

# 25周年記念誌

継承と発展

2007



早稲田大学本庄高等学院

# 25周年記念誌

継承と発展

2007



早稲田大学本庄高等学院





学院校舎（給水棟より西を眺む）



学院校舎全景（西から東を眺む）



G棟（生徒会室・保健室 提供：西沢写真館）



H棟（旧3年ハウス棟 提供：西沢写真館）



校舎雪景（1994年）



中庭（B棟・給水棟を眺む 提供：西沢写真館）

# 「大なる使命」を前に



開発前の風景（六道の辻 1980年）



開発前の風景（1980年）



開発前の風景（現校舎C棟の辺り 1980年）



生徒寮（1982年度～1984年度）



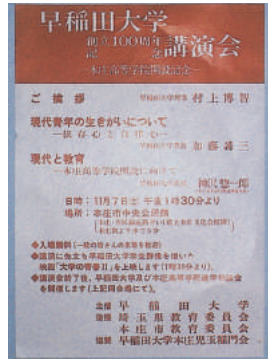
開校記念演奏会（1981年）



校舎建設地の造成開始（1981年）



初年度用の学院案内



開校記念講演会（1981年）



校舎建設起工式（1981年）



第1回入学試験風景（大久保キャンパス 1982年）



開校前の教職員研修（1981年）



第3代 榎本隆司 学院長 (1993年)



第2代 大槻宏樹 学院長 (1990年)



初代 神澤愼一郎 学院長 (1987年)



第6代 尾崎 肇 学院長 (2004年)



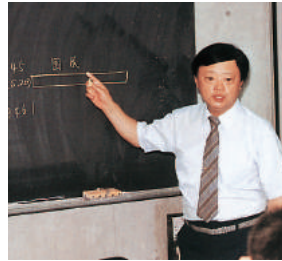
第5代 河合素直 学院長 (2003年)



第4代 山下 元 学院長 (2000年)



高橋廣満 先生 (1991年)



笹川古日 先生 (1987年)



冷牟田修二 先生 (1986年)



小野裕二郎 先生 (1991年)



高橋 聡 先生 (1996年)



青木 宏 先生 (2001年)



富永安男 先生 (1987年)



加納敏郎 先生 (1992年)



田実佳郎 先生 (1993年)



山田庄一 先生 (2000年)



大塚恵美子 先生 (2001年)



田辺明義 先生 (2001年)



球技大会 (旧野球場 1993年)



球技大会 (旧サッカー場 1993年)



体育祭 (懐かしい旧グラウンド 1987年)



胴上げ (2003年)



新グラウンドで初めての体育祭 (2001年)



第1回マラソン大会 (1997年)



応援 (2001年)



小山川の土手を走る (1997年)



第11回稲稜祭 (1992年)



第3回稲稜祭 (1985年)



第1回稲稜祭 (1982年)



「早稲田魂」の垂幕 (2003年)



体育館での後夜祭 (1989年)



ホーム模擬店 (2002年)



中庭ステージでの後夜祭 (2003年)



実行委員製作のモニュメント (2003年)

# うずまく文化の潮



歴史博物館前（1994年）



交歓夕食会（1993年）



故宮（第1回修学旅行 1985年）



天壇（1999年）



綱引き交流（1990年）



万里の長城



北海道修学旅行（2003年）



教員の出し物（1987年）



自転車交流（1986年）



スポーツ交流（1990年）



明十三陵（1992年）



授業交流（1986年）



友誼宮（1994年）



別れの一韵（1990年）



天神平より谷川岳を望む（4期生）



赤城地蔵岳（6期生）



浅間鬼押し出し（1987年）



# 集り散じて



10周年記念式典（大槻学院長 1991年）



第1回卒業式（本庄市民文化会館 1985年）



第1回入学式（大隈講堂 1982年）



α入試説明会（1994年）



完成年度の教職員（1984年）



第13回卒業式（共通教室 1996年）



北大附中夏学之校長来校（前列右 1985年）



北大附中董灵副校長（右から2人目 2002年）



ホーム行事（新年餅つき大会）



「本庄早稲田の杜の植物」（2005年）



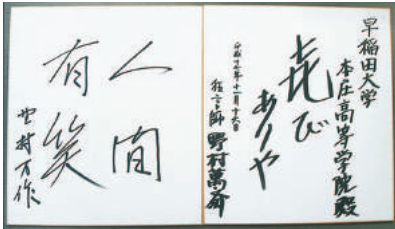
羊皮紙に書かれた楽譜（図書館）



旧図書館（上）・食堂（下）



大雪のため休校・除雪風景（1990年）



野村万作・萬齋父子の色紙（2005年）



新図書館（本庄分館）



中庭での一駒（1992年）



新幹線新駅北口（2007年）



学バス（2002年）



旧グラウンド風景（2007年）



第2回 ISSF (韓国 2006年)



第1回 ISSF (タイ 2005年)



ISSF (オーストラリア 2004年)



台中第一中学との交流協定 (本庄 2007年)



シンガポール NJC との交流協定 (シンガポール 2007年)



第3回国際鉄人コンテスト (台湾 2005年)



台中第一中学の訪問 (2007年)



台中第一中学との交流協定書 NJC との交流協定書



上海華東中学との交流協定 (上海 2006年)



台中第一中学との交流 (折り紙 2007年)



北大附中を迎えたお茶会 (有勝寺 2007年)



上海華東中学とのシンポジウム (大阪 2007年)



北大附中との料理交流 (2007年)



第26回入学式 (大隈講堂 2007年)



総長視察 (2007年)



入学手続き風景 (2007年)

# 稲稜祭

## パンフレット総覧



第2回稲稜祭 1983年



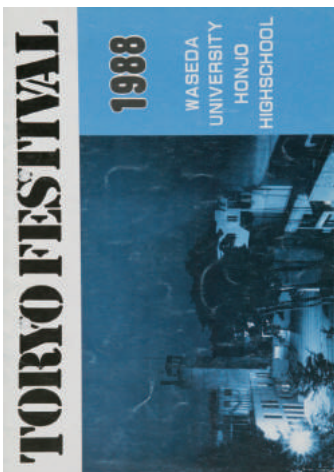
裏 表  
第1回稲稜祭 1982年



裏 表  
第4回稲稜祭 1985年



第3回稲稜祭 1984年



第7回稲稜祭 1988年



第6回稲稜祭 1987年



第5回稲稜祭 1986年



第10回稲稜祭 1991年



第9回稲稜祭 1990年



第8回稲稜祭 1989年



第13回稲稜祭 1994年



第12回稲稜祭 1993年



第11回稲稜祭 1992年



第16回稲稜祭 1997年



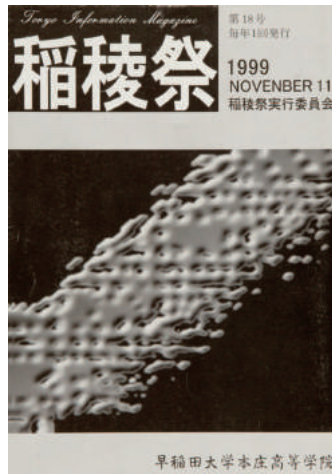
第15回稲稜祭 1996年



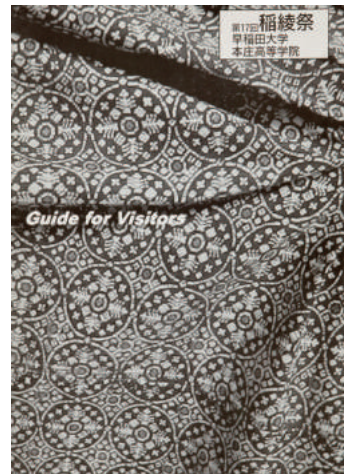
第14回稲稜祭 1995年



第19回稲稜祭 2000年



第18回稲稜祭 1999年



第17回稲稜祭 1998年



第22回稲稜祭 2003年



第21回稲稜祭 2002年



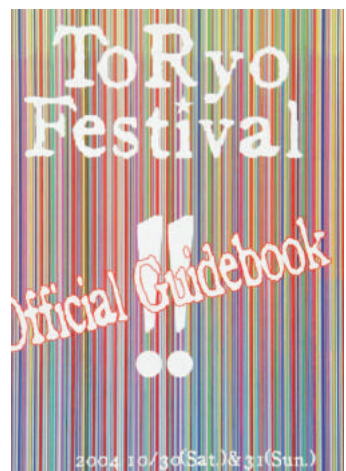
第20回稲稜祭 2001年



第25回稲稜祭 2006年



第24回稲稜祭 2005年



第23回稲稜祭 2004年

# グラフィア写真解説

## 【都の西北・早稲田の森】

校旗・創立に際して作られた。日ごろ見ることは少ないが、式典に使用されている。

校歌・作詞者相馬御風の筆になる。勿論複製。本庄学院院長室に掲げられている。

大隈胸像・教旨・奥島孝康8代総長の時、各キャンパスに設置された。本庄学院では給水タワーの前に立てられている。

本庄キャンパス全景・土地取得より46年後の状況。学院開校時には本庄学院校舎とセミナーハウス（現ドミトリ）のみ。その後、図書館分館、

共通教室棟、大学グラウンド・テニスコート、各種研究棟が順次建てられ、2004年には新幹線新駅「本庄早稲田駅」、リサーチパークの各施設が完成した。

## 【聳ゆる臺】

H棟・開校当初3年生のハウスとして使用されたが、その後、3年生のロウカールームとなり、2007年度より共学にもない女子関係の施設となった。

※学院校舎は理工学部建築学科穂積信夫教授研究室の設計で、1986年「建築業界賞」を受賞した。

## 【「大なる使命」を前に】

開発前の風景・左は現ドミトリ前の交差点付近（六道の辻と呼ばれた）から学院方向を望む。道路を右に下ると遊水池に到る。中は現在の3年生自転車置場に沿うスロープ。右は学院へのスロープを登りつめて、平場になった現校舎C棟の辺りである。

生徒寮・上里町七本木のキングレコード独身寮を借りて生徒寮としたが、キングレコード側の都合で3年で閉寮となる。

学校案内・開校にあわせて生徒募集のために作られたもの。A5版、総12ページ、白黒印刷であった。

開校前の教職員研修・1981年夏、追分セミナーハウスにて行われた準備室嘱託・採用予定教員・職員による研修。

## 【人は変れど】

各学院院长・稲稜祭・修学旅行・体育祭などの折の各学院院长挨拶。初代学院院长神澤惣一郎先生は1998年に逝去。

各教員・小野先生は創立10周年記念式典での挨拶（1992年退職）、冷牟田先生は遠足での風景（2001年退職）、笹川先生は授業風景（2001年逝去）、高橋廣満先生は修学旅行での一齣（1997年退職）、加納

先生は修学旅行での一齣（1995年退職）、富永先生は授業風景（1993年退職）、青木先生は校外授業風景（2006年退職）、高橋聡先生は修学旅行での一齣（2003年退職）、田辺先生は授業風景（2001年退職）、大塚先生は調理実習での一齣（2005年退職）、山田先生は

授業風景（2006年退職）、田実先生は卓球部員との卒業写真（1996年退職）

## 【いよ声そるへい】

体育祭・球技大会・開校以来約20年慣れ親しんだ旧グラウンド。体育の正規授業・体育関連行事・防災訓練などの他、運動部の練習の場となった。

マラソン大会・1997年より大学グラウンドを借りて、マラソン大会が開かれた。コースは本庄キャンパスの周りを廻る約10キロで、疲労のピークはキャンパス南側を流れる小山川の土手の辺り。

応援・2001年度より新グラウンドに移転して、初めての体育祭。応援部が各競技を応援した。

稲稜祭・第1回は給水棟脇での受付風景。未だ砂利が敷かれている。後夜祭は体育館で行った年もあったが、後に中庭にステージが設けられ、応援部による演舞で盛り上がるスタイルとなってきた。何時の頃からか、給水棟に垂幕「早稲田魂」が下がるようになる。ホーム主体の模擬店は

そのホームの伝統となっている。

## 【うずまく文化の潮】

故宮・自転車交流・授業風景・初期には自転車王国中国ならではの自転車交流（北大附中⇄円明園）があった。

歴史博物館前・天壇・全体写真は当初、歴史博物館の前で撮っていたが、天安門事件後は天壇公園になった。

北海道修学旅行・2003年、サーズの猛威により訪中修学旅行は中止となり、代替として北海道旅行が行われた。

交歓夕食会・友誼宮…修学旅行最終日に北大附中の教員・生徒を友誼宮に招いて夕食会が行われ、修学旅行最大の盛り上がりを見せる。友誼宮の建物に垂幕「歓迎早稲田大学本庄高等学校」が飾られている。

### 【集り散じて】

入学式・卒業式…入学式は一貫して大隈講堂で行われているが、卒業式は本庄市民文化会館、共通教室で行われた。

ホーム行事…ホーム行事には6月のスポーツ・パーベキュー大会、12月のボウリング大会、1月の新年餅つき大会がある。

北大附中董灵副校長…写真は訪中修学旅行時のものであるが、董副校長は本学院20周年の折、北大附中を代表して訪問され、式典で挨拶された。

旧図書室・食堂…蔵書数の増加に伴い移転する前の図書室、現自修室。クローラーがあり、夏の暑い日は生徒のたまり場になった。食堂は備え付け、照明ランプ付の丸テーブルであったが、2007年度から定員増により、可動式のテーブルに変わった。2005年のノロウイルス騒動により、

著しく改善された。  
羊皮紙に書かれた楽譜…本庄学院の図書室に何とかアカデミズムが欲しいということ、篠田先生が寄贈されたもの（冷牟田修二「本のコーラス」

『図書館便り』18号、2001）を参照）。学院図書室に掲げられている。  
大久保山の植物…青木先生が変貌する大久保山（本庄キャンパス）の今を記録にとどめる必要から調査され纏められた。本庄キャンパスの貴重な調査記録である。

野村父子の色紙…2005年度の芸術鑑賞教室の記念に揮毫していただいた色紙。学院長室にある。

中庭での一齣…大槻宏樹第2代学院長は学生時代相撲部で活躍し、教員になっても相撲部部長を勤められた。その学院長に勝負を挑む学院生。学バス…通称「クマバス」、正式には本庄キャンパス連絡バスという。旧セ

ミナーハウスからJR高崎線本庄駅、東武東上線寄居駅を朝夕往復する。これとは別に本庄と東京西早稲田キャンパスを結ぶバスが運行されている。

旧グラウンド風景…新幹線方面より西方旧グラウンド方向を眺む。左に旧部室棟、右側にリサーチパークの施設が見える。変貌する本庄キャンパスの風景である。

### 【進取の精神】

ISSF: International Student Science Fair (国際高校生科学フェア) の略。

2004年にオーストラリア大会に参加して以来、連続参加し、生徒の研究発表、教員の交流の場になっている。

鉄人コンテスト…正式には International Creative Ironman Contest (ICC: 国際創造鉄人コンテスト) といひ、毎年夏に台湾政府主催で行わ

れる。本学院では3年前から参加している。

協定交流…国内外交流の発展を背景に、近年、海外校と交流協定を結んだ。単なる親睦ではなく、生徒・教員の研鑽を発表する学術的な交流をベースにしている。シンガポールNJCとはシンガポールにある Singapore National Junior College で理系教育を重点的に行う国立の高校、台中第一

中学とは台湾国立台中第一高級中学校で、男子は理系、女子は芸術系を重点的に教育する学校、上海華東中学とは中国上海にある華東師範大学附属第二中学である。台中第一中学は2006・7年本校を訪問した。

上海華東中学とは2007年3月大阪EXPOパークにて学術シンポジウムを行った。北大附中との交流は開校以来の長きになるが、2006年より毎年本校を訪問するようになった。料理交流は家庭科室にて日中料理を楽しみ、学院の隣にある宥勝寺にて歓迎お茶会も開いた。

共学始動…2007年2月の入試を経て、男子26名、女子97名が共学1期生として入学を果たし、4月には大隈講堂にて、第26回入学式が行われた。共学に対する関心は高く、5月には白井総長が直々視察された。

表紙のマークについて…早稲田大学は2006年に大学のシンボルマークを製作した。シンボルマークの共通デザインは早稲田大学の角帽を上から見る菱形で、その中に施す図柄、色により各学部、箇所を区別する。

表紙のマーク左は早稲田カラーの臍脂を地に大学の校章を白抜きで配したもので大学共通のマークである。右のマークは本庄高等学校のマークで、大久保山の自然と若さを意識した淡い若草色を地に本庄学院の校章を白抜きにしたものである。2つ並べて「早稲田大学の本庄高等学校」

を意味する。

(佐々木幹雄)

# 目次

## 早稲田大学本庄高等学院創立二十五周年を迎えて

本庄高等学院が第二の四半世紀を迎えるにあたって

早稲田大学本庄高等学院長 尾崎肇……3  
(早稲田大学理工学術院教授)

本庄高等学院創立二十五周年に寄せて

早稲田大学総長 白井克彦……5

山の動く、二題……………第二代学院長 大槻 宏樹……7  
(元早稲田大学教育学部教授)

「地の塩」異聞―教育の可能性―…第三代学院長 榎本 隆司……8  
(元早稲田大学教育学部教授)

創立二十周年のころ……………第四代学院長 山下 元……9  
(早稲田大学政治経済学術院教授)

創立二十五周年おめでとうございませ……………第五代学院長 河合 素直……10  
(早稲田大学基幹理工学部長・理工学術院教授)

開校二十五周年ということ……………元教員 小野裕二郎……12  
(理科・化学)

スズメバチ……………元教員 冷牟田修二……12  
(地理歴史科・世界史)

けもの道……………元教員 田辺 明義……13  
(国語科)

保健室から……………元教員 児玉 光子……14  
(保健室・養護)

振り返れば……………元教員 大塚恵美子……14  
(家庭科)

学院教育への思い……………元教員 山田 庄一……15  
(英語科)

地理授業のトピックスから見た二十五年……………元教員 青木 宏……16  
(地理歴史科・地理)



# 本庄高等学院二十五年の教育と今後の展望

一 教務関係……………19

(1) 学校の形態……………19

一 一学年男子二四〇名の創始……………19

二 共学検討の始動……………23

三 定員増共学の確認……………27

四 関係箇所との打ち合わせ……………35

(2) 教育課程……………44

一 総論……………44

二 各教科……………55

国語科……………55

数学科……………58

英語科……………59

理科……………62

物理

化学

地学

生物

総合学習(サイエンス)

地理歴史科……………67

日本史

世界史

地理……………72

公民科……………72

倫理

政治経済

保健体育科……………81

芸術科……………82

美術

音楽

家庭科……………85

情報科……………86

(3) 各種行事……………88

一 体育行事

二 芸術鑑賞教室

(4) 卒業論文……………92

(5) 入学試験……………102

(6) 本庄学院のSuper Science High School

(SH)プロジェクト……………105

(7) 本庄学院の交流プログラム……………109

(8) 図書室……………111

二 生徒関係……………113

(1) 寄宿制度……………113

一 生徒寮	
二 最近の委託ホーム制度	
(2) 人権教育	115
(3) 本庄高等学院傷害見舞基金発足の経緯	119
(4) 生徒表彰について	120
(5) 保健室	122
(6) 稲稜祭	123
(7) 生徒会公認団体(クラブ活動)	125
応援部	125
硬式テニス部	126
剣道部	128
サッカー部	129
体操部	131
卓球部	131
軟式テニス部	133
バドミントン部	134
バレーボール部	135
野球部	137
ラグビー部	140
陸上部	148
レスリング部	149

ワンダーフォーゲル部	152
スーパースイエンスクラブ	154
演劇部	156
三 その他	158
(1) 校舎	158
(2) 高大連携	160
(3) 父母の会	168
二十五五年を想う	
教員	175
「本庄学院今昔」	嘉来 純一 (英語科・一九九四年度卒)
雑感	木元 保 (数学科)
ワセダの中核	小林 大輔 (国語科)
雑感	齋藤 正憲 (地理歴史科・世界史)
大久保山の仲間十一首	坂井 淳一 (公民科・倫理)
私の「故郷」	佐々木幹雄 (地理歴史科・日本史)

変わりゆくことと変わらぬこと……………高山 正弘  
(英語科)

いつまでも未完成の魅力……………田邊 潤  
(体育科)

二十五年を振り返って……………中野 公世  
(理科・物理)

雑 感……………櫛島 眞澄  
(英語科)

クラス会で思い知らされたこと……………羽田 一郎  
(数学科)

大久保山・その後……………吉見 孝人  
(理科・生物)

ホーム関係……………布川 福治  
(ホーム担当職員)

ホームを担当して……………金子 薫  
(委託ホーム金子)

二十五年を振り返って……………高田千枝子  
(委託ホーム高田)

二十五年を振り返って……………町田 皓次  
(委託ホーム町田)

二十五年を振り返って……………田村 光生  
(二九八五年度卒)

卒業生……………岡 弘  
(二九八七年度卒)

「持つべきものは……………小林 央之  
(二九九〇年度卒)

「本庄」の「人間教育」……………

山……………渡邊 真  
(二九九八年度卒)

開校二十五周年、おめでとうございます……………松島 秀典  
(二九九九年度卒)

北海道修学旅行……………石井 大祐  
(二〇〇三年度卒)

『早稲田の血』……………清水 智文  
(二〇〇四年度卒)

「附属校」であるということ……………福田 崇  
(二〇〇五年度卒)

われらが母校……………野添 啓輝  
(二〇〇五年度卒)

卒業生保護者……………岩堀 忠雄  
(父母の会一九八二・三年度会長)

感謝の気持ちを込めて……………大谷 恵教  
(父母の会一九八四年度会長)

懐かしい思い出……………荻本 信義  
(父母の会一九八五年度会長)

慶祝創立二十五周年記念……………横尾 弘明  
(父母の会一九八七年度会長)

世代間に渡る学び舎へ……………高橋 福八  
(父母の会一九八八年度会長)

大久保山で縁を結んだ私達……………高橋 慶一  
(父母の会一九八九年度会長)

変革の時代に思う……………新井 光夫  
(父母の会一九九〇・三年度会長)

大久保山の散策……………坂上 俊夫  
(父母の会一九九一・七年度会長)

創立二十五周年によせて……………

創立二十五周年おめでとうございます……………三好 大器  
(父母の会一九九二年度会長)

「ビクともするなと風に立つ」……………松島 良策  
(父母の会一九九九年度会長)

母と子を育んでくれた本庄高等学院……………佐々木花子  
(父母の会二〇〇〇年度会長)

二十五周年によせて……………高橋 淳  
(父母の会二〇〇二年度会長)

「自然の中で」……………松田 一郎  
(父母の会二〇〇三年度会長)

学院に期待すること……………田代 充雄  
(父母の会二〇〇六年度会長)

三年生の息子をもつ親の思い……………松隈 健治  
(父母の会二〇〇七年度会長)

## 資 料

1	年 表……………	1
2	各種データ……………	13
(1)	歴代学院長……………	13
(2)	専任教員……………	13
(3)	歴代教務主任……………	14
(4)	年度別組主任一覧……………	15
(5)	卒業者数……………	17
(6)	ホーム入居者数変遷……………	18

早稲田大学本庄高等学院創立二十五周年を迎えて



本 庄 の 春

# 本庄高等学院が第二の四半世紀を迎えるにあたって

早稲田大学本庄高等学院長 尾崎 肇

本庄高等学院は、創立二十五周年をむかえ、ここに第二の四半世紀の第一歩をふみだしました。これまでの二十五年間に今日の本庄高等学院を築き、支えてくださった皆様に関心より感謝申し上げますとともに、本庄高等学院の前途を皆様とともに祝いたいと思います。

そこで、ここでは本庄高等学院の現状と将来について、簡単ではありますが、述べさせていただきます、本庄高等学院の将来像を皆様と共有したいと思います。

本庄高等学院の創立当時、世界は未だ二十世紀後半の大半を支配し続けたパラダイムのさなかにあったことを思うと、この二十五年間の世界の激変ぶりを再認識させられます。このような中で、本庄高等学院が積み上げてきたことに、伝統となつて受けつがれていくことがある一方、現時点の目でみて、創造的に改革しなければならないことが少なくないことも当然なことであります。

本庄高等学院は、創立二十五周年を期して二〇〇七年四月、一学年八〇名の増員による男女共学化を果たしました。これは男女比三対一

に相当しますが、共学というにふさわしい男女比は、女子がより多いところにあるように思われます。また、わが国で少子化がすすむなか、女性の社会進出、つまり社会における男女共同参画の実現がいつそう急がれていることを考えると、この男女比につよくこだわることよりも、将来の社会の発展、福祉に貢献する人材を集めることに、より力点をおきたいと思えます。現在、女子の受け入れの壁になつて居るのが、女子むけの委託ホームがないことです。男子むけもあわせて、委託ホームとのバランスをはかりながら、寮の建設を急ぎたいと思えます。

増員・共学にもなつて、本学院の全校舎が、現校舎がたつ大久保山の南麓に移転することが決まり、現在、新校舎の設計の段階にあります。生徒の自主的な勉学・研究の場となる広義の図書館、国内外交流の場となる大教室、ラウンジ、食堂など、本学院の教育の特徴をささえる施設が重点的に整備されます。

本学院の開校時は生徒の七割をしめていた委託ホーム生が、現在は三割に満たなくなつています。これは、この間の交通の利便性の向上

も一因となっていますが、上記のパラダイムの崩壊後にながく続いた経済不況がおもな原因となっています。本庄という立地を考えると、大都會の高等学校とことなり、自宅通学生とのバランスをはかりながら、ひろく全国から生徒を受けいれることが肝要です。それはまた、早稲田の中核をなす人材が全国からあつまる意味でも重要なことです。そのためにも寮の整備を急ぎたいと思います。

本学院では、開校時から北京への修学旅行と、その際の北京大学附属中学との学術・文化・スポーツ交流など、早くから国際交流を行ってきましたが、昨今のグローバル化の時代において、各高等学校の国際交流の活発化はいちじるしく、国際交流の多様性などにおいて本校は遅れをとってきたとさえいえます。このような状況のなかで、本校では昨年度、国内外交流委員会を新設し、今年度、シンガポールと台湾の高等学校と交流協定をむすび、定期的な交流活動を開始しました。ひきつづき、修学旅行の形態の再検討、英語圏との交流など、多様できめ細かな国際交流の体制をつくりたいと思っております。

本校は、二〇〇二年度以来のSSH（文科省指定 Super Science High School）プログラムにより、理数・情報教育だけでなく、国際交流、英語教育なども活発化しています。SSHプログラムは二〇〇九年度をもって終了しますが、それ以後もこの体制を維持・発展させていくことが重要であると考えています。そのための経済基盤を確立することが課題となります。

本庄高等学院は、四方に開かれた学校でなければならないと思えます。それなくしては、学校の健全な発展は望めません。各学部との連

携、本庄リサーチパークの大学院研究科との協力、同窓会、保護者会、後援会との協力、そして委託ホームをはじめ、地元との協調など、どれも欠かすことができません。

以上、本庄高等学院が第二の四半世紀をむかえ、その近未来像を皆様と共有して第一歩をふみだすために、早期の実現が望まれることについて述べさせていただきました。これら以外の事柄も皆様とともに積極的に提案して、本校の将来像として共有し、実現にむけて努力したいと思っております。

（早稲田大学理工学術院教授）

## 本庄高等学院創立二十五周年に寄せて

早稲田大学総長 白井克彦

早稲田大学本庄高等学院が、今年で二十五周年を迎えることになりましたことは、関係教職員のみならず、早稲田大学にとりましてまことに喜ばしいことであり、心から祝辞を申しあげ次第であります。

二十五周年を迎える本年度は本庄高等学院にとって誠に重要な年であります。本庄高等学院は本年より定員を八十名増員し、男女共学の学校として新しくスタート致しました。志願者数も昨年比約一・五倍となりました。この厳しい難関を突破した三二三名（うち、女性九七名）の新生を迎えて、学園は二十一世紀に向けて新たに展開してまいります。ご家族の皆様方はたいへん大きな期待をもって、早稲田大学本庄高等学院へお子様をお送りいただいたものと思います。早稲田大学としましては、数ある私立高等学校の中から、本庄高等学院を選んでいただいたことに対して深く感謝を申し上げますと同時に、これからの早稲田大学の中核を担うべき候補生としての生徒の皆さんの成長に、心からの期待を寄せております。

本庄高等学院の創立は一九八二年・昭和五十七年ですが、この年は

早稲田大学創立百周年という大きな節目の時であり、その際に行なわれた数々の記念事業の中でもきわめて大きな事業といえるものでした。そして、創立二十五周年という節目の年を迎えて、学院のある本庄キャンパスではすばらしい構想が次々に実現されています。

二〇〇四年に開業した上越・長野新幹線「本庄早稲田駅」に直結した形で広がる早稲田大学の新たな研究拠点「早稲田リサーチパーク」には、西早稲田にあつた情報通信の研究機関、国際情報通信研究所・センターが移転し具体的な活動を始めましたし、他にも環境総合研究センターをはじめとする施設が次々に開設されています。環境総合研究センターは地球規模の環境・エネルギー問題に対応した先取的な研究開発を展開する研究機関として、国際的レベルの多彩な研究活動を行っていきます。

本庄高等学院の教育方針にも「地域との様々なレベルでの交流を通じて、人間・社会・自然に対するみずみずしい感性を育成する」ということが謳われています。また、スーパーサイエンスハイスクール選



定校として、科学技術・理科・数学に重点を置いた教育を行っているということもありますから、生徒の皆さんも早稲田リサーチパークにある様々な施設を訪れ、いろいろな形で地域交流やすばらしい学習体験をする機会があるものと思います。近い将来、このリサーチパークにある研究機関で活躍することを目指す人も出てくるかもしれません。ぜひともしっかりと勉強していただき、将来的には早稲田リサーチパークを優れた研究のメッカとして発展させていくために多くの人達が力を貸していただけることを期待します。

本庄高等学院が創立二十五周年を迎えた二〇〇七年は、早稲田大学にとっても創立百二十五周年の記念すべき年であります。早稲田大学では創立百二十五周年の年を第二の建学と位置づけて、「二十一世紀へ挑戦する開かれた大学」を目指して、教育・研究を中心とした様々な構想を着実に具体化してきています。本庄高等学院の生徒の皆さんは、大学創立百二十五周年を経て、より輝きを増し活気にあふれたキャンパスで、早稲田大学の学生としての新たな第一歩を踏み出すことになるでしょう。その大学生活をより実りあるものにするためにも、生徒の皆さんにはこれからの学院での学生生活、勉強にスポーツに励んでいただきたいと思います。多くの信頼できる仲間をつくることはもちろん、早稲田スピリットすなわち「現実の世界にあるさまざまな矛盾や問題を解決し、人と世のために役立つとする気概」をもつてください。そして、広い視野で物事を見つめ多くの刺激を受けて、自分にはどんな能力や可能性があるのか、将来、自分の能力はどんなことに活かせるのかといったことを考え見つけ出す努力をしてもらえること

を心から期待しています。

また、ご父母の皆様には、お子様と一緒に本庄高等学院の学校づくり、さらに早稲田大学の大学づくり、私たちと一体になって、今後とも様々な面で多大なるご協力を賜りますよう心からお願ひ申し上げます。

本庄高等学院の新たな飛躍に向けて、大いに期待するとともに、今後のさらなる発展を心より祈念して、私のお祝いのご挨拶に代えさせていただきます。

## 山の動く、二題

第二代学院長 大槻 宏 樹

早稲田大学百周年時に、本庄高等学院が大学附属校の次男として誕生した。したがって大学百二十五周年は学苑の二十五周年の節目に当たる。百二十五年の意味は大隈の百二十五歳に由来している。そもそも百二十五歳は、人のおとなの完成時が二十五歳で、その五倍が人間の寿命という大隈の考えからきている。とすれば、二十五周年は本庄高等学院の次男としてのおとなの完成期の刻印として殊更に祝福されよう。

### 一月ではない

わが学苑十年目は「青鞥」創刊八十周年目であったと記憶している。この時、学苑が共学化によって大久保山の山が動くのではないかとの思いから、共学化の提案をした経緯があった。「青鞥」創刊号の巻頭詩は与謝野晶子の「そぞろごと」で、「山の動く日来る」の一行から始まる。わが学苑も共学導入によって、「大久保山の動く日来る」の予感をもっていた。

福沢諭吉になくて大隈重信にあるもの、その一つは女子教育であろう。大隈は「天下ハ天下ノ天下」の二番目の天下を大切にしていたが、

女子教育はまさにその象徴であろう。しかし何故か、今日まで早稲田大学の附属に共学の機会がないまま推移してきた。

「そぞろごと」の少し後に平塚らいてうの「元始女性は太陽であった」の一文が寄せられている。その後半では「もはや女性は月ではない。その日、女性はやはり元始の太陽である」と宣言している。

なぞらえていえば、「もはや本庄は月ではない。その日、本庄はやはり元始の太陽である」。そんな宣言をしてみたい。

### 二 荆冠の祝福

紙幅の残りが乏しいが、大久保山が動くようもう一題。それは早稲田大学本庄高等学院の質の高い教師陣で文字通り優れた教科書を編纂してほしい。もちろん両学院の協力でもよいし、学部・大学院教員との共同作業になれば好都合かもしれない。高大一貫教育を実践しているくうえでも緊急に検討・実行してほしい課題である。かつて戦後直後の文部省は先鋭的であった。学習指導要領も拘束力は全くなかったし、教科書の検定もおおらかな自由の時代があった。そんな時代の再来を多くの人は望んでいるのではないか。早稲田大学本庄高等学院編纂教科書の登場が、大久保山の山を動かすのみならず、わが国教育界の山を動かしてほしい。

祝！ 早稲田大学本庄高等学院二十五周年。

祝祝！！ 早稲田大学本庄高等学院二十五周年。

(元早稲田大学教育学部教授)

## 「地の塩」異聞

——教育の可能性——

第三代学院長 榎本隆司

専門委員として創設にかかわり、初代の神澤学院長には、十年頑張って本庄教育の道をつけて下さい、と勝手を言ったりしていたのだが、全く思いもかけず、六年四月を本庄で過ごすことになった。

就任を待っていた初仕事の「入試要項」に、「道は行く者のために在り、選ぶ者のために開かれている」と書き、求められた卒業記念のアルバムに、「遠山青き春な忘れそ」などと戯れうたを添えたりしたが、わたし自身の生涯にとっても忘れたい月日となった。この間に接した生徒諸君、教職員各位、ホームや保護者の皆さんほか、支えて下さった多くの方々にあらためて心からの謝意を寄せつつ、お蔭を得て創立二十五周年を迎えたことを共に祝いたいと思う。

当然のことだが、いろいろなことがあった。外へ向けては、誇るべき歴史となった北京大付中との交流があるが、その十年を機に生徒代表と先生をお招きした。本番で訪問した時、来校した女生徒の一人と校庭で会ったが、にっこり笑い、やがて涙ぐんでいた姿がすよく印象に残っている。全国私大付属中・高の第一回教育研究会を先生方の尽力で開いたこと、NHK浦和支局長だった河野女史（現副会長）や、石原官房副長官の訪問視察を受けたことなど、石原氏とは後日ギリ

シヤでばったり出合ったりしたが、ともども二十五年の歴史をかたちづくってきたものだ。内では、服装の自由化やα選抜など民主的で活力のある学校づくりを目指したが、その一方で迷惑をかけたホームへ事務長と出向き、おどかされながら平身低頭、また、北関東暴走族の大將だったという「好青年」宅に生徒主任らと託びに行ったり等々……。

そんな本庄高等学院のことを、誰が本気に考えているのかと、全学に向けて訴えたこともある。大学が担う高校教育について重ねて問うた「地の塩」『本庄』教育の夢」（早稲田フォーラム）がきっかけとなり、頼みにしていた良識牛山常任理事のもとで、学院問題を考える全学部との懇談の場が開かれ、交流の機会が持たれるようになった。「身を捨ててこそ」と思ったわけでもないが、学部進学を拒否された生徒のことで訴訟を決議したことがある。「教育の可能性が全く認められない」という理由がどうしても納得できなかった。教務部長（現白井総長）に会ってその旨を伝え、学部へ向かう間にどんな話が伝わったのか、学部長（現常任理事）が、学院長の責任感・熱意に感じたと言って、教授会決定を戻す英断を示して下さった。

当の生徒の顔はその時以来一度も見えていないが、わたしはいまなお教育の可能性を信じて、折にその成長ぶりを思い描くのである。

（元早稲田大学教育学部教授）

## 創立二十周年のころ

第四代学院長 山下 元

この度は、本庄高等学院が創立二十五周年を迎えましたことをお慶び申し上げます。今年は、早稲田大学の創立百二十五周年の年でもあり、期を同じくして大学でも記念式典が行われていることも誠に意義深いことと考えております。

五年前の創立二十周年のときには学院長を兼任していた関係から、種々の記念事業が行われたことが回顧されます。中でも、記念式典（ホームカミングデー）が「奥島総長」から「白井総長」への交代の時期に行われた関係から、両先生に祝辞と講演を願ったこと、また、ホームの研修旅行と題して、イギリス、フランス、ドイツの日本人学校や稲門会を訪問し、新設の婦国生I選抜制度の説明会を行ったことなどが印象的に思い出されます。

話は少し遡りますが、私が初めて本庄を訪れたのは平成十一年の春で、その第一印象は美しい自然の中にやや古びた教会風の校舎が建っているということでした。

さて、校務が始まると、大学とのユークリッドの距離もアカデミックな距離もかなり遠いということが、次第に実感されるようになりました。このため、学部や研究所の教授を招いて課外講義やセミナーを

盛んにし、高大一貫教育の推進に努めたつもりです。

また、教育環境も必ずしも十分とはいえず、校舎に空調を入れること、スクールバスを引くことなどに努力した日々でした。

次に、父母代表との懇談のなかで各位の教育への協力の意向が高まり、父母会費が十二倍に値上げされるにいたりました。その結果、本庄高等学院の教材費等が一応潤沢になり、併行して、新聞「緑風」が創刊されました。

また、前後して、卒業生の表彰制度が設けられたこと、卒論のアップストラクト集が発行されるようになったことなども思い出されます。

なお、平成十四年には文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールの指定校になり、かなりの研究費を取得できたことから、理数系の教育内容が積極的に拡充されたことを記しておきたいと思えます。

その後、平成十六年には、新幹線の「本庄早稲田駅」が新設され、併せて、大学院と研究機構が開設されたことから、大久保山は名実共にリサーチパークらしく発展しました。

そのような中で、本庄高等学院は今年から男女共学になり、同時に、規模も拡大されたことから、本学での評価も高まりつつあります。

この度の創立二十五周年を期に、益々進展されることを期待いたしますと共に、関係各位のご活躍をお祈り申し上げます。

（早稲田大学政治経済学術院教授）

## 創立二十五周年

おめでとうございます

第五代学院長 河合 素直

本庄高等学院さらには本庄プロジェクトにかつてかわつた者として、本庄高等学院が創立二十五周年を迎えられ、この二十五周年を機に男女共学という新しいステップを踏み出されたことに、心からお慶びを申し上げたい。本庄高等学院設立が審議された学部長会で（筆者は教務副主任で傍聴していた）「男女共学にすべきではないか？」という意見に、当時の教務部長が高等学院から取り組みたいという趣旨の発言をされていたことを不思議と記憶しているので、男女共学までの二十五年の重みを感じざるを得ない。

さて、現在の社会状況は、それぞれの組織において従来の延長線上を歩み続けるのではなく明らかな展望をもつことが難しい状況といても過言ではない。時代の流れ、環境の変化をきちんと見ることを怠ったために、姿を消した組織すらあるのが現実である。このため、それぞれの組織が、自己点検・評価を行い、大きな時代の流れを見据えつつ次の目標を設定し変革をとげていくこと、生物にたとえていえば環境の変化に対応して進化していくことが、いま求められていると考える。そして、このことは教育の場にも当然のことながら、あては

まるのではないであろうか。しかし、教育の場において点検・評価と次の目標の設定を行うにあたって、どう取り組むべきかということになると大変難しい問題となってくる。その理由として、まずは点検・評価を進めるにあたっての評価指標を明確にすることが極めて難しいことがあると思われる。組織の設立時のめざすところ（大学でいえば建学の精神）が、どのような形で実現できているかという評価指標も非常に抽象的であり、しかも巢立っていく卒業生にその教育の場がどう貢献したかということも、ある程度の長いレンジでみる必要がある。で、そう簡単に評価できるものでもないからである（いわゆる受験校では〇〇大学合格者△名という簡単な評価指標が通用するかもしれないが）。しかし、だからといって点検・評価それに続く目標の設定を怠ることが許されるわけではないことは当然である。これに加えて、社会からの卒業生に対する評価がはつきり定まるまでにはかなりの時間の遅れがある（卒業後十、二十年あるいは三十年後かもしれない）ということを考え合わせなければならない。このため、外からの評価が定まってしまうまでは、修正のための取り組みが手遅れになる可能性が非常に大きいことも明白であろう。したがって、「教育の場」のあり方を常時点検・評価し、これをもとにさらに次の目標を先見性をもって設定することが非常に重要になってくるわけである。このように考えてくると、本庄高等学院では、男女共学を機に「教育の場」についての点検・評価それにもとづく目標の設定を改めて行い、さらにこのプロセスを繰り返しながら、今までの伝統の上によりよき伝統を築き上げられていくことが大きく期待されることになる。

さらに、もう一つ加えておきたいことがある。それは、教育制度をはじめとする社会システムの変化の影響である。直接的には、家庭教育を含む入学するまでの学習履歴が確実に変わりつつあることである。このいわゆる質の変化は非常にゆつくりとしたものではあるが、だからといってこの変化に対応して「教育の場」を再構築することは避けて通ることができないのが現実であろう。現在の「教育の場」における最も大きな課題の一つが、この入学者の質の変化へどう対応するかということであろう。筆者の大学における教育の場での体験から語るならば、多くの学生諸君は「知識を授けられるという受動的な学習姿勢」は十二分に身に付けているが、能動的な学習姿勢、すなわち自分で考えて問題を解決する、別の言い方をすれば自ら「知」を獲得するための方法論を獲得しようとする意識が極めて希薄に感じられるのである。したがって、まずはこの学習姿勢の転換のために大きなエネルギーを注ぎ込むことが必要になる。長年身に付けてきたものを一八〇度転換させようとするのであるから、容易なことではないのが現実なのである。この例からもお分かりいただけるように、入学者の質の変化に対応して「教育の場」をどのように整備していくかが大きな課題となる時代を迎えており、この男女共学を機に優秀な卒業生を育む「教育の場」の整備が一層進められることを期待したいわけである。

ここで、何故本庄高等学院における教育への期待を述べてきたかについて触れておかなければならない。筆者は、現在基幹理工学部（理工学部は二〇〇七年四月から基幹理工学部、創造理工学部、先進理工学部の三学部に再編された）の学部長を務めており、学部としての重

点課題の一つが「優秀な学生の確保」であり、是非とも本庄高等学院から多数の優秀な学生をわが基幹理工学部に送り込んでいただきたいと考えているからである。ある予備校の電車の中の広告に「理数の落日」という見出しがあった。これに代表されるように、理数離れは確実に進みつつあるように思われる。これに「少子化」の流れが加わり「優秀な学生の確保」が大きな課題となっているわけである。これは、単に基幹理工学部の問題という単純なものではなく、科学技術創造立国をめざすわが国の問題なのである。わが国の将来を担う科学技術者の育成という観点から、また基幹理工学部の立場からも、是非とも本庄高等学院において新しい時代を切り拓く若者、できればさらに理数系に関心のある若者を育てていただきたいと考えるものである。

最後に、理工系からの期待という形になってしまったくらいはあるが、早稲田大学の中核となる人材の育成という観点から本庄高等学院が一層の発展をとげられることを祈念して、筆を置く。

（早稲田大学基幹理工学部長・理工学術院教授）

## 開校二十五周年ということ

元教員 小野 裕二郎

長くご無沙汰しました。もう二十五年が経過しそうなんです。我がが生まれて二十五年というかどうか。ごく平凡には結婚年齢ですね。だから男女共学になったのです。

結婚式のあいさつの言葉で「これから先、人生は山あり、谷ありですが、どうか協力して乗り越えて豊かな家庭を作ってください」と言います。

この一九八二年七月に英文学者斉藤勇先生がお孫さんに殺されるという事件があつて、世間を恐怖の底に突き落としました。こういう凄まじい事件は最近では連日のように報道されています。しかし、学校教育そのものはまだまだ余裕がありました。

いま政治は学校教育までも自民党政府の管理下に置かれようとしています。そして教委のもとにマニュアル化されようとしています。マニュアルにないことや書いてないことは教育現場ではできなくなりそうです。人間はマニュアルでは成長できません。しかし、私立学校は教委の外にあります。

ある学者は「日本の近現代の学者、知識人のしていることは觀念に陰影がない」といいます。これについてある児童文学者は「だからな

んでも平つたくなるんです。戦争に負けるというあれだけのことがあつても、民主主義の国家になった、国を挙げて戦争から離脱して平和主義になった、と思ひ込んじやっているとかが平つたいんです。陰影がありません。」と述べています。これは民主主義になった、平和主義になったということだけで、それらを支える陰について何も無いのです。これが「平つたい」というのです。

ジュネーブの日本人学校の校長先生は私に「学院生は公立校の生徒に重くのしかかっている受験勉強の代わりに豊かな青春が過ごせて幸せです。各国の外交官は学院卒業生が芸術や文学など人間性に大事な分野に秀でているので高く評価しています」と言いました。これは当然のことですが、悲しいことに学部先生たちの多くは学院生が基礎学力？が低いと馬鹿にしますが、大きな誤りです。

学院には受験勉強がありません。新しく発足した体制を豊かに結実させるためにはこの重大な利点をどう生かすかしっかり考えてほしいと願っています。  
(理科・化学)

## スズメバチ

元教員 冷牟田 修 一一

C棟西側二階での授業が多かった。

夏になると、スズメバチがよく飛びこんできた。生徒たちは騒ぎだ

すが、蜂には、私は妙に度胸がすわっている。

東京大空襲の体験者には、B29とスズメバチとでは比較にならない。生徒は片目で蜂を追い、片目では、じつと私の動静をうかがっている。

空襲を思いだすと、スツと血がひき、私は異様に落ちついてくる。

出席簿を扇のようにかざして蜂に近づき——孤高な能楽師の舞というべきか——蜂を誘導。カーテンで巻きこみ、外へと派手にたたきだす。そして、ゆっくり窓をしめる。

日頃、馬鹿にされているせいか、この充足感はまだ大きい。

「スズメバチに二回さされると死ぬというが、二匹同時にさされたらどうなるか」

得意になって、ハッタリの質問をだすと、ひとりが手をあげた。応援部の生徒だ。名前は忘れた（もともと知らないが……）。下校時に自転車置場で、後頭部を一度に二匹にさされたという。

一瞬、ギョツとしたが、私はすぐに事態を理解した。

その頭はまさに針ねずみのバリバリのたわし頭。やられたのは蜂だったらしい。

教室は畏敬の渦。

山上の学校ならではの思い出である。

（地理歴史科・世界史）

## けもの道

元教員 田 辺 明 義

その昔、早稲田大学が本庄へ進出する前の大久保山は、人影のほとんどない、静寂そのものの山だった。

宥勝寺を出て、いまの学院事務所から中庭の松の一叢を過ぎ、体育館の南側を通り、下浅見へ抜けて下る細道は、いわゆる「けもの道」だった。

筆者は高校入学の春、宥勝寺の現任職等とその道を自転車で縦走したことがある。折しも躑躅の咲く頃で、細い「けもの道」を包み込みながら、全山に紅い絨毯を敷き詰めた感を呈していた風影が忘れられない。

その後三十年の歳月を経て、高等学院建設の地鎮祭の時に訪れた大久保山は、大きく変わろうとしていた。

「けもの道」を遮るように林立していた松は、数株を残すばかりで、校舎建設予定地は重機で均されていた。第二次世界戦前後には若干人手の入ったことはあったものの、ほとんど動力の入らないままの自然だった。

以来、進出計画は思うようには進捗しなかったが、いまでは種々の施設や研究機関が新設され、加えて、女子生徒の通学も可能な時代に



なつたことには驚いた。

開校当初の校内での一齣だが、都会育ちの多かつた生徒の中には、夜間照明に叢がった昆虫類を見て後込みする者も居た。ホームステイ生の中には、帰省の際に弟達へのお土産と称して、大事そうに持ち帰つた者もいた。

土曜日の授業では土産として封筒か何かに閉じ込められた虫の音が、かなり耳障りに感じられたことや、土曜日は帰省のため落ちつかない生徒の多かつたことなどが懐かしい。

いまでも大鷹は営巣を続けているだろうか。痩せてはいたが、狐や狸はまだ山に棲んでいるだろうか。残っていてほしいものが沢山ある。

(国語科)

## 保健室から

元教員 児 玉 光 子

本庄高等学院が、世界に向けて発信するワセダグループの基幹校の一員として、二十五周年の大きな節目の年を迎えられ、これを機に更に新たな発展を期しておられることを心からお慶び申し上げます。

私は一九九六年から二〇〇三年まで七年間、養護教諭として学院のお世話になりました。

学院の思い出は尽きませんが、学院の生徒は皆、個性豊かな独自の

雰囲気を持つていて、現在と将来をしっかりと見つめている生徒が多いことを感じました。彼らと話すことで私自身とてもよい勉強をさせてもらいました。

青春入り口に立つ彼らは、病気や怪我だけでなく、折に触れて将来への夢や心の悩みを話してくれました。

多感な時期の生徒へのアドバイスは、将来の生きかたにも影響します。私も及ばずながら真剣に向き合いました。

北京の修学旅行、マラソン大会、稲稜祭、……。これらの行事で躍動する若人の姿がくつきりと脳裏に残っています。

何年か経つた今思うと、私の人生の中で一番有意義で充実した期間だったような気がします。

最後になりましたが、先生方、事務所の皆様、生徒諸君のお陰で学院での生活を幸せに過ごせましたことを心より感謝しています。有難うございました。

(保健室・養護)

## 振り返れば

元教員 大 塚 恵美子

満二十五歳を迎えた本庄高等学院には、その歳月以上ぎっしり詰まった歴史があります。今回早稲田大学の創立百二十五周年記念と期

を一にしての記念式典が予定されていますが、その中で困難を越え多彩に開花、結実を遂げてきた本庄高等学院の物語が語られることでしょう。

振り返れば一九九四年男子校の家庭科導入という重要な使命を受けて私は着任した訳ですが、実はそれ以前一九八九年の学習指導要領改訂の告示に伴って、新教育課程の編成に向けた具体的な検討が開始されてきました。男子の家庭科必修が最も難しい課題であったと聞いています。

私の在職した十二年間で、本庄高等学院の土台を揺がす様な事態の一つに「新幹線本庄早稲田駅」設置に伴うその周辺の開発工事計画が挙げられます。現在は新幹線利用通学の便利さがプラスに働いていますが、当時工事期間中の通学生は、自転車通学路の度重なる変更―当然不便で危険を伴う通学路に大変迷惑を被っていたはずですが。しかしこの状況下で彼等が創り出した美談がありました。新幹線駅へ下る並木道の桜を「伐採から守ろう」と自分たちの声を集め、その声を県迄届けたのでした。本庄高等学院生は、大久保山の自然を全身で受け止め、四季折々の変化を色や音、空気を通して感じ、愛して、それを滋養にしているのだと思います。

家庭科導入の当初、私学男子校としては先陣を切ったの實現でしたから他校のモデルとして発表する機会が度々ありました。しかしもう一步家庭科教育の目標からすれば男女共学が必要でした。二〇〇七年度その理想が實現し、共に学び合える環境がスタートした訳です。益々の発展が期待されます。(家庭科)

## 学院教育への想い

元教員 山田庄一

学院に赴任する前年に提出したレポート――「本庄高等学院教育の根幹をこう考える」「私学における教育のあり方」「学部全入制附属高校の使命」――を退職を機会に読み返してみた。内容はかなり評論的になってしまったことを自省している。

A・トフライが「明日の世界が必要とする人間は、重要な判断をくだせる人、新しい環境に向かって急速な変化の現実の中で新しい関係を見出せる人が要求される」と云っているが、現在型の教育課程を一步進め、教育に欠けているところを補って人生の目標をみつめる手がかりを発見させてやる教育こそ未来に向かう教育であり、私学における教育でこそそれは實現できるのだと確信している。

私は学校の営みの中で主流をなすものは、学校の目標を学年や、クラスの目標に具体化し、さらに一人一人の生徒に達成可能な努力目標としてとりくませることであると考えている。その具現の場が生徒の日々の学習であり、部活動等である。公立学校では不可能と思われる一連の営みが私学においてはじめて可能になるのではないだろうか。二十五年の歴史の自身は決して単純なものではなかったと思う。この歴史を土台にして学院が将来に向かって一層発展していくことを期

待したい。

(英語科)

## 地理授業の

### トピックスから見た二十五年

元教員 青木 宏

開校した一九八〇年代はじめは、イラン・イラク戦争と中国の改革・開放政策が大きな話題でした。イ・イ戦争以降、中東問題は一層複雑になりました。中国では人民公社の解体が終了し、生産請負制に移行、また経済開放政策の柱として経済特区の建設が進みました。

一九九〇年代は国家の分裂と統合、そして環境が主要な学習テーマとなりました。社会主義圏でソ連や旧ユーゴスラビアの分解、チェコスロバキアの分離独立などが相次ぎます。新たに独立した国家の名前や国勢の把握も学習目標の一つになった時期でした。一方、西ヨーロッパではマーストリヒト条約が結ばれ、EUの政治統合へのスタートが切られることとなります。環境を地球規模で捉え、世界全体で持続可能な開発を考え始めた時代でもありました。

一九九〇年代には、多くの地名変更も話題となりました。インドや東南アジアでは外国支配時代の地名を民族的なものに変えたものが目立ちました。崩壊したソ連では革命以前の名前に戻したものや、ロシ

ア語風のを多数派民族の言葉に代えたものが多く見られました。二〇〇〇年代に入ると、多様な国際化が広範囲で展開しました。ひと、物、情報が国という枠を超えて動くようになります。一方でソ連崩壊後、アメリカ合衆国の一極支配が強まりました。グローバリズム、インターナショナルイズム、トランスナショナルイズムといった見方、捉え方が地理授業の重要な課題となってきました。同時に一国主義とも評されるアメリカ合衆国から目を離せなくなりました。

(地理歴史科・地理)

# 本庄高等学院二十五年の教育と今後の展望



学院への径

## 一 教務関係

### (1) 学校の形態

二〇〇七年四月に早稲田大学本庄高等学院は二十五年におよぶ創立以来の男子校から男女共学校へ大きく学校の形態を変えることになった。一九九一年の十月、本庄高等学院大教室で設立十周年記念式典が行われた。式典に引き続き行われた祝賀会にて、開校時、教務部長として尽力された奥島孝康教授（前総長）が挨拶に立ち「学校の真価が問われるのは大学では五十年、高校では三十年の歳月がかかるでしょう」という趣旨の話がされた。設立時の熱が収まり、教員の世代交代があり、また、草創期の卒業生も四十半ばと社会では中堅からベテランの域に入る、そうなるまで初めて教育の成果が社会的に評価され、飾らない学校の姿が見えてくる、ということなのであろう。しかし、本庄高等学院はその三十年を待つことなく、二十五年目にして共学校へと大きく学校の形態を変えることになったのである。それだけ、この二十五年における本学院を取り巻く社会の動きが早く、かつ激しかったということなのである。

創立以来の二十五年間は男子校としての歴史である。しかし、その二十五年のうち過半の歳月（一九九二年～二〇〇六年）を掛けて共学の可能性を議論してきたこともまた事実である。換言すれば、本庄高

等学院の二十五年は学校の形態を模索、検討してきた歴史であったといっても過言ではない。したがって、いま「創立二十五周年記念誌」にこの間の「学校の形態」を纏めるにあたり、男子校創設にいたる経緯とともに共学校にいたる経緯とをあわせて述べることをお許しいただきたい。男子校創立にいたる経緯は主として小野裕二郎の文（早稲田大学本庄高等学院紀要『教育と研究』創刊号一九八三、『早稲田大学本庄高等学院創立十周年記念誌』一九九二）に頼り、共学校にいたる経緯は時々の教諭会資料、委員会報告などをもとに纏めることにした。

#### 一 一学年男子二四〇名の創始

本庄高等学院は一九八二年四月、埼玉県北本庄市（当時の人口約五万）の南端に位置する早稲田大学本庄キャンパス（約八〇万㎡）内の大久保山の頂にその産声を上げた。本庄キャンパスは一九六一年、早稲田大学第七代大濱信泉総長の時代、工業団地の誘致よりも学園都市となることを望んだ本庄市より学部誘致を条件に低価格で提供を受けた土地である。しかしながら、地元希望を叶えるには東京から一〇〇キロという距離はあまりにも遠く、なかなか地元の望む学部移転の動きとはならず、結局提供を受けてから十年後の一九七〇年にセミナーハウス一棟を建てただけであった。当然、本庄市との関係がギクシャクする。そうした状況下に、第十一代清水司総長が「英断」を振るい、早稲田大学の附属高校である「高等学院」を新たに本庄キャンパス内に新設することにしたのである。これが本庄高等学院の設立事情である。清水総長が「英断」を振るったとはいえ、総長の「独断」

で決まるはずもない。新キャンパスに附属の高等学校を新設するという後の本庄高等学院創設に結びつく話は一九七六年頃より検討されていた。

一八八二年、大隈重信により設立された早稲田大学（当時は東京専門学校。一九〇二年に現在の名称になる）は一九八二年に創立百周年を迎える、については将来を見据えて今後大学はどのような教育、研究計画で進むのかを全学的に検討する必要がある。そこで、一九七六年頃より早稲田大学の各箇所（学部など）の教員により構成された「長期計画懇談会」が立ち上げられ、早稲田大学の将来構想を検討し、その結果を一九七七年二月に「長期構想について」と題し報告された。

まさに、この長期構想の中に「新たな高等学院創設」の方向が示されていたのである。「長期構想について」の中に、私学としての伝統を守りその特色をいかすために新たに附属または系属の高等学校・中学校を設置する、将来は新設・既存あわせて附属・系属からの学部進学者数は二〇％となるよう構想する、新たな附属または系属の学校の設置場所は全国的視野に立つて検討するが、特に新キャンパスには高等学校を設置する、新たな学校においては帰国子女教育をも考慮し、また教育実験・実習の場として活用できるようにする、という構想が語られていたのである。

早稲田大学には附属高校としてはすでに東京練馬の上石神井に早稲田大学高等学院があり、法人を異にするため系属校と呼ばれる早稲田実業学校、早稲田中・高等学校が二校あった。しかし、これら学校は全て都心の中にあり、入学者も都会の生徒が多く、全国的視野で学生

を受け入れたいとする早稲田大学にとっては、既存の附属・系属校にはない特性をもつ高校の創設を意識していたのである。いうなれば既存校との差別化であり、換言すれば、機能が分化され、住み分けされた高等学校の創設である。従来のキャンパスを避け、帰国生受け入れという生徒募集の視野を海外にも向けたことはその現われである。この差別化は、具体的な検討が進むにつれ明確化されていった。

一九七七年五月、四年後に迎える百周年の記念事業を検討するため「百周年記念事業計画委員会」が組織された。「百周年記念事業計画委員会」の役割は三ヶ月前に提出された「長期構想懇談会」のまとめた報告をもとに記念事業を具体的に検討することであり、数ヶ月に亘り小委員会に分かれ、細かな討論が行なわれた。しかし、その最中の一九七八年二月、検討内容が報道機関に流れ、新聞紙上に「早慶カラー再興」、「一九八二年四月を目処に、本庄市に定員二〇〇〇〜三〇〇〇名で全寮制の附属高校を開設する」という記事が掲載されたのである。委員会では検討内容がリンクされたために、翌三月に記事の内容を後追いつけるかのように急遽中間報告をまとめ、「本大学の伝統と特色を生かすため、本庄校地に附属高校（入学定員約二〇〇名）および寮を設置する、その規模は校舎・寮・その他あわせて約一萬㎡（約三〇〇〇坪）、資金約二十億」という、具体的な場所、規模とともに経費をも発表したのである。これにより、新たに設立されることになった高等学校は本庄キャンパスに建てられることが明言された。委員会はさらに高等学校の設置は急務であり、百周年記念事業と切り離し、早急に大学において検討することをあわせて提案した。これを受けて、理事会は、

早速翌五月の学部長懇談会において「附属高等学校設置に関する件」として報告し、全学に周知させたのである。

新たに本庄に附属高校を設立するという計画が百周年記念事業から外され、倉卒に大学にて検討すべきことになった経緯は定かではない。しかし、同年六月に、長年にわたり学部誘致を切望しながらそれが一向に叶えられずにいた本庄市が起した土地返還要望の動きと無関係ではなからう。早稲田大学としては検討内容がマスコミにすっぱ抜かれるという「不名誉」な状況の下で、不満の増大する本庄市へ大学としての早急なしかも責任ある対策が迫られたのである。この後、その年の秋に第十一代総長に選任された清水司総長の指導力により、翌一九七九年一月、「高等学校設置検討委員会」が開かれ、本庄高等学院設立に向けて具体的な検討が開始された。

「高等学校設置検討委員会」は各学部からの代表者が集まり、実に細かい検討を精力的に行い、わずか数ヶ月の間に「高等学校設置に関する答申」を纏め上げた。その答申には学校の名称、設置場所、教育方針、入学試験、学部への進学、寮の七項目に纏め、仮称としながらも初めて「本庄高等学院」なる名称を用い、一クラス男子四〇人、過年度生（一年間のみ）受け入れ、帰国生受け入れを記し、さらに後に本庄高等学院の教育方針となった「断片的な知識の集積ではない、総合的な理解力、個性的な判断力を涵養する」、「地域とのさまざまなレベルでの交流を通して、人間、社会、自然に対するみずみずしい感性を育成する」、「知識と実行力（気力、体力）の結合を期する」をも謳っているのである。そして、委員会では、実現のためのより具体的な検

討は今後設置される専門委員会に委ねる、とした。

一九七九年夏休みを返上する形で、第一回「高等学校設置専門委員会」が開かれた。この委員会の役割は一九八二年四月の開校をにらみ、「本庄高等学院の設置計画」を作成することにあつた。二年後の開校となると、教育内容はもとより学校運営に関する様々な課題についてその方向性を具体的に検討しなくてはならない。「高等学校設置専門委員会」は約一年間、一〇回に亘る全体会、六回に及ぶ小委員会を重ねて、翌一九八〇年六月「早稲田大学本庄高等学院設置計画に関する答申」を纏めた。この「答申」は「はじめに」から始まり、名称、設置場所、課程・学科および入学定員、教育方針、学部への進学、教育課程、生活指導、選抜方法、海外帰国子女の受け入れ、寮・ホストファミリー、教育実習の一一項目について提言したあと「むすび」にて終えている。そこには、定員もこれまでの二〇〇名としていたのを二四〇名とし、入学試験は三教科の他に作文・面接を行う、帰国子女を受け入れ、自宅通学のできない生徒のための寮・ホストファミリーの設置にまで触れている。全国型、全世界型を志向する本庄高等学院の基本はここに定まったといえる。

ただこの時点で、ハウス制、移動教室・教科教室制は決められておらず、服装にしても制服制帽が「望ましい」としている点は注目される。若干気になるのは、この一連の諮問、答申の中で女子教育について余り多く触れられていないことである。確かに、「定員」のところでも「将来一定数の女子を入学させることも検討する」という要望が付されたが、時間を割いて検討した形跡がないのである。おそらくは、「高

等学院」ということで、伝統的な男子校のイメージが優先されて議論が展開していったものと思われる。社会的、時代的にも男女別学に違和感を抱かない背景があったのであろう。

一年をかけて集中的に行われた議論を纏めた「答申」はその年七月の評議員会にて承認を受けた。そこで、大学は開校まであと一年半しかないという限られた時間の中で、生徒募集、入試、校舎建設そして立地する埼玉県への認可申請などの具体的な作業を行うために「本庄高等学院開設準備室」を設置した。「準備室」には、室長神澤惣一郎、副室長小野裕二郎、事務長亀田佳明が任命され、校舎建設、教員採用、学則・規則、教育課程、生徒募集・入試、学部推薦、生活指導、寮・ホームの開設など実に学校を運営するために必要な多くの事務が決められ、開校、開設に向けてフル回転で動き出したのである。この作業に当たったのは、先に述べた神沢・小野・亀田の他に、開校後の教員勤務を見越して準備室嘱託として採用された国語科の田辺明義、風間益人、数学科の矢作修、富永安男、英語科の加納敏郎、岩田克己、社会科の冷牟田修二、理科の篠田晋治、体育科の若林正、職員としては本部より赴任した安藤清、篠田光之、栗本真澄、高野マサ子、新たに採用された原口千代子、森田早苗、玉川とし子、柳澤一夫、小池政夫、大沢研一、新井智であった。準備作業は一九八一年の秋十一月以降は東京から本庄キャンパスに拠点を移し、日々、姿を変えてゆく校舎建設の進捗状況を目の当たりにしながら、進められていったのである。

こうした経緯を経て、ようやくにして一九八二年二月二十一日、早稲田大学本庄高等学院第一回入学試験（一次）が理工学部のある東京

新宿大久保キャンパスで行われた。定員二四〇名に対し、一一六一名（帰国生一〇六名を含む）の志願者があり、そのうち、見事二次試験を突破して合格となったのは三一二名（帰国生四四名を含む）、結局地元推薦生一〇名を加え、晴れて第一期生となったのは男子二六五名（帰国生三五名を含む）であった。月が替わり、四月十日、二六五名の新生を迎えて大隈講堂において入学式が行なわれ、十二日には本庄学院での始業式を経て、新たな附属校設立構想から五年を経てようやくにして本庄高等学院の一ページが始まったのである。

二十五年誌をまとめるに当り、今改めて本庄高等学院の設立の経緯を振り返って見ると、確かに早急な対応を迫られた「本庄問題」があったとはいえ、全学的に構成された各種委員会や数度に亘り事細かに検討が行われ、これまでの既存の附属・系属校にはない新しい附属の高等学校を創設し、早稲田の中核たる人材を育てることにいかに力を入れていたかその熱意がひしひしと感ぜられるのである。一学年僅か二四〇名、全校生徒七二〇名という極めて小さな学校を、採算を度外視してまでも創るという意気込みに、総長以下理事会の新学院に対する期待の大きさを感ぜざるを得ない。

こうして、埼玉県本庄市の大久保山に小規模男子校としての早稲田大学本庄高等学院が誕生した。それはまさに、二十五年間の男子校の歴史の始まりであった。



## 二 共学検討の始動

### (1) 「地方拠点都市地域」構想

冒頭にも記したように、開校十年目の一九九一年秋「十周年記念」の祝賀会が行われた。その席上挨拶に立った第二代大槻宏樹学院長は十年を振り返り、今後の将来構想として、女子入学をも視野に入れた検討が必要になるという趣旨のことを言われた。これが、本庄高等学院から女子入学の検討を公に発信した最初とされている。しかし、先にふれたように、一九七九年六月に出された「高等学校設置検討委員会の答申」の中にも、「定員 約二〇〇名 男子普通科」と記した次の行に、「ただし、将来一定数の女子を入学させることも検討する」と記され、男子校として出発しても将来的には女子受け入れの検討を行なうことが確認されていたのである。大槻学院長は男子校として十年経過して一区切りついたことでその時期がきたと判断したのである。学院長として女子中学生を子女に持つ地元受験生の保護者らからの要望にも接し、そうした思いを強く抱いていたと思われる。将来的に少子化の到来が囁かれ始めてきた時期でもあった。

学院内で女子受け入れの検討を始めた矢先の一九九三年八月、本庄、児玉などの県北一市五町一村が埼玉県より「地方拠点都市地域」に指定されることになった。この「地方拠点都市地域」とは「地域における創意工夫を生かしつつ、……、都市機能の増進及び居住環境の向上を推進」する目的で一九九二年に成立した国の「地方拠点都市法」に、四四の道府県が名乗りを上げ、認められたものである。県の指定を

受けたことを以って、早速、本庄、児玉などの県北一市五町一村は基本計画の策定と事業の推進を担う「本庄地方拠点都市地域整備推進協議会」を発足させた。「本庄地方拠点都市地域」構想の基本方針は「上越新幹線新駅の誘致や早稲田大学を中心とする研究・開発機関の立地促進を図るとともに、恵まれた地域資源を活用し、『職・住・遊・学』の機能を備えた魅力ある拠点都市地域の形成を図る」というものである。

こうした本庄高等学院を取り巻く教育的環境が大きく変わるといふ話がにわかには持ち上がり、ざわざわした雰囲気の中、一九九三年秋十月、大学本部より濱田泰三常任理事が来校した。濱田理事は本庄児玉地域が「地方拠点都市法」により地域指定された、については早稲田大学もこの計画に積極的に関わっていく、今後は本庄キャンパスに接して新幹線新駅も作られ、キャンパス内には各種研究施設も作られてゆくであろう、理事会は現在の本庄高等学院の校舎もそうした研究施設として利用することを考えている、したがって、本庄高等学院校舎の移転・建替を考えなくてはならない、ついでには、本庄高等学院でも新校舎計画、さらには新校舎で行なう新しい教育内容について検討してほしい、という趣旨のことを話された。二年後の一九九五年に埼玉県により承認された「基本計画」によれば、「本庄地方拠点都市地域」構想は本庄・児玉などの地域が一〇の地区に分かれ、事業を展開する計画が語られている。そのうち、本庄高等学院に直接関係する地区の事業は、本庄キャンパスを「早稲田リサーチパーク地区」として「早稲田大学の教育・研究施設などの誘致を図るとともに、関連する諸施設の整備をすすめる、世界の科学技術革新を先導する研究・開発・交流の

拠点」と位置づけ、さらに本庄キャンパスに接して走る上越新幹線には新駅誘致、さらにその新駅北側については都市基盤整備を行う、という内容であった。

本庄高等学院はこれまで校舎の使い勝手の悪さから理事会に繰り返し校舎建替を要望していたが、突然、降って沸いた「地方拠点都市地域」構想により、その可能性が生じてきたのである。この濱田常任理事の要請を受けて、榎本隆司第三代学院長は翌年一月臨時教諭会を開き、「新校舎問題」を検討する学院長の諮問委員会として「基本構想検討委員会」を学内に設けることを提案し、承認された。

しかし、今改めて思うと、僅か開校十三年目にして、新校舎、そして新しい教育内容について検討を行なうことになろうとは、本庄高等学院創設を検討するために各種委員会に関わった学部教員、準備室の教員たちにとっては思いもよらない、複雑な心境であったに違いない。

## (2) 将来構想の検討（一九九四年～一九九七年）

各教科から選ばれた教員により構成された基本構想検討委員会は限られた期間の中で一〇回の委員会を開き将来の学院教育とそれを支える施設などについて鋭意検討した。その報告を纏めるに当っては、委員会の検討結果を教員懇談会などで披露し、委員以外の教員の意見をも取り入れることに努め、一九九四年五月に「今後の学院教育についての基本的な考え―校舎建替を含めて―」と題し答申した。ここで答申書にそって検討の内容を簡単に紹介することにした。

まず、委員会では本庄高等学院の将来構想を検討するに当り、前提

となる方針を確認することにした。それは十五年前に本庄高等学院の設立を構想した際、全学的な各種委員会の答申に盛り込まれた新しい高等学院への期待はもとより、開校後十数年、緑豊かな大久保山で展開した本校の教育成果をも継承する、とはいえ、守旧的にならず、将来的に変わりゆく学院を取り巻く教育環境をも見据える必要があるという内容である。具体的には学部より期待された早稲田の中核を育てるという附属校の使命とともに、必ず到来する少子時代、本庄児玉地方拠点都市の展開に伴う人口の動態、周辺地域との交流、大久保山に今後展開される理系を中心とした研究・教育の機関、施設の活用などを視野に入れて本庄高等学院の教育を検討するということである。

こうした前提を基礎に「今後の学院教育の基本的なイメージ」が語られた。それは、斬新で時代を先取りし、教育の場において生徒はもとより教員も自己実現が可能で、受験生が入学したい全国に一つしかない学校を目指す、少子時代の到来や国際化時代に対応して広い視野に立つて様々な個性を持った優れた生徒を募集し、生徒の個性、適性を伸ばすような多様な教育的仕組みを整え、学部への進学意識が明確に持てるよう附属高校としての利点を活かした高大一貫教育を推進する、かかる教育目標を達成するために、クラス編成、カリキュラム、課外活動、教育施設の面においてゆとりある教育環境を整える、というものであった。そして、こうした教育目標を「実現するための手段」として、生徒募集、教育内容、学部進学、施設などについての具体的な検討がなされ、提案されたのである。それをやや詳しく見て行くことにする。

生徒募集では、まず第一に「男子と同等に女子も早稲田大学附属校生として教育を行い、共学化を進める」とした。ついで、帰国生受け入れの継続、推薦生の枠の拡大、地方の優秀な生徒の確保、自己推薦選抜制度の導入などをあげ、生徒数については、これまでの一学年二四〇名とそれほど差はないものとする」とした。ここで留意すべきは、女子受け入れについて推進することが明確に語られたことである。女子受け入れ、共学化の理由としては、さまざまな視点からその実現を危惧する意見のあることも委員会では承知しているが、女子の大学進学率が高くなったと言われて久しい昨今、女子を入学させない理由、根拠がない、また、将来において社会・時代を女子と同等に担って行く男子が女子と区別なく同質の教育を受けることは、男子にとっても誤った女性観から解放される事にもなる、とした。また、功利的な考え方であるが、女子を受け入れる事により、応募者の母集団がひろがり、その分優秀な学生が多く集まることにもなる、女子をどの分野(帰国生、自宅生、推薦生、地方生)でどの程度入学させ、年次的にどのような計画してゆくかは今後検討を要する、とした。さて、その具体的人数であるが、関連して開かれた委員会では、一学年の規模二五六人、一クラス三二人、八クラス編成、男女比は五対三、一クラス男子二〇人、女子一二人、全校生徒男子四八〇人、女子二八八人の計七八名という試算が出された。

教育内容としては、基礎学力の養成は段階的習熟度に従い年次配当を行うが、専門性を持つ選択科目や授業を多様に用意し、生徒の進路決定に役立つように、また、本庄キャンパス・大久保山の教育環境、

自然環境を最大限生かすようにそれぞれ工夫する、帰国生には必要に応じて補習を行う、ということなどが提言された。さらに、一つの学習テーマに対して様々な視点から関心を持たせるために分野の異なる複数の教員が交代で授業を行う「総合学習」的な授業の模索、本庄キャンパスの自然を教材とすることはもとより、将来本庄で展開される理系分野の高度な研究、教育内容を高校生にも触れさせ、優秀な生徒には飛び級制度の導入、なども検討された。関連して、ゆとりある教育としては全国に先駆けて三〇人学級という少人数教育を行い、それに伴う教員増、教科の特性に合わせて専門性を持つ教科配属職員の充実などが指摘された。その他、表彰制度の充実、附属校としての利点を生かした大学との教育的・文化的交流、学部教員との共同によるテキストの開発など高大一貫教育の方向性も示されたのである。

学部進学に関してはこれまでの、進学基準・システムは基本的に継承するとしても、単なる成績だけではなく、生徒の意欲、適正を考慮してフレキシブルな仕組みを考え、また反対に成績が良くても意欲のない生徒は推薦を見送るなどの仕組みが必要である、という意見も出された。

施設としては、HR、必修科目などは三〇人学級に見合った広さを持つ固定教室制、選択科目は移動教室制とし、体育施設の充実、理科だけでなく美術・情報などの実習教科には専門職員の配置、本庄キャンパスに集う学院生、大学院生、教職員さらには一般市民などが利用できる図書館、食堂、講堂(ホール)、博物館の設置、さらに自宅外通学の学院生や海外からの大学院生そして教職員のための宿泊施設の設

置、大学本部と接続したネットワークの構築、スクールバスの運行などが提言として盛られた。

委員会としては今後この大久保山で展開される「本庄・児玉地方拠点都市地域」構想から本庄学院が排除されるのではなく、一緒に新しい展開に参画して、同じ早稲田の一員として、協力しながら附属校としての教育を行いたいという考えを提案したのである。

これらの提案は学院長の諮問に対する委員会の答申という形をとつたため、理事会用に「本庄高等学院将来構想ならびに教育条件の整備について」と題する報告書に書き改められ、それが一九九四年七月教諭会の承認を得て、理事会に提出された。

この後、数年、毎年本庄学院の将来構想検討委員会は構成メンバーを変えながらも組織され、先に提示した本庄高等学院の将来構想について検討を続けた。しかし、それに対して理事会側が反応を示すことはなかった。

そうした中、一九九七年十二月に本部教務部主催で各学部から選ばれた教員と各学院の教員とで構成された「本庄高等学院に関する懇談会」が発足し、約一年かけて懇談が行われ、その内容が一九九八年八月に「まとめと提言」として報告された。そこには本庄高等学院への期待から現在の「問題点」が種々指摘され、高大一貫教育の取り組みを柱とする提案がなされた。さらには将来審議会、全学審議会（第一次）に引き続き、第二次全学審議会が組織され、高等学院教育に対して厳しい意見が相次いで出され、高大一貫教育の仕組みづくり、優秀な生徒の確保についての提言などが行なわれていったのである。これ

は高等学院への期待から現状を見直し、新しい仕組みを検討するため、学部、教務部が動き出したことを物語っている。

一方、「本庄拠点都市地域」構想の方は、先に述べた一九九五年三月に「基本構想」が埼玉県により承認されたことを受けて、早稲田大学理事会は四ヶ月後に「本庄キャンパスにおける教育研究計画」を大学の方針として正式に決定した。これにより拠点都市構想の柱の一つである「早稲田国際リサーチパーク基本構想」が開始したことはいうまでもない。早稲田大学は「本庄キャンパス校地利用基本計画検討委員会」を立ち上げ、一九九七年十二月に「本庄キャンパス校地利用基本計画検討委員会第一次報告書」を纏め、本庄キャンパスを利用した研究・教育活動の今後のアウトラインを示した。それには、研究施設や研究者の宿泊施設などの建物、そして各建物を結ぶ道路など土地利用の大きなゾーニングされた見取り図が示されていた。本庄キャンパス内に大学の研究機能を移転し、さらには企業を誘致して、各種研究棟、研究者の宿泊棟などを建て、本庄キャンパスをアメリカのカリフォルニア州シリコンバレーのような先端科学技術の研究団地として開発しようという計画であった。

また、新幹線新駅については、一九七一年の上越新幹線の建設計画発表以来、新駅誘致を呼び掛け、一九九一年には「上越新幹線新本庄駅設置促進期成同盟会」が結成されていた。そこで、こうした長い誘致運動を背景に、一九九七年の長野新幹線開通にあわせて、翌一九九八年に本庄、埼玉県、JR東日本との間で「新駅設置についての基本覚書」が締結されるという動きが生まれ、新駅開業に向けて具体的に

進むことになった。しかし、新幹線新駅北側の都市基盤整備については、一九九七年に「地権者協議会」が結成されて町づくりについての協議が行われることになったが、様々な思惑や、一九八〇年代後半の株価の狂乱上昇の後遺症による深刻な不況により、進出を企てる企業もほとんどなく、計画が進まない状況が続くことになる。「本庄地方拠点都市地域」構想の内、計画が進んでいたのは新幹線新駅構想と早稲田リサーチパーク構想だけであるといった状況であった。

こうした動きの中で、一九九九年に「本庄キャンパス校地利用基本計画検討委員会」より「本庄キャンパス校地利用に関する基本的な考え」が発表され、あわせて開発計画図が添えられた。しかし、不思議なことに、その計画図には、本庄キャンパス内に本庄高等学院の校舎は存在していなかったのである。地図そのものは、その後、本庄高等学院の要望により修正されることになったが、これにより、新しく展開するキャンパス計画の中に本庄学院が入り込む余地はないことが明らかになったのである。本庄学院は新しく展開する校地利用構想の中で今後も教育活動を続けたいという意向を要望していたにも拘わらず、である。

### 三 定員増共学の確認

#### (1) 再び校舎移転と将来構想の検討

本庄高等学院が自らの将来構想を理事会に提出して四年後、一九九八年九月に河合素直常任理事、白井克彦教務部長が来校し、理事会の考える本庄高等学院の将来構想について説明した。その内容は一九九

三年秋の濱田常任理事の話と基本的に変わらない。「地方拠点都市地域」構想に基づき本庄キャンパス校地の再開発の計画を進めているが、それにともない本庄高等学院の校舎を今後どう考えるか、また、校舎だけでなく、学校の形態、教育面での将来構想をどう構築するか、「本庄高等学院の自主的・自発的改革を尊重し、学部・理事会はこれを支援したい」ということであった。新校舎の規模を考える上でも定員・共学の早急なる検討を学院側に要請したのである。具体的新校舎の候補地として、現在の場所にとどまるか、南側斜面に展開するか、キャンパスを出てJR高崎線本庄駅と本庄キャンパスの中間に求めるか、の三案で、理事会としては大久保山を出る考えを強く示唆した。候補地のうち在来線本庄駅と大久保山の中間地点とする案は、本庄キャンパスの土地の一部を「地方拠点都市地域」構想に提供する代わりに、代替地を得て、その土地に新校舎を建てるというものである。教育内容・学校の形態などについては基本的に先に理事会に提出した「本庄高等学院将来構想ならびに教育条件の整備について」をもとに考えればよいのであるが、理事会の強く示唆するキャンパスを出る考えについてはさすがに本庄学院の教員は動揺を隠し切れなかった。

理事会の説明を受けて学内では将来構想検討委員会が早速に検討を開始した。しかし、如何せん時間がない。そこで、委員会ではまず、今後の本庄高等学院の学校の形態、移転先などについて教員より忌憚のない意見を聴くことからはじめた。教諭会、教員会で意見を求めても発言者は限られ、声にならない意見も聴く必要があると考え、本庄高等学院に勤める専任の教職員全員にアンケートを実施することにし

たのである。教員だけでなく、職員にもアンケートを実施したのは同じ職場で働き、日々生徒に接している早稲田の構成員として附属校としての本庄学院の将来について意見を述べて欲しいと考えたからである。アンケートの回答率は教員八五％(三四人中二九人)、職員九〇％(一〇人中九人)であった。アンケートの内容は大きく分けて、将来の本庄高等学院の校舎の移転先、今後の本庄高等学院の位置、今後の本庄高等学院の規模および女子入学問題についての三項目である。その結果を見ることにする。

まず、「本庄高等学院の校舎を何処にしますか」という設問に対して、「現在の場所に残り、改・増築で施設を充実させる」は教員三名、職員は〇名、「本庄キャンパス内の他の場所に移転する」は教員二〇名、職員二名、「本庄キャンパスの外に出る」は教員五名、職員七名、「いずれの問いにも保留する」としたのは教員一名、職員一名であった。

ついで、「将来の本庄高等学院の位置づけについてどう考えますか」の設問に対して、「これまで通り『学校法人早稲田大学』の一員とする」はYes三六名(教員二八名、職員八名)、No一名(教員〇、職員一)、「別法人化についても考えておくべきである」はYes一四(教員八名、職員六名)、No二二名(教員一八、職員三)、「複数ある学院では相互の『住み分け』は必要である」はYes二二名(教員一七、職員五)、No一四名(教員一一、職員三)という結果が出た。

そして、今後の本庄学院の規模と共学についての設問に対し、「将来は定員増をはかるべきである」は九名(教員六、職員三)、「現在の定員でよい」は二五名(教員一九、職員六)、「定員を減らすべきである」

は三名(教員三、職員〇)であった。共学については「女子を入学させる」は二三名(教員一六、職員七)、「男子校でいく」は一三名(教員一一、職員二)であった。

これらアンケートにより、将来の本庄高等学院の「学校の形態」としては共学化を志向するが、定員増は望まない、校舎は現キャンパスの中に建るという本庄学院で勤務する教職員の意思が浮かび上がったのである。本庄高等学院の中で共学化が話題になった一九九二年以後これまで、学内にはその可能性を将来計画検討委員会などで種々検討し、教諭会でも議論されてきたが、ほぼ全教員の意思が数字の上で確認されたのはこの時が初めてである。委員会はこのアンケート結果そのものを一九九八年十月に教職員に配布し、さらに、それをもとに十一月初め「将来計画検討委員会報告」を纏め、学院長に答申した。

その年の暮れ、再び学院長より委員会に対しアンケート結果に基づいて、将来の高等学院の規模(定員、共学、中学併設など)、校舎規模、その他関連する事項の三点について至急検討するよう諮問が出された。そこで、委員会では一ヶ月余りの間に五回の委員会を開き、翌一九九九年三月に「一九九八年度将来計画検討委員会報告」主として第二次諮問への答申」と題する報告書を作成したのである。

委員会では報告書を纏めるにあたり、二つのことを確認した。その一つは、今回の第二次諮問の内容は創立十年以降、特に一九九四年度の基本構想検討委員会の答申以来、毎年その年度の検討委員会で議論され、折に触れて話題となり、幾度と無く語られてきたテーマであり、すでに議論は出尽くしていると判断される、したがって、次の五つの

視点、

① 「第二次全学審議会報告」、「(両) 高等学院問題に関する懇談会報告」にもられた大学・学部の本庄学院への意見や要望を踏まえ、て検討する。

② 早稲田大学の一員であることを前提とし、かつその役割を果たす。

③ 新校舎をキャンパス南側斜面へ移転することを前提に検討する。

④ これまでの歴代委員会の議論、今回のアンケート調査報告を尊重する。

⑤ 本庄キャンパス再開発計画で大学が実践する新規事業（研究・教育）に連動する形で学院教育の展開を考える。

にそって纏めることにするということである。

いま一つは、報告書を纏めている最中の一九九九年二月に河合常任理事、白井教務部長が再び来校され、学院側の「積極的」、「主体的」な検討を強く示唆する場面もあったことから、委員会では報告書は学院の意思と方向性を強く打ち出す必要があると考え、委員一二人に共学賛成、反対、保留の三案の内、どの立場で報告書を纏めるか、その方向性を確認したところ、賛成九、反対三、保留〇という結果になったので、答申は共学推進の立場で纏めることになったのである。答申の概要は以下の通りである。

将来の学校規模・形態として、まず「定員」であるが、基本的に一学年二四〇名とする、たとえ定員増を考えたとしても一学年三〇〇名

程度とし、一学年六〇〇名、七〇〇名などという大幅増員は行わない、

定員増よりもむしろ学級定員を三〇名とし、きめの細かい少数精鋭教育を行いたい、とした。本庄高等学院の経営が苦しいことは承知しているが、だからといって大幅な定員増は教育効果を損なう、むしろ三〇〇名程度にして、少人数学級を考える、というものである。本庄高等学院が創立時四〇名学級としたのは当時としてはきわめて斬新なことであり、次の展開はさらに斬新なものとし、受験生とその保護者への強いアピール性を求めたものである。

「男女共学」については、本庄高等学院は将来女子を入学させる、その人数、男女比、開始年度については今後検討する、女子入学に伴い懸念される問題を明らかにし、さらにそれを解決する議論を重ねる、とした。共学問題は創立十年目を期に継続して検討されてきたことであるが、その時々の構成委員の考えにより、賛成↓反対↓賛成↓反対とその都度大きくぶれ、それゆえに教諭会の正式議題にはならず、結局学院の意思を確認することが無いまま推移してきた。そうした中、今回のアンケートでは教員の八割が意思を表明し、そのうち過半数の共学賛成が確認されたのである。このことの意味は大きい。

共学推進の理由としては、早稲田大学を志向する者は男子だけでなく、学部は女子を排除せず共学を基本としている、四年生大学への女子進学が増えている、という現実に対し、早稲田大学の附属校が女子を受け入れない理由が見当たらず、「男女平等」、「男女機会均等」などの精神からいっても女子受け入れは当然である、また、少子化の中で、学院の教育的質を維持するためには、やはり母集団を増やす必要がある

る、さらに、男女が席を同じくして学校生活を送るのは「自然」かつ人格形成においても重要で、男女共生社会では基本的な教育形態である、などが挙げられた。

一方、共学反対の理由としては、男子校としての伝統を築きたいという積極的な意見から、今この状況（環境、態勢）の下で共学に進むのは不安であるという消極的な意見まで、個々においてはかなりの温度差がある。その具体的な意見として、男子校に誇りをもち伝統を築きたい、男子部活の沈滞化、女子教育の経験が無い、生活指導の問題、共学のデメリットを克服しないうちは無理、委託ホームへの女子入居の困難性などが挙げられたが、大方は男女共学にとまなう生徒指導が量的に増え、かつ質的な困難さも加わるという点に尽きる。

このように共学については推進、反対・消極の両意見が出されたが、実は両者の議論はかみ合っていないのである。推進者の意見は社会性、時代性に適うものであり、教育に携わる者はその意見に表立って反対することには「勇氣」が求められよう。しかし、推進者においても反対者の言う「不安」が全く無いわけではないこともまた事実である。とはいえ、学院としては学部から寄せられる優秀な学生を確保して欲しいという期待に応えるためにも、ここで、共学の方向性を示す必要がある、「反対者の理由とする不安を解消する手立てを慎重に検討する必要がある」と纏めたのである。

「中学併設」については、本庄学院には附属の中学校は併設せず、高校・大学の一貫教育を今後も展開する、とした。その理由として、早稲田大学系属校の早稲田実業学校が共学とともに小学校を併設し、

小学から大学までの一貫教育という方向を示したが、これは慶応システムへの志向である、慶応は小学校から大学まで「慶応精神」の下に一貫教育を展開するが、それを可能としているのは、いわゆる「慶応ファミリー」という仲間意識があるからで、残念ながら早稲田にはそれが無い、「早稲田精神」、「早稲田の団結」などと言われるが、一丸となって仲間をまもるという意識が無い、そうした中で、「のんびり」と附属で六年間ときに九年間過ごした早稲田の「子供」を果たして学部が好意的に受け入れてくれるか、はなはだ不安であるという、理由からである。

校舎規模については、本庄学院が教育を展開する上で、現在利用している面積（グラウンド、教室など）より広く、かつ、不便にならない程度の規模と内容が必要である、とした。極めてあいまいな答申であるが、これは定員数、共学の規模に左右されるので、その大枠が決まらないと明確な答申は出せないということであった。

その他関連する事項として、先に行なったアンケート結果に示された将来の学院校舎を南側斜面とするその理由を説明した。それは、過去十七年間、この大久保山で教育を展開してきた教員にとっては、この山を離れての学院教育の展開は考えられない、というものである。

これまでの教育理念を継承するということであればこの自然を抜きにしては考えられない、この大久保山の自然は本庄学院へ進学を希望する受験生やその保護者たちにも魅力であり、教育環境、教材としても貴重な財産である、それは石神井の高等学院との差別化を図る上でも価値があり、本庄学院がこのキャンパスの外に出たら、そもそも本庄



に在る必要は無く、もつと通学に便利な首都圏に接近するほうが受験生確保においては効果的である、という理由が挙げられたのである。

この報告書は一九九九年三月の教諭会にて報告されたが、その年度の委員会報告という形をとったため、共学化への意思確認はなされなかった。

## (2) 構想の具体化

年度が改まり、四月に榎本隆司学院長に代わって、新しく山下元第四代学院長が就任した。山下新学院長は着任早々の四月の教諭会にて、これまで積み上げてきた校舎建替、共学などの将来計画を学院の意思として決断する時期にきていると判断し、協議事項に「男女共学について」と題し、提案した。しかし、いきなりの発議として採決では戸惑うこともあろう、そこで、これまでの議論を踏まえ、各教員がそれぞれ考えを纏める時間が必要ということで、意思の確認は翌五月の臨時教諭会に持ち越された。果たして、五月の臨時教諭会に再び「男女共学について」なる議案が出され、「近い将来本学院が男女共学に移行する方向で二〇〇三年度の（共学）実現に向け、具体的検討に入る」という原案に対し、出席した教員三〇人中、賛成二三名、反対四名、保留三名という結果が出たのである。三〇名中の二三名の教員が賛成したということは約八割弱、参加しなかった教員を含めても七割強の教員が将来の方向性として共学を志向したのである。この決議を受けて、学院長は教務部長に決議内容を報告し、協力を要請した。

二〇〇三年度に共学を実現するとすると、残された期間は三年弱で

ある。学院では、校舎移転は本庄キャンパスの再開発の進捗状況と絡むが、まずは共学の可能性を検討するのに必要な情報を収集するため、共学校へ視察に出かけることにした。この視察は翌年の三月まで断続的に行なわれ、訪問した学校は同志社大学香里高校（深草）、立命館大学高校（深草）、国学院大学国学院高校、東京農業大学第三高校、関西学院高校、黄柳野高校、麗澤高校、幕張総合高校、新潟国際情報高校、慶応湘南藤沢高校、都立晴海総合高校などで、基本的に性格を同じくする大学附属の高校が主に選ばれ、将来のカリキュラムへの関心から総合高校も含まれた。これら半年にもおよぶ視察は翌二〇〇〇年五月に、委員会より「学校視察報告書」として纏められ、翌六月の教諭会にて報告された。

二〇〇〇年六月、白井常任理事、河合常任理事、渡辺重範理事が本庄キャンパス校地利用計画の状況と早稲田大学「二十一世紀の教育研究グランドデザイン」を説明するために来校した。この「グランドデザイン」とは、一九九〇年代の後半に第一次から第三次に亘って行なわれた「全学審議会」の答申を受けて、総長が二十一世紀の早稲田大学の教育研究のあり方を再度諮問するために一九九九年に全学的に組織された「二十一世紀の教育研究グランドデザイン策定委員会」が作成した答申のことである。答申には早稲田大学のありとあらゆる機能、分野、箇所および、法人を同じくする高等学院に關しても二十一世紀に向けての「改革」の方向性が示されていたのである。両高等学院に求められた改革の方向性とは、優秀な生徒の確保、高大一貫教育の推進、若手教員の育成で、優秀な生徒の確保については男女共学、中

学併設への志向が求められたのである。渡辺常任理事は早稲田実業学校の例を引きながら本庄学院における男女共学の検討を要請した。一方、「地方拠点都市地域」構想の新幹線新駅は二〇〇四年開業を目標に二〇〇二年度から工事に入る、それに合わせて、「リサーチパーク」構想でも大学院国際情報通信研究科の本庄展開を行なう、ただし、学院の校舎の移転先の一つとされるキャンパス外の土地についてはいまだ決定していない、という説明であった。

学院に再度、将来構想を前向きに検討して欲しいということである。学院としてもこれまでも検討を行なっているのだが、その前提となる学院の移転先が未だ決まらないのである。移転先の一つの候補として、キャンパスの外に出る案があり、理事会はその方向性を強く示唆するが、この時点においても、新幹線駅北側についての開発計画が進まず、結局いまだ候補地が決まらないという状況であった。そうした不安定な中で、本庄学院の将来計画を語らなくてはならず、正直なところ、学院としても実際どのように具体的計画を立てていいのか戸惑うことも多かった。

二〇〇〇年の将来計画検討委員会は二〇〇一年二月に「二〇〇〇年度将来構想検討委員会報告」を纏め、三月の教諭会で報告した。その内容は、学校規模としては男子二四〇名、女子八〇名の計三二〇名(八〇名定員増)とし、これが認められない場合は情報・理系・国際・体育科コースを新設し、これも認められなければ現状二四〇名を男子二〇〇名、女子四〇名とする、その他、専任教員増、通学バスの運行、女子は原則自宅通学、定員増に伴う学部推薦枠の見直し、校舎の設計

は専門家に依頼する、などが述べられている。こうした中、二〇〇一年三月の年度末には学院北側のグラウンドを明け渡し、代わりに南側の広大な大学グラウンドを使用することとなり、あわただしく、体育用具の移動、運動各部の部室移転が行われ、新幹線新駅の計画と大学の企画する「リサーチパーク」構想だけは着々と進んでいったのである。

年度が変わり、二〇〇一年四月、白井・河合常任理事が来校し、繰り返し、理事会の考えを説明した。学院のキャンパス外への移転場所は、現在交渉中で、未だ決まっていない、決まったら発表する、学校の形態としては中学併設の考えもある、独立採算に近い経営体質の改善は重要で、教員の給与、勤務体制も絡めて考える必要がある、という厳しい内容の話も含まれていた。二〇〇一年度の将来計画検討委員会は、新校舎の場所を棚上げする形で、しかも、労働条件の「改善」まで示唆される状況の中で将来計画を考えなくてはならなかった。そこで、再び中学併設のメリット、デメリット、学校規模、男女共学導入の形、新校舎のラフ・プランなどが検討された。議論が振り出しに戻ったような検討内容であったが、報告書では中学併設は短期的に難しく、学校形態としては高校のみとする、一クラス四〇人学級を維持し、二クラス分八〇名を定員増、定員増分は女子とし、一学年八クラス三二〇名という案に纏った。一九九九年の「報告」以来、新校舎の場所が決まらないとはいえ、本庄高等学院の将来構想の方向は基本的にここに定まった感がある。

二〇〇二年五月、白井常任理事、河合常任理事が来校し、本庄キャンパス利用計画の経過説明を行なった。二〇〇二年の秋から学院の旧

グラウンドに大学院などの施設工事が始まり、二〇〇四年三月に完成し、大学院の教育活動を予定しているが、学院新校舎のキャンパス外の代替地ははまだ決まっていない、今年の夏には最終的にどうするか理事会で決定したい、と説明した。代替地の確保はとも難しいという観測を示したのである。そうした中、二〇〇二年度の検討委員会ではこれまでの議論を下に、具体的な校舎のモデルプランの検討に入ることにした。それは定員三二〇名、将来的には男女半々になることまでも想定して、移動教室制、固定教室制の二案で校舎のプランを考えたのである。

### (3) 煮詰まった定員増・共学化構想

年が明けた二〇〇三年三月、堀口常任理事、深沢教務部長が来校し、高等学院の教員と懇談を持った。そこでは、学院の代替地として理事會が考えていたキャンパスの外に出る案は消えた、キャンパスの外に出ることはなくなったが、「グラウンドデザイン」の提案を真剣に受け止め、新しい本庄高等学院の将来構想について検討して欲しい、高等学院に期待された男女共学、中学併設のうち特に本庄高等学院には定員増、共学化について検討して欲しい、というものであった。「グラウンドデザイン」は先にも述べたように、二十一世紀の早稲田大学の教育と研究のあり方を全学的視点に立って纏められたものである。それは、少子時代が継続する中、いかに早稲田といえども安穩としてはいられない、優秀な学生を確保するために、どのような方法があるのか、各教育・研究箇所がそれぞれの立場で二十一世紀を生き抜く仕組みを考

えたものである。この「グラウンドデザイン」にそって、政治経済学部、第一・二文学部、国際教養学部、人間科学部、スポーツ科学部、教育学部、理工学部では学部・学科の創設、改編、そして通信教育制度の試みなどが展開されていた。危機感の現れである。こうした中、早稲田の中核を育てる使命を持つ両高等学院がこれまでの仕組みで次の時代を乗り切るのは難しいという思いが理事会、学部ともに抱いていたのは事実である。

二〇〇三年四月、山下元学院院长に代わり前常任理事の河合素直第五代学院院长が就任した。河合新学院院长はこれまで早稲田側の開発の責任者として本庄キャンパス校地利用計画を仕切り、立场上、学院の新校舎についてはキャンパスの外へ出ることを示唆していた。しかし、新校舎の場所が決まらず本庄高等学院の将来構想が「停滞」していたことに責任も感じていた。そこで就任早々、河合新学院院长は二〇〇三年度の将来構想検討委員会に「男女共学・定員増」についての学院の意見を取り纏めるよう諮問した。学院院长には箇所からの自発的な改革姿勢を示すことが、理事会の理解、協力が得られやすく、その後の交渉、展開において有利であるという判断があり、また、定員増分の施設建設の候補地は学院校舎北側の駐車場という考えがあった。早速、二〇〇三年度の委員会は活動を開始し、早くもその年の七月に「校舎移転のいかんにかかわらず、『男女共学化』を実現すべき目途とし、それに向けてただちに具体的な準備に着手すること」という答申を学院院长に提出し、それが七月三日の臨時教諭会にて報告された。

この答申を受けて、一週間後の定例教諭会に「共学について」とい

う議題が提案された。その内容は、これまで、校舎移転を前提とする「共学化」の議論があったが、そうした前提を除いても、学院を取り巻く厳しい諸状況を考えると、男女共学化に向けての検討は必要であるという判断の下、

1 男女共学にむけて、具体的な準備作業を行う、

2 この作業を通じて、どうしても越えられないハードルがあり、

本学院において共学は無理である、ということでも学院の意見が一致すれば、今一度、原点に戻り、共学以外の検討を始める、というものである。

この提案に対し若干の意見が出されたものの、反対意見はなく、基本的に了承されることになった。これまで、繰り返し確認されてきたテーマではあるが、次へ進むための「決意表明」とも言えた。提案の中の「どうしても越えられないハードル」とは具体的に何を示すのか。それは許認可権をもつ埼玉県認可が得られない、理事会が「本庄学院の考える将来構想案」に賛成しない、定員増に見合った施設を確保できない、ことなどを想定したものであり、さらには女子を受け入れた場合のキャンパス・委託ホームの安全性への不安なども含まれていた。そこで、そうした問題がクリアできない場合には、再度検討し直し、別の方向性、たとえば男子中学校併設などを検討するということである。

本庄高等学院の共学の可能性については十年にも及ぶ検討を行い、そのつど共学の方向を確認してきた。にもかかわらず、具体的にその方向への動きがなかなか進まなかったのは、学内に共学消極論が少な

からずあったことにもよるが、そのほかに、「本庄拠点都市地域」構想と絡んだ新幹線新駅北側の開発計画（地域振興整備公団）が進まないために、移転先の代替地が決まらず、新校舎建設の話が進まなかったことにも大きな原因がある。しかし、今回の答申で、「校舎の移転のいかにかわからず」共学化を進める、としたのは、本庄高等学院をとりまく教育環境が激変して来ている、という認識が強く意識されたためである。それは、例えば、少子化の到来に伴い入学生の学力低下を実感し、「地方拠点都市」構想に基づく新幹線新駅「本庄早稲田」駅の着工、GITS、IOC（インキュベーション・オン・キャンパス）など研究機関新設の「早稲田リサーチパーク」構想の実現など、具体的に目に見える形で進行しており、さらには、二十一世紀に向けて早稲田大学の種々の改革（学部再編、大学院新設など）が進む中で、高等学院だけがこれまでの形態で乗り切れるのか、早稲田の一員として「ブランドデザイン」に少しでも応える必要がある、という考えからである。

先にも述べたように、一九九〇年代後半からの「両高等学院懇談会」、「全学審議会」、「ブランドデザイン」の会議において、次世代の早稲田の中核を育てるという高等学院への期待から現状を改革する提言がしばしば示唆されていた。学院側はこれら期待に応えず、ただ手をこまねいて事態の成り行きをぼんやりと眺め、少子時代を迎えていたわけではない。本学院はここ十年、さまざまな取り組みをして、学院教育の向上を図ってきた。たとえば、高大一貫教育として課外講義、サマーセミナー、進学準備セミナーなどの各種セミナーの開催、学院教

育の特色である卒論の改革、選択科目の充実などを図り、学院生に進学の意味と目的を自覚させる教育を展開してきた。しかし、さまざまな取り組みの中で、やはり二〇〇二年度に文部科学省からスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）の指定を受けたことは大きな転機となった。この期を境に、理系教育の充実が図られ、高大連携に加え、大院連携も図られ、本庄高等学院の理系教育の評価が高まることになった。SSHの「効果」はそれに止まらず、社会科学分野での教育活動も活発化させ、さらにはスポーツの部活にもその刺激が伝わり、試合成績が向上するなど生徒たちの活躍が目立ち始めたのである。このSSHの指定により学校全体の雰囲気活性化し、社会的評価も高まってきたというのも事実である。

入試においても、早くに早稲田を志向する優秀な生徒を確保するために、さまざまな取り組みを行ってきた。 $\alpha$ 入試（国内生自己推薦）、I入試（帰国生自己推薦）を取り入れ、さらに、より多くの受験生が受験できるように試験日を繰り上げ、これまで行っていた地元推薦の範囲を広げ、指定校推薦制度を始めるなどさまざまな改革を行ってきた。これにより、二〇〇四年度より受験生が驚異的に増加するという現象が見られた。しかし、より優秀な生徒の確保という観点から見ると、こうした仕組みではあと五年、十年は持たない、そこで、男女共学という学校の形態を変える選択肢を選んだのである。時代や社会の動きに合わせて、改革を行ってきたがそれだけでは乗り切れない、解決できないものがあり、仕組み、形態をかえる大きな岐路に立っていることを実感したのである。

#### 四 関係箇所との打ち合わせ

##### (1) 理事会との打ち合わせ

共学化の方向性が過去十年の間に三度確認されたことを以って、河合学院長は二〇〇三年七月に第二次諮問を委員会に依頼した。その内容は、学校の規模（生徒数、男女比、教員数）、教育体制、施設・設備、実施の目標年度などで、共学の具体化についてであった。検討委員会はこの第二次諮問に対し、数ヶ月後に「中間答申」という形で学院長に答申し、その年の十一月の教諭会にて報告した。それは、これまでの議論を踏まえて一クラス四〇名学級、一学年八クラスで二クラス八〇名増、八〇名増分を女子とする、男女比は三対一で、実施目標年度は二〇〇六年とする、という内容であった。過去十年の間に、榎本・山下の二代の学院長より同様の諮問が出され、その時々委員会が同様の答申を行ってきた。そして今もそれを繰り返し、常に同じ方向性を指し示してきたのである。今後、次のステップに進まないと本庄学院の「良識」が疑われることにもなる。語学の学習で言えば、毎年、毎年初級を学習し、その成果は十分に確認されているにもかかわらず、中級に進まないのと似た状況を繰り返してきたのである。そこには、共学の是非などをさらに初手から議論するのは不毛である、という雰囲気漂っていた。

そこで、委員会、教務は次のステップに踏み出すための確認作業を行った。まず、本庄学院の中だけで共学が可能か不可能かを「ああだ」、「こうだ」と議論していても始まらない、そもそも、定員増・共学な

る方針が許認可権を持つ埼玉県が認めるのか、また、理事会が学部推薦枠・施設・教員増などの点において学院の要望を認めるのかなど、総じて本庄学院の「外」との協議、相談、打診が必要な段階にきている、ということを確認した。そしてそのためには、これまで共学に消極的な理由とされた、部活(部数と顧問数)、生徒指導、安全性、寄宿施設などについて女子を受け入れる場合の問題点を検討する必要がある。そこで、教務と委員会のメンバーが分科会を作り、それぞれのテーマについて検討した結果、基本的にクリアできないものは無い、やれる範囲で、できるところから始めればよい、ただし、通えない女子のために委託ホームを開放することは難しく、当面女子はホームに入居できない、ということが確認されたのである。これにより、本庄学院の定員増・共学の将来構想を「外」に打診するという次のステップへ進む下地ができた。

二〇〇四年一月中旬、初めて埼玉県学事課を訪ね、本庄学院の定員増共学化という将来構想について打診した。これに対し、県学事課は平成七年埼玉県私立学校振興協議会が県に要望した少子化時代における「私立学校行政への提言」に記された「生徒減少期間中に限っては、原則として収容定員の増加をもたらすような学校、学科等の新設認可は当面見合わせるような配慮が望まれる」、「しかしながら、県民のニーズに応える新しい教育を行う場合で、既存校に例をみない特色を持っているか、あるいは、非常に必要性の高い学校や学科について、その新設が埼玉県の高等学校教育全体の振興に寄与する場合には、公私協調の理念を考慮しつつ、上記原則の例外として検討する必要もある」

という一文を示し、県民のニーズ、既存校にない特色がない限り、埼玉県私学の立場を斟酌すれば難しいのではないかとこの判断を示した。これが県との初めての打ち合わせであった。

埼玉県学事課との初回の打ち合わせを行なって、県との交渉には学校法人としての対応が不可欠であり、また、大学理事会は我々の将来構想をどのように理解し、支援するのか、「総じて本学院の定員増と共学を実現するには、大学理事会の判断や支援が極めて重要、かつ必要」であるということから、本庄学院側から理事会と交渉する段階に達したと判断し、二〇〇四年二月の臨時教諭会にて「学院内での議論、検討と平行して理事会との協議に入る」、「定員増・共学にともない教員増、学部定員枠、施設、通学バス、安全性の確保などについて理事会の考え方、また、県への申請に当たっての協力」などについて協議する、ということが確認された。これにより、十年の歳月を要した共学についてやっと理事会との協議という段階に至ったのである。

年度が改まった二〇〇四年四月一日、河合学院長に代わり尾崎肇第六代学院長が就任した。二〇〇四年の入学式の前日四月七日、尾崎新学院長と教務主任、事務長とで理事との打ち合わせを持った。この打ち合わせでは、これまでの学院内での定員増・共学についての検討の経緯を説明し、具体的な協議は次回から行うことを確認した。その後、堀口健治教務担当常任理事を中心とする大学との協議は月一回のペースで五月から十一月まで五回ほど行い、学内からは学院長、事務長、教務主任(教務)、将来構想委員会委員二名が常に参加した。堀口理事との打ち合わせにおいては、共学理念、生徒・教員の規模、

施設などについて協議し、将来像についてはSSHの教育経験を生かした高度な理系教育の推進を謳い、定員増についてはこれまでたびたび確認されてきた二クラス八〇名増、教員については五名増、施設については現校舎とは別に三三〇〇㎡の校舎を新築するという、方針が固まった。この間、七月下旬には中間報告として学院長が理事会にて本庄高等学院の将来構想を説明した。

理事との間では大まかな構想が固まってきたが、理事会は本庄高等学院の将来構想だけでなく、上石神井にある高等学院の将来構想をも同時に進めたいという考えの下、本庄学院との協議と平行して高等学院との協議も行っていた。理事会は上石神井の高等学院には高校の定員を減し、その分中学校を併設する可能性について協議していた。しかし、上石神井の高等学院の将来構想がなかなか進まず、本庄学院の将来構想が先行する雰囲気になっていた。理事会は両高等学院の将来構想を同時にスタートさせるために、堀口理事を中心とする教務部との打ち合わせとは別に、渡辺重範諸学校担当常任理事の下で「両高等学院将来構想検討会」を開くことにしたのである。この「渡辺委員会」はその年の十月から翌二〇〇五年の五月まで不定期に三回ほど開かれ、まず、理事会の両高等学院への要望、期待が述べられ、ついでそれを踏まえた両高等学院からの将来構想を説明した。両高等学院の将来構想は基本的に理事会の志向する方向と矛盾するものではなかったが、各学院の議論の深さ、歴史においてかなりの差があり、両学院の将来構想を同時にスタートしたいという理事会の思惑に狂いが生じることになった。そこで、とりあえず、理事会は本庄高等学院の構想を

先に進めることとし、二〇〇七年五月の「渡辺委員会」を経て、七月の理事懇談会において基本的に了承したのである。

県への申請には理事会承認は必須事項である。七月の理事懇談会において本庄学院の定員増・共学の将来構想について基本的に承認したとはいえ、それは県への申請を理事会として正式に決定したということではなかった。十一月になってもなお理事会は上石神井の学院との同時スタートにこだわり、本庄高等学院の将来構想について正式に決定しなかったのである。しかし、二〇〇七年四月に定員増、共学をスタートするには、学則変更の申請を県に提出する時期としてはぎりぎりのタイムリミットを迎えていた。二〇〇三年の一〇月に学院では将来構想の開始目標を二〇〇六年としたが、諸般の事情により結局二〇〇七年度にずれ込んでしまっていた。二〇〇七年は本庄学院の二十五周年、更には早稲田大学そのものの百二十五周年に当るので、尾崎学院長はこの記念すべき年に新しい本庄学院のスタートを強く望んだ。学院側としても、一年遅れたが、十年来共学の可能性を検討してきて、やっと外部との交渉段階に入り、その可能性が見えてきたところで足踏みをするということは許されないことであった。また、少子化の影響がずっしりと効きはじめてきていた。これまで議論してきて最終決定権を握る理事会が県への申請を決定しないということは逆に理事会の責任をも問われることにもなりかねない。こうした情勢に鑑み、二〇〇五年十一月、ついに、理事会は本庄高等学院の「学則変更(定員増・共学)を県に申請する」という決定を下したのである。この決定は、その月の全学の教学会議体にて報告され、早稲田大学の全学的

な承認を得ることになった。

## (2) 県への認可申請

理事との打ち合わせ、理事会への説明などがおおむね順調に進む中、県への打診については、二〇〇三年一月の初回以来大きな進展は見られなかった。そもそも、本学院の定員増・共学化のうち定員増については、先述のように、少子化時代における学校、専攻の新設は、既存校にない特色、県民のニーズがない限り、認められない、という私学振興協議会の申し入れの下では、難しい状況にあった。そこで、理事との打ち合わせにおいても、既存校に無い本学院の特色を模索し、SSH教育の実践により得たノウハウを前面に打ち出すということが確認された。その内容は大学の附属校だからこそできる、文理分け隔てのない教育を基本的に展開する、理系的素養を持つて文系に進学させる、文系的素養を持つて理系に進学させる、理系志望者には文系的素養のほかに更に高度な理系教育を行なう、というもので、この考えを持ってしばしば県側と打ち合わせを行なったが、やはりその関門は大きかった。県への打診は二〇〇四年一月を初回として、七月、十月、翌二〇〇五年の三月にも行い、特に二〇〇五年三月の打ち合わせでは、学院側、県側双方で理系教育の専門家を交えて意見交換を行なったが、「既存校にない教育とはいえないのではないか」ということになり、再度検討の必要を迫られたのである。

県への打診は混迷を極めたが、理事との懇談が進む中、「早大本庄が共学化しそうだ」という噂が始め、二〇〇五年の秋には某新聞紙上

に、県北の地に私大附属の共学校の誕生は県民のニーズに叶うものである、という趣旨の記事が掲載されたのである。この記事のあと、本庄高等学院の共学化は県北地域だけでなく広く埼玉県の教育に貢献する、という考えが、世間に知られることとなり、規制緩和の時流の中で、徐々に県との協議も動き出したのである。それは、理事会が県への申請を決定した翌月の二〇〇五年の十二月であった。ようやくにして県との具体的な打ち合わせが始まったのである。

「再開」された県との交渉において、早稲田大学は本庄高等学院の定員増共学は県民のニーズ、埼玉県の高校教育振興に寄与するという理念を正面に掲げることにした。これまでの文理偏らない教育を基本に、SSHのノウハウを活用するということは勿論であるが、新たに女子教育という視点を打ち出し、「男女共同参画社会」の下、女子の社会進出を図る教育を展開する、特にこれまで、女子の進出する分野の少なかつた理系分野の教育を展開し、女性科学者の養成という点を強調することにした。定員増の理由となる特色ある教育としては、理系分野と絡めながら高大一貫教育を推進し、とくに理工学部との連携を柱に高校のレベルを超えた教育内容を展開する、更に、早稲田リサーチパーク内に始動した早稲田大学の大学院とも連携した教育を推進するなど、これまでの高大一貫に加え高院連携という大学の附属高校であるからこそ、本庄キャンパスであるからこそできる教育構想を打ち出した。また、本庄キャンパスの自然を教材とし、本庄学院で展開する高大、高院連携の授業に地域の中学生、高校生にも参加してもらい、地域教育の活性化にも貢献し、さらに、新幹線通学の可能性を高め、



東京・群馬からの入学も視野に入れ、地域の活性化にもつなげる、という多角的な視点に立った案を考えたのである。

こうして、定員増の理由書の他に、学則変更に必要な書類が整えられて、県への申請となった。二〇〇六年三月、臨時教諭会にて、定員増（共学化）に伴う学則変更の申請を行なうことについて本庄学院としての最終的な意思確認を行なった。それは県に申請する際、学校法人の理事長（総長）だけでなく、当該学校の教員代表が署名捺印する必要がある、そこでその教員代表を誰にするかを提案し、採決の結果、三〇名中二五名の賛成（反対〇、保留五）を得て、教務主任が署名捺印し、県へ申請することに決まったのである。理事会、県との交渉が進む中、学内的には二〇〇七年度の定員増・共学開始は施設などの面で準備が追いつかないのではないかと、少なくともその準備が整うまで開始の年を遅らせるべきではないかという意見もあった。しかし、十年の議論を経て、学内的に大方の教員の理解を得、さらには理事会、県との交渉を経て、やっと県への正式申請という最終段階に達したこの期に及んで、申請を延ばすことはできない、一、二年延ばしても「条件」が明確に整うことは保障されず、結局はまた一からの議論を始めることになる、という判断の下、県への申請を決議どおり行なうことにしたのである。

申請に伴う施設の改修計画については、理事会において本庄高等学院の学則変更を県へ申請することが決まった二〇〇五年の十一月に、大学本部の総合企画部（現キャンパス企画部）がとりあえず、女子トイレ、女子ロッカー、女子更衣室などの女子受け入れにともなう既存

校舎の改修計画を立案し、本庄高等学院に提示した。学院では総合企画部の既存校舎改修案は基本的に受け入れるとしても、常日頃教育活動に従事し、生徒の動線を目の当たりにしている教員としては、例えば地下にトイレを持つていくというのは無理があり、やはり教育現場の意見を取り入れて欲しい、また、女子関連の施設をつくることだけで無く、その分はみ出した部室、合宿施設などをどこにするかの代替案が不可欠となり、学内の委員会で検討し、その年の十二月から数度にわたり教諭会を開いて修正案を考えた。こうして学内の意見が組み込まれた施設改修案が県への計画申請に添えられて審議会に付されることとなったのである。

許認可は県知事の専権事項である。とはいえ、県は学識経験者らで構成される私学審議会の意見を聴するのがきまりである。県の私学審議会は五月十八日と決まり、その一週間前に、審議委員による視察があった。視察は、早稲田側から定員増・共学化の学則変更の趣旨説明、それに伴う施設の改修説明を行い、審議委員からは趣旨説明への意見や現場を見た上での改善のアドバイスなどを伺った。この事前視察を経て、五月十八日、埼玉会館にて審議会が開かれたのである。

冒頭、私学関係者らから、「私立学校行政への提言」にもられた少子化時代における定員増自粛の申し合わせをもとに本庄学院の定員増に対し反対意見が出されたが、休憩を挟んで再開されると、学識経験者らにより、同じ「私立学校行政への提言」にある県民のニーズをもとに賛成意見が強く出され、結局、「早稲田大学本庄高等学院の定員増の案件は適当と認める」という議長の裁定が下されたのである。この裁

定に対し異論は出なかった。こうして、早稲田大学本庄高等学院の定員増、共学化は第一関門を通過した。この段階では、計画申請が承認されたということである。この後は、承認された計画申請にそつて改修工事が成され、認可申請を出し、最終認可という手続き経ることになる。

改修工事はできるだけ授業に支障が出ないよう夏休みを利用して行なうことにした。授業がないといえ部活や夏休みの研究など生徒、教員が登校、勤務する中工事は進められた。工事の主たる内容は既存施設を女子トイレ、女子更衣室などに変えることで、夏休み明け直前まで続けられた。実際の工事はその後も意見が出て、計画申請の工事計画と部分的に異なるところもあったが、工事が完了し、認可申請の段階において県も了承するところとなった。認可の審議会は九月八日に行なわれた。審議会は、視察委員による工事が完了した報告を受けて、早稲田大学本庄高等学院の定員増（共学）を了承した。これを受けて、県知事の裁可が行われ、ようやくにして本庄高等学院の定員増・男女共学が認められたのである。これにより、二〇〇七年の生徒募集において「予定」、「申請中」などの冠は消え、二〇〇七年度四月より八〇名定員増、男女共学が実現することとなった。

### (3) 校舎問題

一九九四年に学院の将来構想を検討し始めた時から、形態の変更は当然施設・校舎の問題と絡んでいた。校舎移転の話が常に先にあつて、それに対応する形で、形態の変化を模索するという時期が十年近く続

いた。しかし、二〇〇三年になり、理事会が考えていたようにはキャンパスの外に適当な広さの土地が確保できないことが明らかになり、新校舎への全面移転の構想が消えても、「グランドデザイン」などに盛り込まれた全学的な議論を背景として、本庄学院の形態変更の議論は学内、理事会とも変わることは無かつた。それは少子化という時代の変化、本庄キャンパスの環境変化に対応して優秀な生徒を確保し、教育するという認識を理事会、学院ともに切実に思い抱いたからに他ならない。したがつて、本庄学院側は二〇〇三年に、「校舎移転に関わらず、男女共学を推進する」という確認を行なつたのであるが、しかし、定員増分の施設確保は当然必要なことであるといううまでもない。

二〇〇四年四月に、本庄高等学院が定員増共学について理事会との相談に入つたとき、定員増共学の構想は当然施設の改善（施設増）を前提とするというものであつた。河合学院長の腹案でもあつたが、理事会としては二〇〇四年の夏に現校舎の北側駐車場に三三〇〇㎡規模の校舎を増設する考えがあることを示した。それは現在共通教室で行なつている家庭、音楽の授業をも新校舎の中で展開するという構想である。

しかし、この新校舎案には大きな障害が立ちはだかつていたのである。それは本庄学院の建つ区域に接して保護鳥類のオオタカが生息しており、にわか建物建てるのは難しく、オオタカ問題が解決しないかぎり新校舎は建たない、それがいつになるのか皆目見当もつかない、さらにそれだけでなく、二〇〇二年に「本庄新都心地区環境検討委員会」の提言により、本庄学院の建つ区域には新規建設は行なわな

いことが確認されていたのである。こうした制約があるにも関わらず、B棟北側の駐車場に校舎増設計画が考えられたのは、そうした制約下でも教育施設ということで特別な認可が得られるという判断があったからである。このように駐車場北側の案は実現するにはいくつもの不確定な要素が横たわっていた。理事会の考えは、そうした制約がクリアされるまで、共通教室棟に教室を設けるので、何とかそこで凌いでほしいということであった。

この考えで行くと、定員増共学化を校舎増設とセットで考えていた学院としては定員増共学化を果たしても増設校舎が伴わない「片肺飛行」を余儀なくされ、しかもそれがいつまで続くのか分からない不安かつ不自由な中で教育活動を展開しなくてはならない、ということになる。また、諸条件が整備され、北側駐車場に増設校舎が建つたとしても、本庄高等学院の校舎問題は解決済みということにされ、今後十年、二十年、はては三十年に亘って、定員増、共学化の議論以前からわれわれが改善を要望していた現校舎の問題点が何一つ改善されずに、教育活動を展開しなくてはならなくなる、という恐れが残ることになるのである。

そこで、学院としては、いつ出来るともわからない、駐車場に校舎を増設するという案に拘らず、開校以来の校舎問題を解決し、今後の定員増、共学化を迎えるに相応しい校舎について、議論した。その結果、駐車場の増設案とともにB棟改築案、食堂増・改築案、B棟改築＋食堂増築案などを考え、これを二〇〇五年九月の臨時教諭会にて確認し、理事へ要望することにした。その内容は、これまでのような一学

年男子二四〇名に対応した規模の教室、食堂、保健室では魅力がない、図書室が離れていることは高校としても、全員学部へ進学する附属高校としても教育学上問題であるという考えの下、機能的な校舎配置は教育の展開において極めて重要であり、受験者と保護者が学校を選ぶときの判断基準として、見栄えの良さとともに必須の要件である、というもので、新たな校舎問題を提案したのである。このわれわれの要望を受けて、理事は校舎・施設問題は教育において重要であるという認識をもつことになった。しかし、まずは目の前に迫った定員増・共学の学則変更を県へ申請することに伴う、女子のトイレ・ロッカーなど既存校舎の改修が優先されることになり、学院の関心は既存校舎の改修工事に集中することになった。

既存校舎の改修が一段落した二〇〇六年秋に、再び「新校舎問題」が起こった。理事会は学院が先に提出していた校舎の問題が学院教育や、受験生の志望に大きな影響を与えるという認識を理解し、折に触れて抜本的な校舎建替の案を示唆するようになってきた。先にも記したように、一九九八年頃より、理事会は「本庄拠点都市地域」構想の下で、道路、建物などの「本庄キャンパス校地利用基本計画」を策定し、市にその計画を申請していた。しかし、オオタカの営業によりなかなか開発の条件が整わないことから本庄キャンパス校地利用計画そのものの見直しを迫られてもいた。まさにこうした時期に、本庄高等学院の定員増、共学が始まることになり、理事会は、本庄学院の新校舎問題を含めて、本庄キャンパス校地利用計画の修正を真剣に検討せざるを得なくなったのである。

キャンパスの外に新校舎の候補地を求める考えはすでに消え、駐車場北側に三三〇〇㎡の新校舎を一棟建てる案も環境問題で難しい、また、それだけでは定員増・共学にとまらぬ学院の校舎問題は解決しない、そこで、先に市・県に出した本庄キャンパスの開発計画を見直し、駐車場北側に建てようとしていた校舎をグラウンドに近接した南側斜面に建てる案が考えられたのである。しかし、これに対し、学院は、定員増分一棟（北側駐車場に建てる三三〇〇㎡分）をグラウンド脇に建てても生徒の動線が現在よりも複雑になることから、教育活動に著しい支障をきたす、安全面においても不安が増すという意見を述べたところ、理事側は、いっそのこと校舎を全面的に南側グラウンド側に移転する、ただし、全校舎を一気に建設するのは難しいので、まず、第一期工事として北側駐車場に考えていた分を建てる、という考えを示し始めた。学院の機能を全面的に南側斜面、グラウンドの脇にもつて来るといふ考えが理事会の中で生まれてきたのである。

理事会のこうした認識の動きにつれて、学院側は新校舎に対する要望を纏めておく必要を感じた。現校舎が建てられたとき、学院の教員の意見が入れられず、それがため、狭隘な教室をはじめさまざまな箇所での「校舎問題」が二十年以上に亘って解決されないまま続くことになったのである。こうした経験をもつ学院側では「校舎は教育の理念と密接に結びつく問題である」とし、現場で教育に携わる教員の意見を入れてもらうために、まずもって二〇〇六年秋から将来検討委員会にて新校舎についての学院側の要望を纏めることにした。この検討は僅か三ヶ月という極めて短い期間ながら、実に濃い議論が行なわれ、

纏められた新校舎の基本構想はその年の十二月の教諭会にて承認され、理事に提出されることになった。新校舎基本構想に盛り込まれた新校舎の延べ床面積は二万㎡を超えていた。

二〇〇七年二月、理事会はついに、これまでの「本庄キャンパス校地利用計画」は諸般の事情により実現が難しいと最終判断を下し、規模を縮小した「計画変更」を決定した。この計画変更を行うにあたり市、県との打ち合わせにおいて、「計画変更」提出後の再変更はできない、今回の「計画変更」が本庄キャンパスの最終計画となる、計画の最終提出時期は七月末までに行う、ということが確認された。今回の「計画変更」案に、学院新校舎の計画案が示されないと、学院校舎は本庄キャンパスの中では現在の場所に半永久的に固定されることになる。そこで理事会は先に示唆していた学院校舎の全面移転を正面に掲げて学院と話し合いを始めることにしたのである。一九九三年に「地方拠点都市構想」が始まって以来、理事会が「本庄学院の新校舎は本庄キャンパス内に建る」ということを認めたのはこの時が初めてであった。

南側斜面・グラウンド脇に予定された新校舎の打ち合わせは二〇〇七年三月より、先に提出していた二万㎡を超える計画案を基に始まった。しかし、この案では経費、予算の面で理事会の理解が得られないというところで、学院側に再検討が要請された。学院でも春休みを返上し、わずか一ヶ月という間に、規模を圧縮した案を作り、それを教諭会にて確認した。圧縮したとはいえ、基本的には生徒のための教室の広さは確保する、図書情報機能を教育活動の中心に据えるという構想

であった。ただし、体育施設を要望どおり実現することは難しく、これについては既存施設（共通教室の体育施設）を借りるということで、一万二〇〇㎡の校舎案を理事側に提出したのである。大学本部は基本的にこの案を基にして、基本設計に入った。

本庄高等学院の二十五年における「学校の形態」をやや詳しく述べてきた。一九九二年の検討開始以降一五年を経てとにかく共学が実現した。この間、多くの意見が出され、校舎移転なども複雑に絡み、二転三転した。生みの苦しみが長く激しかった分、順調に育ってくれることを願いたい。

計画申請、認可申請を行なっている間も、受験生に対しては「計画申請、認可申請を行なっている間も、受験生に対しては「共学」という広報、説明は行なっていた。年三回、本庄学院で行なう学校説明会においても、毎回、前年の一〇〇〇名をはるかに越える二〇〇〇名もの希望者が殺到し、説明会場をこれまでの大教室から急遽共通教室に移さざるを得ない状況となった。学習塾などで行なう各地の学校説明会でも「話しを聞きたい、相談をしたい」という受験生とその保護者の数は前年を大きく上回った。そこで、受験者数が大幅に増加するという予想の下、入試要項、入試問題の増刷、試験会場・監督の増員などを検討し、入試に備えたのである。

年が明けて出願となった。応募者総数は最終的に三一一名、男子二二六名、女子七四五名で、女子分が増えただけでなく、男子の応募も増えたのである。これら三〇〇〇名を超える応募者がそれぞれの

受験区分の試験を経て、最終的に本学院へ入学を果たしたのは男子二二六名、女子九七名、計三二三名であった。

周知の如く、早稲田大学は他大学に先駆けて一九三九（昭和十四年）年に正式に正規女子学生を受け入れ、いわゆる男女共学を実践した大学であり、正規女子学生を受け入れる前は、諸般の事情により、聴講生という形で女子を受け入れていた。そうした「聴講生の時代」の一九二三（大正十二年）、当時、理工学部応用化学科の聴講生であった田代美代子は、女子が大学で学ぶことができ、大変幸せである、しかし、なかなか授業なども難しく、せめて、その予科である高等学院で、まずもって、基礎的なことが学べれば女子学生は一層学部の授業の理解を深めることができよう、とあって、高等学院への女子入学を当局に要望したのである。この要望はその時はおろか、戦後の学制改革における新制高等学院の発足時でも、二十五年前の本庄高等学院創設構想の際にも見送られた。しかし、田代美代子の思いは実に八十四年後の二〇〇七年、本庄高等学院の創立二十五周年において実現したのである。本庄高等学院の共学は、こうした共学を希求した長い歴史の一つの到達点であり、さらにこれから続く長い共学の歴史の始まりである。

二〇〇七年四月八日、東京新宿の早稲田大学大隈講堂において第二十六回の本庄高等学院入学式が行なわれた。男子一色であったこれまでの入学式と異なり、男子に交じり席を占める女子の姿は印象的であった。

（佐々木幹雄）

## (2) 教育課程

### 一 総論

教育課程は、改めて言うまでもなく、学校教育における教学活動の基本であり、その内容は学校の教育的特色を端的に表すものである。

教育課程は文部科学省（旧文部省）の告示により、約十年おきに見直し、改編が行われ、各学校はその時々々の学習指導要領の改訂に従いつつ、独自の教育課程を作っている。この二十五年の間に教育課程の改編は二度あり、本庄高等学院は一九八二年の開校以来三種の教育課程を実践してきたことになる。そこで、今、二十五年に及ぶ教育課程を二回の改訂にあわせて三期に分け、各期の教育過程の編成過程を述べることとする。設立にともなう第一期は主として小野裕二郎の文（早稲田大学本庄高等学院紀要『教育と研究』創刊号一九八三年）を参照し、第二・三期はその時々々の教諭会資料、委員会報告などをもとにした。

#### (1) 第一期（一九八二～一九九五）

本庄高等学院の教育課程について初めて議論したのは、一九七九年一月に発足した「高等学校設置検討委員会」においてである。そこでは、当然、既存の附属高校である東京練馬にある上石神井の高等学院や東京新宿にある系属校の早稲田実業学校、早稲田中・高等学校の教

育理念を意識して、議論されたのであろうが、具体的な内容はなく、以下のようなきわめて原則的な学習方針が確認されただけであった。すなわち、それは、

1 高校教育ではすべての教科が基礎科目であると考えるべきである。

2 文科系・理科系の区分けは遅い方が望ましい。

3 特色は制度によって出すのではなく、内容によって出すのがよい。

4 英語・数学・国語の三教科を徹底的に教育すべきであるが、カリキュラム上で時間を多くするというのではない。

5 七教科（英語・数学・国語・理科・社会・芸術・体育）が相互に関連し、最終的に基礎学力の向上で一致することが必要である。

の五項目で、これらが新しい高等学院の教育課程に骨子として盛り込まれることが期待された。

そこで、これら五項目を基本方針として、一九七九年夏に組織された次の検討段階である「高等学校設置専門委員会」の小委員会ですべて本庄高等学院の教育課程が議論された。ここでは、高校の科目はすべて基礎科目と捉え、全科目を履修させるのが望ましいとする考えと、個性と自発性を伸ばすには選択科目を多くするのが望ましいとする考えについて協議したが、各委員の見解の相違から、方向性を見出すことはできず、結局、開設の具体的準備作業を行う「本庄高等学院開設準備室」において検討することになった。とはいえ、この「高等学校

設置専門委員会」にて検討された本庄高等学院に期待された教育課程の考えは「教育の基本方針」、「教育課程編成の基本方針・原則」として「答申」に纏められたのである。この「答申」に纏められた教育の基本方針は開校後二回に亘る教育課程改編においても一貫して受け継がれ、今でも本庄高等学院教育の基本となっている。そこで、初心を振り返るためにも、ここに掲載しておくことにする。

すなわち、「教育の基本方針」としては、

- ・断片的な知識の集積ではない、総合的な理解力、個性的な判断力を涵養する。

- ・地域とのさまざまなレベルでの交流を通して、人間、社会、自然に対するみずみずしい感性を育成する。

- ・知識と実行力（気力・体力）の結合を期する。

ついで、「教育課程編成の基本方針」として、

- ・入試から解放された高校本来の教育を行うことができるので、魅力ある教育課程の編成を考える。

- ・知・情・意の調和のとれた教育を目指す。

- ・基礎学力をつけるために、基礎的な科目を組織的徹底的に教育する方法を考える。

- ・本庄の自然環境を生かした「土に親しむ」教育を考案する。

- ・豊かな感性、意欲的な気力や実践力を育成するための特別活動、

- 学校行事などを工夫する。

さらに、「教育課程編成の原則」としては

- ・英語・数学・国語の三科目を基礎（重点）科目として学力の涵養

につとめる。ただし、このことは三科目の単位数の大幅な増加や科目偏重を意味するものではない。

- ・体育を充実し、体力の育成をはかる。

- ・芸術教育・自然に親しむ教育を尊重する。

- ・文科系、理科系等、将来の進路に応じた科目編成の幅は、高学年に進むに従って広げる。

- ・英語教育に当っては英会話、LL教育などの充実をはかる。

- ・教育効果の上から、単位の細分化はできるだけさける。

- ・生徒の幅広い興味や関心に対応するために科外講義を活用する。

の一五項目である。

早稲田大学の全学的な意見を集約して新しい学院教育の教学の基本方針が纏められ、この「方針・原則」の下に具体的な教育課程の編成作業が「本庄高等学院開設準備室」に委ねられた。

「本庄高等学院開設準備室」では、早速、開校に間に合わせるべく、県への申請もあり、具体的、かつ最終的な教育課程案を検討した。その結果、文部省が定めた「新学習指導要領」の基本方針を尊重しつつ、専門委員会で本庄高等学院への期待をこめて纏められた「教育課程の方針・原則」に基づき、次のような四項目を基本原則として確認したのである。すなわち、

- 1 英語・数学・国語を基礎教科として、各学年にわたって必修させる。

- 2 社会・理科も二年まで共通必修とし、基礎分野は原則として二年までに学習させ、選択科目は三年に置く。

表1 第1期の教育課程

教科	科目	1年	2年	3年
国語	国語I 国語II	4		△3
	現代文 古典	1	4	△3 2 3
社会	現代社会 日本史	4		△3
	世界史 地理 倫理 政治		2 3	△3 3 △3 △3
数学	数学I 代数・幾何 基礎・解析 微分・積分	6		
			2 3	△3 △3 3
理科	理科I 物理学 化学 生物	4		
			3 2	△3 △3 △3 △3
保健体育	保健体育	3 1	3 1	2
芸術	音楽I～III 美術I～III	} 2	} 2	△3
外国語	英語I 英語II	3		3
	英語IIA 英語IIB 英語IIC		3 3	3 △3
	ホームルーム	1	1	1
合計		32	32	32

△は選択科目

3 芸術・体育はできる限り重視する。

4 各学年三二単位とする。

である。そして、この基本原則を下に、表1の様な具体的な教育課程が編成されたのである。

この第一期の教育課程の特徴を先の四つの基本原則に沿って述べる  
と、1については、基礎科目とされた英語・数学・国語の三学年における必修総単位数が英語一八単位、数学一四単位、国語一四単位と多く、基礎科目として大きく位置づけられており、さらに、三年次においても数学(微分・積分)、国語(現代文・古典)が文・理志向に関わらず、必修となっていることである。そこには文理隔てのない教育の考えが貫かれている。3については、芸術のうち音楽・美術を選択とし、それぞれ二年間四単位を学ばせる、体育は体力の育成をはかると

いうことで保健体育を一〇単位とした。4については各学年、LHRを入れて一週三二単位とし、水曜日の午後は授業を行わないこととした。水曜日の午後に授業を行わないこととしたのは、文部省の方針である「ゆとり」教育を取り入れたもので、その分、部活動の充実、課外講義などに有効に使われることとなり、学院の特色としてその後の二度の改編においても継承されている。なお、開校当初、自宅外通学生

の精神的な問題から帰省等を考慮して隔週土休制がとられたが、その心配はないということで、すぐに撤廃された。

また、二年次までに培った基礎学力を専門分野の学習に役立たせるという目的で三年次には選択科目が設置された。学部進学が約束された付属校にとっては受験に必要な技術よりも、将来進む学問世界の基礎的な知識を理解させておく必要があるということで、学部の教養ゼ



ミ的な内容の授業を展開しようというものである。この選択科目は四つの群に国語、社会、数学、理科、芸術、英語の七教科より平均七〜八科目の講座が設置され、生徒は各群より一科目選択し、一科目三単位で、計一二単位を取得する仕組みである。選択科目の履修は自由選択が原則であるが、将来の進学部と絡め、特に理系進学志望者には物理、化学の必修を、文系進学志望者には日本史、世界史いずれかの履修を義務付けた。これは、一九七九年の「高等学校設置検討委員会」の答申に盛り込まれた文系・理系のコース分けは遅い方がよい、という意見を汲み、三年次の選択科目の履修をもって必然的に文理区分けになる仕組みとしたのである。理系志望者が数学・理科の選択科目を必修とする考えはこの後の数度の改編においても維持されている。

この教育課程は、開校した一九八二年の新入生から一九九三年に入学した生徒が卒業する一九九五年まで行われた。

## (2) 第二期(一九九四〜二〇〇五)

学院開校後、一回目の教育課程改編の告示が一九八九年頃より文部省より出された。今回の改編の大きな特徴は「男女が協力して家庭生活を築いてゆくことや、生活に必要な知識と技術を習得させることなどの観点から」、これまで女子に課せられていた家庭科を男子にも必修としたこと、さらに戦後教育改革で生まれた社会科という概念を高校ではなくし、「国際社会に生きる日本人として必要な資質を養うことを重視する観点から」、これまでの社会科のうち公民的分野を独立させて公民科とし、その他の地理歴史的分野と分けたことである。これによ

り学院では社会科の廃止、地理歴史科、公民科、そして家庭科の設置を検討することになった。これにより、新教育課程では従来の七教科から九教科となったのである。

今回の改訂に対し、どのように取り組むべきか一九九〇年一月頃より教科主任会にて検討を開始した。その中間報告とも言うべきものが、翌年一九九一年三月の教諭会にて報告されているので、その資料をもとに、まずは一九九〇年度における学院の新教育課程編成の動きを見ておくことにする。

まず、新教育課程の改編作業を行うにあたり、一九九〇年一月に教科主任会により教員に向けて「新教育課程編成に向けてのアンケート」を実施し、同年三月から四月にかけて「アンケート」の回収、集計を行い、その結果を全教員に報告した。続けて同年四月から五月にかけて各教科に、教科に関わる新教育課程編成案の検討を依頼し、各教科の検討内容を教科主任会に持ち寄ることとした。同年六月の定例教諭会にて、教育課程編成の作業は煩瑣であるが、各教科と密接に関わるので、そのための委員会を別途に組織せず、これまで検討してきた教科主任会を新教育課程編成案作成の委員会とすること、さらにその月の臨時教諭会にて、教科主任会に新教育課程編成のための作業委員会を設置すること、などが承認された。

そして、この教科主任会の中に設置された作業委員会では、具体的に教育課程案を作成するために次の九項目の問題点と編成のための基本原則を確認した。すなわち、

作業委員会の問題提起

- 1 家庭科の設置の可否
  - 2 週三二単位か三四単位か
  - 3 選択科目を何単位とするか
  - 4 文・理コースの導入の可否
  - 5 各教科の科目、学年配分
  - 6 週休二日制の検討
- 新教育課程編成の基本原則
- 1 週三二単位
  - 2 家庭科（四単位）設置
  - 3 選択科目を設置する場合は科目内選択と自由選択である。これらの問題提起、基本原則を委員会でも検討した後、各教科に教科の希望単位数、学年配分案を持ち寄ってもらうことにした。各教科の希望案が七月十二日に提出されると作業委員会では早速、いくつかの新教育課程編成案を作成し、その案を基に、夏休みに入った十八・十九日の両日に、教科主任会を開き、試案を作成することとした。教科主任会にて作成された試案は四案あり、これが今回の改訂で初めて示された案となった。試案作成に当り留意、確認したことは、
- 1 新学習指導要領―教育課程の基準
  - 2 本庄高等学院設置計画に関する答申
  - 3 各教科の希望案
  - 4 アンケート
  - 5 家庭科の設置
  - 6 週三二単位案と三四単位案の二案で作成

- 7 二年次より文・理コースを導入、選択科目は四群の八項目である。
- 8 選択科目は二単位

教科主任会ではこれら四案のうちどの案が「本庄高等学院設置計画に関する答申」に照らして、本学の設立、教育理念に適合しているかを検討した。その結果、四つの案は「学院教育の基本方針に照らして、その理念を充分反映し尽くしているとは限らない。コース制導入にしろ、自由選択の幅の縮小にしろ、内包する問題は多い」という結論に達し、引き続き教科主任会で検討することとなったのである。これが、一九九一年三月段階の状況である。

その後検討が重ねられて、一九九一年六月の臨時教諭会にて、改めて新教育課程編成表が提出された。この案は全学年とも週三二単位とする、家庭科は四単位配当とする、一・二年で文理コース分けはせず、これまで通り三年配当の選択科目で行う、選択科目は五群一〇単位とする、などを基本的な骨子とするものであった。文理の選択は高学年に行うという「設置の答申」に従い、一・二年での文理コース案はここでも排除された。また、ゆとりある教育の考えの下、本校独自の水曜日は四時限までとする考えが引き続き活かされ、各学年の総単位数は三二単位となった。さらに、これまで四群一二単位の選択科目が理系の自由度の少なさを解消するために五群一〇単位とした。

しかし、継続して行われた再度の検討の結果、同年十二月の教諭会にて、三学年とも三二単位とするが、基礎学力の充実を図るといこととで、日本史、地理、化学、体育、数学において必修科目を一ないし

二単位ずつ増やし、その分、家庭科を二単位減じ、選択科目四群八単位とする案が示されたのである。選択科目四群とするこの案では、理系進学希望者が自由に選択できる科目は一つになり、その自由度の少なさを危惧する声が出て、その後、再度検討した結果、一九九二年五月の教諭会に三年化学二単位必修案を取りやめ、そのかわり選択科目を一群増やす案が再浮上したのである。この案は翌六月の定例教諭会に協議事項として掛けられたが、継続審議とされ、七月の教諭会にて再度議論され、とりあえず「第一次方針」として承認されることになったのである。この案が一九九四年から始まる本庄高等学院の新教育課程として県学事課へ申請された。

県への申請は一九九三年十一月、大学教務部により学則変更の手続きという形で行われた。しかし、県学事課は、本庄高等学院の新教育課程案に対し、難色を示した。それは本庄高等学院の家庭科二単位案は新しく導入される家庭科の標準単位を四単位とする条件を満たしていないということである。学院側は県に対し、是非この案で進めさせて欲しい旨を要望したが、学事課は新しい指導要領では文部省が男子の家庭科四単位必修の完全実施化を求めており、二単位では「全ての生徒に四単位必修」にはならないとして強い改善指導がなされたのである。そこで、学院では一九九四年の三月の教諭会にて、県学事課の指導を受け入れて、家庭科四単位必修、その分、選択科目を一群減らす、とする案が再度検討された。学内的にはなかなか理解が得られず、継続審議とされたが、結局二ヶ月後の五月教諭会にて原案通りとすることが一応確認されたのである。

この後、家庭科を三単位で行うのはいかがかという考えを県へ打診したが、今回の改訂において、これまでしばしば認められてきた標準単位四ないし三単位を三ないし二単位とするという単位減を認める科目に家庭科は該当しないということから、この代替案は認められないことになった。そこで、翌週、臨時教諭会が開かれ、これまでの議論を整理し、理系志望者にとって選択科目一群減は選択科目の自由度という面から考えて厳しい、理工学部よりの理系進学者に対して化学教育を充実して欲しいという要望に配慮するとなると、三年化学は選択必修としてでも行う必要があるということで、結局選択科目を五群とする、しかし、これでは三年生のみ三四単位となる、そこで、体育を一単位減じ三三単位とし、そのうち二単位を家庭科に充当し、家庭科を四単位とする案が最終的に承認されたのである。早速、県へ学則変更の再申請を行い、これが六月二十四日付けで、県により了解された。

こうして、難産の末、全国の私立男子高校としては、いち早く「生活科学」としての「男子家庭科」が設置され、ようやくにして、新教育課程が一応出来上がったのであるが、一・二年三三単位、三年のみ三三単位とするアンバランスが、その後も議論を続けさせることになった。

一九九四年の新教育課程がスタートした時点で、その年度入学した生徒が二年になり、翌年三年を迎えるという一九九五年の六月定例教諭会にて、「新教育課程の改定について（一九九六年度、一九九七年度以降のカリキュラム）」と題する協議事項が審議された。それは新教育課程における三年生が三三単位である不自然さを解消しておきたいと

表2 第2期の教育課程

教科	科目	1年	2年	3年
国語	国語I 国語II 現代文 古典講読	4	4	2△2 2△2
	地理歴史	世界史B 日本史B 地理A	2 2 3	△2 △2 2△2
公民	倫理・政治・経済	2		△2 2△2
数学	数学I	4	3	△2
	数学II			
	数学III	2	3	△2
	数学A 数学B 数学C			
理科	物理I 物理II	2	2	△2 △2
	化学I 生物I 生物II	2	2	△2 △2 2△2
	地学I 地学II			
	地学III			
保健体育	体育 保健	3 1	2 1	4
芸術	音楽I~II 美術I~II	}△2	}△2	
英語	英語I 英語II オーラルA オーラルB オーラルC リーディング ライティング			5 4 3
家庭	家庭一般	2		2
特別活動	ホーム・ルーム	1	1	1
合計		32	32	32

△は選択科目

いうことであつた。

本庄高等学院における三三単位とは水曜日の午後一時間授業を行うということである。三年生だけが変則的カリキュラムというこの不自然さを今後一〇年続けることの問題はやはり大きく、課外講義、部活動などの課外活動を考えると全学年総単位を揃えておきたいということである。そこで、全学年三三単位とするために、完成年度までの移行期間は英語、体育の科目別学年配当を若干調整することとし、完成年度以降は結局地理歴史科の地理B三単位を地理A二単位とする提案がなされたのである。この案は教諭会の決定を経て、その年の七月に県学事課へ提出され、承認を得ることになった。こうして、足掛け五年の検討を経て、ようやくにして表2にあるような新教育課程が決まったのである。

この新教育課程の大きな特徴は家庭科の導入と選択科目が五群一〇単位になったことである。群は増えたとはいえ、実質これまでの四群一二単位より二単位減じたのである。これは文系理系ともに授業時間の減少に繋がり、教育内容の低下が懸念されるところで、それはその後の改定においても影響を与える所となった。ただし、今回の改訂により、各群の科目が第一期の七〜八科目より、四ないし五科目多くなり、各群に二ないし三講座配当され、生徒の選択肢が増えたことは、本庄高等学院の選択科目の特色を著しく高めることになった。ちなみに、必修科目の学年配当では公民科の政治経済が一年から三年、理科の地学が一年から三年にそれぞれ移ることになった。

## (3) 第三期(二〇〇三)現在

一九九八年頃より再び一〇年ごとの学習指導要領改訂に基づき、教育課程再編の告示が出された。今回の改訂の特色は、まず、著しく発達した情報社会における情報教育の重要性に鑑み「情報科」を設置し、かつ必修科目としたこと、ついで、「主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「探究活動に主体的、創造的に取り組む態度」を育てるために、従来の縦割りされた教科の枠、垣根を越えて授業を展開できる「総合的学習の時間」を設置したこと、そして、ゆとりある教育をさらに推進するため土曜日を休校とする週五日制を導入すること、さらに、総単位各学年おおよそ三〇単位とすること、である。週五日制については前回の改定においても指摘されていたが、それは、まず、公立学校から試験的に導入して様子を見るところであった。しかし、今回は試験的段階は終わったということで、公立学校は一斉に週五日制に移行し、私立学校も可能な範囲で行う、というものであった。

教科は一〇教科に増え、かつ新たに「総合的学習の時間」を設置するということ、教える科目は増えたが、土休制を導入し、しかも総単位数三〇単位にするというのは明らかに「矛盾」しており、改訂どおり教育課程を編成するとなると、従来の教科・科目の単位数は必然的に減らさざるを得なくなる。ここでは学力不足を招く恐れがあるということと、編成の作業過程ではこの点をめぐり議論が繰り返されることになった。

本庄高等学院では一九九四年の新カリキュラム施行後、将来計画検

討委員会が「本庄児玉拠点都市地域」構想に伴う校舎移転の問題と関連して、次代の本庄高等学院の教育プランをもあわせて議論していた。しかし、その後、新教育課程の検討は継続されず、本格的な作業が始まったのは改編の告示を受けて一九九九年度に発足した教育課程検討委員会からである。この四月に発足した新教育課程検討委員会は二ヵ月後の六月、定例教諭会にて中間報告を行った。その内容は、新教育課程は二〇〇三年度新入生からの導入を別途とするが、新教育課程の内容を検討するには、本庄高等学院が週五日制を導入するか、しないかをまず決めなくてはならない、そのために教員の共通認識と理解が必要である、として、週五日制を導入した場合、しない場合の問題点(それぞれのメリット・デメリット)、新・旧教育課程の移行措置にとりもなう問題点、さらに一九九四年に将来計画検討委員会にて提案されていたコース制の導入などについて、委員会で議論して出た意見を纏めて報告し、広く教員の意見を聴くというものであった。勿論、にわか結論は出るはずも無く、翌週に臨時教諭会を開いて継続審議を行うこととなった。

翌週六月十七日に「週五日制について」という議題で臨時教諭会が開かれた。そこでは、週五日制は単位数削減とあわせ考えたと学力不足という教学上の問題を引き起こし、また、教員が研究日を一日持つという現在の仕組みの中で週五日制を導入した場合には研究・労働条件上の問題も生じるので、こうした問題をも視野に入れて意見を募ることとした。その結果、週六日制を維持して土曜日授業を行う意見、土曜日は授業を行わず行事日とする意見、単位数の削減にとりもなう

コース制の検討など実に様々な意見が出された。結局、内包する問題は多く、かつ多岐に亘るので、週五日制について一気に結論を出すというところまではいかず、これらの意見を踏まえて、再度委員会にて継続的に検討してゆくこととなったのである。

そこで、教育課程検討委員会は二週に亘る教諭会で出された意見を踏まえて、再度、教員全員から週五日制の導入について教員の意見を網羅的に聴くためにアンケート調査を行うこととした。その集計結果が十二月の定例教諭会に提出された。アンケートは専任教員三四名に對し行われ、回答者二五名であった(回収率七四%)。その結果は、週五日制に関して、「踏み切るべき」一六名、「踏み切るべきでない」五名、完全週五日制とした場合の「研究日は別の曜日に一日とる」一三名、「研究日はとらない」七名であった。教育課程に関しては、週五日制とした場合、週の「総単位数は三〇単位で行う」一二名、「三〇単位では足りない」八名、週五日制とした場合、「文理コース制の導入」一六名、週五日制を導入しない場合、「総単位数三二でよい」二〇名、文理コース導入学年は「二年次から」一〇名、現行の選択科目制を「二年次から」七名、現行週六日制でも文理コース制は「二年次から」一〇名、現在の選択科目制を「二年次から」七名、学期制については週五日制の場合「二学期制」一七名、週六日制の場合「二学期制」一六名であった。

アンケートの集計結果から全体の傾向を推し量ると、二学期制の完全週五日制を導入し、教員の研究日は土曜日以外に一日設ける、総単位数は週三〇単位とし、文理コース制は二年次より設ける、というの

が大方の教員の「意見」として集約されたのである。その後の臨時教諭会ではこの集計結果を下に、種々議論が行われ、今後はそれら意見を参考にして、さらに検討を行うことになった。

年が明けた二〇〇〇年二月の教諭会にて、アンケート集計後の委員会の検討内容を報告して、週五日制の是非をめぐって再び議論がなされたが、時間的な問題もあり、教育課程の編成作業としては次のステップに進まざるを得ず、委員会ではこれまでの度重なる議論、アンケートの結果を鑑み、授業日の五日制・六日制いずれにしても、とりあえず、現段階では「土曜日は授業を行わない(ただし土曜日の扱いについては今後の検討とする)」ことを前提として、具体的に授業カリキュラムが組めるのかどうかを確認するためにいくつか試案を作成することを提案した。そして、その試案が二〇〇〇年二月の定例教諭会に提出された。その内容は文部省の指導要領の改訂趣旨に沿うようにできるだけ総単位数を三〇単位に近づけて、LHR一単位を加えて一・二・三学年ともに原則週三一単位とするものである。ただし、三年生はその外枠として「総合的学習の時間」二単位を学ばせて、結局三三単位とした。

この案の特徴は、三年の「総合学習の時間」を枠外としたことその他に、必修科目の総単位数はこれまでと基本的に同じであるが、三年の理系進学志望者の選択科目の物理II、数学IIIが二単位ではいかにも少なく、それを三単位必修選択とする、これにあわせて、文系進学志望者にも必修選択として地理歴史、国語の科目を三単位履修とすることが求められたことである。当然、この案をめぐって意見が交わされた

が、その意見を踏まえて、今後、再度検討してゆくとし、その作業は二〇〇〇年度の委員会に委ねられることになった。

二〇〇〇年四月に発足した新委員会では前年度に出された編成案を下に、新教育課程における各教科の希望する（学ばせたい）科目、単位数、学年配当などを再度確認するため二度目のアンケート調査を行うことにした。その結果、前回のアンケートでは見えなかったことが浮かび上がってきた。それは進学学部のかんに関わらず、高校教育として生徒が学ばねばならない科目があるということである。具体的には、前回のアンケート結果に見られた二年次からの文理コース制に対して消極的意見が増え、進路は違っても全人的教育が必要であり、文理の別はこれまでのように三年の選択科目によって特色を出す方がよい、ということが明らかに意識されてきたことである。

そこで、委員会では早速アンケートをもとに新たに二つの新教育課程案を検討し、それが、二〇〇〇年七月の教諭会に提案された。これらの案はともに、三年生の理系選択科目に三単位科目を含みつつも三学年とも総合学習を含め三単位とする案である。委員会はこれら二案について各教科での検討を依頼した。その結果、やはり三年生の時間を減じたくない、三年生の選択科目においてはやはり文・理進学志望者にそれぞれ三単位の選択必修を設けて三年生は三三単位とする案が、新教育課程への移行措置の試案とともに二〇〇一年三月の教諭会に提出されたのである。移行措置についての試案は二〇〇一年度から二〇〇四年度にかけて英語科、体育科、家庭科の単位を加減して、二〇〇三年度から新課程へのスムーズな移行を目指したものである。

二〇〇一年度の委員会では二〇〇〇年度末に出された編成案の検討から始まり、一・二年生は三一単位、三年生は三三単位案が引き続き確認された。三年の選択科目に二単位と三単位の科目を併置することについてはさらに検討して、結局選択科目は原則二単位とする、ただし、理系志望者の物理Ⅱ、数学Ⅲは三単位必要ということで、理系選択の物理Ⅱと数学Ⅲを組み合わせてそれぞれ三単位とする案に調整された。これにより、二〇〇二年二月の教諭会には、一・二年三一単位、三年三三単位とする案が報告され、各教科の意見を聴いて、三月の教諭会にて決定するということとしたのである。

そこで、教科主任会が開かれ、再度、最終確認のため各教科の意見を伺うことにした。その結果はこれまでの議論とは異なり、やはり、学年によって総単位数が違うのは何かと不便で、実際の学校運営上問題が多くなり、時間割編成も複雑になる、また、移行期間のすり合わせにも問題が多くなるなどのことから、全学年これまでのように週三二単位とする方向に纏ったのである。多くの学校が週五日制へ移行する中、慶応など一部の私立大学附属の高等学校が週六日制を維持するという情報もあり、週五日制に批判的な受験生の保護者へアピールするためにも、週五日制の学校との差別化を鮮明にするのが得策であるとして、本庄高等学院は週六日制、土曜日も通常授業を行い、水曜日は四時限授業というこれまでの姿勢を確認したのである。

これにより、二〇〇二年三月の教諭会にて表3の全学年三二単位とする案が出され、承認された。この承認は本庄学院の「良識」であるといえる。それはゆとりある教育を目指しても、やはり一定レベルの

表3 第3期の教育課程

教科	科 目	1年	2年	3年	選	択
国語	国語総合 現代文 古文選 現代文 歴史 地理 理科 総合 科目	4	2 2	3	△2 △2	○
地理・歴史	世界史 日本史 地理 理科 総合 科目	2	2 2	2	△2	
公民	政治・経済 選択科目	2	2		△2	
数 学	数学I 数学II 数学III 数学A 数学B 数学C 選択科目	3	3		△3	◎
		2	2		△2 △2	◎
理 科	物理 化学 生物 地学 理科総合 科目		3 2	2	△3 △2	◎ ◎
		2			△2 △2	
保健体育	体育 保健 選択科目	3 1	2 1	2		
芸 術	音楽 美術 音楽 美術	△2				
		△2		△2 △2		
外 国 語	英語I 英語II オーラルコミュニケーションI オーラルコミュニケーションII リーディング ライティング 選択科目英語III	3 3	3			
			2	3 2	△2	○
家庭	家庭基礎 選択科目	2			△2	
情報	情報B 選択科目	1	1		△2	
総合的学習	総合的学習	1	2	1		
特別活動	ホームルーム	1	1	1		
合 計		32	32			32

△は選択科目 ◎は理系必要選択科目

授業数は確保しなくてはならないとすることが、前回の改編の時と同じように確認されたからである。この案は翌二〇〇三年一月、学則変更として理事会を経て、県学事課へ提出され、承認されることになった。

今回の改訂の目玉ともいえる総合学習の時間は、一年一単位(理科)、二年二単位(情報・家庭・数学)、三年一単位(卒論など)とし、特に

二年二単位のうち一単位は情報を核にその他の教科を組み合わせることにし、チームティーチング(コラボレイト形式)の授業形態をとることにした。また選択科目も基本的に二単位であるが、物理IIと数学IIIの二単位を複数組み合わせる理系進学志望者はそれぞれ三単位学習することとした。また、文系選択必修として古典、英語の履修を義務づけ、学

力強化に努めた。また、二〇〇二年度から文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール(通称SSH)に指定されたこともあり、二年生にSSHクラス二クラスを設けたこともこの期の特色といえる。なお、学年配当の変更としては一・二年の選択であった芸術(音楽・美術)が一・三年、三年配当であった政経が二年に変更となった。

(佐々木幹雄)



二 各 教 科

国 語 科

はじめに

国語科二十五年の変遷を以下に述べてゆくが、開校から十年までについては、すでに『十周年記念誌総括と創造』（一九九一年。以下『十周年誌』と略称する）に記述がある。ここでは、『十周年誌』以後の歩みを中心に、報告を行うこととする。

(一) 教育課程の変遷と専任教員の人事

一九八二年の本学開校以来、教育課程の改定が二回にわたって行われた。まず、開校当初の科目表を示す。

「一 年」	「二 年」	「三 年」
国 語 I 4 単位	国 語 II 4 単位	現代文 2 単位
国語表現 1 単位	古 典 3 単位	国 語 II 3 単位 (選択科目)

一九九四年度の改訂により、科目と単位数は、次のように変わった

国語表現 3 単位 (選択科目)	国語表現 3 単位 (選択科目)
---------------------	---------------------

(完成年度の一九九六年度によって示す)。

「一 年」	「二 年」	「三 年」
国 語 I 4 単位	国 語 II 4 単位	現代文 2 単位
		古典講読 2 単位
		現代文 2 単位 (選択科目)
		古典講読 2 単位 (選択科目)

さらに、二〇〇三年度の改訂で次のように変わり、現在に至っている(二〇〇七年度の課程表で示す)。

「一 年」	「二 年」	「三 年」
国語総合 4 単位	現代文 2 単位	現代文 3 単位
	古 典 2 単位	古 典 2 単位 (文系必修選択科目)

なお、二〇〇七年以降の入学生は、三年次の古典(二単位)が必修になる予定である。

次に、専任教員の人事の流れを記す。『十周年誌』時点の国語科の陣容は、次の通りであった。

風間益人 高橋聡 高橋広満 田辺明義 吉田茂

このうち、高橋広満教諭が一九九七年三月に相模女子大学に転出、一九九八年四月に曾原祥隆教諭が着任した。また、二〇〇一年三月に田辺明義教諭が選択定年制により退任し、同年四月に川鶴進一教諭が着任した。そして、二〇〇三年四月に小林大輔が、二〇〇七年四月に上牧瀬香教諭が着任した。その結果、二〇〇七年四月現在の国語科は、

風間益人 上牧瀬香 川鶴進一 小林大輔 曾原祥隆  
吉田茂

という六名の専任教員によって構成されている（なお高橋聡教諭は、一身上の都合により二〇〇三年四月に退任した）。

また、非常勤講師については、「国語科文集創立二十周年記念特別号」（二〇〇三年三月）に、二〇〇二年度までの一覧が掲載されている。二〇〇三年以降の異動は次の通りである。

井上 和人講師（一九九六年四月～二〇〇六年三月）  
小林 大輔講師（一九九七年四月～二〇〇三年三月）  
千島 秀夫講師（一九九八年四月～二〇〇五年三月）  
後藤奈智子講師（二〇〇〇年四月～）  
廉 東浩講師（二〇〇二年四月～二〇〇四年三月）  
秦 花秀講師（二〇〇四年四月～）  
相沢 毅彦講師（二〇〇五年四月～二〇〇六年三月）  
小澤 純講師（二〇〇五年四月～）  
上牧 瀬香講師（二〇〇五年四月～二〇〇七年三月）  
窪川真紀子講師（二〇〇六年四月～二〇〇七年三月）  
小財 陽平講師（二〇〇六年四月～）  
荻野 友範講師（二〇〇七年四月～）

## （二） 文庫本教材の利用と国語科文庫

一クラス全員に文庫本を貸与し、教材として用いる試みである。『十周年誌』には、「兎に角、書物を読ませる学校にしたかった」と、動機

が記されている。文庫本の貸与は、現在は必修国語のクラスではなく、主に選択科目のクラスで行っている。

ただ、「書物を読ませる学校にしたかった」という当初の動機が、決して見失われたわけではない。文庫本に関して言えば、二〇〇七年度に設置した「国語科文庫」が、この動機から発している。「国語科文庫」は、いわゆる名作に限らず本を揃え（図書館所蔵の作品とできるだけ重ならないようにしている）、気軽に本を手を取れるようにしたものである。

現在の利用状況は、教員の予想をはるかに上回ったものになっている。まだ開始間もない試みなので、今後の推移を見守る必要があるが、学院生の潜在的な読書欲を刺激できたと考えている。

## （三） ビデオ教材とPC機材の利用

国語教育においても、映像教材は有効なツールである。ただ、『十周年誌』にも指摘があるように、現在もなお十分に活用できているとは言い難い。

また、過去に蓄積した映像教材のうち、機材や方式の関係で、現在使えなくなっているものもかなりある。そうした貴重な教材を、今後どう保存していくのかという点にも、注意を払っていく必要があるだろう。

さらに、PCのプレゼンテーションソフトを用いた授業も、適宜導入すべき時期に来ていると考えられる。

#### (四) 古典教材の自主編纂の試み

『十周年誌』によると、一九八七年度から三年間にわたり、三年生を対象にした、古典教材の自主編纂を試みたところ。この試みは、現在も頓挫したままになっている。編纂を行うか否かも含めて、今後検討する必要がある。

#### (五) 漢字大会の廃止と中間試験の実施

一九八七年度に開始した漢字大会を、二〇〇六年度をもって廃止した。

漢字大会は、全生徒が一斉に漢字力を競う貴重な機会であり、一年間にわたり一定の成果をおさめてきたと評価できる（楽しみにしていた生徒もけっこういた）。しかし、必ずしもやる気の旺盛な生徒ばかりではなかったため、二〇〇三度からは、漢字大会の点数を二学期の成績に算入する措置を取った。

ただその後、各種行事や部活動との兼ね合わせで、全学一斉のテストが行いにくい状況となってしまった。

一方、中間試験の科目数については、教科主任会等でしばしば議論が交わされてきた。特に問題となったのは、一年生の科目数の少なさである。組主任の立場から、学習の習慣付けがしにくいという意見が多く寄せられたのである。

以上の状況を鑑み、二〇〇七年度から漢字大会を廃止して、中間試験を行う決定をした。これまでも、担当教員ごとに、漢字や古典文法

などの基礎的な知識を問う小試験を行っていたが、それを中間試験という形で行おうというのである。

『十周年誌』には、「進学など生徒の判定に用いる定期試験重視は、生徒の向学心を試験向けのものにしてしまいかねない」との危惧が表明されている。確かにその通りである。生徒の学習意欲をどう高めていくかは、今後も常に考えていかなければならない問題である。

#### (六) 『国語科文集』の編集・刊行と

##### 『読書の森へ』、および『読書の記録』

『国語科文集』は、生徒の感想文やレポートなど、優秀な作品を印刷した冊子で、一九八八年度から毎年刊行している（現在十五号まで刊行）。生徒にとっては、掲載されることがかなりの名誉になっているようである。また、先輩の文章を後輩が読んで、感心したり批判したりする機会にもなっている。

『読書の森へ』は、二〇〇三年度に作成した、教員による読書案内の冊子である。目的は、生徒の読書欲を高めることにあった。毎年生徒に配布していたが、必ずしも所期の目的が果たせたとはいえ難く、二〇〇六年度をもって絶版とした。

かわりに導入したのが、『読書の記録』である。読了した本の作者や題名、内容や感想などを簡略にまとめる、読書ノートのようなものである。年間三十冊以上は読むべきことを、生徒に課している。特に何を読めという指示はしていない。「国語科文庫」とセットになる試みでもあり、今後の推移を見守る必要がある。

### (七) 選択科目の組織的設置への試行

『十周年誌』には、「或る事柄を教授可能な教員が居ると謂う理由で選択科目を設置するのではなく、本学院国語科カリキュラムが必要性を求める科目を組織的体系的に設置する方向を目指している。古典文学演習（上古・中古・中世・近世。韻文と散文）、近現代文学演習（明治・大正・昭和。韻文と散文）、漢文演習（韻文と散文）、国文法講座、文学史講座、評論演習、中国語入門講座等が必要」とある。

この指摘については、その当否も含め、今後とも検討する必要がある。

### (八) 選択科目「中国語」における中国語検定試験 受験の実施と選択科目「朝鮮語」

選択科目「中国語」を、一九八七年度より設置。中国語検定の受験を課している。

また、一九九九年度には、選択科目「朝鮮語」を設置した。

いずれの教科も、本来は外国語科として独立しているべきものだが、設置以来国語科の所管となつている。国語科が所管することに特に異議はないが、学校組織の中での位置付けを、きちんと確認してみる必要があると思われる。

（小林大輔）

## 数 学 科

開校時数学科は三年まですべての学年で必修としていたが、一九九三年の改訂時には、三年の数学四単位は理系進学者にたいして必修にしている。数学科ではこのときの改訂が一番の大きなカリキュラムの変更といえる。これは文系進学者に対してはやや高度な内容で消化不良になり、理解不足の生徒に進度や難易度を合わせると理系の進学者にとつては簡単過ぎたりと、一緒に授業をすることに無理が出てきていた為である。これにより最低数学の履修時間は文系進学者では一、二年で十二時間と減らす代わり、理系進学者は十四時間と時間数では同じであるが、選択科目になることで受講人数を少なくして授業効果が得られるということを期待して導入した。

二〇〇三年度の改訂では、一、二年で情報や総合学習の時間が入れられた為、数学の時間が減る結果となる。一年では総合学習の時間を論理学の授業に当てさせてもらい、かろうじて三学年のトータルで理系進学者の授業時間が確保されている。理系進学者に関しては開校時から変わらない履修時間が確保され、内容もほぼ同等のものを教えることが出来ている。一方文系進学者には、選択科目で文系のための数学Ⅲなどの科目も設置して二年までの数学だけでは物足りない生徒や数学が好きな生徒に対しても対応している。文系進学希望者でも数学Ⅲ、数学Cなどの科目も選択可能である。これらの選択科目のほかにより内容の難しい数学についても学べるようにしている。「数学Ⅲ上

級」、「数学C上級」もこの科目であるが、科目名にSSHがついてい  
る「応用確率統計」、「記号論理学入門」、「解析学入門」などの科目が  
これに当たる。数学科ではこのように、文系進学希望者、理系進学希  
望者、さらに難しいことを学ぼうとする生徒とそれぞれに対応した内  
容の科目を置いて、それぞれの進学先で十分力を発揮できるようにカリ  
キュラムを考えてきている。

(木元 保)

## 英語科

### はじめに

二十五周年という記念の年が、英語科にとって大きな節目の年にな  
りました。長らく英語科にご尽力いただいた山田庄一先生が、二〇〇  
七年三月をもって定年退職をされました。後任として、本学院卒業生  
の嘉来純一先生が赴任いたしました。山田先生の築かれた有形無形の  
財産を引き継ぎ、英語科は四月より新たなスタートをきりました。更  
に二〇〇七年度からの定員増共学化に伴い、二〇〇八年度には専任教  
員が一人増員することになっています。

本年度は、専任が七人と非常勤講師が五人の総勢十二人で、総時間  
数一四六単位を担当しています。

### 二十五周年を迎えて

この二十五周年のうち一九九四年と二〇〇三年にカリキュラムの改  
訂が行われました。それに伴い本学院のカリキュラムも見直され、英  
語科では単位数の変化もありました。本紙面では二十五周年を顧みな  
がら、各学年における現行の様子をお知らせいたします。

#### 第一学年

英語ⅠとオーラルコミュニケーションⅠの二科目となっています。  
現行のオーラルコミュニケーションⅠは、開校当初から行われていた  
文法とLSIに分けて授業を行っています。成績は文法とLSIを合算し  
て一科目としています。

#### 英語Ⅰ

開校以来、英語Ⅰを「英語の基幹となる学習」と位置づけ、「聞く・  
話す・読む・書くの基礎的能力を養う」を目的とし、「自分のニーズに  
応じて適切な学習方法」の体得を望んでいます。

#### オーラルコミュニケーションⅠ・文法

一九八五年でのカリキュラムの見直しの際、文法が指導内容から外  
され、結果として検定教科書がなくなりました。そういったことも考  
慮され、開校当初は、加納敏郎先生が作成されたテキストを用いて授  
業を行ないました。本学院のみならず文法の必要性が再認識され、市  
販のテキストが充実してきたのを見計らって、切り替えていきました。  
「英文を理解し、通じる英文を書くときに、言葉を使う際のルール」

文法は欠かせない」が、開校以来の方針です。

### オーラルコミュニケーション・LL

開校当初は、山田庄一先生が作成された教材を用いて授業を行っていました。それは、NHKのテレビ講座を基本にしたもので、本院一年生のレベルに合った教材でした。現在でも、「英語の会話、発音に慣れる」を目的としています。

## 第二学年

英語IIとオーラルコミュニケーションIIの二科目となります。オーラルコミュニケーションは、一年次と同様に文法とLLに分けて授業を行っています。成績は文法とLLを合算して一科目としています。

### 英語II

「英語Iで学んだ技能を基礎とし、英語を聞き・話し・読み・書くというコミュニケーション能力を一層伸ばすこと」を目的とし、特に「コンピューターネットワーク上で用いられる言語が英語が主流である現実を認識し、読む力と書く力の養成」を積極的にを行っています。

### オーラルコミュニケーションII・文法

開校当初は、第一学年と同様に、前述のテキストの二年生用を使って授業を行っていました。使用教科書は一学年と同じ経緯をたどり市販のテキストへと移りましたが、いずれにせよ、二年間で一通りの文法事項を学習するようにしてきました。

### オーラルコミュニケーションII・LL

「どのような場面でのような表現が用いられているかを学び取る」

ことを目的とし、開校当初は市販のビデオ教材等を用いていました。現在では、主にネイティブの先生がその特性を活かした授業を行っています。

## 第三学年

リーディングとライティングの二科目になります。

### リーディング

「第一、第二学年を通じて育成した英語の総合的な力の完成」を目的とし、「大学教養課程での英語の授業に対応できるだけの読解力の養成」を目指しています。

### ライティング

「一、二学年で培った文法の知識と語彙力をもとに、自分の意見を英語で表現する基本的な力を身につける」ことを目的とし、「最終的にはまとまった意味を持つ文章が書けるようになること」を望んでいます。

一九九八年よりクラスを二分割し、一クラス二十人程度の規模で授業を行ない始めました。これは、「できるだけ学習の個別化(individualization)をはかり、語学教育の効果を上げることを目的」としたものです。二分割によって教育効果は上がり、帰国生の要望にも十分に配慮ができるようになりました。

### 選択科目

生徒の様々な要望に応じながら、更なる英語力の向上を目指し、設置科目を選定してきました。二〇〇七年度は、「英会話上級」「英会話

中級「時事英語」「英語学術発表基礎」「Mathematics」「英語III」を開講しています。なお、「Mathematics」はSSH関連の授業で、英語を使って授業を行っています。また、「英語III」は二〇〇五年度に設置されましたが、文系学部に進学を志望する生徒にとって必修選択科目となっております。

### 学年共通事項

#### サイドリーダー

自習教材として各学年の生徒のレベルに合ったものを年間二〜三冊程用意しています。開校して数年間は、年間一〇冊程の英書を生徒に読むように指導したこともありましたが、冊数は変わっても「語彙力の充実をはかる」、「内容の理解は勿論であるが要点や概要を捉える力をつける」という目的は変わりません。

#### GTEC・TOEIC

二〇〇四年度から外部試験を実施しています。年二回、春と秋にGTECを行います。生徒は、総合点だけでなく、聴解力・読解力・作文力・語彙力の伸展の様子を、自分の結果として経年的に把握することができます。春のGTECの結果が五五〇点以上で希望する者は、秋はTOEICを受験することになっています。

外部試験スコアは成績の一部に参入する以外に、国際教養学部進学希望者の英語力を測る判断基準にもなっています。当然のことながら、帰国生およびI選抜生の入学後の英語力の推移を客観的に知ることにも、大いに役立っています。

### 単語集

語彙力の養成にと、各学年一冊ずつ自習教材として生徒に渡しています。確認のために、定期試験に決められた割合で問題に組み入れています。

### おわりに

本紙面を執筆するにあたり、二五年分の関係資料に目を通しました。そのとき強く感じたことは、表現は異なりながらも、開校当初から一貫する英語教育に対する意気込みでした。言い換えれば、それは、できるだけ良い授業を生徒に提供したいという強い思いであります。我々はその思いを受け継ぎ、真摯に職務の遂行に励んでいかねばならないという念に駆られています。

二〇〇七年二月二十七日に山田先生の最終講義が行われました。その際に、「学院に教えることは喜びで、嫌だとは一度たりとも思わなかった」と先生は述べられました。二五年間を振り返り、英語科教員の思いはこの一言に尽きると思います。

(加藤裕章)

# 理 科

## 物 理

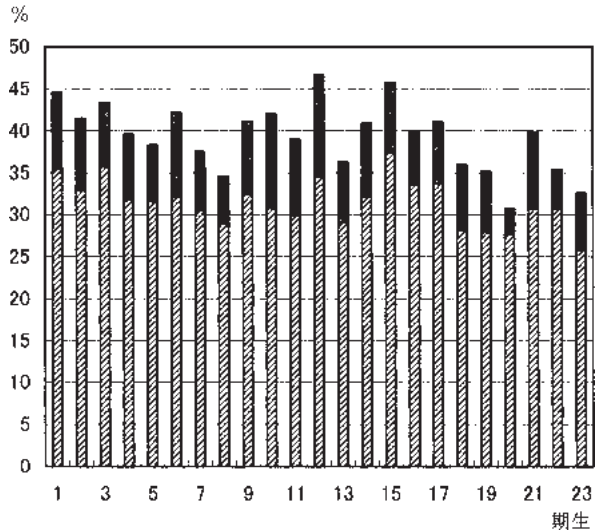
物理のカリキュラムの流れは、開校以来二年生全員に三単位、三年生は理系選択者のみ三単位としてきたが、途中一九九四年より一年二単位、二年二単位全員必修、三年理系選択者二単位となり、また現在は、始めの学年配置に戻っている。全員必修の授業においては、できるだけ実験を取り入れるよう心がけてきました。三年の授業においては、教科書の枠にとらわれずに、大学との接続を念頭に置き、微分積分を積極的に取り入れた授業展開としている。

二〇〇二年にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けたことがきっかけとなり、二〇〇三年の三年生より、選択科目に希望者一〇数名からなる習熟度別の上級クラスを設けました。学部進学に評価が密接にかかわるといふ制約より、定期試験問題は共通としている。本学院にとっては、始めて習熟度別クラス編成を取り入れたもので、その試みはより能力を伸ばすという意味でうまく行っていると言える。今まで扱う事が出来なかつた、理論的に高度な事を取り入れた授業展開が出来るようになりました。

二〇〇三年の二年生より、SSHクラスを導入しました。

グラフは、一期生より、各年度において、卒業生に対する、物理選択者及び理系進学者（理工学部及び教育学部理学科）の割合を示す。

理系選択者及び進学者の割合



年度によってばらつきはあるが、三五から四五パーセントの生徒が理系選択をして、三〇パーセントが理系進学をしている（グラフの下の部分）。その差の五から一〇パーセント（グラフの色の濃い部分）の生徒が理系選択をしながら、政経や法学部などの文系学部に進学している。自分の意思で文科系へ進学した生徒の他に、理数科目の赤点の為に理系進学できなかった生徒が含まれている。開校当初より、理工学部の定員枠は八五名、二〇〇七年の理工学部再編より一〇三名となり、ここ二十年は定員枠を満たしていない状態が続いている。しかし、人気の学科は時代の風潮を大きく反映して、年度により大きく変わって



いる。僅かな減少は見られるが、世間で言われているほどの大きな理科離れはおきていないと言えよう。

最近の生徒達はいろいろ工夫してやってみようということが薄れてきたのか、実験器具がこわれなくなりました。定期試験も易しくなってきました。質問に来る生徒もめっきり減りました。理科に興味・関心を持ってもらうにはどうすれば良いか、自分で問題提起をして答を見つけていくことができる生徒を育てるにはどうすればよいか、ということが永遠の課題です。

物理の教員の動きは、専任教員としては開校当初の中野公世の他に田実佳郎（一九九二～一九九五）、影森徹（一九九七）が勤務しており、その他に多くの非常勤の先生方に協力して頂いた。お名前と年次を上げておく（敬称略）。山口健一（一九八三～一九八七）、中里弘道（一九八五）、大杉定之（一九八六～一九八七）、室谷心（一九八六～一九九〇）、水谷雅志（一九八八～一九九二）、稲垣誠三（一九九一）、松永康（一九九四）、河野尚幸（一九九四）、大滝学（一九九四）、手嶋憲彦（一九九五）、二宮貴司（一九九五、一九九六）、中村博樹（一九九六）、小高克彦（一九九六）、吉澤大樹（一九九六～二〇〇〇）、下井歩（一九九九、二〇〇〇）、渡辺貫光（二〇〇〇～二〇〇三）、三枝亮（二〇〇〇～二〇〇三）、八木迪子（二〇〇五）、千野司（二〇〇六～）。

（中野公世）

## 化 学

開校年度は化学の授業はなかったが、化学担当の教員として小野裕次郎教諭がいらっしやった。二年目から上野（教諭）が加わり二年生の授業一二時間を二人の教員で担当した。当時は小野教諭は教務として学校全体の仕事をすることが主であった。三年目の完成年度には三年生の選択化学の授業が加わり、全部で二七時間の授業となった。化学の基本的な方針は実験を主体に授業を行うこととし、教科書の内容を鵜呑みにせず、実験結果の解釈や疑問は文献を調べるといふものであった。これは今も変わらない。そのため大学職員である新井智氏が実験の準備、生徒の実験補助、実験室の管理を担当した。完成年度からは二年生と三年生の実験を行うようになったため、一つしかない実験室は常に実験の準備か実験で使われるようになった。いままも実験室の事情は変わらないが、SSHに指定されてからは実際の実験回数が増え、共通教室棟を借りて対応している。化学実験室は実験室としては少し狭い、有毒ガスなどの排気設備がない、実験室の奥の実験台付近に避難路がない、など生徒が実験を行うときの安全について少々不安であったが、三人で最大限の注意を払った。小野教諭が退職してからは専任教員一人と非常勤講師で授業を行ってきたが、男女共学化ともない二〇〇八年度より専任教員が一人増える予定である。なお、実験担当の職員は、新井氏の後（一九八二～八八年）、野村勝治氏（一九八九～九三年）、力田正二氏（一九九四～二〇〇一年）、及川英雄氏

(二〇〇一—二〇〇二)と担当がかわり、現在は福井直子氏(二〇〇三—)が担当である。

二年生の化学の授業は完成年度より大きくは変わっていない。実験回数は三年の実験があるため年間七回程度である。実験の後にはレポートをめいめいの生徒が書いて提出することになっている。講義の内容は一般の高等学校のそれとあまり変わらない。三年生は講義が中心で大学での化学の授業を少し意識したものになっている。また、二〇〇五年度より化学も一年生の総合学習(サイエンス)の一部分を担当するようになった。試行錯誤しながら授業を進めているが、二〇〇七年度は化学の基本を入学してすぐの生徒に学んでもらうことにしている。

最後に、前にも述べたように一九八九年度と、一九九二年度以降、非常勤講師の方々に協力をお願いして授業を進めている。本庄高等学院の卒業生や理工学部の大学院の学生諸氏がほとんどであるが、忙しい本業の中ご協力をいただってきた。学生諸氏の場合には大学の研究室にもご負担をおかけしてきたと思う。非常勤講師の方々からエネルギーをもらってなんとかやってこれたというのが化学である。この場を借りて厚く(熱く)御礼申し上げます。ご協力いただいたのは次の方々である(敬称略)。

一九八九年度 浅野真、一九九二年度 市来玲子、黒田宗仁、平井達哉、一九九三年度 市来玲子、黒田宗仁、平井達哉、高安徹、一九九四年度・一九九五年度 高安徹、佐藤孝行、佐原寛、一九九六年度 高安徹、水野操、谷嶋元宏、一九九七年度 水野操、一九九八年度 水

野操、庄司健、一九九九年度 庄司健、羽野友紀子、二〇〇〇年度 羽野友紀子、風間健志、二〇〇一年度 風間健志、渡辺敏史、二〇〇二年度 渡辺敏史、田中学、二〇〇三年度 田中学、新倉宏、山口洋平、留守尚子、二〇〇四年度 新倉宏、山口洋平、伊藤亜紀子、荻野真澄、二〇〇五年度 伊藤亜紀子、荻野真澄、二〇〇六年度・二〇〇七年度 石橋京子、神代瑞樹、宮川可奈子

(上野幸彦)

## 地 学

理科の地学分野に関する授業は履修の学年や科目名が変わったりしたが必修科目として全員に二単位の授業として実施しているという点では開校以来変わっていない。開校年度の一九八二年より一九九三年までは一年での「理科I」(生物分野と合せて四単位)の中で二単位の授業であった。一九九五年度から二〇〇四年度までは三年で「地学I B」を二単位の授業とした。二〇〇五年度からは三年で「理科総合B」として地学分野を二単位の授業として実施している。専任の篠田が担当してきたが、非常勤で水谷雅志講師(一九八七・四〜一九八九・三)、神沢憲治講師(一九九八・四〜二〇〇二・三)に担当して頂いたクラスがある。

二単位という授業時間では高校地学の内容を全般的に扱うことは出来ない。そこで、太陽系の中の惑星としての地球の仕組み・特徴を軸に地球規模の空間的広がり、時間的広がりを認識できるように授業展

開を心がけてきている。固体地球の学習にあつては地球物理学の研究の成果をもとにしたプレートテクトニクスの考え方を中心にしている。地球の成立時以来の進化を見る中では生物の果たしてきた役割に目を向けさせた。また、太陽からのエネルギーが作り出す地表付近の多くの自然現象を、水の果たす役割が大きいことなどを通して理解させる等である。三年での履修になり、既に物理、化学、生物を学習した上での授業になるので生徒の理解は早く、深くなつたと感じている。

二〇〇二年度よりSSH授業の一環としての選択科目「地球環境」の中では、「人工衛星による地球環境観察」をテーマにランドサット衛星データの利用による栃木県足尾山地、大久保山周辺の経年的、季節的な環境観察と現地踏査等を実施している。また、一年の総合的学習・サイエンスの中では、人工衛星を利用する技術の理解のためにGPS受信機を用いて、学院の位置の測位を実施、地形図から求める方法とも比較する学習をしている。

(篠田晋治)

## 生 物

本庄高等学院では開校以来、理科の科目については生物・物理・化学・地学の全てを必修科目として履修するようにカリキュラムが組み立てられた。この二五年間、生物については第一学年において週二時間の授業が割り当てられており現在に至っている。さらに、第三学年に

おいては選択科目の中に生物の科目が置かれている。選択授業は一期生が三年生になつた一九八四年に始まり、一九九五年までは週三時間の授業であったが、それ以降は学院でのカリキュラムの変更によつて選択科目は週二時間の授業となつた。

この間、文部省(現文部科学省)の指導要領の改訂に伴いカリキュラムの変更があり、第一学年での生物の授業は、一九八二年～一九九三年は「理科I」(時間割での科目名は理科Ib・生物)、一九九四年～二〇〇三年は「生物IB」、二〇〇四年から現在までは「生物I」として授業をおこなつてきた。第三学年での「選択生物」(当初より現在まで一クラス開講)は一九九六年以降は「生物II」として授業を展開してきた。これまでに、教科書は第一学年では「新理科I」三省堂(一九八二年～一九八七年)、「高等学校理科I改訂版」啓林館(一九八八年～一九九三年)、「高等学校生物IB」啓林館(一九九四年～二〇〇三年)、「高等学校生物I」啓林館(二〇〇四年～二〇〇五年)、「生物I」東京書籍(二〇〇六年以降)を使用し、第三学年での選択授業では「高等学校生物」啓林館(一九八四年～一九九五年)、「高等学校生物II改訂版」啓林館(一九九六年～二〇〇五年)、「高等学校生物II」啓林館(二〇〇六年以降)を使用した。

全生徒必修の第一学年の「生物I」では、大学学部卒業後に社会に出た際に必要な一般的な基礎知識として身に付けておいてほしい事柄を中心に、具体的には教科書の目次に従つて表すと「細胞」・「生殖と発生」・「遺伝」を中心に、取り扱っている。さらに、現在の社会で話題となつている生物に関係する事柄(例えば環境に関すること、バイ

オテクノロジーに関すること、新しい医療に関すること、感染症に関すること、ノーベル賞に関すること等）を、教科書を離れて、新聞等の記事などを用いて紹介する授業も積極的にやっている。

第三学年での選択科目の「生物Ⅱ」では教育学部理学科生物学専修、先進理工学部、人間科学部などの生物学に関係する学部・学科に進学を希望している生徒を対象に、現代生物学の基礎をしっかりと身に付けてもらうことを目的として細胞の構造と機能・生体高分子（タンパク質や核酸）・酵素のはたらき・生体内での化学反応（呼吸、光合成や窒素同化）・筋収縮のしくみ・遺伝子研究の歴史・DNAと遺伝情報の発現・発生のしくみ・免疫のしくみ・バイオテクノロジーなどについて、かなり詳しく授業を展開している。

開校二年目から、理科担当の職員として勤めてこられた大島辰也さんが二〇〇〇年六月に理工学部へと転勤になり、その前年の九月からは理科担当の職員として中島功さんが現在までお勤めになつている。生物担当の教員は開校以来、今年（二〇〇七年）三月までは私一人で全ての授業を担当してきたが、四月からの定員増・共学化に伴い私他に大学院先進理工学研究科院生（修士課程）の佐藤那央さんが非常勤講師として一年生二クラスの授業を担当している。

（吉見孝人）

## 総合学習（サイエンス）

本庄高等学院の校舎を取り囲む大久保山の森は総面積約八〇ha。こ

ナラやクヌギ、ヤマザクラなどを主体としたいわゆる雑木林で、アカマツがそこに混じり、四季折々に魅力的な景観を見せてくれる。授業ではこの恵まれた立地を活かした内容のものを扱おうと心掛けて

いる。  
具体的にいえば、次のとおり。

### 〈一学期〉雑木林

雑木林の成り立ちや昔の人々の生活との関わり、雑木林の今日的意義について学ぶ。加えて、自然保護について考える。

### 〈二学期〉キノコ

キノコを含む菌類の生態と自然界における役割、重要性を学ぶ。菌類と人間との関わりについても触れる。

### 〈三学期〉森林の効用



タマゴタケ（テングタケ科）まっ赤な傘。テングタケ科のキノコですが、美味。



ハナオチバタケ（キシメジ科）とても可憐なキノコです。落葉を分解してくれます。

水源涵養、二酸化炭素吸収など、森林のもつ様々な公益的機能について学ぶ。

この中でも、生徒たちの興味をひくのは何といつても二学期に行うキノコについての授業だろう。本学院はキノコの宝庫といつても過言ではなく、可憐なものから何とも形容し難い珍奇な形をしたもの、さらには一本口にしただけでも命を落としかねない危険極まりないものまで勢ぞろいして、生徒より私のほうが興奮してしまうほど。初めはキノコになどまったく興味のなかつた生徒の口から「調べていくうちにキノコのイメージが変わった」「キノコがないと私たちは生きていけないんだということがよく解った」などといった感想が漏れると嬉しくなる。授業回数に限られているが、今後もなるべくフィールドワークをとり入れていきたい。大自然には私たちには測ることできない不思議や魅力が満ち満ちている。その自然に直に接することで、自分たちが大いなるものの中に生かされていることを感じとってくれたら何よりだと考える。

(講師・内野郁夫)

## 地理歴史科

### 日本史

二十五年の間に、教育課程の改訂が二回あり、日本史の授業も大きく三種の教育課程を実践したことになる。

最初のカリキュラムは開校二年目の一九八三年から一九九四年までで、この期において日本史は必修科目として日本史Bを二年生配当とし週二単位、三年生の選択科目として週三単位行なった。担当教員は専任一名(佐々木)の他、高橋勇市・徳永高志・石崎建治・畠山聡の四名の講師である。当時の日本史学習の基本的な考えは二年生で日本の歴史を若干浅くとも通史的に広く学習し、その知識の上に立って三年生で生徒自身の関心、興味、進学志望学部に応じて、時代とテーマを選択し、より深く専門的に学習するというものである。

二年生ではまさに原始・古代から始まり、中世・近世へと進む。ただ、授業時間が週二時間しかなく、なかなか近現代まで進むのが難しいが、それぞれ工夫して大正時代まで行う年も多くあったと記憶している。通史的に行なうとはいえ、平板な説明に終わることなく、各時代の特徴を整理し、さらに、例えば平氏政権の限界はどこにあったか、秀吉の歴史的役割は何か、なぜ徳川政権は崩壊したかなど、歴史の転換点に留意するよう心がけた。また、歴史というと政治史が主流にな

りがちだが、社会史はもとより文化・思想史にも言及した。

三年の選択科目では担当教員がそれぞれ専門とする分野、すなわち原始・古代・中世・近代・現代を扱った。原始・古代では日本考古学、魏志倭人伝、日本神話などを扱い、中世では荘園制、南北朝、近世では鉄砲伝来から明治期までの日欧交渉史、蘭学などの思想史、近代では日本資本主義発達史、世相史としての昭和史、金融恐慌からアメリカの占領政策、敗戦からオイルショックなどを扱った。高校の日本史としては原始・古代から近現代までかなり詳しく学習でき、高等学院ならではの授業が行なえたと自負している。古代の魏志倭人伝の授業では漢文を読み、注釈をつけ、さらにそれを冊子に纏めるという作業も行なった。これは五年ほど続き、生徒たちにも学習の意欲を持たせることとなった。

第二期のカリキュラムは一九九五年～二〇〇三年までである。日本史の必修科目は日本史Bを二年生配当とし週三単位、三年生配当の選択科目は週二単位行った。担当教員は専任一名(佐々木)の他、高橋勇市・望月雅士・畠山聡・松井慎一郎の四名の講師である。

二年生配当の必修日本史Bは従来通りの原始・古代から近現代までの通史を学習し、授業時間が週一時間増えたことにより授業の深度、進度にゆとりが出て、毎年、一九四五年の終戦までは終えることができた。三年生の選択科目では、原始・古代から近現代までを網羅したが、一九九七年度以降は中世が休講となった。日本史Iは原始・古代的分野であるが、文献史的視点ではなく、「考古学から見た日本の歴史」と副題をつけ、文字ではなく、遺物、遺構から復元される歴史を

学んだ。二〇〇〇年度以降の選択日本史の特徴としては、近代においてアジアから日本の歴史を見るとどう見えるのか、ということ、「近代日本と東アジア」を設け、さらに二〇〇一年からは「近代日本と東アジア」を発展的に解消し、東洋史、西洋史と組み合わせ、「近現代の世界」を開講した。その内容は近代日本の知識人が中国・朝鮮という東アジアをどう認識したかという思想史、日清戦争、北清事変、日露戦争、第一次世界大戦、シベリヤ出兵、一五年戦争という近代日本が歩んだ戦争の歴史とその崩壊過程などを学んだ。二〇〇二年度からは昭和史の講義も加わった。三年選択科目が週二単位の連続授業一〇〇分となったことにより、単元の設定がすっきりした点はあるが、単位減により学習の内容が薄まった感もある。

第三期のカリキュラムは二〇〇四年度から始まり、現在進行中である。担当教員は専任一名(佐々木)の他、高橋勇市、望月雅志、松井慎一郎の三名の講師である。

今回の改訂の大きな変化は再び二年生配当の必修日本史が週二単位に減じられたことである。開校当初の十年間は週二時間でも日本史Bを行なったこともあるので、今回も日本史Bを行なうことを考えた。

しかし、学習指導要領の規制が強く、標準単位四時間の日本史Bを二時間で行なうことは日本史Bを履修したとは見なされず、結局、進学校では珍しく、日本史Aを学習することにした。かつての日本史Aは原始・古代から近現代までの歴史を浅く学ぶものであったが、新教育課程では近現代に照準を合わせて、黒船来航から現代までを重点的に扱うことになった。しかし、前近代を知らなくて、学部へ推薦するこ

との不安、特に高校受験科目である英語、数学、国語しか学習してこなかった多くの学院生が前近代の歴史を知らずに学部へ進むことの不安は大きい。そこで、三年生の日本史の選択科目がかなりの部分で現代にシフトしていることもあり、二年では日本史Aを行なうが、前近代にも力点を置くということで、授業を展開している。三年配当の選択科目は第二期の後半と同じで、アジア近代史と絡めた近現代の日本、さらに昭和史を学んでいる。

大きく教育課程の改訂にあわせて三期に分けて、本庄高等学院の日本史の二十五年を述べてきたが、授業を行なうにあたり各期を通じて心がけたことが二つある。まず一つは、歴史の学習においてはとかくありがちな年号、人物名をがむしやりに覚えること（丸暗記）は要求せず、政治・社会の内容とその変化などから各時代の特色を理解させようと努めたことである。いま一つは、日本史だからといって列島の歴史のみを学ぶのではなく、朝鮮半島、中国大陸の政治、社会情勢が日本の歴史に大きな影響を与えてきたこと、時には一つの政治世界として認識しなくてはならない時がある、ということを強調してきたことである。特に日本史では現在日本の抱える問題と近似する過去の事例を多く学ぶことになる。それは次世代を担う学院生にとっては絶対的に必要とされる知識である。

日本史の授業というと、どうしても座学中心になり易い。しかし、本庄高等学院の立地する本庄キャンパスは埋蔵文化財の宝庫であり、こうした財産を授業に活用したのであるが、如何せん時間がない。教えることが多く、かつ教える時間が少ないというジレンマにいつも

陥っているのが日本史の現状である。二十五年を経て、つくづく思うことは、教員の意識改革により、座学を離れた学習形態を取り入れる工夫が求められなくてはならないということである。

（佐々木幹雄）

## 世界史

本学院の世界史は、開校当初から現在に至るまで、必修科目と選択科目から構成されている。必修科目、選択科目の順に述べよう。

本学院開校時のカリキュラムでは第二学年の三単位の必修科目として「世界史」が配置された。したがって授業の開始は一九八三年度である。当初は専任でビザンツ教会史の冷牟田修二と非常勤でキリスト教史の中島（旧姓篠塚）昭子によって授業が行なわれた。八四年度からは冷牟田が倫理担当に移り、専任の東アジア史の三崎良章と中島、さらに非常勤でオリエント考古学の浅野一郎が担当した。この専任一名と非常勤二名の体制は九二年度まで続くが、非常勤の一人は浅野からヨーロッパ近代史の近藤信市に代わった。また九三年度には三崎が在外研究員となった関係から、三崎の担当分を非常勤で中国古代史の久保雅人と同じく申英秀が担当した。

九四年のカリキュラムの改定においては、世界史は「世界史B」を履修することとなったため、四単位必修とされた。本学院ではそれを第一学年で西洋史、第二学年で東洋史というように二学年に分けて二

単位ずつ履修することとした。そこで冷牟田が再度世界史の担当となり、西洋史を受け持った。九四年度はカリキュラムの変わり目で、第二学年三単位と第一学年二単位となり、世界史の授業時間数が大幅に増大したため変則的な体制で乗り切ったが、九五年度からは冷牟田が西洋史、三崎が東洋史を担当し、西洋史、東洋史それぞれに非常勤一名が加わる形に落ち着いた。西洋史の非常勤は中島、エジプト考古学の長谷川奏、同じく齋藤正憲と交替し、東洋史のそれは中国古代史の石岡浩が継続した。冷牟田が二〇〇一年三月で定年退職したため、西洋史の専任は非常勤であった齋藤が引き継ぎ、非常勤にドイツ近現代史の飯田洋介が加わった。

○三年のカリキュラム改定では世界史の変更はなく、したがって第一学年西洋史二単位、第二学年東洋史二単位という体制は九四年以来現在まで続いていることになる。○三年度には三崎が特別研究期間となり、代わりに石岡と非常勤で中国古代史の濱川栄が担当したが、その後は三崎が全六クラスの授業を行なっている。西洋史は選択科目との関係で、齋藤とともに、飯田と非常勤でハプスブルク史の兼子恵実が交替で担当し、○六年度の齋藤の特別研究期間の際には、非常勤でエジプト考古学の南澤武蔵が加わった。

選択科目は開設当時のカリキュラムでは各講座三単位で四講座を履修することになっていたが、初年度生が第三学年に進級した一九八四年度から実施された。世界史関係では「東洋史」および「西洋史Ⅰ」「西洋史Ⅱ」の三講座が設置され、「東洋史」は主に東アジア前近代史で三崎が、「西洋史Ⅰ」は古代オリエント史で浅野が、「西洋史Ⅱ」は

ヨーロッパ近世史で中島が担当した。その後、八八年度から従来の「東洋史」を「東洋史Ⅰ」とした上で、中国近現代史を扱う「東洋史Ⅱ」を二講座設置し、非常勤で中国近代史の堤茂樹が担当した。これは九〇年度には中国古代史の北川俊昭、さらに九一年からは申に交替した。また九一年度にはヨーロッパ近代史を扱う「西洋史Ⅲ」を開設し、近藤が担当したが、九二年度には廃止され、「東洋史Ⅰ」「西洋史Ⅰ」各一講座、「東洋史Ⅱ」「西洋史Ⅱ」各二講座の体制が結局九五年まで続いたことになる。担当は三崎、申、冷牟田、中島に、長谷川、久保が順次加わった。

九六年度に新カリキュラムの生徒が第三学年に進級し、選択科目も二単位を五講座履修する新たな体制となった。三単位の時は、連続の二時間とその前日あるいは翌日の一時間という変則的な時間配分で、授業展開は非常に難しかったが、連続の二時間のみとなった結果、すっきりした授業になったように感じられる。単位数が減った分講座数が増え、東洋史では「Ⅰ」「Ⅱ」を前近代史とした上で近現代史を扱う「東洋史Ⅲ」二講座が新設、西洋史では「西洋史Ⅰ」が二講座に増設された。講座数に変動はあったものの、科目の形は二〇〇〇年度まで続き、授業は東洋史が三崎、申、石岡、西洋史が冷牟田、長谷川、齋藤によって行なわれた。

二十一世紀になるとともに科目名が激しく変動した。まず〇一年度には近現代史を扱う講座は日本史と連動して「近現代の世界」の中の一講座とすることとし、その「Ⅳ」をドイツ近代史とした。○二年には従来の東洋史、西洋史という名称を廃止し、教員の研究対象に基づ



き、「イスラーム史」「古代エジプトの歴史と文化」「中国史」を開設した。さらに〇四年には東アジア近現代史を扱う「近現代の世界V」を設置し、〇五年には「中国史」を「中国前近代史」とした。担当は齋藤、三崎、南澤、石岡、飯田(〇三年度後半から〇四年度前半は兼子)であり、現在に至っている。

本学院の世界史は、開設以来、必修科目は教員各自の歴史観に基づいた通史を講じ、選択科目は各教員の研究分野に即した、歴史学の最前線を見据えた授業を行なうことが継続され、それが大きな特色となつていると言えよう。

(三崎良章)

## 地 理

地理は、必修科目の「地理A」と選択科目の「地理学演習」とがあり、いずれも三年次に配当されている。教育課程における変遷をたどつてみると、必修科目は開校時から「地理」(三単位)であったが、一九四四年度に「地理B」(三単位)となり、一九九六年度から現行の「地理A」(二単位)となった。これは本校の教育課程において二時間しか当てられなくなったためであるが、内容的には「地理B」の内容も多く取り入れてきた。指導要領の言葉を借りれば「系統地理と地誌を両輪とする体系のもとに、現代社会の地理的認識を目指す」という姿勢である。一方、選択科目は一九九六年度に新設され、一九九八年度か

ら「地理学演習」の名称で開講されている。

地理を担当する専任教諭は一名である。一九八四年度からの二三年間は青木教諭が担当されてきた。二〇〇六年度をもって青木教諭が退職されたことよって、この二〇〇七年度からは新たに高井が担当している。以下、青木教諭が担当されてきた授業をもとに、その内容を回顧することとしたい。

「地理A」および「地理B」を融合した授業として特徴あるものの例に、中国に関する地誌的授業や、環境や食料に関する主題的学習がある。中国については、北京への修学旅行の事前学習と絡めて詳細な中国地誌を学んできた。中央統制的な制度の国家であり、時代ごとの政策と生産活動、生活とが密接に結びついているため、政治・経済等の関連教科の内容にまで踏み込んだ授業を展開してきた。また、「地理A」の学び方の一つとして指導要領が示す「作業的学習」も取り入れられた。最近扱った「人民元切り上げ」では、四〜五人のグループごとに切り上げた場合の中国、日本、中国に進出している日本企業などに与える影響を検討し、発表したグループへの質疑応答で授業を進めるといふ形を取った。

別の授業では、北京での自由行動を考慮するための北京地誌を学んだ。北京への修学旅行は、急速に変化する都市像、交通、経済活動などを体験しながら学べる良い機会である。早稲田大学への中国からの留学生などの協力を得たりしながら学習を進めた。環境や食料問題は、アメリカ合衆国、旧ソ連、インドなどで行われた大規模農業関連開発と、その後の影響を取り上げた。旧ソ連の中央アジア、アメリカ合衆国中

西部の土壤浸食は、青木教諭の研究テーマであったので、生産と環境との関連について現地調査に基づき最新情報をもとに学べるようにした。

選択科目「地理学演習」は、本庄キャンパス周辺と本庄市街地でのフィールドワーク、詳細な外国地誌を柱とした。キャンパス周辺では、地形、農業地理、市街地では都市地理学を学んだ。フィールドワークの後にはレポートが課された。その一部は社会科教員室前に掲示してある。外国地誌は、昨年から大学院国際情報通信研究科(GITS)の留学生による各国の紹介を中心に展開した。

地理は、地表面に展開する自然的もしくは人文的な諸現象が「なぜ」「どのように」成立している(してきた)のかを、人々の生活との関わりにおいて検討する。今後は、生徒にとって身近な話題を取り上げながら、身の回りの地理的事象に対して疑問を持ち、その理由を考え、姿勢を育めるような授業を行っていききたい。

〔付記〕本稿の執筆にあたり、前任者の青木教諭には多大な御協力を頂きました。ここに記して、感謝いたします。

(高井寿文)

## 公民科

## 倫理

### 【総説】

本学院では一九九三(平成五)年度まで一年生に「現代社会」を配当し、これを倫理的分野(a)と政治経済分野(b)の二科目に分けていたが、教育課程の変更にもとない、九四(平成六)年度より、一年生に「倫理」、三年生に「政治経済」を配当することとなった。(ただし「政治経済」は二〇〇四(平成十六)年度より二年生に配当)

『十周年記念誌』所収の冷牟田修二先生の記事によると、本学院における「現代社会」はa・bとも、二年次以降に履修する社会科学系の科目へと展開していく、一種の社会科学入門講座として位置づけられていたとのことである。九三(平成五)年度に「現代社会a」を担当し、九四(平成六)年度より「倫理」を担当する筆者においてもその基本姿勢は変わらず、二年次以降の学習全般に対する何らかの動機付けになれば、という思いで授業を行っている。とりわけ筆者が重視しているのは、思考や文化の多様性ということであり、古今東西の様々な思想や宗教を紹介することにより、そのことを少しでも生徒に伝えたいければ、と思っている。

三年生選択科目については、九五(平成七)年度までは「倫理思想

西暦年度		一九九二		一九九三	
年度		四		五	
科目名称		現代社会 a (倫理)		現代社会 a (倫理)	
クラス		A B C D E F		A B C D E F	
担当 (職名)		冷牟田修二(教諭) 冷牟田修二(教諭) 冷牟田修二(教諭) 冷牟田修二(教諭) 冷牟田修二(教諭) 冷牟田修二(教諭)		坂井淳一(非常勤講師) 坂井淳一(非常勤講師) 坂井淳一(非常勤講師) 坂井淳一(非常勤講師) 坂井淳一(非常勤講師) 坂井淳一(非常勤講師)	
特記事項		前年度まで現代社会 a を担当されていた冷牟田修二先生の国内研究期間制度の適用にともない、北村晋先生と坂井の二人非常勤講師体制となった。		旧・新約聖書の記述に依拠しつつユダヤ教の成立と初期キリスト教を概観した後、古代ギリシア思想についてその神話の生成からアイデア説までを略説し、「無からの創造」を説く前者と「無から有は生じない」と説く後者の深い結びつきがヨーロッパ思想の土台となったのだということを語った。更に後期には古代インドのウパニシャッド哲学を論じ、ヨーロッパ思想との対比を試みた。	
坂井担当クラスの講義内容					

【1年生配当「現代社会 a (倫理)」「倫理」】

史」が設置され、九二(平成四)年度までは冷牟田修二先生が、九三(平成五)～九五(平成七)年度までは非常勤講師の北村晋先生が担当された。九六(平成八)年度より科目名を「倫理」に変更し、筆者が担当して今日に至る。

以下、『十周年記念誌』出版年度の翌年度一九九二(平成四)年度以降の、

一年生配当の「現代社会 a」「倫理」のクラス別担当教員氏名、特記事項および筆者担当クラスの講義内容の概略と、三年生選択科目「倫理」の講義内容の概略を記す。

(坂井淳一)

一九九七			一九九六						一九九五						一九九四							
九			八						七						六							
倫理			倫理						倫理						倫理							
	C	B	A	F	E	D	C	B	A	F	E	D	C	B	A	F	E	D	C	B	A	
	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(非常勤講師)	北村 晋(非常勤講師)	坂井淳一(非常勤講師)	北村 晋(非常勤講師)	坂井淳一(非常勤講師)	坂井淳一(非常勤講師)	坂井淳一(非常勤講師)	坂井淳一(非常勤講師)	坂井淳一(非常勤講師)	北村 晋(非常勤講師)	坂井淳一(非常勤講師)	北村 晋(非常勤講師)	
				坂井が教諭として赴任し、一年生全クラスを担当する体制となった。(～二〇〇一年度)													科目名が現代社会 a から倫理へ。二期制から三期制に移行。冷牟田先生がこの年度より世界史を担当されることになったのにもない、北村先生と坂井の二人非常勤講師体制が継続となった。(～一九九五年度)					
	この年の春は、いわゆる臓器移植法の成立をめぐる議論が高まっていた時期でもあったので、そのことを材料に、比較的具体的に倫理とは何かということを語り、導入とした。その後は、ユダヤ教の成立と初期キリスト教、さらに、初めてイスラームについて比較的詳しく講義を行い、最後はインド・ヨーロッパ語族の問題も織り込みつつインド思想を概観し、原始仏教の基礎まで語った。			前年度と同じくまず倫理という科目を学ぶ動機付けを行い、インド・ヨーロッパ語族の問題等も織り込みつつ、基本的に平成六年度と同じ順序でインド思想を詳説した。その後は旧・新約聖書の記述に依拠しつつ、ユダヤ教の成立と福音書の内容までを概観した。							初めに、倫理・倫理学とは何かということを概説し、倫理という科目を学習する動機付けを行った。その後は、基本的に平成五年度と同じ順序で講義を行い、最終的には原始仏教の基礎まで語った。						一～二期は、インダス文明からバラモン教を経て仏教が展開するまでを講義した。特に仏教については瑜伽行派や如来藏思想、密教等にも言及し、詳説した。三期は旧約聖書の記述に基づいてユダヤ教の成立までを概観した。					

二〇〇〇						一九九九						一九九八								
一一						一一						一〇								
倫 理						倫 理						倫 理								
F	E	D	C	B	A	F	E	D	C	B	A	F	E	D	C	B	A	F	E	D
坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)
<p>前年度の脳死移植の実施、大阪連続通り魔事件の犯人の少年の実名・顔写真報道をめぐる新潮社逆転勝訴などを材料に、具体的に倫理とは何かということを語り、導入とした。また、初めての試みとして年度の最初に、バラモン教、仏教、古代ギリシア哲学、ユダヤ教、キリスト教、イスラームのそれぞれについて大雑把な話をしてみた。その後の講義の順序としては、インダス文明からヒンドゥー教に至るインド思想、ユダヤ教の成立と初期キリスト教。</p>						<p>この年の二月にいわゆる臓器移植法成立後初の脳死移植が行われ、脳死移植自体のみならず、それを報道する側の倫理についても議論が高まっていた時期であったので、それらのことを材料に、具体的に倫理とは何かということを語り、導入とした。その後は、インダス文明からヒンドゥー教に至るインド思想を概観し、更に、ユダヤ教の成立と初期キリスト教、イスラームを扱った。キリスト教については、特に信仰義認の問題を詳説した。</p>						<p>前年度にいわゆる臓器移植法が成立し、施行されたことによつて脳死移植についての議論が高まっていた時期でもあったので、そのことを材料に、比較的具体的に倫理とは何かということを語り、導入とした。その後は、ユダヤ教の成立と初期キリスト教、イスラームを概観し、最後はインド・ヨーロッパ語族の問題も織り込みつつインド思想を扱い、初期大乘仏教まで語った。</p>								

二〇〇四				一〇〇三					二〇〇二					二〇〇一							
一六				一五					一四					一三							
倫理				倫理					倫理					倫理							
D	C	B	A	F	E	D	C	B	A	F	E	D	C	B	A	F	E	D	C	B	A
前田英一(非常勤講師)	前田英一(非常勤講師)	坂井淳一(教諭)	前田英一(非常勤講師)	前田英一(非常勤講師)	前田英一(非常勤講師)	前田英一(非常勤講師)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	前田英一(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)
									<p>坂井が生徒担当教務副主任となつたのにもない、坂井が二クラス、非常勤講師が四クラスを担当する体制となった。(一〇〇七年度)</p>												
<p>旧・新約聖書の記述に依拠しつつユダヤ教の成立と初期キリスト教を概観し、イスラームについても略説した。最後はインドス文明からヒンドゥー教に至るまでのインド思想を概観し、仏教については原始仏教の基礎までを扱った。</p>				<p>前年度に同じ</p>					<p>前年度と同様、『哲学入門以前』の序章と第一章を講読した。三学期には、インド思想もとりあげ、インドス文明からバラモン教を経て原始仏教の基礎までを概観した。</p>					<p>授業で扱うべく数年前から準備を進めていた川原栄峰『哲学入門以前』の序章と第一章を講読した。講読に先立ち、序章を読む為の導入として脳死移植問題をとりあげた。また、第一章の読解にはキリスト教、ソクラテス・プラトン、カント、ルター、臨済等についての予備知識が必須であるので、それらについて適宜講義を行った。三学期には、バラモン教・ヒンドゥー教等のインド思想についても略説した。</p>							

【三年生選択科目「倫理」】		西暦年度	平成年度	一学期	二学期	三学期														
一九九六	八	二〇〇六	一八	倫理	倫理															
一年を通じて、毎時間一人ずつ倫理に関する任意のテーマについて発表させ、質疑応答後、坂井がコメントを与えるという形の授業を行った。発表時に配布する資料は事前に提出。テーマは、安楽死、人工中絶、少年法、死刑制度、報道倫理、インターネット社会、いじめ、差別、難民問題、ニーチェの思想等、多岐に亘った。各学期末にレポート提出。							F	E	D	C	B	A	F	E	D	C	B	A	F	E
							三澤三知夫(非常勤講師)	坂井淳一(教諭)	三澤三知夫(非常勤講師)	坂井淳一(教諭)	三澤三知夫(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)	三澤三知夫(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	三澤三知夫(非常勤講師)	坂井淳一(教諭)	坂井淳一(教諭)
							一〜二学期は、インダス文明からバラモン教を経て仏教が展開し、最終的にヒンドウー教が成立するまでを講義した。特に仏教についてはナーガールジュナ(竜樹)の縁起・空思想を詳説した。三学期は旧・新約聖書の記述に基づいてユダヤ教の成立と初期キリスト教を概観した。キリスト教の講義においては、初めてキリスト論を比較的詳しく扱った。													
							二〇〇一〜三年度と同様の方法で『哲学入門以前』の序章と第一章を講読した。キリスト教の講義においては初めて、いわゆる「パウロの十字架の逆説」にも言及した。													

一九九七	九	<p>当時何かと話題になっていたいわゆる援助交際について、新聞記事や関連図書等をもとに研究発表を行わせた。学期途中に神戸児童殺傷事件が起こり、その後一年を通じて何度か話題にした。レポート提出。</p>	<p>この年の六月にいわゆる臓器移植法が成立したのを受けて、今後の日本における脳死者からの臓器移植について、様々な角度から研究発表を行わせた。二学期は主として現状を分析し、三学期は日本の伝統的な死生観と脳死議論の関係について考察した。各学期末にレポート提出。</p>	
一九九八	一〇	<p>前年度六月にいわゆる臓器移植法が成立、十月に施行されたのを受けて、今後の日本における脳死者からの臓器移植について、様々な角度から研究発表を行わせた。レポート提出。</p>	<p>前年度に起きた神戸児童殺傷事件をきっかけとして、法曹界ではそれ以前から始まっていた少年法改正論議が一般社会においても大きな話題となりつつあったのを受けて、少年法の歴史・理念、少年審判の実際、改正論議等、様々な角度からの講義を行い、二学期末にレポートを提出させた。予てからレポートの書き方指導の必要性を感じていたので、三学期は、二学期に提出させたレポートをもとに個別指導を行い、学期末に改訂版を提出させた。</p>	<p>倫理に関する任意のテーマについて研究発表を行わせた。テーマは、同性愛、報道倫理、カルト、教育とは何か等。任意のテーマでレポート提出。</p>
一九九九	一一	<p>脳死臓器移植問題について、一学期は主として脳死臓器移植の現状について、二学期は日本の伝統的な死生観と脳死議論との関係について、様々な角度からの研究発表を行わせた。各学期末にレポート提出。</p>	<p>柳田邦男『犠牲（サクリファイス） わが息子・脳死の一日』（文藝春秋社）をテキストに「人稱による死の違い」という捉え方を紹介し考察を加えた。レポート提出。</p>	<p>いわれる出生前診断と生命の選別について講義を行った。レポート提出。</p>
二〇〇〇	一二	<p>倫理に関する任意のテーマについて研究発表を行わせた。テーマは、宗教と科学、学歴社会、死刑制度、性同一性障害等。少年法改正論議についてのレポート提出。</p>	<p>上記『犠牲（サクリファイス）』を読み、その中に紹介されるタルコフスキー監督の映画『サクリファイス』の視聴等も交えて、特に自死した主人公・洋二郎君の精神世界について考察を加えた。レポート提出。</p>	<p>町野朔・森岡正博両氏による臓器移植法改正をめぐる議論を紹介し、講義を行った。レポート提出。</p>
二〇〇一	一三	<p>倫理に関する任意のテーマについて研究発表を行わせた。テーマは、安楽死と尊厳死、奉仕活動の義務化、大学とは何か等。当時世間を騒がせていたクローン人間について講義を行い、それについてのレポートを提出させた。</p>	<p>上記『犠牲（サクリファイス）』を読み、その中に紹介されるタルコフスキー監督の映画『サクリファイス』の視聴等も交えて、特に自死した主人公・洋二郎君の精神世界について考察を加えた。レポート提出。</p>	<p>町野朔・森岡正博両氏による臓器移植法改正をめぐる議論を紹介し、講義を行った。レポート提出。</p>



二〇〇二	一四	上記『犠牲（サクリファイス）』を読み、その中に紹介されるタルコフスキー監督の映画『サクリファイス』の視聴等も交えて、特に自死した主人公・洋二郎君の精神世界について考察を加えた。レポート提出。	日本では脳死臓器移植について長らく議論が進まず、臓器移植法施行後も実施件数が極めて低い水準に留まっているのは何故なのかという点について、様々な角度から講義を行った。レポート提出。	町野朔・森岡正博両氏による臓器移植法改正をめぐる議論を紹介し、講義を行った。レポートでは、一年間の学習の結果、この議論に対して自分はどういう立場を取るかを明らかにさせた。
二〇〇三	一五	上記『犠牲（サクリファイス）』を読み、その中に紹介されるタルコフスキー監督の映画『サクリファイス』の視聴等も交えて、特に自死した主人公・洋二郎君の精神世界について考察を加えた。レポート提出。	上記『犠牲（サクリファイス）』において言及されるフロイトの精神分析学やドーキンス『利己的な遺伝子』を紹介し、とりわけ後者について、そこに表明されている学説が、今日、もはやそれを抜きにして倫理を語る事が困難であると思われるほど、人間にとつて重大な問題をはらむものであるという坂井の考えを述べた。レポートでは、そのことを踏まえた上で、あらためて、人間が人間であることの意味を問うた。	日本では脳死臓器移植について長らく議論が進まず、臓器移植法施行後も実施件数が極めて低い水準に留まっているのは何故なのかという点について、様々な角度から講義を行った。更に、この年の十二月に自民党の脳死・生命倫理及び臓器移植調査会が、脳死になつた子どもの臓器提供を認める法案を次期通常国会に提出することに決めたという報道を受けて、その法案の是非も含めてレポートを課した。
二〇〇四	一六	上記『犠牲（サクリファイス）』を読み、その中に紹介されるタルコフスキー監督の映画『サクリファイス』の視聴等も交えて、特に自死した主人公・洋二郎君の精神世界について考察を加えた。レポート提出。	上記『利己的な遺伝子』に関連する書物の中で坂井が特に深い感銘を受けたA・ブラウン『ダーウィン・ウォーズ 遺伝子はいかにして利己的な神となったか』青土社』の第一章、第二章を読み、他の関連図書も交えながら考察を加えた。レポートでは、それらの書物の内容理解度を問うと同時に、それらの読書体験を踏まえた上で、あらためて、「人間の将来」について考えさせた。	日本では脳死臓器移植について長らく議論が進まず、臓器移植法施行後も実施件数が極めて低い水準に留まっているのは何故なのかという点について、様々な角度から講義を行った。レポートでは、町野朔・森岡正博両氏による臓器移植法改正をめぐる討論記録を読ませ、一年間の学習の結果、この議論に対して自分はどういう立場を取るかを明らかにさせた。
二〇〇五	一七	二〇〇四年度に同じ		

二〇〇六	一八	<p>上記『犠牲（サクリファイス）』を読み、その中に紹介されるタルコフスキー監督の映画『サクリファイス』の視聴等も交えて、特に自死した主人公・洋二郎君の精神世界について考察を加えた。レポート提出。</p>	<p>一学期の考察の発展として、自己犠牲を極致とする利他の精神について、そのような精神が発動される源は何なのか、という問題を扱った。具体的にはこの問題についての①キリスト教におけるとらえ方②カント哲学におけるとらえ方③フロイトの精神分析的とらえ方④いわゆる社会生物学方面からのとらえ方を紹介し考察を加えた。レポートでは①③についてまとめさせた。</p>	<p>町野朔・森岡正博両氏による臓器移植法改正をめぐる議論を紹介し、講義を行った。レポートでは、或る仏教者が、日本の仏教者達の生命倫理問題に対する姿勢を批判した講演記録を読ませ、その批判内容と、日本における脳死臓器移植実施件数の低迷がどの程度関係しているかを考えさせた。</p>
------	----	--	--	---

## 政治経済

開校後九三年度までは政治経済分野の必修科目として「現代社会a」が一年生に配当されていた。「政治経済」は、これに代わって九五年度から三年生に配当され、〇四年度以降は二年生に配当されている。

学院生のほぼ半数は社会科学系の学部・学科に進学する。学院での学習を各学部の専門へと接続するためには、消費者・生活者としての視点しか持たず社会の動向にもつぱら受動的な生徒たちの意識を、能動的な問題発見・解決者の態度へと転換させることが求められる。

そのためには、憲法・市場・政治制度・企業経営の基本事項を静態的に理解させるだけの授業内容では不十分である。現在「政治経済」では、市場のメカニズム、人権概念の意義と課題、政治過程における利害の錯綜など、問題の構図を読み解く思考法の基礎をあたえた後、重要なカレント・トピックに社会科学系諸学がどうアプローチするか

を紹介する構成をとっている（〇七年度は、地球環境、財政再建、司法制度改革、グローバル化、平和構築、若年労働の六トピック）。

また、問題を独自に見出し、その関心を他者と共有し、問題解決型の思考をもって分析・考察にあたる取り組みとして、任意テーマによるレポートの執筆・発表学習を続けている。〇七年度は、この学習を情報科との協働による科目「総合学習B 論文リテラシー」（二年生配当）で展開している。

二年生での以上の学習を基礎に、三年生では選択科目で学部・学科への接続をより意識した調査・発表主体の授業を行なっている。政治経済分野の選択科目群は、生徒のニーズに応えるかたちで〇三年度以降順次改編され、〇七年度は「経営学入門」二講座、「政治学入門」「経済演習」「法学基礎演習」「国際関係論入門」「現代社会論」各一講座で構成されている。なお卒業論文では、例年学年の二割にあたる約五〇名が政治経済分野のテーマ・教員を選択している。選択科目の拡充は、学部選択指導に加えて、卒論指導の充実にも資するところが大きい。

ここ数年は、各種の訪問・見学企画が定着し参加者も増加するなど、教室を越えて社会に学ぶ授業外の活動も活発である。学外のコンテスト・交流企画への参加も目立っており、受賞の実績も備わってきた。

学院生が将来その最前線に立つてであろう現代世界の諸問題に目を見開くとともに、問題解決のツールとなる各学問分野の関心・発想を基礎から吸収することは、学部選択からキャリア形成へといたる展望の一端をつかむうえでも一助となる。多くの大学生の進路設定は、依然として学部三年時の単なる「業界選び」に終始している。高大一貫教育の場であればこそ、学院の政治経済教育では、将来の自己像を喚起させ進路設定の起点となるような実践を今後も追求したい。

「現代社会Ⅱ」「政治経済」の科目担当者は、以下の通り。(着任順、カッコ内は担当年度および担当選択科目名)。笹川古日(八二―〇〇、「経済」「政治」、花嶋聡(八四)、田中敬文(八五―九〇)、宮田道昭(九一―九六、「現代アジア研究」、須藤和夫(九七―九九)、鈴木隆弘(九九―〇二)、坂本慎吾(九九)、古賀毅(〇〇―、「現代社会論」ほか)、久米光弘(〇〇―〇二)、上田太郎(〇二―、「政治学入門」「経済演習」「国際関係論入門」ほか)、菅原大助(〇三―〇四)、渡邊真(〇四、「法学基礎演習」、金亮完(〇五―〇六、「法学基礎演習」、海老原崇(〇四―〇六、「経営学入門」、杉本和士(〇六、「法学基礎演習」、岩間宏博(〇七―、「経営学入門」、宮坂渉(〇七―、「法学基礎演習」)。

(上田太郎)

## 保健体育科

本庄高等学院が開校して四半世紀が経過した。一九八二年は「上越新幹線大宮新潟間の開通」「夏の甲子園で徳島池田高校初優勝」「ホテルニュージャパン火災」などが話題となった年だそうである。時の流れは誠に速いものである。

草創期に不十分な施設のままに体育の授業が始まったのであるが、準備段階から携わった方々の並々ならぬご苦労のおかげで今があることに思いを馳せ感謝しなければならない。その頃の授業場所の確保や授業方法の工夫、エピソードなどは十周年記念誌に記されているのでここでは触れないが、その後も依然として一角が未買収地のまま使用していたAグラウンド(陸上、ラグビー、サッカー)、Bグラウンド(野球)、テニスコートで授業や部活動が展開されていた。卒業生の方はAグラとかBグラなどの略称のほうがなつかしい響きがあるのだろうか。間もなく、駐輪場にむかう道路を隔てて南側に部室棟が完成した。主たる活動場所が屋外である各部の部室、体育用具置場、ミーティングルーム、教員室などの機能を備えた二階建ての建物である。テラスからAグラウンドが一望できる部室棟はなかなかのものであったと思うが、現在にはリサーチパーク構想によって大きな建造物が建ち並び、海外からの留学生も交じえて大学院の授業が繰り広げられているという国際的な研究拠点へと変化してきている。時代の流れや要求によって変化は致し方ないことと理解できても、大久保山の古くからの住人

にとつて、景色が変わってしまったのは一抹の寂しさも感じるのではないだろうか。

体育関連では二〇〇一年の南側大学グラウンドへの施設全面移転が大きな出来事だった。大雨増水時の調整池も兼ねているとことだが十分な広さの野球場、四〇〇Mトラックを有し、各種フィールド種目の設備も整った陸上競技場（当初はラグビー、サッカーとの共同使用だったが、その後サッカーはグラウンド西隣りに移った）。そして新たに部室棟（一階は部室、トレーニング場、シャワー、二階は部室、教員室、ミーティングルームを兼ねた教室）も完成し、現在に至っている。

以上のように屋外運動施設の充実に比べて屋内施設は従来そのままであり、体育館では授業のみならず部活動においても多くの生徒が隣に気にしながらの練習状況が日常的になっている。共学のスタートによつて今後学院がどのように変わっていくのか、また考えていかななくてはいけないのか。他教科ではあまり問題とならないことが体育の授業や体育的行事においては大きなテーマとなることが多い。

学院の教育環境をより豊かなものにするために新校舎建設の計画があるが、現状を踏まえてさらなる学院活性化のためにも体育施設（特に屋内施設）の充実が急務であろう。

（伊藤一雅）

## 芸術科

### 美術

一九九一年度～二〇〇三年度

一年生授業内容

一・二学年とも週二時間授業

生徒全員にスケッチブック（F六六）、鉛筆（二H・H・F・HB・B・二B）、カッター、練り消しゴム、消しゴムを購入させる（その他の教材は実験実習費で購入）

一学期

○校地内大久保山の鉛筆による風景写生

写生用椅子、蚊取り線香を使用

二学期

○各自自分の手を見て鉛筆による写生

一八×二三センチ大（銅板の大きさ）にスケッチブックの

画用紙を区切り描く

三学期

○二学期で描いた手のデッサンを元に銅板画（一八×二三大

厚さ〇・五ミリ）の作成

ドライポイントのためのニードル、印刷は版画用プレダン

紙、凹版用黒インクを使用

## 二年生授業内容

### 一学期

○校地内大久保山の水彩による風景写生

不透明水彩絵の具一二色、筆（大・中・小）、パレット、バ

ケツ、写生用椅子香取り線香を使用

### 二学期

○平面構成によるデザイン

各自ケント紙四枚を使用する 描画材料は自由だが実験実

習費でポスターカラーのみ購入

### 三学期

○陶芸（春休みに穴窯を使い薪による焼き締め焼成 三日間

計七十二時間以上の焼成 作品は三年時に渡す）

器に限らず自由制作（お面や陶板、置物など）

陶土は信楽陶土を用い手回しろくろ・ヘラ・コテなどを使

い成形する

## 二〇〇四年度

新カリキュラム移行年度のため一年生のみ授業となる

## 一年生授業内容

前年度までと同じ

## 二〇〇五年度

全学年新カリキュラムとなり現在に至る

## 一年生授業内容

前年度までと同じ

## 三年生授業内容

### 一学期

○校地内大久保山の水彩による風景写生（二〇〇三年度まで

と同様）

### 二学期

○平面構成によるデザイン

時間数が少ないために各自使用するケント紙は三枚とする

（その他は二〇〇三年度までと同様）

○陶芸 時間数が少ないため湯飲みやマグカップなどの小物

を作る（冬休みに穴窯を使い薪による焼き締め焼成 作品

は三学期に渡す）

### 三学期

○授業時間数が二時間または四時間と少ないので二学期の続

きを行う

（吉田茂樹）

## 音楽

一九八二年の開校時は音楽室も芸術科の教員室もできておらず、現在の社会科教員室に社会科二人、保健体育科二人、芸術科二人の六人が机を並べて半年を過ごした。その年の後期から（当時は二期制）芸術棟ができ、音楽室もできたので、それぞれの教科教員室に移ったが、

最初の年で、初めて出会う人ばかりであったのでそれぞれの専門の話や、出身地の話などそれはそれで楽しい時間を過ごすことができた。

音楽室ができるまでの半年はC—一〇四教室にアップライトのピアノを置き、二時間続きの授業を行った。一期生は現在のように音楽クラス、美術クラスとは分けてなかったからである。二期生以降は現在に至るまで美術クラス、音楽クラスに分かれたので、音楽では二時間続きの授業はやっていない。一期生が三年生になったときは選択科目で「作曲」を開講し、九名の生徒が受講した。自分で「詞」を書き、作曲しようということで、二年間開講した。ただ個人のレベルに開きがありすぎ、ついつい個人レッスンのようなことになってしまったので現在は開講していない。

一九八九年には中村が国内研修で一年間「オペラ」で全国を回っていたので、その間フルトがご専門の田島裕子さんに講師として来て頂いた。田島先生には授業のほかにもブラスバンドの指導も熱心に指導していただいた。

一九九一年から二年間は、中村が教務の仕事をするようになったため、音楽専門で「こんにやく座」元代表の小城登さんに一年生の授業を担当していただいた。たいへんおらかな性格の方で、生徒にもずいぶん慕われていた。

一九九四年に、カリキュラムの改訂があり、家庭科が必修となり、共通教室棟を使用することになったので、音楽科も以前から狭さを感じていた芸術棟の音楽室（現在は情報室）から現在の共通教室棟に移動した。

二〇〇三年に、カリキュラム改定で芸術はそれまでの、一年、二年と連続して受講するのではなく、一年生と三年生で授業を行うことになった。一年間という間をおいて行う三年生の授業は生徒たちにとって、音楽（の授業）とは何かということ、一年間の変化、成長ぶりを改めて問う、素敵な機会となっているように思う。

音楽の授業は最初の頃こそ、試行錯誤のようなときもあったが、現在では一年、三年共に呼吸法、発声練習、斉唱、合唱、鑑賞といったことが中心に展開されている。一年生ではそれに、加えて「誰でもできる作曲」というタイトルをつけた作曲の楽しさを味わう時間も設けている。

各学期の評価は開校以来ずっと「演奏試験」か「歌の試験」を実施している。大教室のステージの上で、クラス皆の前で自分の得意なもの、やりたいことをできるだけ範囲を限定せずに行うものである。特に「演奏試験」ではピアノやギター、管楽器、歌などオーソドックスな内容のものを演奏するのももちろん、作詞作曲、演劇、舞踊、掛け声、叫び、ジャンルわけの難しい怪しげなパフォーマンス、最近では「エアーギター」や「エアーボーカル」と名づけた、音楽を流しながら（時には音楽も流さず）要するに、その気になって展開されるパントマイムなどもとびだし始めた。中には全くピアノを触ったこともなかった生徒が友達の弾くピアノに触発されて思い立ち、一年間でシヨパンの「幻想即興曲」を弾いてしまったりする生徒もたくさん出てきている。演奏試験では毎回たくさんの方の天才たちに出会えることができる。

（中村 忍）

## 家庭科

### 一 講座体系の変遷

日本の家庭科教育は、一九九四年度から男女必修科目となった。過去の家庭科は、女子のみで、家庭のこと、調理や被服製作、育児にその中心があった。しかし多様な生き方が認められつつある社会において、家庭科に求められることは、大きく変わってきた。一九九四年度から、男女が共に学ぶ科目となり、生活文化の伝承・生活技術習得を旨指すと同時に、「人」と「社会」「自然」との関わりについて問題意識を持ち解決してゆくこと、そして一人ひとりが主体的に自分の生き方を模索してゆく事が、大きな課題となった。

本院の講座体系は、一九九四年度の新カリキュラムスタート時に、一学年で「家庭一般」二単位、三学年で「生活一般」二単位が設置された(一九九四年度入学生から適用)。一九九九年度からは、三学年の「生活一般」が「家庭一般」に変更され、一学年次と合わせ、「家庭一般」が合計四単位となった。その後、カリキュラム改定により、二〇〇三年度からは、一学年の「家庭基礎」二単位のみとなり、現在に至る。

### 二 学習目標

家庭科は、生活を科学する総合的な教科である。生命と生活の再生座に関わる営みとしく、みを学習し、「健康で文化的な生活」と「個人の尊厳と両性の平等、相互協力」を実質的に保障することをめざして、実現する力を身につける教科である。

生徒は、未来に、社会で仕事に関わる時、生活者の実状、実態を把握していなければ、それぞれの専門分野で活躍できない。日常生活においても、生きる営みと無縁では、人間らしい真の豊かさは得られない。中学で学んだ技術・家庭科を深め、他教科で学んできたことを整理し、すべて踏まえて、それらを統合し、人間らしい生き方を考える機会を持つ。そして、自然と人と関わり合って地球上に生きる生活者として、自分が生きている世界は、どんな仕組みになっていて、どんな課題が存在して、人々はそれにどう向き合い、どうやって命を輝かせようとしているのか学ぶ。人生には、どんな希望があるのか、生徒たちが共に探し、共に見つけ、卒業後の自らの進むべき道を確かなものとすることを目標としている。

(柵橋知之)

## 情報科

### —本庄学院の情報教育—

本庄学院の情報科は、二〇〇三年度から開始された新指導要領に新教科として「情報科」が盛り込まれたことにより発足した。しかし、本庄学院の中で情報教育「らしき」ものは一期生から行われてきていた。現在に至る間、紆余曲折はあったとはいえ、開校当初は NEC の PC8001 や富士通の FM8 といった 8bit 機が出始めたばかりのころであり、当時の先生方がコンピュータに関する教育の必要性を考えていたということは、高校としては卓見だったと考えている。

私は、一期生が三年になった年に数学の非常勤として採用された。数学の授業も行っていたが、学院側から要請され、三年選択科目として「BASIC 入門」という、プログラミング言語 BASIC を用いて様々なプログラムを作る講座を持っていた。当時の PC 室（現 B 一〇二教室）には PC 8001 が一〇台、FM8 が一〇台置かれ、記録メディアはカセットテープであった（現代の生徒諸君には想像もつかないでしょう？）四十人教室で二十台しかなかったのは当時マシンが高価だったためと理解できるが、何故機種を統一しなかったのか不思議でならなかった記憶がある。当時はマシンによって BASIC が異なっていたため、教材として二通りのソースを用意しなくてはならず、大変面倒な思いをしていた。

私は三年非常勤をした後、数学科専任として就職した。その頃、寄

付を受け IBM の 8bit 機四十台の時代を二年経た後、しばらくコンピュータ関連の選択科目は実施しなかった。その辺りには、既に PC も PC9801 などの 16bit 機が主流になっていた。マシンの性能も上がり、OS も DOS や Windows3.1 が始め、その上で Multiplan や 一太郎などのソフトが動かせるようになってくると、「ソフトも作るよりも使う時代」と考え、プログラミングの授業の必要性を感じなくなったためである。Bio2 教室は普通授業用教室に転用し、利用された。

一九九四年からの新指導要領では「高校男子家庭科必修」が盛り込まれた。Internet 技術が普及し始めた頃であり、今後の本庄学院教育で必要になるだろうと判断し、家庭科室と一緒に PC 室の設置を要請した。学院校舎では手狭なため共通教室棟に家庭科関連教室を設置することとし、同時に音楽科もそちらへ移動し、旧音楽室を PC 室へ転用することとなった。当初設置されたマシンはそれ以前教育学部 PC 室で使っていたお下がりであった。が、当時回線が一二八Kしかなかったとはいえ、Internet に接続され、また Office もインストールされており、BASIC を教えていた当時を考えると隔世の感であった。数学の授業で Mathematica や Excel を用いて二項分布→正規分布、e（ネイピアの数 e）への収束、極形式による曲線、パラメータ表示による曲線などの数学現象をシミュレーションさせるなどという展開も可能になった。当時は教員の Internet 用環境もまだまだで、B 一〇二教室に Photostop がインストールされた教員用 PC とスキャナーが十台ほどおかれていた。一年後、県の補助金を得、新しい生徒用 PC が設置された。



二〇〇三年の指導要領では情報化社会をにらんで新教科「情報」と「総合的な学習の時間」が設置されることとなった。情報の授業二単位および選択科目を行うには一つのPC室では無理なため、改めてB一〇二教室をPC室へ転用することとなった。当時、情報科は全く新しい教科であったため担当教員にも授業展開のイメージがなく、「情報科では何をどう教えるのか？」という内容をテーマとしたシンポジウムがいたるところで開催されていた。本庄学院では前述のような歴史があり、同時に早稲田大学や高等学院の情報関連の先生と情報交換できる機会も多かったので、あまり「うろたえる」必要はなかった。以下に、現在行っている情報関連授業の内容を簡単に紹介する。

一年次：レポート・論文リテラシー（アカデミックリテラシー）の基礎（Officeの使用、プレゼンテーション技術、情報発信技術の基本、データ処理の基本）

二年次：情報発信技術の発展（Web技術、JavaScript・HTML）、コンテンツは政経とのコラボレーション授業「総合学習・論文リテラシー」から）

三年次：選択科目「情報と文化」（メディアリテラシー）、選択科目「情報と映像」（Illustrator、Photoshop、Flash）、選択科目「情報サイエンス」（プログラミング）

高校の情報科が他教科と異なる最大の点は、「自前のコンテンツを持たない、あるいは乏しい」という点にある。他教科や特別活動で培ったコンテンツを「いかに効果的に発信するか」という点に情報科の役割はある。一方で、本庄学院には大きな目玉として「卒業論文」があ

る。また、近年Wordでレポートを作る、Excelでデータ分析を求める授業も多い。そのような状況に鑑み、本庄学院の情報科の軸は「論文リテラシーと情報表現」に置こうと考えたわけである。この方向は間違っておらず、生徒たちの様々なレベルの情報発信において寄与しているのではないかと自負している。

最後に、本庄学院のWebページについて一言書きたい。本庄学院Webページは、私が教務副主任をしていた一九九五年に開設した。当時は、まだ高校でWebサイトを持つていたところは少ない時代であったが、少子化の中受験生も減っており、本庄学院教育の魅力を様々なレベルで社会アピールしていく努力をした方がいいのではないかと考えたからである。某「学校HPコンクール」で佳作を得ることもできた。その後、杜エクスプレスなどの父母会のページ、生徒が作った部活のページなども増えコンテンツも充実してきた。Flashなど華やかな技術は使っていないが、コンテンツの充実度では日本有数だと考えている。

（半田 亨）

### (3) 各種行事

#### 一 体育行事

現在、体育行事としておこなわれているのは体育祭、球技大会、マラソン大会である。体育祭は一九八八年より六月に実施されるようになった(それまでは、おもに十月実施)。この時期、梅雨入り予報を気にしながらの体育祭であり、年によっては終了間際の天候急変のためプログラムを消化できないまま閉会となったこともあった。毎年先輩達が残した記録を目標に熱い挑戦がみられるが、次にこれまでの学院

表1 陸上競技記録会最高記録

100m	11秒11	1991年	3年	磯部	彰宏
200m	22秒93	2004年	3年	羽鳥	文久
400m	52秒21	2003年	2年	羽鳥	文久
1500m	4分15秒52	2004年	3年	藤原	拓浩
80mH	11秒20	1990年	1年	松本	雅人
走幅跳	6 m50cm	2005年	2年	早野	知弘
走高跳	1 m86cm	2002年	3年	細矢	晃徳
砲丸投	12m79cm	2006年	2年	小林	

記録(個人種目)を表1に挙げておく。

体育祭と入れ替わる形で秋の行事となった球技大会は三学年でおこなわれていたが、一九九七年より修学旅行中に一、二学年のみで実施されるようになった。種目はサッカー、ソフトボール、バレーボールであるが、女子の入学によって今年は球技大会も様変わりするものと思われる。

最も新しい体育行事はマラソン大会である。「持久走を通して走運動に関心をもたせ、自らの体力作りへの意欲を

喚起する。目標に向けて努力し、体力の限界に挑戦することを体験させる」というねらいのもとにおこなわれ、

今年は一十回目を迎えることになる。大久保山を巡り、児玉方面まで足を伸ばす約10kmのコースをゴールとなる陸上グラウンド目指してひたすら走る。二期も終わろうとしている初冬の一日、生徒はゴール後に受けとるスポーツドリンクの味とともに全力を出し切ったそう快感を味わうことになる。第十回(二〇〇六年)の上位記録を表2示し、生徒の健闘を称えたい。

(伊藤一雅)

表2 第10回マラソン大会上位入賞者

陸上部シード選手

一般の部

順位	学年・組	氏名	記録	順位	学年・組	氏名	記録	部活
1	2年C組	福島 翔太	35分17秒	1	2年C組	佐野 直音	36分51秒	野球
2	2年F組	高山 良介	35分36秒	2	1年D組	小田 大貴	37分13秒	サッカー
3	2年A組	澤井 健	35分45秒	3	2年C組	藤野 友貴	38分35秒	サッカー
4	1年A組	渡辺 翔太	35分51秒	4	2年F組	千葉 友貴	38分54秒	硬式テニス
5	1年A組	高橋 幸大	36分09秒	5	1年D組	武藤 恵太	39分04秒	サッカー
6	3年C組	町田 知宏	36分26秒	6	1年C組	田中 大夢	39分59秒	サッカー
7	1年D組	八幡 聖	36分48秒	7	3年C組	大沢 薫	40分02秒	バスケットボール
8	1年B組	杉山 翔一	37分47秒	8	2年D組	仲間 一茂	40分16秒	野球
9	2年E組	薙澤 光作	38分44秒	9	2年C組	高畠 涼	40分53秒	野球
10	1年E組	佐藤 勇輔	39分30秒	10	1年F組	西須 大祐	41分05秒	野球

## 二 芸術鑑賞教室

学校には通常の教科授業の外に学校全体で取り組むさまざまな行事がある。体育祭しかり、文化祭しかり、修学旅行、遠足しかりで、これら学校行事はその学校の教育的特色をある意味雄弁に物語るものである。そうした学校行事の中にあつて、その学校の文化レベルをはかるものに芸術鑑賞教室がある。本庄高等学院の二十五年間における芸術鑑賞教室はどのような推移をたどったのか。二十五年間を三つの時期に分けて簡単に振り返ってみることにしたい。

まず、揺籃期とも言うべき第一期は一九八四年から一九九〇年までの時期である。本庄高等学院が芸術鑑賞教室を初めて行ったのは、開校二年後の一九八四年である。この年は全学年が揃ったいわゆる完成年度の年で、六月十三日に一九七九年度のアカデミー賞受賞作品である映画『クレイマー・クレイマー』を鑑賞した。当時の資料によれば芸術鑑賞教室ではなく「映画会」とされている。その後こうした行事を行うこともなく、数年が経過したが、一九八七年十月十五日に劇団「顔」による『ナポレオン』が本庄市民文化会館にて上演された。これが、企画会社に依頼し、「プロ」の演者による上演作品を鑑賞した本庄高等学院初の芸術鑑賞教室であり、当時は「鑑賞会」と呼ばれた。翌一九八八年十月二十日には俳優小劇場による『椎の木の暦』が上演され、二年ほど演劇鑑賞が続いたが、一九八九年には映画『エデンの東』、一九九〇年十月十七日には映画『奥の細道』、『暴力の街』をそれ

ぞれ上映し、再び映画鑑賞となった。

この第一期の芸術鑑賞教室は実施した年もあれば、行わなかった年もあるというように不定期で、かつ映画と演劇鑑賞が混交して行われたことを特色とする。続く第二期において映画鑑賞は主として人権教育の中で行われるようになったので、映画鑑賞を芸術鑑賞教室とするのはこの期の特色でもある。また、第二期に一般的となる劇団による演劇鑑賞教室もこの期に行われている。劇団による演劇教室は費用の点から言っても、映画上映よりも高くつくが、「生」の上演作品を鑑賞するという点では比較にならない感動を与えるものである。従つて、この第一期の演劇鑑賞は本格的な芸術鑑賞教室の始まりともいうことができよう。

ただし、第一期の芸術鑑賞教室は行われた時期がほとんど十月であるということにも留意する必要がある。実はこの十月という時期は三年生の修学旅行の期間中にあたつており、従つて、この期の芸術鑑賞教室は三年生はほとんど参加できず、一・二年のみの鑑賞という、全学上げての芸術鑑賞教室とはなっていないのである。これも第一期の特色である。

第二期は一九九一年から一九九九年までである。この期は芸術鑑賞教室を全校生徒を対象とした学校行事と位置づけ、授業のない水曜日の午後を使って行われるようになった。時期も、一学期の期末試験が終了し、夏休みに入る前になるとなく、今学期も終わりという雰囲気の中で行われるようになった。

第二期の芸術鑑賞教室の上演作品を掲げると、オペラ『セロ弾きの

『ゴシユ』（一九九一年）、演劇『阿Q正伝』（一九九二年）、演劇『ベツカンコ鬼』（一九九三年）、演劇『コーカサスの白墨の輪』（一九九四年）、演劇『センボ・スギハアラ』（一九九五年）、演劇『国語元年』（一九九六年）、演劇『トッピングミスターじじい』（一九九七年）、音楽『ラテン音楽をきく』（一九九八年）、演劇『夏の世の夢』（一九九九年）であり、中にはオペラ、音楽の鑑賞もあるが、ほとんどが演劇鑑賞であった。

この第二期の特色は先にも述べたように、全学年参加の学校行事と位置づけられ、本格的な芸術鑑賞教室が軌道に乗った時期といえよう。したがって、この時期を芸術鑑賞教室の定着期と呼んでもよいかもしれない。

第三期は、二〇〇〇年から二〇〇七年までである。この期は芸術鑑賞教室に対してそれなりの学院としての動機付けを行い、学院の文化を構築するために工夫がなされた時期である。

その嚆矢は、二〇〇〇年に東京早稲田の大隈講堂で行われた早稲田大学の学生楽団である「早稲田大学交響楽団」による演奏会である。

これは三年生の修学旅行期間中に行われたものであるが、世界的に評価を受けている楽団で、同じ早稲田の仲間ということでそれほどの経費も掛からず、引き受けていただいた。生徒は入学式以来の大隈講堂で音楽鑑賞会を持ったのである。二〇〇二年のトリックスター社による『THE NEWSPAPER』も、演劇一辺倒であった従来の趣向とは違っていた。トリックスター社は政治問題をコント仕立てに演じるのを得意とし、特に憲法学者で著名な早稲田大学法学部教授水島朝穂氏

の脚本をコントにしたこともあり、水島氏を知る教員より推薦を受けて依頼したという経緯がある。学院側は当初水島氏の「日本国憲法」のコントを希望したが、著作権などの問題もあり、トリックスター社の時事コント『THE NEWSPAPER』に決まった。小泉純一郎、田中真紀子などをもじった政治コント、学院の教員を風刺するコントなどもあり、奥が深くないという批判も聞かれたが、学院生には結構受けられた。また、翌年の二〇〇三年に行われた音楽『アコーディオンとその仲間たち』は企画会社ではなく、本校出身者のアコーディオン奏者である田ノ岡三郎氏に直接依頼したもので、田ノ岡氏の仲間である中国の弦楽器二胡、アフリカの打楽器ジャンベ奏者らの協力を得て行われ、手作りの音楽祭という印象を持つことができた。二〇〇四年は青年劇場による演劇『ケプラーあこがれの星海航路』の観劇であった。この演題は、本庄学院が二〇〇二年にスーパーサイエンスハイスクールに指定されてから数年たち、SSH事業が展開していく中、科学をテーマにした演劇もいいのではないかとということで、催されたものである。こうして、芸術鑑賞教室に学院の意図が少しづつ加わるようになってきた。そしてその「最大」のものが二〇〇五年の芸術鑑賞教室であろう。二〇〇四年に入学した生徒の保護者に国立劇場に勤める斉藤讓一氏がいた。斉藤氏は父母の会の文化部会に入られており、斉藤氏に本庄高等学院の演劇鑑賞教室の話をしたところ、狂言師野村万作氏を紹介された。若いころ演劇をやっていた斉藤氏は演劇関係者と親しく、野村家とは昵懇の間柄であった。万作氏だけでなくその御子息の萬斎氏をも子供のころから良く知っていた。そういう縁もあり、野村万作

氏に芸術鑑賞教室の話をしたところ、万作氏が早稲田大学の卒業生でもあり、是非後輩に当る早稲田の高等学院生に話がしたい、ということとで、とんとん拍子に話が進み、その年の七月に「野村万作の狂言教室」を行うということになった。しかし、スケジュールが急遽つかなくなり、秋に延ばさざるを得なくなった。それならばということ、万作氏だけでなく、テレビで役者としても活躍している萬齋氏をもお呼びして、野村万作・萬齋父子による狂言教室を行ってはということになり、齊藤氏に再度ご尽力いただき、それが実現したという次第である。これには、本庄キャンパスで授業を行っている大学院国際情報通信研究科教授で映画監督の安藤紘平氏の指導による実習授業として映像記録も行われ、保護者、依託ホームのホスト氏も観劇するなど、その日、学院には一種独特な雰囲気漂っていた。

演目は「萩大名」、「六地藏」で、公演に先立ち萬齋氏の狂言解説があった。初め、いかに保護者の知り合いだからとはいえ、著名な狂言師をお呼びして、公演して頂いても、本庄学院生に狂言の「せりふ」が理解できるのか、観衆としてのマナーがきちんとできるのかなど、古典芸能ということもあり、多少の不安があったのも事実である。しかし、そこは学院生、「せりふ」もよく理解し、笑うべきところでは大爆笑も起こるなど、古典芸能を鑑賞する力は見事であった。

早稲田の先輩である万作氏は公演後に挨拶にたち、狂言は庶民の視点で作られ、それを大切にしてきた、早稲田の建学の精神に通ずるものがある、早稲田人たる者は「上に詔わず、下を蔑まず」生きなくてはならないという話を、後輩である学院生に贈られた。

この二〇〇五年度の芸術鑑賞教室は本庄学院の芸術鑑賞教室が「なかなかのものである」ということを証明することとなった。生徒たちも古典芸能に関心を持ったに違いない（詳しくは吉田茂「この辺りの者でござる―万作・萬齋狂言の会報告―」早稲田大学本庄高等学院通信「かぜ 緑風」No.一八を参照）。

二〇〇六年度は前年の余韻もあり、大きく趣向を変えようということとで、音楽教員の仲間にお願ひしてこんにやく座によるオペラ『注文の多い料理店』を上演した。こんにやく座のオペラは一九九一年の『セロ弾きのゴーシュ』以来で、実に一五年振りである。二〇〇七年度は共学元年にあたり、少しにぎやかということで、劇団ライブ・カムパニーによる、踊って歌ってのミュージカル『THE トーマス アイ♡ EDISON』を鑑賞する。小学生時代に「問題児」とされたエジソンが母親の理解と愛情により、大天才といわれ、次々と電気機器を發明してゆくという話を踊りと歌で構成したものである。エジソンを取り上げたのは本学のSSHを意識したためである。

以上、二十五年に及ぶ芸術鑑賞教室の変遷を見てきたが、これだけの歴史があり、本庄高等学院の芸術鑑賞教室はやはり「並」ではないと感じた次第である。なお、野村万作氏は二〇〇七年、人間国宝に指定された。

(佐々木幹雄)

## (4) 卒業論文

卒業論文は本学の教育方針の一つである自学・自習の具現である。

本庄高等学院では一九八二年に入学した一期生以来、学部進学にあたっては一貫して卒業論文の作成を義務づけてきた。学部進学にあたり入試を経ないという仕組みの中にあつて、受験で学部に入學した学生との違いを受験のテクニクではなく、学問の府である学部に進み、研究するための基礎ともいえる「問題・テーマの発見」とその「解決方法」を学ばせるという考えのもとに行なつてきた。卒業に必要な単位数に組み込まれることはないが、未提出者は学部進学への推薦権を失うこととし、学部進学と強く結びつけてきた。これまで、提出された卒業論は約五五〇〇本にもほぼる。その一本、一本が生徒一人ひとりの学部進学への想いである。

開校当時、他の学校においては「自由研究」と題する高校生の研究論文などを課すところは多く、「卒業論文」と銘をうち、課している学校は極めて少なく、当時は世間的にも相当に注目を浴びた。やや背伸びした感のある「卒業論文」という名称をあえて使つたのは、本学院の目指す教育が「並」のものではないという意気込みを示したからである。しかし、そうした学校側の意気込みとは裏腹に、生徒たちの取り組み方、受け取り方はまちまちで、戸惑いを見せた生徒も多くいた。教員の期待と生徒の対応の相克のなかで、評価の重み、指導のあり方

などについてこの二十五年間にいくつかわつた変遷を見せた。ここでは、本庄高等学院の二十五年間におよぶ「卒業論文」について簡単に振り返ることにしたい。

### 一 一期生の卒業論文

卒業論については学院設立前に継起的に組織された全学的規模の委員会で議論され、その必要性が答申に盛りられるということは無かつた。ただし、教育課程の外に「特論」いう形で、より専門性の高い講義を生徒に受けさせるということが議論されたことはあつた。しかし、それは古典文学などの分野を意識したもので、高校レベルを超えた学問世界に触れさせるという点においては卒業論文につながる考えかもしれないが、専門性という点においてはむしろその後の本庄学院で展開した選択科目との関連の方が強い。その意味で、卒業論文が具体的に検討されたのは開校後のことである。そこで、本学院の卒業論文の歴史を振り返るために、スタートとなつた第一期生の「卒業論」に関する学院の取り組みから見てゆくことにする。

卒業論文についての概要が初めて議論に付されたのは、管見の限りでは、一期生が二年に進級した一九八三年六月の臨時教諭会である。「学部進学・学科決定基準について」と題した資料の中に「卒業論文」の項があり、目的、テーマ設定、テーマ・教員決定、テーマの登録、指導、論文の提出、枚数、評価、学部進学についてなど簡単なコメントが記されている。それによると、

目的は、学院における学習のまとめとして作成するものであつて、

自ら学び自ら考えるという本学院の教育方針の実現を目指す、テーマは、生徒が自主的に設定し、指導を希望する教員に学年末に申し出る、指導は、自発的学習指導ではあるが、論文をまとめるにあたって、関係教員の指導を受ける、ただし、そのための特定の時間は設けない、枚数は三十枚以上(四〇〇字詰原稿用紙)、評価は三段階(A・B・C)で評価する、学部進学は評価Aの生徒は、学部学科決定において、成績同点者のある場合に優先させる、評価Cの生徒は学部・学科決定において最下位とする、卒業論文を提出しない生徒の学部進学は認めないことがある、という内容であった。

卒論の規定が「学部進学・学科決定の基準」の中で語られていることは、繰り返し述べているように当初から卒論を学部進学と絡めて考えていたことを示している。この指針はその後の検討においても基本的に継承されていくこととなる。

一期生がいざ卒論に取り組むという段階になった一九八四年二月の教諭会において、より明確な規定が示された。それが、一九八四年度の「学院生活のしおり」に掲載され、初めてその概要を生徒が目にするようになったのである。今、それを転載する。

### 1 目的

本学院三年間の学習のまとめとして作成させる。「自ら学び、自ら問う」という本学院の教育方針の具体化のひとつであって、長文を書くことによって自分自身の考え方を確認させるとともに、学部進学への自覚を促すことを卒業論文作成の目的とする。

### 2 テーマ設定

本学院の卒業論文は学部の卒業論文のような学術論文であることを必ずしも求めているのではないが、たんなる作文に終わることなく、学問的、専門的であることが望ましい。したがって生徒が選択科目に関連したテーマを自主的に設定することを期待している。

#### 3 テーマ登録(省略)

#### 4 論文枚数の基準

和文 五〇枚(四〇〇字詰、学院指定のもの)

英文 二五枚(A4ダブルスペース)

#### 5 提出 五九年十二月十日(月)

#### 6 評価

論文という性格のため、評価はA、B、C、Fとする。この評価の基準はつぎの通りとする。

A 学術性が高く、高等学校生のレベルを抜いている。

学部・学科への積極的な意欲が評価できる。

本人の努力を高く評価できる

B 学術的ではあるが高等学校生のレベルである。

学部・学科への意欲が読み取れる。

本人の努力を評価できる。

C 学術的レベルが低い。

学部学科への意欲がやや低い。

本人の努力が認められない。

F 学術的レベルが極めて低い。

進学の意欲が認められない。  
本人の努力が全く認められない。

提出が著しく遅れている。  
提出しない。

こうした生徒向けの卒論作成要綱が出されたのである。この要綱を決めた八四年二月の教諭会では評価A・B・Cにつき、「Aを五〇点、Bを二〇点、Cを一〇点とする、評価A・Fについては進学への影響が大きいので、三学年の学年主任・組主任・教務で構成する評価審査委員会での審査をおこなう、評価Fの者の進学については評価審査委員会の意見を求めて、教諭会で決定する、教育課程への組み入れとしては、施行期間であるので、卒業論文が学部進学に対し、有意義であるとの評価が定まった時点で、一単位特別活動に組み入れることが考えられる」などのことがあわせて確認され、その年の四月からテーマ登録、指導教員の決定など実質的な作業が始まり、第一期生の「卒論」がスタートしたのである。

一九八四年六月の教諭会で「進学学部・学科の決定について」と題し、進学学部を決定する際の同点者の順位をどのように決めるかが議論された。その結果、「進学基準点が同点のときは、次の順に成績を比較し高点順に決定する」とし、「卒業論文成績↓三学年平均点↓三学年総点」の順が確認されたのである。ちなみに、進学学部決定の基準点とは、当初は一年次の学年平均点十二年次学年平均点×2+3年次学年平均点×3+卒論点ということであった。この方法で行なうと、基準点の満点は六五〇点となり、そのうち卒論は五〇点で、一割弱の

重みを持つことになる。つまり、進学における卒業論文の位置づけを高くしたのである。それだけ、卒論に対する教員の期待が大きかったといえる。果たして、一九八五年二月に第一期生の卒業論文の評価が出された。その内訳は二四五名に対し、A評価四四名(二八%)、B評価一九三名(七九%)、C評価八名(三%)、F評価〇名であった。

こうして始まった卒論であるが、基本的な仕組みはこのとき定められた形がその後も継承されていくこととなる。何しろ初めての試みであり、生徒がどのように取り組み、どの程度のレベルの内容に仕上げてくるのか、見えないところもあるので、とりあえずは、これでスタートすることにしたのである。しかし、評価方法、指導のあり方、提出方法、手書きかワードプロセッサ使用かでその後、いくつかの変遷を見ることになった。

まず、初めの見直しは、早くも翌一九八五年に出された。初年度はA・B・C・Fの四段階評価であったが、B評価を受けたものが全体の約八〇%と多く、その中には評価Aの五〇点ではないが、いきなりその下の二〇点まで下げるには惜しく、三〇点、四〇点を与えてもよい卒論もあるので、評価Bを細分する必要があるという意見である。そこで、評価Bを二つに分け⑧とBとし、評価Aについて七〇点、⑨は五〇点、Bは四〇点、Cは一〇点、Fは零点とし、各評価の基準についても、評価Aは「学術性」、「学部への意欲」、「努力」の三点が全て満たされる必要は無いが、「学術性」については、テーマ設定の趣旨が明瞭であること、資料収集の視点が明確に読み取れること、結論がテーマ設定の趣旨に対応していて、単なる感想ではないことの三点が



備わる必要がある、評価⑧は、評価Aに及ばないが、評価Bにするには惜しいというもの、評価Fは卒論への意欲が全く認められないもので、特にA、⑧については口頭試問を義務付けることが議論されたのである。評価Aが七〇点となったことは進学基準点の一割強を占めることになり、進学への影響がより一層大きくなった。果たして、こうして修正された基準により採点された二期生の卒論の評価はA評価三名（一三％）、⑧評価七四名（二九％）、B評価一三六名（五四％）、C評価九名（四％）、F評価無し、となり、評価⑧を設けたことの効果が確かめられたのである。

評価への議論はこの後もしばらく続くことになるが、⑧を+Bにする、+BをB+にするなど、若干迷走気味になることもあった。

## 二 卒業論文の動揺

とにかく、本庄高等学院の卒論がスタートした。果たして高校生に「卒論」が書けるのか、剽窃、盗作などを見抜けるのか、指導が徹底できるのか、評価がぶれないか、進学基準に対する比重は重くないかなど、年を経るごとに、多くの問題が指摘され出した。一九八七年十二月の教諭会では、「評価は従来どおり、ただし、評価基準に厳密に従うこと、評価Aは慎重であること、指導については担当個々の判断に委ねる」という「注意、警告」ともいえる内容のことが申し合わされた。その後の臨時教諭会では、一九八八年度からは全員に口頭試問を課すことが議論され、あわせて、評価担当は専門性を重視するので、予め生徒に教員が担当できる領域を示す必要があるなどのことが検討

された。これは一人で二〇人、三〇人もの卒論を指導する、専門以外の分野も引き受けるという現象に対し、担当・指導の適正数、評価の公平性などの問題点を解消しようとしたものである。しかし、なかなか、問題の解消とはならず、一九八九年一月の教諭会でなされた「卒業論文評価審査委員会報告」では、今後の課題として、「進学への比重が大きい、分野の幅が広すぎる、生徒の受け止め方、取り組み方がまちまちである、提出時期・評価点など、教科主任会で検討する必要がある」という提案がなされたのである。このように、年を経るに従い、様々な問題が噴出してきた。

一九九二年二月の教諭会に出された「卒論評価審査委員会」の意見には当時の混迷ぶりが現れており、当時の状況を振り返るためにも掲げることにする。

- ・ 専門外の評価は非常に困難である
- ・ 剽窃（盗用）引用、ダイジェストなど、見分けがむずかしく、短期間では調査もできないまま、評価しなければならぬというのでは、適正な評価は無理である。
- ・ 学術性の高い論文を求めること自体、現在の学院生の実態から見て無理である。過重な課題となっている。
- ・ 卒論には意義はあるが、作業過程を見るために中間的に、指導を加える必要がある。
- ・ どこまで自分で書いているのかわかりにくい。
- ・ 教えないこと、指導していないものを評価しなければならぬことの危険性があり、進学にも重大な影響を及ぼすことの二重の危

険。

・評価段階の幅を小さくする（一科目扱いとするとか、AとEの五段階で、点差を小さくする等）。

・「卒業論文」という名称も変えた方がよい。

・「自由研究」「卒業レポート」のようにして、枚数も削減、評価比重も小さくする。

・選択科目のなから、一つとって、卒業制作（レポート）としたらどうか。

・複数での評価を考える。

・卒論執筆で、やってはいけないこと、やらなければならぬことを徹底的に指導する必要がある。

・現在の評価基準（定義も含めて）を見直す。

・制度によって、不正ができないシステム、テーマ設定を考えるべきだ（自由研究、卒業レポート、ドキュメント、体験記など、生徒が行動し、自分で調査、観察等して書けるもの）。

などの意見が寄せられ、来年度に向けては

・途中経過の分かる中間的な指導を行なう必要がある。

・卒論デー、卒論週間をもうけて担当教員への中間報告を義務づける。

・不正行為を厳に戒める。

・現二年生のテーマ登録までに、種々検討して、注意し、指導していく。

・「進級・卒業・進学基準」の見直しのなかで、卒論の位置づけを、

可否も含めて、見直すのでは遅すぎる。

・早急に、来年度どうするべきか検討すべきである。

という、厳しい注文まで出されたのである。

スタートして、十年が経たないうちに、実に様々な問題が顕在化してきた。これら問題点はこのときに初めて指摘されたのではなく、当初から話題にはなっていたことである。

これら問題点を整理すると、果たして、高校生に学術性を持たせる「卒業論文」を課すことが可能なかどうかという「高校生」と「卒論」という問題、それと絡み、高校生に論文の書き方を指導しないで、果たして良い「卒論」が期待できるのか、高校生の身の丈にあった内容・レベルのものを「努力」として評価するのがいいのではないか、学部の卒論と違って生徒のテーマには余りにも幅と「落差」がありすぎ、それを同等に評価するのは危険である、剽窃・盗用に対し十分に確認できず、その割には卒論評価が進学学部決定に与える影響が大きすぎる、という「評価の難しさ、重み」、「指導の仕組み」という点に集約されたのである。

こうした意見はこの後も例年のごとく、指摘され、一九九三年二月の教諭会にも、

・締め切りを守れない生徒がいて、学部進学への位置づけが意識されていなく、

・卒論への取り組みが全体的に遅く、十一月を過ぎても中間報告をしない、できない者がいる、

・テーマを選択科目とリンクさせてはどうか、

・評価Aの七〇点は比重が大きすぎる、評価Aが二割いるのは多すぎる、評価が甘くなっているのではないか、  
 ・評価の目安がよく理解できない

という意見が出され、次年度への対応としては卒論を「早く」取り組ませる、などの改善方針が出された。こうした意見を汲み、同年三月には、新たな評価基準が示された。それは学部進学への「意欲」を見せるということではなく、卒論そのものの学術性を高める方向に軌道修正され、さらに、同じ年の七月の教諭会では卒論の「中間報告」の提出を「義務付け」、卒論製作の全体を見通して、今どの段階にあるのかを生徒はもとより、指導教員も確認することとしたのである。

一九九四年の二月の教諭会にも審査委員会の報告がなされ、そこでも一般的な傾向としては真摯な取り組みが少ないことなどの否定的な意見が多く、「大学で『論文』課題や、卒論を廃止するという意味を考える必要がある」など、「卒論廃止論」まで出されたが、その一方で、まじめに取り組んでいる生徒も少なからずいることも忘れてはいけない、卒論全体について学院として整理すべきである、来年度の新入生から新しいものでやれるようにしたらよい、という肯定的な意見もだされた。

そこで、今後卒論をどうするか、ここ数年にわたって、卒論そのものの様な意見を踏まえて、大局的な卒論の見直しについての提案が翌三月の教諭会に諮られた。それは「卒論は存続を前提として見直す。…中略…『卒論』を三年生に課すことによって、種々の問題を論理的に考察させるということは、学院教育三年間の集大成として必要

である」、一部には期待に込められなかった生徒もいるが「多くの卒業生が卒論に真剣に取り組み、一定の水準を超えた論文」を作成したことも事実である、として、次のような改善点が指摘された。  
 それは、一九九四年度入学生から

・卒業論文という名称は変えない(高校生として十分研究できるテーマを設定させて、調査、作業、活動などを経た論文とする)。  
 ・枚数は四〇〇字詰原稿用紙五〇枚とする。

・単位のない特別科目とする。

・進学基準に占める割合を低くする(一科目分として、一〇〇点満点で一〇点刻みとして評価し、四〇点以下でも卒業基準の不可科目には算入しない)。  
 という内容にするというものであった。

また、これに合わせて、従来の進学基準の算定方法、一年次学年平均点 $\times 1 + 2$ 年次学年平均点 $\times 2 + 3$ 年次学年平均点 $\times 3 +$ 卒論という仕組みを改め、各学年科目点の総和とし、それに卒論点を加えることとした。これにより、卒論の進学に占める影響は相当に下げられることになった。すなわち、これまでは進学基準点の一割強を占めていたのが、三学年分のうちの一科目分でしかなくなったことにより、その割合は二%前後と、著しく低くなったのである。卒論の問題点を解決し、よりよい卒論を書かせたい、という期待をこめて、種々検討した結果、生徒にとっては「卒論は単なる一科目分の価値」でしかなくなったのである。また、一九九四年十月の教諭会にて、「進学基準」のなかに卒論が明記されることになった。これも不思議なことで、卒論

を出さない場合は学部推薦権を失うことは決められてはいたが、進学基準には明記されていなかったのである。そこで、「学院生活のしおり」の「進級・進学基準」の中に「卒業を認める者」として「卒業論文を提出した者」の一文を加えることにしたのである。言ってみれば、重みは下げたが、進学の条件であることを明言したことになる。

一九九六年六月、教諭会において一九九四年度入学の三年生の卒業点について一〇〇点満点の一〇点刻みとすることが確認され、翌一九九七年七月にはこれが一〇〇点満点で五点刻みに訂正（現二年生）された。この一九九七年七月の改定時には、単に五点刻みを提示しただけでなく、評価のガイドラインをもあわせて提言されたのである。それは一〇〇〇〜九〇〇、九〇〇〜七〇〇、七〇〇〜五〇〇、五〇〇〜三〇〇、三〇〇〜〇の各段階に対する基準を学術性の高低、資料分析の深度、調査活動、剽窃の有無、枚数などから決めたもので、基本的に卒論の学術性を意識した内容となっている。

こうして、本庄高等学院の卒論は様々な問題を内包しながらも、継続することとなり、評価の価値は下がったが、そのレベルを高校生一般に落とすのではなく、高いものは引き上げるといふ方向性が見て取れる。そうしたなか、共学化の動きが沸き起り、各地の共学校の視察を行っていたが、慶応義塾大学藤沢高校（KEI）を見学した折、卒業論文の概要を一冊にまとめたアブストラクトを目にした山下第四代学院院长は本庄学院でもぜひアブストラクトを作成し、外部に積極的にPRするのが学院教育の発信につながると考え、二〇〇〇年六月の教諭会にてアブストラクトの作成について協議した。卒論に対する考

えが迷走していたなか、多くの教員は二の足を踏んだが、良い卒論を書かせ、生徒の励みになるのであればということで、タイトルは和文とし、英文タイトルも付し、指導教員を明記し、内容は和文六〇〇字から七〇〇字、英文二五〇語から三〇〇語とし、キーワードを三点、主要文献三点を明示させるといふ内容であった。提出は情報化時代にあわせ、かつ編集の煩雑さを避けるためにフロッピー提出とさせた。

### 三 新たな試み

本庄学院の卒業論文は受験を経ずに学部進学を行なう生徒にとつては、早い段階から学術的世界に触れるという点において、極めて有効であり、一種の英才教育の面をも持っている。将来進学する分野の世界を高校生のときから垣間見させ、その分野についての知的好奇心を高めさせるといふ点において、高大一貫教育の理念からしても必要な仕組みといえる。しかし、そうした思いを持ちながらも、開始して数年のうちに、様々な問題が持ち上がり、そのつど生徒に対し「真摯な取り組み」を呼びかけ、進学に占める評価の割合を勘案しつつも、なかなか、教員の期待する方向には向かわなかった。

その原因はどこにあるのか。理由は様々であろうが、まず第一に考えられるのは、生徒が卒論を「意識する時間」がほとんど無いということである。開校以来、卒論のテーマ登録は三年次の四月に行い、六月頃に指導教員が決まり最終決定する。その後、卒論に向かうことになるのだが、卒論とレポートの区別もつかない生徒にやれ文献だ、やれ資料だ、実験だといって「強要」しても、生徒は身を引くのがほと

んどで、あつという間に夏休みに入ると、部活などで忙しく、やっと卒論に向かうのは実質十月以降というのが現実である。中には十月半ばの修学旅行、十一月初めの文化祭などで忙しく、ついに十二月初めの期末テストが終わって、初めて卒論と「対決」するという生徒も少なからずいた。すなわち向き合う期間が短いのである。真摯に取り組む生徒でも有効に使えるのは夏休みであり、テーマをどう攻めるか、じっくり考える時間がほとんどないのである。まずこの点が惜しまれた。実質数ヶ月という期間の中で「卒論」を仕上げる、その程度の内容のもので「良し」とされていたのであろうか。多くの生徒は残念ながら易きに流れる。これは人情である。このことから、いまま少し、テーマ登録を早め、卒論を意識させ、テーマと向き合う時間をこれまでより長く持たせる仕組みが考えられてこよう。

本庄高等学院の教育の特色として多彩な選択科目があげられる。その内容は特に社会科学、人文科学分野においては学部の教養ゼミにも匹敵し、教員も大学院修了者が多く高校の授業としてはレベルの高い内容となっている。こうした特徴を持つ本庄学院の選択科目が、残念ながら、卒論と絡んでいないのである。これまでも選択科目と絡めて卒論を課するという意見が出ていたが、それを厳密に行なうと社会科学、人文科学系の教員の負担が多くなるということで、実現しなかった。しかし、本庄高等学院の特色とも言える卒論と選択科目という二つの仕組みが噛み合わないというのはなんともつたない話である。そこで、それを組み合わせる仕組みが考えられてしかるべきであった。

そして何よりも、高校生に論文とは何かを説明する必要があったの

である。関心、興味を得るものはあつても、それを調べてまとめるといふ作業の中で、さらに一歩進んでテーマを論じること、資料を基に、疑問や明らかにしたいことを論理的に説明するという過程をどのように行なうのかを、説明、指導する必要があつた。これまではそうしたレポートと論文の違いなど、論文に必要とされる技術的な約束事が指導されておらず、生徒自身もとまどうことが多かった。開校当初、「卒論は生徒の自主性を評価すべきであり、指導しなくても良い」、さらには「指導といっても教員の専門分野のテーマとそれ以外のテーマでは指導に差が出て、結局不公平になるのであるから、基本的に指導はしない方がいい」という意見までも聞かれた。しかし、これでは、折角、貴重な時間を費やし、学部進学とも絡め、本庄学院の教育の特色といえる卒論がなかなか生徒の中に浸透していかないのも無理は無く、生徒ばかりは責められない。そこで、卒論作成についてのノウハウを指導することの必要性が痛感されたのである。

卒論廃止論もあつたが、はじめに取り組んでいる生徒もいること、やはり本庄学院の教育の特色として継続するのであれば、もう少し、組織的に系統的に卒論に取り組ませる必要があるということ、その仕組み作りに向けての提案が二〇〇二年七月の教諭会に出されたのである。若干長いが、要約して紹介することにする。

提案の大枠は、

- ・ 卒論テーマの登録は二年生の二学期、選択科目の登録（十二月）にあわせて行なうこととし、登録には担当教員の承認を得る、テーマ登録の変更は特別な事情に限り認め、三年次四月に行なう、

・三年次四月に第一次中間報告、九月に第二次中間報告（目次、内容四〇〇字一〇枚程度）を行なう、卒論提出は学年末の一月とする、

という内容である。その理由として、

① 本院の高大一貫教育の下、他校に見られない優れた各種カリキュラム・プログラム（課外講義・選択科目など）を設定しているが、それらカリキュラム・プログラムが卒論と効果的に連動していない。

② 卒論はその取り組みへの指導が徹底せず、しかも生徒の間（期間）（テーマ登録または実際に着手してから提出まで）も短く、中途半端に終わってしまったものが多い。

③ そこで、テーマ登録から提出までの時間をもう少し長くし、可能な限りテーマに関連する選択科目を履修させて、より細かな指導の下、学習効率を高め、質の高い、優れた内容のものに仕上げさせたい。

ということが語られた。

そして、この提案に伴う措置として、

・二年生の九月初めに「卒論を書くに当たって（仮題）」を生徒に配布し、卒論とレポートの違い、テーマ設定の仕方、テーマ設定から資料収集、分析、執筆までの作業の手順などについて指導を行なう、

・卒論のテーマと選択科目の内容が合う場合にはその選択科目の登録はできるだけ優先させる、

などの仕組みが考えられ、今後の検討課題としては、評価の見直し、ワープロ書の可否、成績優秀者の扱いなどが掲げられた。

この提案に続いて、その年一〇月の教諭会にて、

・選択科目の登録に当たって、選択科目の講義内容が卒論テーマにそい、講義担当者がその卒論を担当し、受講を認めるのであれば、その選択科目を優先的に履修することができる（一科目のみ）、  
・これまでかたくなに否定されてきたワープロ書を現在の社会状況から判断して認めることにする（剽窃、盗作は担当教員が下書きなどで把握、確認すれば防げる）、

・評価は一〇〇点満点とし、一点刻みでも、五点刻みでも、担当教員の評価方法に従ってよい、

・学部決定に際しては三倍にして加算する、  
という提案を一括して行なった。協議の結果、学部決定に際して三倍にして加算する項目を除き、承認されることになった。

三倍加算案が承認を得なかった大きな理由は、これまで見られた生徒がまじめに取り組まない卒論をそれほど高く評価する必要は無い、評価を高めるといふことにはそれ相当の手当てをしてそれにどれだけ生徒が応えたか、すなわち指導のあり方も強める必要がある、その仕組みが成されない上は評価を高める必要はないということであった。そこで、十一月の教諭会に再度、これからの取り組みを説明し、高からず、低からずのところ、三科目分に相当する評価を与えてはという提案を再度行ない、結局、承認されたのである。

こうして、新しい仕組みでの卒業論文への取り組みが二〇〇二年度

の一年生から始まることになった。そこで、年度が明けた二〇〇三年四月には生徒向けの「卒論を書くに当って」の発行に向けて動き始め、その年の九月に出来上がった。初回は学院内の印刷機で印刷した手作り感のある五五ページの小冊子であるが、翌年から業者に発注して見栄えを良くするとともに、内容を増やして発行を続けている。第一号（二〇〇三年度用）の表紙には「この冊子について」として、

学院生諸君は高校・大学を通じて、「論文」を書くことを避けて通ることはできません。いや、社会に出てからも教育者・研究者として、あるいは企業で必要とされることでしょう。従って、「論文」の書き方の基本をしっかり習得しておく必要があります。

この冊子は学院教育の特色の一つである「卒業論文」作成に際し、論文として完成度の高い作品を作るための一助となるよう、製作したものです。卒業論文のみならず、レポートや Web ページ作成などの際にも役立ててください。

ここで得られた技術や知識は一生の財産になるはずですよ。

と記されている。内容は、年次が進むにつれて増えてきているが、「論文の書き方」、「英語論文の書き方」、「F&A卒論Q&A」、「論文としての必要条件・十分条件」、「知的所有権を尊重しよう」、「先輩は卒論にどう取り組んだか(実例と経験談にみる卒論作成過程)」、「先生からのメッセージ」から構成されている。「教員からのメッセージ」は単なる励ましではなく、分野別、たとえば社会科学、人文科学、自然科学それぞれの論文の書き方について、具体的にその方法を述べたものである。

二〇〇三年二月半ば、大教室にて初めて「卒論報告会」が開かれた。その年度に優秀な卒論を書いた生徒、丁寧な資料集め、分析を行った生徒から後輩（二年生）にその作業内容などを伝えるというものである。手本として欲しいからである。初年度は、慶応義塾大学藤沢高校とネット回線をつないで行う討論をも組み込み、新聞社の取材も受けるなど、卒論が本庄高等学院教育の特色であることを、学校内外に改めて発信したのである。中には教員の推薦により新しく始まった表彰制度である「学院長賞」を受賞するものもあり、また、海外の発表においても受賞する学院生まで出るという状況をも迎えたのである。確実に生徒たちには刺激を与えた。

卒論にも二十五年の歴史があり、停滞期もあり、興隆期もあり、多くの問題を内包しているが、やはり、学術的であることを捨てずに、常に高みに向かわせる努力をしていかないと、またもとの木阿弥になつてしまう危険性は常にある。

(佐々木幹雄)

## (5) 入学試験（含推薦）

一九八二年一月十八日、地元指定校推薦入学応募者一〇名に対して面接が行なわれ、次いで二月二十一日に一一六一名の志願者に対して一般生・帰国生入試（一次）が実施された。そして地元指定校推薦一〇名、一般生二二〇名、帰国生三五名の入学者を以て四月一日に本学院は開校した。本学院の入試はこうして始まったのである。以下、二五年間の入試の変遷を五つの項目に分けて振り返ってみたい。

### 入試の種類

一般生入試、帰国生入試、地元指定校推薦のうち、帰国生入試、指定校推薦は開校当時としては珍しい制度であった。帰国生入試は増え続ける海外居住者の子弟の教育問題に対処するため、また地元指定校推薦は早稲田大学が本庄市に校地を取得し、本学院を開校する過程で本庄市等との交渉の結果設けられたものである。本学院が開校した時代の社会状況、本庄キャンパスをめぐる諸問題を如実に示していたのである。この三本立ての入試体制は八二年から九四年まで続いた。

九五年度に $\alpha$ 選抜（自己推薦入学試験）が始まったのは、入試多様化の第一歩であった。その後二〇〇二年度に帰国生のためのI選抜（帰国生自己推薦入学試験）、〇五年度に直近の数年間における入学者の多い中学校を指定する一般指定校推薦、そして〇七年度には女子の入試が始まった。その結果、現在では、試験の種類だけでも当初の二倍に

なり、さらにそれぞれが男女両性について行なわれているから、入試に関する作業は八二年の四倍になったと言えることができる。

### 試験会場

第一回の入試（一般生・帰国生）は、一次試験が大久保、二次試験が西早稲田で行なわれた。一次試験の大久保使用は八七年まで続いたのに対し、二次試験は八三年度から戸山、さらに八六年度からは本庄に移動した。八八年度からは一次試験が戸山になり、一次試験戸山、二次試験本庄という方式が九六年度まで継続した。

九七年度から埼玉県北部、群馬県等からの学生獲得を目指し、一次試験の会場を戸山を引き継いだ西早稲田に加え本庄にも設定した。二次試験は引き続き本庄で行なわれおり、この一般生・帰国生入試の会場の方式で現在に至っている。

$\alpha$ 選抜の二次試験（面接）は、当初から本庄でのみ行なわれ、この形は現在も同様である。しかしその間、二〇〇一年からは西早稲田と仙台、博多のホテル（ホテルメトロポリタン仙台）〇一年度、ホテルサンルート仙台）〇二年度・〇三年度・〇四年度、博多都ホテル）〇一年度・〇二年度・〇三年度）を使用して、合計四会場で二次試験が行なわれた。仙台、博多での二次試験実施は全国から学生を集めようという意図から試みられたのであるが、予期したほどの志願者が集まらず、博多は三年、仙台も四年で中止となった。また西早稲田は志願者の需要は一定程度あったが、本庄への交通の便も良くなったことから、六年で中止となったのである。



なおⅠ選抜の二次試験（作文・面接）は、継続して西早稲田のみで行なわれ、また地元指定校推薦、一般指定校推薦の面接は一貫して本庄で実施されている。

### 入試日程

本学院は開校以来、一般生・帰国生入試の一次試験は二月二十一日に固定されていた。高等学院と同日で、早稲田大学の学院学部の一連の入試の初日である。一九八七年度には二月二十日になったが、微調整という程度の変更であったと理解できる。この日程が大きく変わるのは九四年度からである。すなわち九四年度に二月十八日になり、翌九五年には一六日となった。さらに九八年度に十二日、〇四年度に九日となって現在に至る。

二次試験は初年度が一次試験の九日後に実施されたのを例外とする、九三年度までは六〜七日後（八六、八七年度は五日後）に実施された。しかし九四年度には五日後、九六年度には四日後となって〇三年度まで続き（九七年度は五日後）、〇四年度からは五日後となって現在に至る（ただし、会場、人員の関係から男女同日に実施できないため、女子は六日後）。曜日の並びも影響するので明確ではないが、一次試験と二次試験の間の時間を短縮化しようという流れが九〇年代中ごろから続いていると見ることができるといえる。

九五年度から一次試験日が高等学院と別日になったことは、本学院のみならず早稲田大学全体に大きな影響をもたらしたといえよう。開校当初、本学院を高等学院の滑り止めにしなないという思惑で、両学院

の試験日は同日とされた。しかし現実には偏差値による振り分けが行なわれているのであり、早稲田大学全体としては早い段階から早稲田大学を志望する志願者の受験機会を少なくしていただけであった。本学院内部でも高等学院との併願を可能にすべきだという声が徐々に高まってきたが、それが実現したのである。両学院に合格した者の多くは高等学院に進学しており、高等学院の滑り止めという傾向は見られるが、現在では約一割の学生は本学院に進学するようになってきている。本学院における男女共学化、高等学院における中等学院（仮称）設置計画などによる両学院の差別化の進展に伴い、この割合は今後上昇していくことであろう。

一方、地元指定校推薦は当初から八六年度まで一月十七日あるいは十八日、八七年度から九二年度まで二月上旬、九三年度から一月下旬となった。その後始まったⅡ選抜、Ⅰ選抜は同日で地元指定校推薦の前後五日以内、一般指定校推薦は地元指定校推薦と同日とされて現在に至っている。

### 試験科目

一般生・帰国生入試の試験科目は、開設以来長く一次試験を国語、数学、英語の三科目、二次試験を作文、面接としていた。これは一九七〇年度以来の高等学院の方式を踏襲したものであった。一次試験を理科、社会を含む五科目とすることは時に話題にはなつたが、本格的に議論されたことはなく、三科目体制は現在まで続いている。他の私立高校の受験科目との関係や、理科、社会の科目の性格からして、国

語、数学、英語のみの試験で問題はないと認識されているのであろう。

一方二次試験は、九五年度から作文が廃止され、面接のみとなった。

これは学習塾などの作文試験対策が進み、型にはまった解答が目につき、採点側の労力に比して効果が少ないと判断されたためである。高等学院が九七年度から面接を廃止して作文（二〇〇四年度からは小論文に変更）を実施しているのとは対照的である。

α選抜では教科の試験は課さず、書類審査を経て二次試験として面接のみを行なうが、一般生・帰国生入試の二次面接に比べ、長時間で面接員の数も多くなっている。I選抜は海外の現地校やインターナショナルスクール出身で英語能力の高い学生を獲得することを意図しているが、これも教科の試験は行なっていない。ただα選抜と異なり、書類審査後の二次試験では面接に加え作文も課しているが、それは英語の能力を重視する一方で日本語能力を担保するためである。なおα選抜、I選抜の入試科目は開設当初から現在まで、変動はない。

### 志願者数

第一回入学試験の志願者は、前述したように、一般生・帰国生入試併せて一一六一名であった。開設以前は二五〇〇名ほどを想定していたようであり、その半分以下に止まったわけであるが、丙午歳生まれの志願者であることや都心を遠く離れた新設校という条件を冷静に考えれば、妥当な数字だったのであろう。それでも八三年度以後は毎年二〇〇〇名前後の志願者を集めていたのである。ところが九〇年度に一五〇〇名を割って以来、小幅な増加が見られた年はあったものの、

全体的には減少傾向が続き、九四年度には一〇六二名になり、初年度を下回ってしまった。

この時期から入試の種類や会場の増設、日程の早期化と高等学院との別日化等の方策が講じられた。その結果、〇五年度の応募者は、この年に始まったα選抜とも併せ、一五六〇名に上った。ただその後も増減が繰り返され、概ね一一〇〇名から一七〇〇名の間で揺れ動いた。はつきりした増加は二〇〇三年に一七三八名になってからで、翌〇四年には二〇三五名と一七年ぶりに二〇〇〇名の大台に乗り、〇六年には過去最多の二一三一名となった。

〇七年度入試は定員増共学化が実現して最初の入試であった。志願者総数は三一一名（男子二三六六名、女子七四五名）と、三〇〇〇名を超え、高等学院（総数三〇七九名、うち一般二三九三名、帰国一七六名、自己推薦五一〇名）を初めて上回ったのである。

二十五年間の入試は、一九九〇年代前半までのいわば伝統的な入試とそれ以後の激動の入試に分けられる。激動の背景には、言うまでもなく、日本社会のかかえる「少子化問題」がある。八〇年代から巷間を賑わすようになっていた「少子化問題」の影響は、本学院には、十五歳人口がピークを迎えた八八年の翌々年、九〇年度から及んできた。その対応策がα選抜・I選抜・一般指定校推薦の導入、入試会場の増設、入試日の前倒しと入試期間の短縮化等であった。

試行錯誤を繰り返すなかで二〇〇三年ころから志願者の増加が明確になった。これは入試に対するさまざまな方策がようやく実を結び始

めたことを示している。数が全てでないことはもちろんであるが、本学院が多くの中学三年生に知られ関心をもたれたことも事実であり、その意味では喜ぶべきであろう。ただ他方では入学手続率の低下という問題も起こっており、志望者増が入学者の質の上昇につながったかについての答えは未だ出ていない。その答えは数十年後になるかもしれないが、われわれとしては今後も多くの優秀な学生確保のための方策を模索し続けなければならないのであろう。

(三崎良章)



## (6) 本庄学院の Super Science High School (SSH) プロジェクト

### 1 Super Science High School について

文部科学省では、二〇〇二年度から、「科学技術、理科・数学教育を重点的に行う学校をスーパーサイエンスハイスクールとして指定し、高等学校及び中高一貫教育校における理科・数学に重点を置いたカリキュラムの開発、大学や研究機関等との効果的な連携方策についての研究を推進し、将来有為な科学技術系人材の育成に資する。」ことを目的とし(文部科学省 Web サイト<http://www.next.go.jp/a-menu/kagaku/daisuki/>から引用)、「科学技術・理科、数学教育を重点的に行う高等学校を「スーパーサイエンスハイスクール」として指定し、理数系教育に関する教育課程の改善に資する研究開発を行うこととなった。わかりやすく書けば、慢性的に続いている理科離れ傾向の阻止と世界的に活躍できる科学技術者の育成を目的とした国家的プロジェクトである。

### 2 本庄高等学院のSSHプロジェクト

本庄高等学院は二〇〇二年度から開始された文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールプロジェクト(以下、SSHと略)において、二〇〇二年度指定校(SSH一期指定校は二六校「内、私立は三校」)

となり、三年間先進的の科学教育プログラム活動を行ってきた。具体的な実施内容や分析等詳細については本庄学院サイト [www.waseda.jp/honjo/honjo](http://www.waseda.jp/honjo/honjo) に報告書を Pdf で置いているのでご覧いただきたい。三年のSSH期間終了年度の二〇〇四年に本学院から改めて五年間の延長申請を行ったところ、ヒアリングを経て、延長の許可がなされた。

二〇〇五年度からはキーワードとして「国際化」「高大連携」が打ち出された。「国際的に活躍できる科学技術者養成」「単に大学の教員を講師として招いたり大学で単発な実験を行うだけではない、『共同研究』レベルの高大連携」をイメージしたものである。この内容は過去三年間の本学院におけるSSH活動でも考えていたことではあるが、あらためてこの方向性を受け、効果的な教育プログラムのあり方を考えている。

インターネットや携帯電話をその代表とする通信技術の進歩は、日常生活における利便性を大いに高めた。しかし、その利用者の何割がその裏側の仕組みや理屈を知っているのだろうか？

このことに象徴されるように、自分の生きている社会や使っている道具を知らないまま日常生活を送っているという事態が特に科学技術の世界で起こりつつあり、この乖離は年々取り返しがつかなくらい大きくなってしまっている。このような、我々の「常識」「素養」と現実社会とのギャップが大きい現状は、他分野ではこれほど目立たない。

学校教育で行う内容が現指導要領にある「生きる」力を養うことだとするならば、それは「生物的な棲息」ではないだろう。「生きる」の前に「より豊かに人間らしく」という形容詞を前につけたいもので

ある。そのためには、自分の住んでいる社会を理解できる「素養」「常識」を身につけることが必須である。

科学におけるこの現状を考えたとき、現在の科学技術社会における素養を身につけることは焦眉の急といえる。そうでないと、技術を享受する側ばかりになってしまい、次の発展が望めなくなり、つまるところ技術の停滞が起こる。

SSHプログラムはこのような硬直した状況を打破する試金石といえる。一〇〇校あまり(二〇〇六年現在)の指定校が知恵を絞ったプログラムから次世代の科学技術社会を担う人材が育つとともに、子供たちの素養が育てられていく。

本庄学院ではそのような気持ちで、「学院のため」という狭い気持ちではなく、「次世代の子供たちのため」という広い視点でこのプロジェクトに取組みたいと考えている。

### 3 本庄学院SSHプログラムとして

#### 行った特徴的な事例

以下は、二〇〇二年度以降本庄学院SSHプログラムとして実施した事例の中で特に特徴的なものである。また、関連する事として一九ページの「本庄学院の交流プログラム」も参考にされたい。

二〇〇二年度

① Super Science クラブ設立(顧問:影森)

電気自動車、ソーラーカー、無動力ポンプ、特大モーター作成な



2003年3月 SS クラブは、京都の農家の要請により、無動力ポンプで水路よりも高い位置にある畑への灌漑ができるか、実地検証を行った



2006年夏、小笠原研修におけるイルカの糞の DNA 採取光景(イルカを追ひ、糞をすのを待っている)

SSH クラスの人数の変遷

	音楽クラス			美術クラス		
	①	②	合計	①	②	合計
2003年度	26	18	44	24	19	43
2004年度	19	24	43	23	17	40
2005年度	25	14	39	21	21	42
2006年度	13	(28)	41	24	17	41
2007年度	26	17	43	26	17	43

どの活動

無動力ポンプは二〇〇三年三月、京都の農家の招待を受け、実際の農地でデモンストレーションをした。

② 地学での LANDSAT データの利用と GPS 測定

二〇〇三年度

① S S クラブ活動における「リフターの研究」(3rd APEC Youth Science Festival 2004 in Beijing におけるグランプリ獲得)、「鉄バクテリアの研究」(3rd APEC Youth Science Festival 2004 in Beijing における準グランプリ獲得)、「有孔虫の研究」

② SSH クラス実施

③ 一年次総合学習「サイエンス」実施

④ 選択科目「科学英語のプレゼンテーション技術」設置

二〇〇四年度

① S S クラブ活動における「EV自動車作成」

② International Science Fair (Australian Science and Mathematics School) 参加

二〇〇五年度

① 大学院研究室と

の共同研究の開始(「ミミズの腸内のセルロース・リグニン分解菌の分離」行田蓮はらの酵母発見「本庄ビールの醸造」)

② 1st International Student

Science Fair (Maider)

Witayansorn School, Thailand) 参加

二〇〇六年度

① 小笠原研修プログラム〔ミナミバンドウイルカのDNA採取と調査〕「母島の植物分布の調査」

② 2nd International Student Science Fair (Busan Science Academy, Korea) 参加

二〇〇七年度

① Singapore National Junior College との共同研究の開始〔熱帯温帯における菌類の調査〕

② 1st Singapore International Science Conference (National Junior College, Singapore) 参加

③ 台湾成功大学における国際超電導実験コンテストに招待参加  
(半田 亨)

#### 4 SSHクラス

二〇〇三年度から、より高度な理科系の授業を受けたい生徒(①クラスと呼ぶ)と、ゆっくりと教えてほしい生徒(②クラスと呼ぶ)をひとつにまとめたクラスを音楽選択クラス群と、美術選択クラス群にそれぞれ一クラス設けた。生徒の選考は、生徒の希望と理数の成績を参考にした。開校当初より本庄学院は、教育方針として理文のコース分けを行わないとしているが、その前提の上で、希望する生徒に対し

効果的な授業を展開する方策として、理数の授業で少人数展開という方法をとった。

その後毎年、数学の定点テストにおいて、目的別少人数クラスの効果を検証している。表はSSHクラスの人数の変遷である。二〇〇六年度のカッコつきの②クラスは、希望者が少なかったため一般クラスとなった。

(影森 徹)

## (7) 本庄学院の交流プログラム

本庄学院は、開校以来継続されている訪中修学旅行における北大附中との交流以外、これといった外部との交流プログラムを持たない学校であった(各々の教員が個人的に行っていたものは除く)。開校当初は高校における海外修学旅行、しかも中国は珍しく、大英断だったといえる。その後、社会の情報インフラ整備が進むにつれて、ネットワークを利用した他校との交流が簡単に行えるようになってきた。また、国際化の進展により、特に私立高校において多様な修学旅行・研修旅



World Youth Meeting 2005 (愛知県、日本福祉大学)においてコラボレーションしたインドネシアチームと記念写真



2nd International Student Science Fair 2006 (Busan, KOREA)における早大本庄イルカ研究班のポスターセッション光景

行が実施されるようになる中、本庄学院の訪中修学旅行の形態も見直しが求められている。

本庄学院が「交流活動における教育効果」に目を向けるきっかけとなったのは一九九六年十一月に本学院を会場として開催された「第一回私立大学付属・併設中高等教育研究会」だったのではないかと考える。前年十一月に立命館高校創立九〇周年記念式典が開催され、ちょうどその年から日本の高校では初めての自己推薦「α選抜」を実施していたことから、「私学の入試改革について話してもらいたい」という依頼をいただき、当時教務副主任だった私が参加することとなった。会の終りに「今回のような、私学の抱える問題や教育のアイデアの情報交換できる場があるといいね」という参加者の意見が相次いだ。それを受ける形で、立命館と本庄学院が中心となり開催した研究会であった。

その場では、色々な学校の修学旅行や教育プログラムを知ることができ、また人的ネットワークを作ることができた。現在も続いている立命館や慶應湘南藤沢との様々な交流や政治経済の教材である経済シミュレーションプログラム MENE はこの会がきっかけとなったものである。

もう一つの大きなきっかけは二〇〇二年度の Super Science High School (SSH) 指定である。このことにより、科学教育に限定はされるが、研究交流プログラムへの予算措置が楽になると

もに、新たな人的・学校間ネットワークができた。同じSSH校である宇都宮高校との研究交流、高崎高校・高崎女子高との Science Camp 実施などである。立命館 BKC で開催されている International Science Fair (ISF) へも毎年参加している。SSHへ再認定された二〇〇五年度からは海外プログラムへの参加も認められるようになった。

その前年の二〇〇四年にはオーストラリアで開催された International Student Science Fair (ISSF) へ父母会の援助の元で参加したが、二〇〇五年度タイ、二〇〇六年度韓国で開催された同 Fair へはSSH予算で参加している。この会でネットワークを作ることのできた学校は多い。特に Singapore National Junior College (NJC) とは教員の相互訪問ののち、二〇〇七年三月より英語の CCDL (Cross-Cultural Distance Learning) と「熱帯温帯における菌類の生態調査」の共同研究を開始した。NJCとは二〇〇七年五月の Singapore International Science Conference (SISC) 参加を利用して尾崎学院長が訪問し、Cheng 校長との間で学術交流協定を調印している。

二〇〇五年一月には東京都白金台にある台湾駐日経済文化代表処より 1st International Creative Ironman Contest (ICIC) への招待があった。これは、それ以前は台湾教育部(日本の文部科学省にあたる)主催で高校生相手に実施していた三日間通して行うトライアスロン型の問題解決型コンテストであり、それを国際大会にしたものである。その時は三位までの入賞はできなかったが、最終課題の表現が見事だったということで、特別に閉会式でデモンストレーションとスピーチを求められた。この会への参加はその後三回続いている。二〇〇五年

十一月には台湾の校長先生十六名の視察団が本庄学院を訪れた。目的は日本の科学教育の視察だったが、ICIC の件もあり、SSH校の中で本庄学院が選ばれたらしい。その中国立台中第一高級中学は二〇〇六年二〇〇七年五月に修学旅行先として約七〇名の生徒が本庄学院を訪問した。二〇〇七年来校時には学術交流協定の調印も行っている。授業・部活動交流のほか、茶道・折り紙などの日本伝統文化・遊戯の交流プログラムを生徒会・ESS 生徒のボランティアの元で実施している。

二〇〇六年九月、NPO 団体である Broad Band School 協会 (<http://www.broadbandschool.jp/>) の仲介により、上海華東師範大附属第二中との共同研究協定に調印し、「EXPO が社会に及ぼす役割」というテーマで共同研究を開始した。二〇〇七年三月三十一日に大阪 EXPO パークで日中生徒による研究発表会を開催している。

ESS が中心となって行っている国際交流イベント “World Youth Meeting” (<http://www.wym.jp/>)、<http://www.japanet.gr.jp/w2007/>、<http://www.japanet.gr.jp/w2006/> への参加は二〇〇二年度より五回を数える。三回目からはインドネシアの SMAN2 Yogyakarta (ジョグジャカルタ第二高校) との共同研究発表、京都案内という形で交流を継続している。

このような交流プログラムが増えていくことは国際化・情報化時代の流れとしてやむを得ない。少し前までなら個人レベルで行うこともできたが、学校間で協定書や覚書を交わした方が双方にとって動きやすい、複数の教員の補助が必要である、規模が大きいため個人レベルでは対応できない、学校として学内で行われているプログラムについ



ては知っておく必要がある、などの理由により二〇〇六年度より国内外交流委員会を立ち上げることとなった。この委員会活動を中心に、時代のニーズに即した、あるいはそれを飛び越えた未来的な、教育効果の高いプログラムが交流という切り口で創造されていくことと期待している。

(半田 亨)



## (8) 図書室

### ― 図書室移転と利用者サービスの拡大 ―

一九九七年六月、「本庄高等学院図書室」と「図書館本庄分館」の一体的運営による図書館サービスの効率化を検討していた大学図書館の提言を受け、本庄高等学院図書室の将来展望とその具体的施策を検討する「本庄高等学院図書室にかかるワーキンググループ」が設置されました。同月には本庄高等学院長からの諮問に基づいて、「本庄高等学院図書環境の狭隘化問題」の検討を開始し、一九九八年二月に「本庄高等学院図書室を本庄分館に併設する」という答申が出されました。

その後答申を受け継ぐかたちの「移転準備検討委員会」での検討の結果一九九八年十二月に視聴覚資料と最新刊雑誌、新聞を自修室（旧図書室）へ残し、大学図書館本庄分館へ全面移転することとなりました。

本庄分館は元来多数の利用者が来ることを前提とした施設ではないため、書架の配置や閲覧スペースに多少難はありましたが、自修室（旧図書室）との棲み分けができたことで図書室本来の静寂な環境を取り戻すことができました。

当時の蔵書数は約七万冊。これらの資料を学院校舎から離れた図書室でどう利用させるかが、移転時の大きな問題でした。移転から九九年を迎えますが、この間、利用者の図書室離れを最小限に食い止めるため様々な方策を採ってきました。そのいくつかを挙げれば、返却は自修室カウンターで受け付ける、通常の貸出冊数を増やす、長期休

期間には二十冊という大幅な冊数枠を設定する、資料の検索は本庄キャンパス内の早稲田ネットワークから常時検索可能な環境を構築するなど、現在も利用者サービスの充実を図るため、様々な取り組みをしています。

一方、卒業論文作成時には多くの生徒が大学図書館の資料を利用しています。本庄分館のカウンターでは WINE 専用検索端末を設置すると共に、大学図書館資料の返却を受け付けていますが、その数は年々増え続けています。昨年度の返却数は七三五冊という数字になりました。しかし、利用者が直接大学図書館へ出向かなければならない今の貸出方法は高等学院生にとって大変不便です。現在本庄高等学院図書室のカウンターで「取り寄せ貸出」ができるよう大学図書館と交渉しています。この記念誌が出る頃には、一段と利用しやすい図書室に変わります。

(柳澤とし子)



図書室への小径

## 二 生徒関係

### (1) 寄宿制度

#### 一 生徒寮

また生徒寮の思い出について書いてみようと思う。生徒寮の設立の経緯等については「十周年記念誌、総括と創造（一九九一）」の中に生徒寮の「準備とはじめの一年」で書いた。そして、私の後に二年間生徒寮長をされた英語科の山田庄一先生（二〇〇七年三月にご定年で退職された。）が「生徒寮の思い出」を書かれている。それらと内容的に重複する部分が出てくるかと思うが、その点はご容赦いただきたい。

学院ははじめの三年間、上里町七本木というところ（学院まで自転車十五分位。委託ホーム高仁さんに近い）に帰国生対象の生徒寮をもっていた。帰国生の馴化のためものとされ、一年次だけいられるが二年になると一般生と同様に委託ホームに移らなければならなかった。今から思うと、二年次でも留まる事ができ、上級生がいる中に新生が入ってくるというような形であれば、帰国生徒が効果的に馴化していったのだろうし、安定感があつたのではと思ったりする。勿論、二年次に委託ホームに移って何か問題があつたとかいうことでなく、先輩と一緒に寮生活をする中で学院生活に早く馴染んでいったであろうと思うのである。二年目、三年目にも四月からしばらくは寮生活が

初めての生徒ばかりを相手に奮闘されておられた山田先生を思い出し、そう思うのである。

山田先生が生徒を怒ったりしている姿を見たことが無かった。学校とは違ったところでの生徒にはつい怒鳴ってしまうようなことはあるのだが。生活習慣の違いとことから来たばかりの生徒達であれば山田先生のような粘り強い対応が正しかったと今では思うのだが、私はよく大声を出していた。

一年目は寮生の自転車での事故が多かったように記憶する。そして、学院までの通学路に先生方に立って頂き登校指導をした。寮生は夏休み位には日本の生活に慣れた。朝夕の食事には業者が入って賄いをしてきていたが、口に合わなかった寮生も少なくなかったように記憶する。初め寮には雑誌や本なども無く、寛ぐコーナーも無かったが、二年目以降段々と整えられ寮生の情緒は安定していった。寮の近くには寮生が買い物をする店はほとんど無く、街にもかなり遠く不便を強いられていたようだった。寮の建物はもともと独身社員寮として建てられ、利用されていたもので玄関、廊下、階段そして風呂場は十分なスペースがあつてゆとりがあり、敷地も広かつたことは都会の施設などと違って寮生にとって幸いなことであつた。

しばらく前の早稲田大学の全学的議論、グランドデザインのの中では、本学院が都会型、地域型ではない全国型の高等学校として期待されていることがあらためて確認されたと思う。二〇〇七年四月から学院は共学化し、女子生徒が入学してきた。帰国生など、自宅から通えない女子生徒の受け皿はまだ無いが、これから徐々に検討されよう。その

中には女子生徒寮という可能性もきつとあるのだろうと個人的に思っている。学院を取り巻く環境も二十五年間ですっかり変わったが、以前の課題として親元を離れて高校生活をしようとする生徒をどう受け止めて行くかを学院が、早稲田大学が対応しようとしているとき、開校当時のことが様々に思い出されて取り止めの無いことをまた書いてしまった。

(篠田晋治)

## 二 最近の委託ホーム制度

本学院は、開校当初より全国各地、世界各国から早稲田大学を志向する優秀な生徒を受け入れることを目的に委託ホーム制度を導入してきた。この委託ホームで生活し、心身ともに逞しくなった卒業生が大いに進み、あるいは社会に出て大いに活躍している現状を見ると、これが、本学院の教育を支える大きな屋台骨として多大な貢献をしてきたと言える。ホストさんからは、年一度卒業生が集まってパーベキューをするのが恒例であるとか、結婚披露宴に招かれてスピーチをしたとか、自分らの結婚記念日を祝う会を卒業生が催してくれたとかという話を伺うにつけ、ホストさんとホーム生との関係は限定された高校の三年間に留まらず、それは生涯にわたって継続されるほどに強固なものとなっていることがわかる。こうした両者の結びつきを思うとき、本学院において、委託ホーム制度の果たした役割は非常に大きなものであったと言わなければならない。

ところが、いまこの委託ホームに入居する生徒が少なくなってきた

いる現実がある。開校当初、委託ホーム入居生が全生徒の六割を占めていたのに対し、本庄早稲田駅の開業、湘南新宿ラインの運行、スクール・バスの定着など交通の便がよくなるにつれ、ホーム入居生は漸減し、二〇〇七年四月には全体の二〇・一％までに落ち込んできている。また、委託ホームが開設されてから二〇余年を経過する今、ホストの世代交代、施設の古さ、入居生へのサービスの不均一、男女共学に伴う女子の宿泊施設建設の可否など様々な問題が顕在化してきているのも事実である。

一方で、委託ホームに関わる現状も変化してきている。経費を節減する必要から、二〇〇六年度からホストの協力を得ていわゆる「空室補償」を停止し、さらに、事務の布川・塚本の両氏、養護の齋藤教諭の全面的な協力を得て食中毒、住環境点検が実施され、保健面だけではない地震対策をも視野に入れた幅広い梃子入れがなされている。また、生徒の生活・学習面では、希望者に対してインターネット環境の整備、ホーム学習会の実施、ホーム行事(ホームスポーツ・パーベキュー大会、ホームボーリング大会、ホーム新年会)の継続実施、変わったところでは、二〇〇四年度から三年間行われたいわゆる「ホーム対抗学習成績競技会」があり、賛否両論あるなか、わずかな賞品(食券)をめぐる競争がなされた。

そうした委託ホームを取り巻く変化のなか、一番大きな変化は「競争原理」の導入であろうか。これは、今までホーム入居希望者を学院が割り振り、各ホームへの入居者数を均一的に扱ってきたのに対し、入居者(保護者・生徒)の希望を優先して、入居ホームを決定しよう

とする方法である。ただし、ある特定のホームに希望が集中し収容しきれない場合は、学院が入居希望者の意向を伺いつつ他のホームへ割り振つてもいい。この方法の導入に際しては、反対意見も少なからず存在したが、ホーム入居希望者の要望に応えていく一つの方策として、また、ホスト自身が魅力的なホームづくりを積極的にやっていこうとする意思に叶った方法として賛同も得られ導入できたのだと思われる。その結果、ホーム生やその保護者の不満が少なくなった反面、入居者数が激減しホーム廃業を迫られるという、ホストにとって非常に厳しい現実をもたらすことになった。この「競走原理」を導入したことが、生徒及び保護者、ホスト、そして学院教育にとって評価し得るものかどうかについては、もうしばらくの時間を待たねばならないであろう。しかし、この方法の導入によって今まで以上に魅力あるホームにするためにホストがいつそう努力され、それを学院が強く支援(例えばホーム表彰制度)していこうという動き、また、ホームの良さを積極的に発信(例えば、ホームページやブログなど)していこうという機運がホストや学院におこったのも事実である。

ところで、いま本学院は定員増に対応するために新校舎の建設に向けて動き出している。その動きのなかで、全国型(全世界型というべきか)の高校を目指すべきだとする大学全体の方針が再度確認された。そうした現状を踏まえて、現行の委託ホーム制度を維持しつつも、生徒や保護者の多様な意思に対応する必要から生徒寮の建設の可否、また、女子宿泊施設建設の可否をめぐって本格的議論が始められている。

(吉田 茂)

## (2) 人権教育

人権とはこの世に生まれた人が、他者とともにその社会、国、そして地球で自由に生き、自らの幸福を追求する権利のことである。わが国においては言うまでも無く、『日本国憲法』に保障された基本的権利の一つである。したがって、差別とはそうした権利を阻害する、またはされる状態のことを指す。しかし、いかに、『日本国憲法』に保障されているとはいえ、人が集まる地域社会、会社、企業はては教育の場では貧富、宗教、性、民族、身体障害、病气、学歴、習俗などにおいてさまざまな人権侵害、差別が起きているのが現実である。こうした人を差別する社会をなくすためにさまざまな場所で人権教育が行われる必要がある。とりわけ、将来を担う人材を育成する学校という教育機関においては、生徒に対して人権尊重の理念、不条理な差別を受けることの苦痛を理解させる教育活動は重要で、かつその責任は重大である。学校における人権教育は特別の教科、科目のみで行なうものではなく、あらゆる機会、あらゆる場面において、担当教員そして学校全体が取り組むべきものである。

本庄高等学院の二十五年における人権教育は一九九三年を境に大きく前後二期に区分される。その第一期ともいえる開校した一九八二年から九二年までの十年間の人権教育は講演会、映画鑑賞という形で行なわれており、不定期で開催されない年もあった。当時は人権教育とはいわず、同和教育という限定された分野の人権教育が行なわれていた。しかも、それは、初めは特別委員会として立ち上げ、後には生徒

の生活指導を行なう「生活指導委員会」の所管とされたため、どうしても十分な教育活動ができなかつた嫌いがある。

この開校以来十年間の人権教育の内容は管見の限りでは全て同和関係に対応したもののばかりで、八五・八七年の大串夏身氏（当時都立中央図書館）による同和教育講話、九〇年の小林初枝氏（当時児玉高校司書教諭）による「現在日本における人間の差別について」と題する講演などが五回、八八年の映画『橋のない川』、九一年の映画『ふれあいの門』の映画上映教室が二回で、関係箇所より取り組みの少なさが指摘されていたのも事実である。

そこで、学院では、人権教育の重要性に鑑み、一九九三年二月（九二年度末）の教諭会において一九九三年度からの「人権教育委員会」設置を決定したのである。一九九三年二月の教諭会資料によると「人権教育委員会を常設の委員会として設置する。従来、生活指導委員会で扱っていた『同和教育』については人権教育委員会に移管する」という提案がなされ、承認された。しかも、これまで「同和」に限定されていた分野が性、民族、障害、病気などありとあらゆる差別に対して教育を行う必要から、「人権教育」という名称に変えた。この期を境に、本庄高等学院の人権教育は大きく変わっていくのである。

この間の事情については、一九九三年度末に行なわれた埼玉県私立中学高等学校協会主催「平成五年度 私立小・中・高等・盲・養護学校 同和教育主任同和教育研究協議会」での本庄高等学院の報告に詳しい。今その報告書を抜粋すると、

本学院では一九八二年四月の開校以来、学内の一般的諸体制の

整備・日常の授業体制の確立に追われ、教育の根幹的課題としての〈人権〉への認識はあったがこの分野に於ける教育体制の確率・整備は必ずしも十分であつたとはいえない。学院創立四年目（一九八五年）より始めた同和教育は、一年生（二四〇名）を対象に毎年一度の同和教育講演会または同和教育映画上映会をおこなつてきた。〈中略〉。

しかし、教育実践面において更に充実を図り、三年間を通し一貫した人権教育を実施せねばならぬことは論を待たない。この認識に基づき、一九九三年度より学内組織として〈人権教育委員会〉を設置し、学内の教育体制の整備・実践を推進することとした。

本学院設置母体の早稲田大学には、大学全体における人権教育の場として、〈人権教育委員会〉が設置され、全学的規模で人権教育を推進している。本学院の〈人権教育委員会〉は、その実践を範としつつ高等学校としての独自の立場から推進して行くものがある。

と述べ、これまでの反省から、体制整備として委員会を組織し、一年より体系的に、しかも早稲田大学の〈人権教育委員会〉と連携して、行なつてゆくことを確認したのである。

こうして、一九九三年度以降の本庄高等学院の人権教育は、教務の下に組織された委員長をいたゞく独立した委員会において計画、実施されることになった。具体的な活動としては、まず、生徒に対しては、四月の新生オリエンテーションでの学院長による人権講話から始まり、十月の一・二年対象の人権教育映画の上映とアンケート、十二月

の全学年を対象とした外部講師による人権教育講話とアンケートを年間の柱とし、委員会は組主任の協力を得て、それら作業への準備・整理などの対応を行なうことになったのである。また、関連する各教科・科目（家庭・地歴・公民・国語など）の通常授業内でも人権を取り上げることとした。教員の活動としては埼玉県・児玉本庄・埼玉県私学人権教育研修会、早稲田大学人権教育委員会へ積極的に参加することとした。

一九九三年以降の本庄高等学院の人権教育の特徴は同和に限定せず、広く視野を広げ、かつテーマを設定し取り組んできたことがあげられる。それは、部落差別はもとより、障害差別、感染症差別、外国人差別、女性差別、イジメなどである。

一九九二年以前を含めた二十五年間で、一番多く取り上げたテーマは部落差別の問題である。それは先にも指摘した以外に、九三年、九七年には再び映画『橋のない川』を上映し、九三年度には「第一部・「完結編」をそれぞれ分けて上映した。また、劇場用映画ではないが、同和関係がらみとしての人権教育映画として、一九九八年と二〇〇三年に「サインはストリート」、一九九九年に「明日にスイング」（埼玉県教育委員会企画・毎日映画社製作）、二〇〇〇年に「風はみどりに」、二〇〇二年に「誇り高き男」（法務局人権擁護局・全日本同和对策協議会企画・東映映画社製作）を上映した。映画上映後にはアンケートを実施、感想はもとより、差別を受けた経験、差別をしたことの有無、同和差別に対する認識について生徒個々に自分の過去を振り返らせ、差別を受ける痛みと差別する醜さを繰り返し指導した。

人権教育に同和関係が占める割合が高いのは、いうまでも無く日本の人権教育の始まりが同和問題と結びついてきたからであるが、一九九三年以降には同和とは直接関係ない他の差別、新たな差別の問題をも取り上げることとなる。

感染症への差別問題としては、エイズ、ハンセン氏病を取り上げ、九五年にはエイズ感染者への差別を扱った人権教育映画「私を抱いて、そしてキスして」、二〇〇一年にはハンセン氏病差別を扱った日活映画「愛する」を上映した。ときあたかも、地球的規模でエイズ感染の広がりに伴い、わが国でもエイズ感染者が確認されるなど差別が懸念されていた時期でもあった。また、不治の病とされ、戦前において強制隔離・断種まで行なわれたハンセン氏病に対する差別への損害訴訟が起ったときでもあった。エイズもハンセン氏病も感染力は極めて微弱であり、そうした基礎知識の無さ、すなわち無知が差別を引き起こし、差別された者のいい難い苦しみと、反対に差別しない人の心の優しさを教えるよい機会となった。

外国人差別としては、二〇〇〇年に人権講話として早稲田大学より中原道子氏による「共生の二十一世紀、あなたは国境を越えられるか」という講演会を行なった。一九八〇年代から日本社会が三K（汚い、危険、きつい）の仕事を避け、高度に情報化されたサービスマスの発展により、肉体労働力が激減し、その労働力不足を埋めるようにインド、イラン、ブラジルなどから多くの外国人が入国した。本庄高等学院のある本庄児玉地域、利根川を渡り群馬県伊勢崎・大田地域でも顕著な現象となり、皮膚の色・言語・習慣の違い、経済的優位性からこうし

た外国人労働者への差別を起さないために行なったものである。かつての「朝鮮人差別」の反省に立っていることはいうまでもない。

外国人差別、民族差別教育として、特記すべきことに、修学旅行に関連した事前学習がある。本庄高等学院は開校以来修学旅行として北京大学付属中学との交流を柱に北京とその周辺を廻る修学旅行を行なって来た。修学旅行の前に事前学習として北京、中国の歴史と現状を学習する。そうしたおりに、戦前、軍国主義時代に中国に及ぼした民族的蔑視・差別に関する教育を行なってもきた。二〇〇三年の修学旅行は「サーズ」により中国北京への修学旅行が中止となり、その代替として北海道旅行が企画された。そこで、その折には、日本の先住民族である北海道アイヌへの差別についてアイヌ研究家の児島恭子氏に「北海道の先住民族アイヌの歴史と文化」を講演していただいた。人権講話と銘をうたなくとも、学校という教育機関の様々な機会を捉えて、人間の持つ差別意識をなくし、過去の差別の不条理さを、生徒たちに伝えることは、かなり効果的な人権教育といえよう。

女性差別としては、一九九九年に延興 桂(財団法人東京女性財団)氏による「男と女 対等なパートナー」、二〇〇六年度は青木玲子氏(WITH YOU 埼玉)による「共学化を迎えるにあたって」の講演をおこなった。男女機会均等法の下、男女共同参画社会を築くために、男社会の中で培われた女性への目に見えない差別、違和感を確認するよい機会であったと思う。特に二〇〇六年は、翌二〇〇七年度より女子を受け入れ共学になるということで、男子校の中で培われた女性への意識改革を狙ったものである。なお、共学化に伴い、二〇〇七年三

月には全教職員に対し早稲田大学セクシャルハラスメント委員会による研修会を行なった。差別意識は無いと自覚していても、何気なく使っている言葉に「はつと」させられることも多く、長い時間と徹底した意識改革が必要である。

先にあげた感染症差別とも絡むが、障害差別としては、九四年には映画「エレファントマン」を上映し、九六年には岩田恵子氏(社会福祉法人埼玉県社会福祉事業団)による「ろうあ者相談員として思うこと」、二〇〇五年の藤井輝明氏(熊本大学医学部)による自らの体験を語った「個性尊重の時代」と題する講演会を行なった。九六年の岩田氏による講演「ろうあ者相談員として思うこと」は、本庄高等学院生の中に聴覚障害者があり、聴覚障害の苦しみを他の生徒に理解してもらうために行なったものである。彼に対する学院の支援としては、教員への正面からの大きな声での授業を依頼し、同級生や市民のボランティアに授業の口述筆記、手話通訳などを依頼した。しかし、その回数などは誠に貧弱で十分な対応がとれたとはいえないものがある。反省として書き加えておくことにする。

ここ数年、超高度な情報化社会を迎え、携帯電話、メールなどの情報手段を通じて、他人を誹謗中傷し、いじめるなどの嫌がらせを行うことが頻繁に発生するようになり、社会問題化している。社会の縮図である学校においても、同様な問題が起き、ここ数年、生徒指導の対象に上るようなこともあった。そこで、情報科の授業「情報と文化」の中で、人権尊重の意味からも情報倫理を取り上げ、外部者に講演などをしていたこともあった。二〇〇三年の新入生ガイダンスで



行なった飯島清氏（埼玉県警察本部）による「ハイテク犯罪防止について」もそうした教育の一環である。

（佐々木幹雄）



B 棟 廊 下

### (3) 本庄高等学院

#### 傷害見舞基金発足の経緯

一九八七年四月に生徒担当教務副主任に就いた私の仕事の一つは、傷害見舞基金を発足させることでした。

当時、学校事故が多発し、社会的にも深刻な問題になってきていました。部活動中に起こった死亡事故や重傷事故は、特に父母にとりましては、精神的にも経済的にも大きな痛手であり、関係する部の顧問や学校関係者にとりましても大きな打撃として、マスコミ等に大きく報道されてきました。

学校事故による生徒の救済制度としましては、日本体育・学校健康センター（現独立法人 日本スポーツ振興センター）災害共済給付金）がありました。それは、「学校管理下で発生した事故による負傷、または疾病等に対して必要な給付を行い、学校教育の円滑な実施を目的とした」制度でした。また、本学院独自の共済制度も既に存在し、相互扶助によって学校内外を問わずに、生徒の疾病や不慮の事故、災害等による医療費を補助していました。しかし、予想外の大きな事故に対し、柔軟に対応できるものを、本学院はもっていませんでした。

このような状況にあつて、不慮の事故に対して、学校の管理責任の有無に関わらず、関係者として柔軟に対応できるような制度の発足が強く望まれていました。八七年十一月五日の定例教諭会で、本学院の傷害見舞基金制度を検討する委員が嘱任され、制度発足に向けて検討が

開始されました。検討委員会のメンバーは、青木宏（本年三月定年退職）、伊藤一雅、佐々木幹雄、山田庄一（本年三月定年退職）、渡辺良隆の各先生方、そして私羽田と事務所からは内藤博美氏でした。『早稲田大学学生事故救急基金規程』や『早稲田大学高等学院傷害見舞基金規程』等を参考にしながら、本学院の見舞基金規程案を作成する検討を開始しました。

傷害見舞基金制度の発足に先立って、翌年八八年四月二十一日の臨時教諭会では、生徒の事故等に関する賠償責任保険（現スポーツ賠償責任保険）に加入することが承認されました。この賠償責任保険は、「部活動等による事故により教員に法律上の損害賠償責任が発生した」時に支払われる保険でしたが、広く学校事故への対応の一つとしては、急を要するものでした。検討委員会は、同年九月二十九日には、『傷害見舞基金制度について（案）』をまとめることができました。十月六日の定例教諭会でその案が検討され、傷害見舞基金制度の発足が承認されました。翌八九年六月一日の定例教諭会で『傷害見舞基金規程』が承認され、六月十六日から施行されました。

発足時二、〇〇〇万円であった傷害見舞基金は、二〇〇六年度決算では、六、六〇〇万円余りに達しています。開校して二十五年ではありまなかつたことは、本当に幸いなことです。これからも、事故防止に努めることこそが、実は傷害見舞基金の趣旨にご賛同いただいで寄付していただいた方々の篤志に應えることではないかと考えております。

（羽田一郎）

#### (4) 生徒表彰について

本庄高等学院生の学芸、スポーツ、社会活動などの分野においての活躍は目覚ましい。開校以来、そうした活躍については、学期集会の折などに顕彰するという方法が長く取られてきた。それとは別に、在学三年間のさまざまな活躍を卒業式の中で顕彰し、父母に向けて示すことはもとより、後輩の在校生の前で顕彰することによって在校生にとつての大きな刺激にならないものかと考え、一九九八年三月の定例教諭会において、卒業式における生徒表彰について、「本庄高等学院在学中、学芸、スポーツ、その他の分野で、きわめて優秀な業績をあげた生徒を顕彰し、卒業にあたって賞状を授与し、記念品を贈呈する。」という趣旨で提案されたが、残念ながら、選考基準を検討する時間的余裕がないなどの理由で承認されず、同年そしてその翌年と、学院長が卒業式の祝辞の中で、活躍した生徒の名とその業績とに触れるという方式にとどまった。

生徒表彰について本格的に検討が始まったのは、大塚恵美子教諭が教務担当教務主任であった二〇〇〇年度からであった。学年からの後押しもあり、何回かの生徒表彰検討委員会を経て、本庄高等学院で最も権威ある賞として誕生したのが「早稲田大学本庄高等学院賞」で、二〇〇〇年十月五日の教諭会においてであった。

この生徒表彰は、学芸・スポーツ・社会活動の分野で目覚ましい活躍をした生徒を対象とすることになり、学芸の部門には卒業論文も含

まれたことから、その後、主に二年生を対象として行われる卒業論文優秀作品発表会という副産物を誕生させることになる。

ところで、この賞は、抜群の成績に限定される賞、例えばスポーツ部門であれば、全国大会出場レベルという受賞するのが非常に難しい賞である。一方で地道な努力を続けている生徒も少なからず存在する。そうした生徒を積極的に発掘し顕彰していこうという趣旨から二〇〇二年度から始まったのが、「早稲田大学本庄高等学院長賞」である。この学院長賞の対象は生徒及び教職員として、第一回の受賞者の中には、文部科学省から「スーパードクター・サイエンス・ハイスクール」の指定を受けるのに際し尽力した影森徹、木元保、半田亨の三教諭が含まれており、学院としてもたいへん喜ばしいことであった。

以上述べた二つの賞は、選考の難しさや受賞候補者の辞退など看過できない問題もなくはないが、様々な分野においての生徒諸君の頑張りを促し、それらを広く顕彰していこうという賞本来の目的は概ね達成されていると思われる。今後、一部変更はあり得るし、むしろそれは望ましいものとして受け入れ、末永く継承されることを強く望みたい。

### 早稲田大学本庄高等学院賞受賞者一覧

(吉田 茂)

二〇〇〇年度	渡辺雅泰・碓井 溪・高橋裕治・中川剛佑・田中晋矢
二〇〇一年度	井上智則・内堀智仁・後藤秀平・松島慎人・三越俊岳・渡辺淳一

### 早稲田大学本庄高等学院長賞受賞者一覧

二〇〇二年度	飯島健太・上野翔太
二〇〇三年度	齋藤直寿・寺田充利・松田純平・内堀貴文・渋谷卓史・安倍慎太郎
二〇〇四年度	甲斐伊織・武藤圭吾・吉田 俊・坂本広樹・柴田 俊・岸本大路・清水智文・小西英昭・羽鳥文久
二〇〇五年度	関根 崇
二〇〇六年度	中尾光良・片岡大典・倉林朗士・軽部友剛・中橋 翔・茂木翔太郎・早野雅人・飯田貴也・柄澤彰良・櫻井佑樹
二〇〇二年度	竹内裕介・田村法人・松崎 健・川崎雅彦・渡辺真一・影森 徹・木元 保・半田 亨
二〇〇三年度	鎌田 徹・大野圭祐・黒田悠介・眞々田敏弘・金子尚弘・白石和久・堀哲之介・山崎俊佑・堀口祐樹
二〇〇四年度	藤原 拓・武藤 優・橋本夏樹・巻 和典・上田聡嗣・松下清隆
二〇〇五年度	木村 隼・松山智樹・衣袋 聡・入澤瑛文・今井亮太・後藤洋平・澤田文彦・原 和弘
二〇〇六年度	弦本康孝・長谷川毅・石井 淳・小山達也・島田雄太・野村正和・衣笠慎吾

## (5) 保健室

集団生活の場では、インフルエンザなど多くの感染症が蔓延する。特に、同年代が集まる学校という場ではそのリスクは高い。学校保健法により、学校伝染病の予防は講じられているものの、ひとたびこの場に侵入した細菌・ウィルスを完全に封じ込めることは未だ困難である。学院の二十五年間においても、様々な感染症が流行し、その中でも主だった集団感染と最近の感染症に関する出来事について、触れてみようと思う。

### 一 結核感染

一九八八年、生徒が結核を発症し、接触者のうち四十六名に感染があったとされ、予防内服が推奨された。その後二年間、定期外検診で経過観察を行った。結核は過去の病気と思われがちであるが、その後一九九三年、WHOは結核の非常事態宣言を発表している。日本では一九九七年、これまで減少を続けてきた新規発生結核患者数が三十八年ぶりに、罹患率が四十三年ぶりに増加に転じたことが明らかになり、一九九九年、厚生省(当時)は結核緊急事態宣言を発表し、再興感染症としての結核問題を提議した。

### 二 ノロウイルス集団感染

二〇〇五年六月二十二日(水)、朝の始業前から、吐き気・嘔吐などの症状を訴える数人の生徒が保健室を訪れた。様子を聞くと、同様の

症状の者が複数いるという。あれよあれよという間に、保健室は同様な症状を訴える生徒で満員になり、悪い予感がよぎる。そこへ事務所から、欠席連絡が平常時より多く、同様な症状を訴える者が多い、との連絡が入り、悪い予感は加速度を増す。すがる思いで学校医へ電話連絡。様子を聞きつけた教務の先生が保健室を訪れ、医療機関へ搬送。そこから怒涛の二週間が始まる。保健所の検査により、原因ウィルスがノロウイルスと判明したのは三日後。TVニュースや新聞にも取り上げられ、学院では百八十名近くが、感染したとされる。

感染源・感染経路は特定できなかったが、これにより学院食堂は改装され、空調が整備され、照度も明るくなった。手洗い励行を必死に訴えたものの、手洗い場がほぼトイレしかなかったため、学食付近、保健室前に手洗い場が新設された。多くの学院生に「体調不良」という大きな犠牲をはらった結果、学院の衛生環境は多少改善された。そして感染症のアウトブレイクは二度と避けたいという思いが、今なお強く残り、予防に力を注ぐ原動力となっている。

二〇〇六年冬、ホテル等でのノロウイルス集団感染がマスコミで頻繁に取り上げられるようになり、国民の不安が高まったとき、学院生は比較的落ち着いていて感染者も少なく、周辺地域の学校との温度差を感じた。実際に学院生が免疫を持っているか否かは定かではないが、過去の経験が、このような形で生かされるケースもあるであろう。

### 三 麻疹集団感染のため大学休講

二〇〇七年五月、関東地方を中心に麻疹(はしか)が猛威を振るい、

首都圏の大学の多くが集団感染により休講措置をとった。早稲田大学も一週間程度休講となり、今（二〇〇七年七月現在）なお、麻疹の集団感染対策を講じている最中である。学院生は通学圏が広いため、感染が心配されたが、幸いにも患者の報告はなかった。五月下旬、急遽、麻疹のワクチン接種歴・既往歴を調査したところ、麻疹ワクチン接種済みもしくは罹患済の生徒（麻疹に対する抗体を持っているであろう生徒）の率は九八%であった。だが、一回のワクチン接種では十分な免疫を獲得しない場合もあるとされているため、実際に抗体検査をしてみないと、この集団がどの程度の集団感染抑止力を持っているのかわからない。

また、この麻疹の流行に伴い、マスコミでも大きくこのニュースが取り扱われた結果、抗体検査の試薬や麻疹単抗原ワクチンが不足するなど、不測の事態が起きた。このように流行期に抗体検査、ワクチン接種をすることは困難であるため、常日頃から、ワクチン接種を推奨する必要性を痛感する出来事となった。

今後も学院が様々な感染症に脅かされることは想定される。目に見えぬものだけに、常に不安を感じつつも、予防に重点をおいた健康教育を推進することが私の使命であると感じている。

（斎藤香織）

## (6) 稲稜祭

— 「迷ったらGO!」 —

一九九七年五月。稲稜祭実行委員長となった江坂悠君から相談を受けた。「ここ数年入場者数が減少傾向で、昨年度の来場者数が一〇〇〇名程度、今年が入場者を増やしたいのですが。盛大に実施するにはどうしたらいいでしょうか。」二人でしばらく相談した後の結論は「生徒が稲稜祭でやりたいことをすべて実施できるように実行委員と教員が力を合わせよう」というもので、合言葉は「迷ったらGOだ!」という方向で話がまとまった。

すぐに実行委員会を召集。生徒が何をやりたいのか、実行委員からアイデアを募集した。

「有名人の講演会の開催」「アイドルを呼びたい」「屋台を増やしたい」「教員と生徒の枠を超えたバリアフリーの企画」「お客さんがワクワク楽しくなるような雰囲気を」「後夜祭の実施」等様々なアイデアが飛び交った。また、教室数の不足から希望クラスのみにとどまっているクラス企画参加についても全クラス参加の方向で進めることにした。実行委員から出る様々なアイデアを前に、江坂君とどこまで実現できるか不安になった。しかし、「迷ったらGO。」とにかく前に進むことにした。

企画をするにはまずお金。予算の総額は決まっていたので、新企画のために増額することは出来ない。そこで、前年度カラー印刷で六〇万円ほどかかっていたパンフレットとポスターを白黒印刷にすること

で予算を三分の一に押さえた。続いては有名人をどう呼ぶか。アイド  
ルを呼ぶことはさすがに難しかったが、榎本隆学院長にお骨折り願ひ、  
当時朝のニュースワイドのキャスターとして活躍されていたフジテレ  
ビアナウンサーの向坂樹興氏を招くことが出来た。次はバリアフリー  
企画。障害者と健常者のバリアフリー企画を生徒会企画として実施。

この企画には自らの聴覚障害を克服し、勉学に励む池上真君とクラス  
メイトの犬塚直志君が準備を進めた。また、教員と生徒のバリアフリー  
として対抗クイズ大会を開催することにした。さらに、尺八の名人の  
坂井淳一先生と事務職員の高橋かおるさんのフルートによるジョイン  
ト演奏会もこの企画に加わった。そして後夜祭。この実施には過去に  
紺碧の空で生徒が騒ぎすぎて怪我人が出ていたこともあり、先生方と  
の交渉が難航したが、そこは日頃から早稲田の自由を愛する先生方の  
寛大な意見が後押しし、実施の方向となった。

普段はおとなしいタイプの江坂君だったが、実行委員長となり、俄  
然リーダーシップを発揮するようになった。また、そんな彼の変貌振  
りを見て多くの仲間たちのサポートの輪が広がり、準備も順調に進ん  
でいった。準備の過程の中、犬塚君は八月の全国手話コンテストに出  
場、見事三位に入賞し、バリアフリー企画は素晴らしい成果に結びつ  
いた。十月に入りポスターが完成。大久保山を象徴する自転車通学生  
の白黒印刷絵柄に、墨でくっきりと書かれた稲稜際の文字が躍ってい  
る。実行委員が一般の生徒に呼びかけ、生徒たちそれぞれの住む広い  
地域に数多く貼ってもらうよう依頼した。そして、半年の準備もあっ  
という間に終わり、当日の朝を迎えた。

稲稜祭は二日間ともみんなの願いが届いたかのような秋晴れに恵ま  
れた。オープニング、早実出身の向坂氏の講演会是一般の観客も多数  
入場し、好評だった。対抗クイズ大会は教員チームの勝利となったが、  
生徒たちも健闘した。ジョイントコンサートは大教室に入りきれない  
ほどの人気となり、私は坂井先生と高橋さんの衣装の裾だけしか見ら  
れなかった。

教室数の不足で心配された全クラス参加のクラス企画もいくつかの  
クラスが演劇、映画、ゲーム等で教室を利用しないで出来る企画を行っ  
たため、教室配分もスムーズに行えた。ホーム参加の屋台の数もふえ、  
中庭もにぎわった。駐車場ではクリエーター部の手作りゴーカートの  
試乗会も行われ、大久保山のそこかしこに笑顔の輪が広がった。

そして、体育館で開催した後夜祭。ザプスキー先生や渡辺先生の歌、  
生徒たちの歌、踊り、心配された「紺碧の空」も稲稜祭を締めるにふ  
さわしい健康的な盛り上がりで無事終了した。後片付けも終わり、集  
合した実行委員たちの満足そうな笑顔。「盛り上がったな。」「全クラ  
ス参加でよかった!」「楽しかったぜ。」「口々に出る嬉しそうな感想。  
みんなが協力して作り上げた稲稜祭という祭がいかに充実したもので  
あったか、みんなの生き生きとした表情が語っていた。そして、沸き  
あがった「委員長。よくやったぞ!」「江坂、がんばった甲斐があった  
な。」の声。「いや、みんなのおかげさ。」そう答える江坂君の目には光  
るものがあった。

数日後、来場者数の集計が発表された。入場者数一四五六名。教務  
室に報告に来てくれた江坂君が私に言ってくれた。「先生、迷ったらG

O。よかったです。ありがとうございます。」彼の言葉に胸がいっぱいになり、私はしばらく返事をする事が出来なかった。

(田邊 潤)

## (7) 生徒会公認団体 (クラブ活動)

### 應援部

創部以来、数々の試合に出かけて行きました。いったい何回、そして総勢何人の部員達と応援に出かけて行っただけでしょう。その度、感動し、応援できる喜びを感じてきました。今でもその時々の様子が目に浮かんできます。「試合に負けるのは我々の応援が足りなかったときだ」という姿勢で日々応援活動をしています。これは私が顧問になっ

た時、当時の団長から一番大切な心構えとして忠告された精神です。

共学化に伴いチアリーダー部が應援部内に誕生しました。これまでと基本的な方針に変わりはありませんが、これまで以上に慕われるように、一同更に努力を重ねていくつもりです。

今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

(加藤裕章)



## 硬式テニス部

私は本庄学院へ一九八六年に採用された。その折、硬式野球部の顧問を命ぜられた。いきなり監督となり八年間続けたが、まったく素人だった私には本当につらい日々だった。ノックもできず、技術的な指導もできず、選手の健康管理の知識すらなかった。このような危険の伴うスポーツの監督として自分のような素人を割り当てる学校の姿勢が信じられなかった。ある日、ピッチングマシンを使ったフリーバッティング練習の最中、バッターの打ったライナーがマシンの球入れをしていた選手の頭を直撃し、救急車を呼ぶという事故が起こった。結果として短期間の入院で全快することができたが、この事故は「注意喚起の態勢づくりをしつかりしていれば起こらなかった」という深い後悔を私に与えた。

一九九四年、夏の大会を最後に野球部顧問を辞退し、少しは経験のあった硬式テニス部の副顧問となった。その直後、開校以来長く正顧問だった加納先生が定年退職をなされ、私が正顧問となった。それからしばらくは私が教務副主任を命ぜられていた時期もあり、部活動としてうまく運営できなかったが、二〇〇〇年代に入りOBの柳内君との連携で早稲田大学庭球部の協力を仰ぐ体制を作るとともに、部員たちの継続的な努力もあり、次第に意識が高くなっていった。二〇〇二年度野口主将(当時二年)の代には新人戦団体戦で初めて県の第3シードを得ることができた。しかし初戦で西武台に2-3で敗れた。そのとき、私は恥をしのいで西武台の監督に「うちと対戦するに際し、ど

のようなことを考えたのか」と聞いた。当時、私は「テニスの醍醐味はシングルス、ダブルスや団体戦は付属品」と考えていた。しかし、この敗戦は「当てる方によって力が上のチームにも勝ちうる」という団体戦の奥深さを教えてくれた。翌二〇〇三年春関東予選大会団体戦はベスト16で終わった。

代が変わった秋の新人戦団体戦は橋本主将の下、ベスト4決で農大三高に2-3で負け、ベスト8で終わった。二〇〇四年春関東予選大会団体戦ではシングル1として新一年の茂木が加わり、ダブルスへ橋本を回す余裕ができた。シングル1茂木、シングル2上田、相手戦力に応じてダブルスを橋本・松下、橋本・巻のいずれかにするという布陣で、3位決定戦で宿敵農大三高に勝ち、初の関東大会出場を獲得することができた。関東では初戦山梨学院に勝ち、二回戦第2シード藤沢翔嶺に負けベスト16であった。その直後のインターハイ予選では第2シード伊奈学園に勝ち、初の決勝で浦和学院に敗れた。本庄学院はスポーツ校でないため、選手の獲得が簡単にできるわけではない。そのため、シングルス・ダブルスの個人戦の成績はいいところ県のベスト16程度である。それなのに、団体戦ではなんと県の準優勝までいきつくことができた。私にとって「団体戦には個人の技術の集合だけではない要素がある」ということを勉強できた年であった。新人戦シングルスでは茂木が3位になったことも特筆される。

代が変わった秋の新人戦団体戦(末松主将)は農大三高に2-3で惜敗してベスト8であった。2-2でシングル3(中橋)を迎え、双方足を痙攣させながらタイブレークで終わるといふ熱戦であった。負





2004年初の関東大会出場メンバー  
右から上田(S2)、巻(D)、橋本(D)、松下(D)、  
茂木(S1)、半田



2005年初の全国選拔出場メンバー  
下右から中尾(D)、中橋(D)、倉林(S3)、千  
葉(D)、上右から軽部(D)、茂木(S1)、田村  
(S2)、田中(D)、片岡(D)、半田

けたとはいえ、見る者に「団体戦はいいな」という感動を与えてくれる試合であった。

二〇〇五年三年茂木・倉林・中橋に新年田村と千葉を加えて臨んだ春は7位で終わった。第2シードで迎えた秋新人戦団体戦(中橋主将)では、ベスト4決の農大三高戦で前年と同様シングルス3に勝敗がかかりしかもタイブレイクという熱戦となった。シングルス3倉林の踏ん張りにより制することができた。この後の関東選抜・全国選抜を通して、決勝で浦和学院に負け、2位決定戦で伊奈学園に勝ち、初の関東選抜大会へ出場することとなった。立教戦・伊奈戦共にシングルス3倉

林の踏ん張りが大きかった。十二月の関東選抜では9位に入り、初の全国選抜出場となった。三月博多で開催された全国選抜では四国1位愛媛の新田と初戦を戦い、1-4で敗れた。特に新田のダブルスの、派手なプレーはないがよく戦略を考え、堅実にポイントを重ねる試合進行は大いに勉強になった。また関東選抜から未来性を見越して試合に起用した田中の成長は、今後にとって大きかった。

二〇〇六年春関東予選大会は準優勝で団体戦、茂木も4位でシングルス出場を決めた。団体は初戦前橋育英に勝ち、二回戦堀越に敗れ、またしてもベスト16で終わった。茂木は初戦で鈴木(足工大)に敗れた。インハイ予選ではまたしても決勝で浦和学院に敗れたが、茂木は

シングルス3位でインターハイ出場を決めた(初戦三重1位前川(四日市工)に6-8で惜敗)。

茂木・倉林・中橋・軽部たちが抜け、層が薄くなると評された秋新人戦団体戦(主将田村)は第5シードで臨んだ。が、関東選抜出場候補だった第4シード伊奈学園を3-2で破ることができ、一挙に勢いがついた。この勝利には、新人戦シングルス県3位だった伊奈学園シングルス1馬場を6-2で破った千葉の功績が大きい。準決勝でまたしても浦和学院に負けたが、3位決定戦で川越東に勝ち、2位決定戦で立教新座に3-2で勝つことができ、二度目の関東選拔出場を決めることができた。伊奈戦、立教戦ともシングルス3倉林(弟)の活躍が大きい。このときの関東選抜では、私

の人生上もつとも悔しい敗戦をした。全国出場をかけた試合で前橋育英と対戦した。練習試合も行う相手で、近年は多少分が良かった。そのような背景もあり、いつもはじっくり相手の戦力情報を集め、当てる方を検討していたのに、このときは前夜のミーティングもそこそこに「これで大丈夫だろう」というスタンスで臨んでしまった。結果は嵐の中の試合、2-1で敗れ全国選抜を逃した。相手の出し方は決まっておおり当てる方と考えると十分に勝てた試合であった。「団体戦では、監督は『万全と堅実』を忘れてはいけない」という教訓である。この敗戦は、この後も悔しく思い出されることだろう。

二〇〇七年春第4シードから関東大会へ出場することができた。初戦は関東選抜最終戦で4-1で勝っていた茨城の霞ヶ浦である。しかし、0-3で完敗であった。相手のこの間の成長の度合がうちよりも大きかった。

以上、最近の戦況をざっと綴った。関東大会常連校となり「早稲田は、個人は大したことないけど団体は強いよな」と評価されるようになった。しかしそれ以上に大きく変わったものがある。それは、部員たちの部に対するプライドと練習意識である。確かに戦力は、県外の強豪校から練習試合をお願いされることも多くなり、また今春までお世話になった小草コーチ、今春からお世話になっている松本・近藤コーチの指導が得られ、上がってきたと思う。が、それ以上に団体戦における選手・応援者の一体感が部の団結意識を向上させた。今では、私が何も言わなくても雨天後はコートに雑巾がけし、ローラーを引いている。二十五年の歴史の中で「早大本庄硬式テニス部はこういう部活

だ」という伝統が形成されようとしている。

二〇〇七年度からの共学化に伴い、女子三名（春田・小泉・木場）が入部した。女子部も新たな伝統作りにこれから取り組むこととなる。

（半田 亨）

## 剣道部

### — 剣道部の四半世紀 —

高体連剣道専門部では、東西南北の四地区に分けて地区大会を四月と九月に、年に二回実施している。二年前の区割り変更により強豪校が数校、剣道でも北部に編入となり、関東大会への道が更に険しいものとなった。現行方式ではその会場は寄居の愛宕記念館がほぼ定番となってきたが、かつては各校持ち回りで開催していた。

昭和六十一年春の大会は、本庄高等学院が開催校で実施された。当キャンパスは広大ゆえ、初めて訪れる大会参加者が迷わずに体育館にたどり着けるように、懇切丁寧な案内を随所に出されるなど当時の顧問・吉田茂樹先生は大変なご苦労をされ、無事に大会を成功に導かれた。開会式で神澤初代院長が、児玉七党の歴史等も交えた会場校挨拶をされたことが記憶に残っている。

一般的に、柔道や剣道といった武道を格技として授業に組み込んでいる高校が、特に公立の場合には多いようであるが、本学の課程は異なっている。この事実と、格技場が設置されなかったという現実（および永年に亘る大学への建設要求にも答えが無いこと）との関係は、

今の我々には知る由も無い。ただ在るのは、武道の場合には精神的中心、拠り所として大変重要な意味を持つ「道場」抜きでこの四半世紀を過ごし、剣道部は今年二六期生を、初の女子部員も含めて迎えるに至っているという現実だけである。

専用道場無きが故に、学院体育館と共通教室等をローテーションで他の部と使い分けして居り、現在は木曜と日曜を除く週五日の稽古回数となっている。

武道の鍛錬では通常、冬夏の酷寒酷暑を乗り切る、寒稽古や暑中稽古が付きものである。これも我が本庄学院では儘ならない。何故か伝統的に海外帰国生と遠隔地からの生徒が多く、八月はホームが閉鎖となるために、通いの稽古に十分な人員が揃わない為である。いきおい、休暇中は合宿による鍛錬に頼ることが多くならざるを得ない。

他の部にとってもそうであるが、セミナーハウスが我々には何の相談も無く、代替施設も無いままに全く突然閉鎖となり、ドミトリへ改装されてしまったことも合宿運営の上では大きな痛手であった。簡易ベッドで普通教室に宿泊するというのは、世間に胸を張ってPRできる、例えば受験生向け学院案内に写真付で載せられるような事柄では所詮ないであろう。

歴史を振り返り目に付くのは、大学の本学に対する無理解と冷淡な扱いばかりとなってしまうが、このように劣悪な環境にもメゲることなく、生徒は二十五年間、剣道を通し心身の鍛錬に励んで来た。インターハイ出場実績で大学への推薦入学を勝ち取るといった他の高校に見られる動機とも無縁で、所謂「ハングリー精神」からは遠い者が大

多数であるが、生涯剣道に繋がる、正道を行く剣道を念頭に、我々は日々生徒と鍛錬を続けている。

定員増・共学に伴う新施設が、過去二五年間に亘る劣悪環境打破となることを衷心より願って稿を閉じさせて頂く。

(利根川博司)

## サッカー部

サッカー部の活動は、仮設グラウンド(現ラグビー場)で始まりました。回りには「まむしに注意」の看板が立っています。雨が降ると回りは池だらけ。ボール拾いが大変でした。

十月からは北側にグラウンドができ部員も練習に集中できるようになりました。練習試合も春休みに実現し、本庄北を1対0で破り、四月から高体連登録。サッカー部の歴史が始まりました。

八月に「苗場」合宿(五泊六日)。その後ホーム生はセミナーハウスに宿泊し練習。二十三年前のセミナーハウスは、空調なし、蚊取り線香を



1984年苗場合宿

たいて二段ベットと最悪の環境でした。一回戦は台風接近のなか、大宮高校で所沢商を2対0で勝利。次の日、児玉で二回戦が行われるため生徒全員セミナーハウスに宿泊し、試合に臨みました。残念ながら秩父高校に敗れてしまいました。

一九九〇年度新人戦北部地区大会で三位、県大会出場を果たしました。一回戦を突破し、ベスト16(川口工業に惜敗)。四月の関東大会予選では、キャプテン南部を中心に奮起しベスト8に進出(浦和学院に0-1)。十年目にして目標を達成することが出来ました。選手権予選も初の二次リーグ進出を果たしましたが、リーグ四位でベスト8進出

2005年選手権決勝トーナメント			1991年関東県大会	
早大本庄		武蔵越生	1	高橋 雄司
西田多嘉浩	GK	木谷 祐貴	2	伊藤 隆広
岡元 政樹		湯川 哲平	3	佐々木 学
今井 純		佐久間優太	4	當間 尚久
戸井田徹也	DF	山藤 喬也	5	岡部 幸礼
石井 誠		田端 裕也	6	柿原 直毅
中澤 拓朗		石井 勇也	7	南部 聡
田中 佑樹	MF	青木 謙太	8	松尾 繁
徳光 逸兵衛		鈴木 竜也	9	桑原 栄二
岡元 栄樹		西川史剛	10	元井 光夫
安倍 元晴	FW	高橋 純也	11	田中 孝則
高橋 大樹		伊藤聡次郎	12	黒須 研太
			13	金子 貴
			14	大河内政典
			15	佐々木洋平
			16	近藤 和正
			17	柿田 亮介
			18	黒須 隆文
			19	小林 秀行
			20	松井 康博
			21	小林 裕介
			22	森 敬和
得点者(アシスト)				
〔早〕高橋(安倍)				
〔武〕高橋(鈴木)・高橋(田中)				
高橋(田中)				
交代				
〔早〕折原(安倍)・山田(岡元)				



1991年選手権メンバー

はなりません。九三年もベスト16まで進出しましたが、その後は一次予選突破は難しくなりました。

二〇〇〇年度の北部新人戦準優勝をきっかけに、各大会の県出場を果たし、〇二年度県新人戦では準々決勝後半まで1-0でリードしていましたが、ロスタイムに追いつかれて延長・PKのすえ花咲徳栄に敗れ、ベスト4進出を逃してしまいました。

〇三年から強化策の一環として、苗場合宿以外に草津(八月)・波崎(三月)遠征を行ってきました。〇五年選手権二次リーグを二位で通過。駒場スタジアムでベスト8をかけ武蔵越生と対戦しましたが、1-3で逆転負け、初の八強入りを逃しました。初の決勝トーナメント進出とあって、スタジアムには一期生の糸日谷・笙君をはじめ百名以上のOBの方々が応援に駆けつけてくれました。

「俺たちのときはレベルが違う」  
「よく頑張った。駒場でできるなんてすごい」励ましの言葉をいただきました。

二六年目をむかえ、OB二九八名、現役六一名、サッカーを愛し、夢を追いかけて頑張っています。

(若林 正)

## 体操部

学院体操部の歴史は、創立一年目からスタートしている。ただし、体育館がなく教室(B二〇四)を借りてのマット運動のみの活動であり、初代キャプテンの小島泰幸氏を中心にレスリングを希望する大野明氏を加えた三、四人での小さな所帯から始まっている。

以後、ほとんどが体操競技未経験者だが、それでも毎年数名の入部希望があり、出入りの多い状態ではあったが何とか今日まで活動を継続してきた。現本庄市長でもある吉田信解氏も実は我が体操部の二代目のキャプテンであった。

アテネオリンピックの影響か、二〇〇五年には大量の入部希望者があり一気に活動が活発になった。全員初心者ではあったが、熱心に練習に参加し、驚くほどの成長を見せてくれた。戦績もレベルの高い埼玉県で団体で五位に入るなど、現キャプテンの塩原巧真君を中心に、始まって以来のすばらしい結果を残してくれた。α選抜での入部者もこの所統いており、今後が楽しみである。

二〇〇六年インターハイ予選 団体七位

新人戦兼関東大会予選 団体五位

二〇〇七年関東大会二次予選会 団体六位

関東大会出場(二年 浦野翔太)  
インターハイ予選 団体六位

(渡辺良隆)

## 卓球部

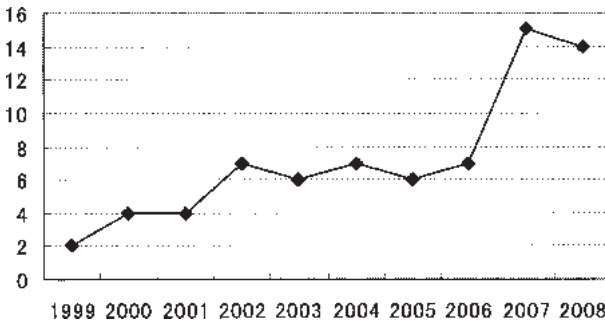
—数字で見る卓球部—

二十五周年を迎えることができ、誠に喜ばしい限りです。さて私が卓球部顧問を担当してから八年が経過しました。その中で部員数やランキングなど数に関して感じたことを皆様に紹介したいと思います。

### 部員数の推移

下のグラフと次頁の表は一九九九年からの部員数をまとめたものです。例えば二〇〇五年であれば福島君の同級生が六人いたということの意味しています。以前と比較しますと部員数が近年急増していることが分かります。このため活気があり廃部という不安はあり

部員数の推移



ませんが、一九九九〜二〇〇一年の頃と比較すると二人で一台卓球台を使えること、練習試合の組み易さなどは失われつつあるのではと考えています。

年度	部員数	主 成 績
一九九九	二	新人戦県北予選ベスト4 (小山)
二〇〇〇	四	県北大会ベスト16 (田中)
二〇〇一	四	高校総体県北予選ベスト8 (池田)
二〇〇二	七	県北大会準優勝 (団体)
二〇〇三	六	県北大会ベスト4 (池田)
二〇〇四	七	県北大会ベスト16 (中村)
二〇〇五	六	高校総体県北予選ベスト8 (団体)
二〇〇六	七	高校総体県北予選ベスト8 (吉川)
二〇〇七	十五	高校総体県北予選ベスト8 (団体)

※内容に齟齬がある場合はどうぞお知らせください。

**本庄高等学院出身の幹事長**

関谷君 (18期生) は本学院の卓球部に所属しており、早稲田大学に進学した後も卓球部に入部し、最終的には関東学生連盟において幹事長を務めました。(これは二〇〇五年九月六日スポーツ報知にも紹介されています)彼は全国で活躍するような選手にはなれませんでしたでしたが、学生卓球界において最も貢献をした学院生と言えます。

**最強の学院生**

ここ八年間で最強の選手は誰でしょうか? 私の独断と偏見で選ば

せていただきますと小山君 (17期生) であると思います。彼は安定性と威力を兼ね備えた両ハンドドライブを打つことができ、サーブスのコントロールにも高い技術を持っていました。彼は高校二年生の春までは地区予選三回戦で負けてしまうような選手でした。しかし遠方から通学しているにもかかわらず毎日遅くまで練習をし、その年の秋には驚くほど上達していたことを今でも鮮明に覚えています。

一方で一九九六年以降の最強の選手は誰になるのでしょうか? 練習試合の時に他校の顧問の先生の話から判断しますと、関東大会団体戦出場、インターハイ埼玉県予選でベスト8に入った君山君、翌年の関東大会団体戦出場の原動力となった大場君ではないかと思われま

す。以下の表に顧問が独断と偏見で選ぶランキングを載せます。もつと以前に強い選手がいたというご批判はあるかもしれませんが、そこはご容赦ください。

最近の学院生は残念ながら、まだここで紹介した先輩達に到達していません。しかしながら能力はありますので、努力次第でもつと強くなれるのではと考えています。

**顧問が独断と偏見で選ぶランキング**

ランク	氏 名	期生	主 成 績
1	君山 誠	14	高校総体県北予選ベスト8 (S)
2	大場 卓	15	関東大会出場 (T)
3	鳥越 龍亮	15	関東大会出場 (T)
4	小山 慎也	17	新人戦県北予選ベスト4 (S)
5	池田 太一	20	県北大会ベスト4 (S)

6	中村 光明	21	県北大ベスト4 (D)
7	赤澤 宗俊	15	関東大会出場 (D)
8	倉林 恭助	20	県北大大会準優勝 (T)

※T：団体戦 S：シングルス D：ダブルス

### 女子卓球部

二〇〇七年度から共学化に伴い女子卓球部が創設されました。現在、部員数は四人ですが、全員初心者のため、フォアハンドのラリーが三十本続くような日々練習を重ねています。

(宮田庸一)

### 軟式テニス部

本庄高等学院の軟式テニス部は、開校時は同好会として発足し、翌年度に部となった。ちなみに、競技名は現在「ソフトテニス」とするのだが正式だが、学院の部としては、発足当時の一般呼称であった「軟式テニス」を継承している。

これまでに正顧問を担当したのは、吉田茂教諭(一九八三〜九九年度)、曾原祥隆教諭(二〇〇〇〜二〇〇二年度)、川鶴進一(二〇〇三年度〜)、上田太郎教諭(二〇〇七年度〜)である(括弧内は正顧問担当年度を示す。副顧問担当は割愛した)。〇七年度の共学化により、新たに女子部も発足し、正顧問二名の体制となった。以下、執筆者が正顧問となった〇三年度以降の部の状況を、簡潔に記すことにしたい。

### (1) 活動状況

部員数は三学年あわせて三十名前後で推移している。部長が中心となって練習メニューを組むという形で、生徒主体の練習を毎日行っている。

### (2) 主な戦績

(a) 高体連主催大会の団体戦……ソフトテニスの団体戦は三ペアの対戦結果による。わが部の最高戦績は県大会ベスト八で、〇三年度の総体県予選、〇五・〇六年度の県インドア大会、〇六年度の県新人大会、の計四回を数える。

(b) 高体連主催大会の個人戦……特筆すべきは、〇七年度に千代田和樹・徳永優作ペアが関東大会出場を果たしたことである。学院生としては一期生以来となる二十四年ぶり二度目の快挙となった。また県大会での最高戦績は、〇三年度新人戦での並木康統・高木佑斗ペアの県ベスト八である。当時一年生だった二人の健闘が光った。

(c) その他……毎年一月開催の県私学大会では、〇五・〇六年度に団体戦三位となった。また、毎年八月開催の東京六大学附属系属高校ソフトテニス大会は、三十七回の伝統を有し、しかも三年生部員の引退試合となるため、部員にとって思い入れの強い大会なのだが、〇五〜〇七年度にかけて次のような好成績を収めることができた。

団体戦(九校中)……〇五年度・三位、〇六年度・準優勝、〇七年度・優勝(初)。

個人戦……三年連続優勝(並木・高木ペア、原田卓・平井一成ペア、千代田・徳永ペア)。

## (3) 今後について

ソフトテニス、硬式テニスをもとにして日本で生まれた競技だが、その魅力の一つにペアの連携が挙げられよう。シングルスは殆ど行われず、ダブルス形式が基本となるため、前衛・後衛がそれぞれの役割を果たしながら、相手と駆け引きを行うことが重要となる。今後この競技の特質を活かし、部員同士の繋がりを重視していきたいと考えている。

最後に、新たに発足した女子部について触れておく。現在の部員数は一年生五名。全員が学院入学後にソフトテニスを始めたばかりで、きわだった戦績はない。また全員が新幹線通学のため、練習日は週三日程度となっている。練習機会は男子に比べ少ないが、練習には熱意をもって取り組んでおり、何よりも部活動を楽しんでいる姿が印象的である。今後は男子同様、生徒主体の部へと進展していくことを願う。

(川鶴進一)

## バドミントン部

執筆者は二〇〇二年度よりバドミントン部の顧問となった。以来、今日に至る部の状況を記したい。

顧問となった最初の年、部活の中で一番の技量を誇ったのは二年生の金子尚弘君であった。彼は中学時代から選手として活躍した実績を持ち、むしろ勝利に貪欲であったとは言い難い部活を変えようと必死であった。若者らしい性急さがあったことは否めないが、同級の部員

はがんばって彼についていった。結果、金子君以外にも複数の県大会出場者が輩出されたことは高く評価して良いだろう。三年次最後の大会、団体戦では県大会進出を逃したものの、金子君自身は個人戦シングルス・ダブルスの二冠を達成した。特記するべきは、一年下の吉田俊君をダブルスのパートナーに指名し、初心者であった吉田君の技術を大いに引き上げ、県北地区有数のダブルス・プレーヤーに育て上げたことである。翌年、部長は吉田君に引き継がれたから、金子君の功績はまことに大きなものがある。

金子君を引き継いだ吉田君も、懸命に部活を率いた。選手としては金子君の後塵を拝したが、その人柄から他の部員の信頼も篤く、部の雰囲気は非常に良かったと思う。吉田君が部長を引き継いだ当初、中学からの経験者がいなかったため、公式戦ではなかなか思うように勝つことができなかった。しかし、腐ることなく、熱心に練習に励む姿を今でも鮮明に覚えている。

吉田君の後を継いだのは稲橋宏一郎君であった。彼は中学時代にテニスをやっており、また体力的にも恵まれていたから、中心選手として活躍してくれた。寡黙ではあったが、自ら部長に名乗りを上げ、その強い責任感から部内に良く気を配り、部員たちにも慕われていたように思う。

そうした中、部の勝ち頭であったのが、小林雅史君である。彼は中学時代に関東大会で勝利を収めた経歴を持ち、既に一年生の段階でシングルス三位を果たしている。その後、二年次にも順調に勝利を積み重ね、新人大会ではシングルス・ダブルスの二冠に輝いた。特にシン



グールの第二セット目は相手に一点も奪われぬ完璧な勝利を収め、県北地区随一のプレーヤーとなった。部長として迎えた最後の学総体個人戦シングルスにおいて、見事連覇を果たした小林君は、驚異的な勝率を残しつつ、引退した。

小林君引退の後、部長となったのは齋藤雄司君であった。残念ながら彼の代には圧倒的なエースは存在しなかったが、皆で切磋琢磨して練習を重ね、荻原大陸君、上山晃平君、小島北斗君、永田延幸君、北井洋平君などが育ち、チーム全体としては良くがんばっていた。最後の学総体予選個人戦においては、誰も県大会に進むことができなかったものの、団体戦では見事、県大会出場を果たした。

二〇〇七年度の部長は宮野翔平君である。彼は中学からの経験者であり、高い技術を持っている。一年にも何人かの有望な選手が控えており、とても楽しみである。目下、秋の新人戦に向けて、いろいろな工夫してやっているところである。

さらに二〇〇七年度はバドミントン部にとって大きな変革の年となった。女子部員の入部である。一〇名ほどの女子部員が入部し、熱心な生徒も少なくない。全員が一年生であるため、公式戦で勝ち進んでいくには時間がかかるであろう。しかし、同じ地区の共学校を見てみると、男女が刺激しあい、がんばっているところが多い。近い将来、男女ともに県大会に駒を進め、会場でその存在感を示してくれるものと期待している。

(齋藤正憲)

## バレーボール部

—「顧問は楽ではない」—

バレーボール部は開校と同時に発足したので、今年で二十五周年を迎える。記念すべき年に相応しく、バレー部は今年関東私立高校大会への出場を果たした。現役部員の努力はもちろんのこと、今ある部の歴史を作ってきた部員たちと、歴代の顧問の先生方のご苦勞の賜物と感謝している。

バレー部の顧問は、上野先生、羽田、望月先生、三崎先生、羽田と変わってきた。この先どのように変わっていくのかは誰にもわからない。しかし、バレーボール部が存続し続ける限り、誰かが顧問を引き受けることになるのだろうし、そしてまた少なからず生徒たちとの衝突もあるだろう。そんな時に、この小文が、いろんな意味で少しばかり参考になればという思いで、筆を取ることにした。

昨年(二〇〇六年)の二月から三月にかけて、ちよつとしたごたごたがあった。

私は、バレーボール部の顧問に復帰する意志を固め、復帰後の部の構想も固めつつあった。そんな矢先だった。部員からの強い拒絶反応があった。バレーボールの素人(この場合は選手経験がない)ということとを意味する)である私には、顧問就任の資格がないという。確かに、私にはプレーヤーとしての経験はない。しかし、六年間のブランクがあるものの、それ以前の七年間は曲りなりにバレー部の顧問をして

いていたし、それなりに部の実績（県大会初出場、北部地区三位、東京六大学附属高校リーグ戦三位等々）も積んでいて、少なからぬ自信もあった。甘かった。うぬぼれていたのだろうか。冷水を浴びせられた思いがした。ちょっと大げさに言えば、バレー部の再建計画に完全に水を差された。

顧問の引き受け手は私以外にいなかったから、バレー部の歴史に幕を引くとしたら私だろうという覚悟もあった。私は、顧問を引き受けた思いと覚悟を生徒たちに話した。特に、強調した点は、お互いに利用するのではなく、部活動を通して、いろんな意味で共に成長したいということであった。しかし、指導に対する不安を拭い切れずに部を去る者もでた。もちろん、残った生徒たちの中には、もしかしたら、不安を抱きつつも、自分の好きなバレーを続けたいという思いだけで、バレーを続けようとした者もいたかもしれない。

私は、本学院に赴任した一九八三年から七年間、バスケットボール部の顧問をしていた。隣でやっていたバレー部の様子は、ときどき見ているので、少しはチームの状態は知っていたし、チームスポーツのもつ共通の魅力も感じていた。だから、バレー部の顧問の要請があったときには、快く引き受けたのだった。

バレーボール部には、幾つかの存亡の危機があった。最大の危機は、部員が一人になったときであったろう。バレー人気は、衰退の一途をたどっていた。当時人気を博したアニメの影響もあったのだろうが、年を追うごとにバスケットボール部やサッカー部に入る新入生が増えていった。

ある年、例年のように七月末に行われている東京六大学リーグ戦が終わって、三年生達はそれぞれの思いを後輩に託して引退していった。九月の新学期が始まったときであった。新チームの部長が突然やめると言ってきた。その影響で次々に辞める生徒が出てきた。結局残ったのは、中学時代に未経験だった一年生ただ一人であった。

その時点で、バレーボール部の歴史に幕を引くこともできた。たつた一人の一年生部員に継続の意思を確認したら、続けたいという。それからその一年生とのマンツーマンが始まった。パスとレシーブの練習が続いた。しばらくすると、二階ギャラリーに人影がポツリポツリ増え始めた。機を待つて声を掛けると、入部したいという。あつという間に七人に増えた。素人七人で十一月の秋季大会を目指した。試合の結果は見えていたが、楽しかった。彼らは二年生になっても、三年生になってもレギュラーの座を取ることにはなかった。しかし、楽しんだ。バレーボールを大いに楽しんだ。彼らの存在がなかったら、今のバレーボール部の存在は、もしかしたらなかったかもしれないと思うと、彼らの存在は忘れてはいけない。

長年顧問をやっていると、繰り返されることがあることに気づく。ある時期になると、顧問とぶつかるようになるのである。成長の過程と私は思っている。やつと自分たちで考えるようになったと思つてうれしくなる一方、やはり対応はいつもしんどい。

バレーボールは面白い競技である。攻撃をする前に、相手の攻撃を受けなければならぬ。つまりレシーブをしなければならぬのである。それを有効な攻撃につなげるためには、うまくパスをし、スパイ

カーが打ちやすいボールを上げてやらなければならない。共同作業が不可欠なのである。そのためには、もちろん一人一人の高い能力があることが望ましい。しかし、一人一人の力の総和が必ずしもチーム力にはならない。そして試合には必ず流れがある。その流れに乗ると、思わぬ好結果が出ることもある。それが、魅力であり、またその流れを掴むことが難しいところでもあり、面白いところでもある。人間関係や、メンバーによって、思わぬ相乗効果がでて、チームの急成長の一因になることもある。

だから、プレイヤーでなかった人も、それなりに顧問ができるのである。いかにしたら相互作用と相乗効果が生み出せるかを考えればいいのである。ある意味、私は、いつまでも素人顧問でいたいと思っている。いつまでも気軽に人に教わることができるからである。

(羽田一郎)

## 野 球 部

野球部活動の記録(一九九六年春季大会～二〇〇七年夏季大会まで)

☆一九九六年四月一日 福永赴任以降の記録を掲載いたします。

### 一九九六年

春季大会 13期生主将 小坂橋直樹 部員11名

北部地区一回戦 V S 鴻巣高校 3 | 6 ●

第七八回全国高校野球選手権埼玉大会

二回戦 V S 川越高校 5 | 2 ○

三回戦 V S 城西大川越 3 X | 2 (延長11回) ○

神田勝選手 サヨナラタイムリー安打

四回戦 V S 埼玉大深谷 0 | 9 (7回コールド) ●

秋季大会 14期生主将 新井将史 部員13名

北部大会一回戦 V S 熊谷商業 7 | 0 ○

北部代表決定戦 V S 秩父農工 5 | 7 ●

### 一九九七年

春季大会

北部地区一回戦 V S 小鹿野高校 16 | 1 (5回コールド) ○

北部地区代表決定戦 V S 埼玉大深谷 0 | 10 (7回コールド) ●

第七九回全国高校野球選手権埼玉大会

一回戦 V S 岩槻北陵 7 | 0 (7回コールド) ○

吉田健投手完封

二回戦 V S 上尾橘 8 | 1 ○

三回戦 V S 鷲宮 0 | 1 ●

秋季大会 15期生主将 高木卓也 部員8名

北部大会一回戦 V S 熊谷西 3 | 2 ○

北部代表決定戦 V S 児玉 2 | 1 ○ 県大会出場

県大会二回戦 V S 越谷西 4 | 5 (延長10回サヨナラ負け) ●

### 一九九八年

春季大会 北部地区一回戦 V S 本庄 4 | 11 (7回コールド) ●

第八〇回全国高校野球選手権西埼玉大会

一回戦 V S 所沢緑ヶ丘 10 | 0 (5回コールド) ○

久保田祐一投手ノーヒットノーラン達成(5回コールド参考記録)

二回戦 VS 飯能南 0-10 (5回コールド) ●

秋季大会 16期生主将 吉澤真吾 部員6名

北部地区一回戦 VS 本庄北 9-1 (7回コールド) ○

北部地区代表決定戦 VS 深谷商業 2-3 (延長12回) ●

一九九九年

春季大会

北部地区一回戦 VS 鴻巣 3-2 ○

香川慶公選手 逆転2ランHR

北部地区代表決定戦 VS 本庄北 10-0 (5回コールド) ○

県大会一回戦 VS 松山 3-2 ○

県大会二回戦 VS 春日部 1-0 ○

久保田祐一投手完封・東仲真吾選手逆転阻止ライトゴロ刺殺

殺

県大会三回戦 VS 東京農大第三 1-11 (5回コールド) ●

全国高校野球選手権埼玉大会初のシード権獲得(春季大会ベスト16)

ベスト16)

第八一回全国高校野球選手権埼玉大会

県大会二回戦 VS 草加南 8-0 (7回コールド) ○

久保田祐一投手ノーヒットノーラン達成(7回コールド参考記録)

考記録)

県大会三回戦 VS 川口 4-5 X (延長11回サヨナラ負け) ●

秋季大会 17期生主将 香川慶公 部員8名

北部地区一回戦 VS 児玉 5-4 ○

北部地区代表決定戦 VS 本庄北 11-0 (5回コールド) ○

県大会出場

県大会一回戦 VS 武蔵越生 1-3 ●

二〇〇〇年

春季大会

北部地区代表決定戦 VS 深谷 8-7 ○ 県大会出場

県大会一回戦 VS 春日部工業 1-5 ●

第八二回全国高校野球選手権埼玉大会

二回戦 VS 日高 10-0 (5回コールド) ○

富澤敦投手完封

三回戦 VS 栄東 10-0 (6回コールド) ○

富澤敦投手二試合連続完封

四回戦 VS 春日部共栄 0-12 (5回コールド) ●

秋季大会 主将18期生 丸山洋輔 部員4名

北部地区一回戦 VS 本庄東 5-1 ○

北部地区代表決定戦 VS 熊谷西 5-3 ○ 県大会出場

県大会二回戦 VS 坂戸西 1-5 ●

二〇〇一年

春季大会

北部地区代表決定戦 VS 小鹿野 11-1 (6回コールド) ○

県大会出場

県大会二回戦 V S 所沢商業 3-13 (6回コールド) ●  
 第八三回全国高校野球選手権埼玉大会

二回戦 V S 城北埼玉 5-10

三回戦 V S 北本 3-6 ●

夏季大会終了後グラウンド移転(旧学院グラウンド↓大学グラウンド)

秋季大会 19期生主将 日高健 部員13名

北部地区一回戦 V S 深谷第一 0-1 ●

二〇〇二年

春季大会

北部地区一回戦 V S 玉川工業 10-0 (6回コールド) ○

北部地区代表決定戦 V S 埼玉工大深谷 1-3 ●

第八四回全国高校野球選手権埼玉大会

二回戦 V S 西武台 0-8 (8回コールド) ●

秋季大会 20期生 主将 白石和久 部員10名

北部地区一回戦 V S 深谷 15-8 (7回コールド) ○

北部地区代表決定戦 V S 成徳大深谷 1-3 ●

二〇〇三年

春季大会

北部地区一回戦 V S 羽生実業 9-0 (7回コールド) ○

北部地区代表決定戦 V S 北本 2-9 (7回コールド) ●

第八五回全国高校野球選手権埼玉大会

一回戦 V S 大宮武蔵野 7-0 (7回コールド) ○

飯野匠投手完封

二回戦 V S 朝霞西 10-0 (5回コールド) ○

飯野匠投手二試合連続完封

三回戦 V S 熊谷商業 3-10

秋山茂伯選手 逆転2ランHR

四回戦 V S 埼玉栄 6-4 ○

白石和久選手 逆転満塁HR

五回戦 V S 浦和学院 0-7 (7回コールド) ●

秋季大会 21期生主将 岡泰裕 部員13名

北部地区一回戦 V S 児玉 13-2 (5回コールド) ○

北部地区代表決定戦 V S 正智深谷 7-3 ○ 県大会出場

県大会一回戦 V S 所沢商業 1-8 (7回コールド) ●

二〇〇四年

春季大会 北部地区代表決定戦 V S 熊谷工業 11-5 ○ 県大

会出場

県大会二回戦 V S 小川 3-4 ●

第八六回全国高校野球選手権埼玉大会

二回戦 V S 慶應志木 1-4 ●

史上初の埼玉早慶戦

秋季大会 22期生主将 新井賢人 部員7名

北部地区一回戦 V S 本庄北 18-1 (5回コールド) ○

北部地区代表決定戦 V S 羽生第一 3-0 ○

折茂篤投手完封 県大会出場

一回戦 V S 武蔵越生 1-8 (8回コールド) ●

二〇〇五年

春季大会

北部地区一回戦 VS本庄 3―2〇

北部地区代表決定戦 VS本庄第一 2―4 (延長14回) ●

第八七回全国高校野球選手権埼玉大会

二回戦 VS栄東 3―4 ●

秋季大会 23期生主将 花里達也 部員8名

北部地区一回戦 VS秩父農工科 12―5 (8回コールド) ○

北部地区代表決定戦 VS秩父 2―6 ●

二〇〇六年

春季大会

北部地区一回戦 VS玉川工業 5―0 ○

北部地区代表決定戦 VS本庄第一 1―3 ●

第八八回全国高校野球選手権埼玉大会

一回戦 VS宮代 10―0 (5回コールド) ○

飯塚 朋広投手完封

二回戦 VS滑川総合 2―12 (7回コールド) ●

秋季大会 24期生主将 佐野直音 部員14名

北部新人大大会準優勝

北部地区一回戦 VS桶川 6―9 ●

二〇〇七年

春季大会

北部大会一回戦 VS桶川西 5―4 ○

北部地区代表決定戦 VS正智深谷 4―6 ●

第八九回全国高校野球選手権埼玉大会

一回戦 VS朝霞西 6―1 ○

二回戦 VS豊岡 3―0 ○

水沼光太郎投手完封

三回戦 VS伊奈学園 6―2 ○

四回戦 VS立教新座 2―3 ●

25期生 部員19名

26期生 部員21名

13期生〜26期生 部員合計 一五五名

(福永泰規)

ラグビー部

―北 風―

「抜山の威力 蓋世の意気」、早稲田大学ラグビー蹴球部の部歌「北風」の一節である。

本庄学院ラグビー部も、一九八二年の開校と同時に、高山正弘先生ご指導のもと、創部された。一年生だけで、三十人を超える部員が集っていた。創部二年目には、佐藤正春先生が着任。本格的で戦闘的なラグビーの技術と闘魂がたたきこまれ、三年目には、ベスト8入りを果たす躍進ぶりであった。

その後、佐藤先生のご病氣・退職を経て、私が顧問となって二十余

年、関東大会県予選で二度、花園大会県予選で一度、八強入りを果たすも、強力な他校ラグビー部を凌駕できずに今日に至っている。

創部二十五周年の今年こそ、「抜山の威力 蓋世の意気」と、声高らかに、ワセダのラグビーを讃えたいものである。

十年以上にわたって監督を続けていただいている大拙政宏監督と、四年前から正顧問に就いた坂井淳一先生のもと、アカクロのジャージを着た早大本庄ラグビー部の雄飛が期待されている。

今年、久し振りに、部員数四十三名。

「抜山の威力 蓋世の意気」につづく歌詞は、「男子の勢、数あれど」である。このことばのあと、部員たちは、自分たちを、自分たちのラグビーを、どう歌いあげるのだろうか。楽しみは尽きない。

(風間益人)

### —一喜一憂の十年—

早いもので私がラグビー部の顧問を務めるようになって十一年が経過し、今年で十二年めになる。素人の私がやりなりにもこの仕事を続けてこられたのは、ひとえに、周りの方たちのお蔭である。丁度私が顧問になったのと同様に、周りの方たちのお蔭である。最初が顧問になったのときいつも助けて下さった前監督の富岡さん、やの何年間か困ったときにいつも助けて下さった前監督の富岡さん、やはり最初の何年間か本当に熱心に後輩の面倒をみて下さった片柳さんをはじめとする沢山の有能なコーチ、いろいろな機会に貴重な助言をいただいた口元先生、そして、二十余年にわたって早大本庄ラグビー

部を見守り続けて下さっている風間先生、数々の顧問の先生方、このように数え上げたらきりが無いほど多くの指導者の方々にまず感謝申し上げます。また、公式戦であろうと練習試合であろうと、毎回欠かさず応援に来て弁当の差し入れ等もして下さるご父母の方々のお力添えにも深く感謝致します。そして何と言っても選手諸君、私の宝です。この十年を振り返ると、一喜一憂という言葉が一番びつたりかなと思う。少しづつでも良いから、憂より喜の瞬間を多く味わえるようになればと思う。

今回、本来であれば創部以来の歴史をつぶさに記録できると良かったのであるが、時間の制約上、果たせなかった。とりあえず、以下、私が顧問になって以降の公式戦の記録だけはまとめてみたのでよろしければご覧下さい。(空白になっている部分は現在確認できていない部分です。お恥ずかしい限りですが、もし記録をお持ちの方がおられましたらお知らせいただければ幸甚に存じます。) なお、早大本庄ラグビー部では、一九九一年に、創部十周年記念誌『北風』を発行しており、幸いそこに最初の十年間についてのある程度詳しい記録が残されているので、これを機に創部以来二十五年間の歴史を残す作業を始めたかと思っている。

(坂井淳一)





2 生徒関係

					1997～1998																	
					9～10																	
コーチ	監督	副顧問	副顧問	正顧問(部長)						コーチ協力	コーチ協力	コーチ協力	コーチ	監督	副顧問	副顧問	正顧問(部長)					
片柳直人	大肚政宏	上野幸彦	坂井淳一	風間益人						野口真澄	富岡誠一	口元周策	片柳直人	大肚政宏	上野幸彦	坂井淳一	風間益人					
副務	主務	副将	副将	主将									副務	主務	副将	副将	主将					
山岸哲二	加藤慎二朗	金 憲珉	小倉康平	田中久則									小倉康平	大川 領	川崎清人	小川 朗	吉田直顕					
11・4・18	11・1・31	11・1・23	11・1・17	11・1・9	10・10・3	10・9・26	10・9・19	10・6・20	10・6・14	10・5・16	10・5・10	10・4・25	10・4・19	10・2・1	10・1・28	10・1・24	9・10・4	9・9・27	9・9・20	9・6・1		
関東大会県予選1回戦	新人戦県大会 1回戦	〃 第3戦	〃 第2戦	新人戦県北予選第1戦	全国大会県予選4回戦	全国大会県予選3回戦	全国大会県予選2回戦	〃 2回戦	国体県大会 1回戦	〃 決勝戦	国体県北予選 2回戦	〃 2回戦	関東大会県予選1回戦	〃 3決	〃 準決勝	新人戦県北予選1回戦	全国大会県予選4回戦	全国大会県予選3回戦	全国大会県予選2回戦	国体県大会 1回戦		
早大本庄	不動岡	早大本庄	早大本庄	行田工業	深谷	早大本庄	早大本庄	不動岡	早大本庄	寄居	早大本庄	熊谷	早大本庄	寄居	深谷	早大本庄	川越	早大本庄	早大本庄	川越		
44		21			100	29	69					62	22				45		42			
0		14			0	5	0					0	19				7		12			
越谷南	早大本庄	寄居	熊谷	早大本庄	(ベスト16) 早大本庄	川越	秀明	早大本庄	川越	早大本庄	熊谷西	早大本庄	川口北	早大本庄	早大本庄	科学技術	(ベスト16) 早大本庄	朝霞	川口	早大本庄	早大本庄	

			1999～2000										1998～1999						
			11～12										10～11						
監督	副顧問	正顧問(部長)											コーチ協力	コーチ協力	コーチ協力				
大脇政宏	坂井淳一	風間益人											野口真澄	富岡誠一	口元周策				
副将	副将	主将																	
吉坂秀毅	小林広明	飛田 亘																	
13・1・8	12・12・23	12・12・17	12・10・7	12・9・30	12・9・23	12・6・11	12・5・14	12・5・6	12・5・4	12・4・29	12・4・21	12・1・10	11・12・23	11・12・19	11・9・25	11・9・18	11・6・13	11・4・24	
”	”	新人戦県北予選1回戦	全国大会県予選4回戦	全国大会県予選3回戦	全国大会県予選2回戦	国体県大会 1回戦	” 3回戦	” 2回戦	国体県北予選 1回戦	” 2回戦	関東大会県予選1回戦	” 3決	” 2回戦	新人戦県北予選1回戦	全国大会県予選3回戦	全国大会県予選2回戦	国体県大会 1回戦	” 3回戦	” 2回戦
科学技術	熊谷	早大本庄	熊谷工業	早大本庄	早大本庄	熊谷工業	深谷商業	早大本庄	早大本庄	浦和	早大本庄	行田工業	熊谷	早大本庄	伊奈学園	早大本庄	川越東	埼玉大深谷	早大本庄
17	12	35	69	27	112	58	14	22	77	31	36	12	46	69	50	91		86	19
5	0	17	5	10	0	0	10	3	0	24	5	5	0	0	5	0		5	15
早大本庄	早大本庄	寄居	早大本庄	不動岡	浦和学院	早大本庄	早大本庄	科学技術	熊谷農業	早大本庄	川越東	早大本庄	早大本庄	熊谷西	早大本庄	和光	早大本庄	早大本庄	伊奈学園
			(ベスト16)														(ベスト8)		

2 生徒関係

				2001～2002										2000～2001											
				13～14										12～13											
コーチ	監督	副顧問	正顧問(部長)									コーチ協力	コーチ	監督	副顧問	正顧問(部長)							コーチ協力	コーチ	
店田 涉	大肚 政宏	坂井 淳一	風間 益人									口元 周策	田留 晋吉	大肚 政宏	坂井 淳一	風間 益人							口元 周策	田中 久則	
	F副 W将 リリー ダー	主将										副務	主務	B副 K将 リリー ダー	F主 W将 リリー ダー								副務	主務	
	蓑 輪 暁	松田 純平										古賀 翼	松田 純平	風間 翔平	中牟田 圭	関 卓真							荒賀 大輔	中牟田 圭	安井 脩
15・1・18	15・1・12	14・12・24	14・12・21	14・9・28	14・9・21	14・9・14	14・6・15	14・6・9	14・5・11	14・4・28	14・4・20	14・1・20	14・1・12	14・1・7	13・12・24	13・9・29	13・9・22	13・6・10	13・5・13	13・5・4	13・4・28	13・4・21			
新人戦県大会 1回戦	” 3決	” 2回戦	新人戦県北予選1回戦	全国大会県予選3回戦	全国大会県予選2回戦	全国大会県予選1回戦	” 第3戦	” 第2戦	県北大大会 第1戦	” 2回戦	関東大会県予選1回戦	新人戦県大会 1回戦	” 3決	” 2回戦	新人戦県北予選1回戦	全国大会県予選3回戦	全国大会県予選2回戦	国体県大会 1回戦	” 2回戦	国体県北予選 1回戦	” 2回戦	関東大会県予選1回戦			
所沢北	早大本庄	行田工業	早大本庄	西武台	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	本庄第一	慶應志木	早大本庄	所沢北	早大本庄	熊谷	早大本庄	浦和	早大本庄	所沢北	科学技術	早大本庄	深谷	早大本庄	早大本庄		
45   12	63   0	33   0	41   12	26   0	36   7	88   7	24   19	43   0	24   10	32   21	27   24	43   5	17   3	31   0	26   12	38   10	48   0	38   0	29   7	24   7	71   0	40   14			
早大本庄	科学技術	早大本庄	寄居	早大本庄	立教新座	桶川西	科学技術	熊谷農業	早大本庄	早大本庄	川越	早大本庄	熊谷農業	早大本庄	科学技術	早大本庄	大井	早大本庄	早大本庄	本庄第一	早大本庄	早大本庄	浦和西		



2005～2006										2004～2005										
17～18										16～17										
特記事項：飯田貴也君U19日本代表選出	正顧問(部長)	副顧問	副顧問	副顧問	監督	コーチ協力					副顧問	副顧問	副顧問	監督	コーチ	コーチ協力				
	坂井淳一	篠田晋治	望月真帆	大肚政宏	口元周策						三浦健郎	吉田茂	(風間益人)	大肚政宏	店田涉	口元周策				
	主将・BKリーダー	FWリーダー	主務	副務							主将・FWリーダー	BKリーダー	副将・BKリーダー	主務	副務	フィットネス・リーダー				
	飯田貴也	秋山拓人	石井祥悟	廣羽総一郎							吉田裕文	中島照之	関口幸太郎	石井祥悟	坂井翼					
	17・12・17	17・12・24	17・11・9	18・4・22	18・5・4	18・5・6	18・5・13	18・5・9	18・9・9	18・9・17	17・1・10	17・1・16	17・4・17	17・6・11	17・6・19	17・9・18	17・9・25	17・10・2		
	新人戦県北予選1回戦	”	”	5・6決	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”
	松山	早大本庄	早大本庄	川越	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄
	20	34	27	17	42	25	24	25	24	32	31	80	40	27	33	115	76	62	32	10
	早大本庄	連合	深谷商業	早大本庄	連合	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	連合	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄	早大本庄

## 陸上部

### —ユニフォームに込めた思い—

一九八七年、陸上部顧問となった私の初めての仕事は、当時青色だった陸上部のユニフォームをエンジに白のW、伝統の早稲田カラーにすることだった。一九二八年のオリンピックで日本人として初めてメダルに輝いた早稲田大学競走部出身の織田幹雄先輩の時代から続く伝統のユニフォームに本庄学院の文字を刺繍した箱根駅伝でも良く知られたエンジにW。このユニフォームを身に纏い、初めてトラックに立った時の選手たちの誇らしくも嬉しそうな笑顔が今でも鮮やかに思い出される。当時は県大会でよく蕨(ワラビ)高校と間違えられたものだったが、今では関東大会やインターハイ、国体でも入賞者が生まれ、早稲田大学本庄高等学院陸上部の存在は県内に広く知られるようになった。

陸上競技は個人競技と思われがちではあるが、リレーや駅伝、また学校対抗総合得点等、チームとして戦う団体競技でもある。そしてその団体競技としてのチームカラーを植えつける意味でユニフォームは重要な意味合いを持つ。エンジはみんなの心が揃って初めて輝く色なのである。レース終盤まで十位の松山高校の背中に肉薄した二〇〇二年の県高校駅伝。埼玉栄高校や伊奈学園等並みいる強豪校を抜き去り、観客を驚かせた二〇〇三年の県総体四〇〇mリレー優勝の瞬間。そして毎年猛暑の中で行われる夏の県北大大会での七回の総合優勝等、チー



2003年 埼玉県高校総体 優勝の400mリレーチーム

ムが団結し一丸となって戦った日、エンジにWの早稲田カラーはひとときわ輝いていた。もちろん、勝負にこだわらず各自がそれぞれのレベルでベストを尽くすことの大切さを伝え、負けた選手を暖かく包んでくれるのも早稲田カラーである。この伝統がこれからもずっと陸上部の選手たちに伝わってくれることを願っている。

顧問としてこの二十二年間、理知的で優しさにあふれた素晴らしい選手たちに囲まれ、一緒にグラウンドに立ち、多くの感動を与えていただいたこと、これまで出会ったすべての選手たちに心から感謝したい。二〇〇七年、男女共学となった陸上部には七名の女子が入部した。男子、女子が共に力を合わせて伝統の早稲田カラーがさらに鮮やかに染めあげられてゆくことを心から期待したい。

(田邊 潤)

## レスリング部

## ―レスリング部の二十五年―

私が本庄高等学院に勤務することになったのは一九八四年、学院の完成年度である。公立学校と私学との違いに戸惑いながら始まった学院での教員生活だが、驚いたのはすでにレスリング部が存在していたことだった。一期生の大野 明がアメリカ生活でレスリングを経験していたことで、学院でもぜひレスリング部をとこうと考えがあったようだ。彼は二代目の生徒会長もつとめ、持ち前の行動力と明るい性格で部員を増やしていった。しかしながらほとんどの部員はレスリング未経験者であり、大会にでてでも「参加するだけ」に近い状況が数年続くことになるのだが、当時は今と違いレスリング人口が結構多い時代で、それなりに活動は盛りあがっていたように記憶している。現在は、高校入学後にレスリングを始めようとする人は減少傾向にあり、他の競技と同様に大会で上位を占めるのは幼い頃からレスリングに取り組んでいるキャリア豊富な人が中心というのが実状である。そのようなとき、一九九五年に始まったα選抜最初の選手として入学したのが静信次郎である。入学と同時に実力を発揮し、それまで開店休業状態だった顧問を大いにあわてさせることとなった。ほとんどの県大会を制し、全国大会での最高成績は国体(福島)五十四kg級第五位となり周囲を驚かせた。α入学の二人めとしては渡辺雅泰である。熱心に練習を重ねて頑張るものの県大会決勝戦で敗れることが続いた。しかし、ついに三年生になって全国総体出場を決めたのは彼の執念だった。そして

α入学三人めは飯島健太である。在学中はほとんどの県大会を制したがブロック大会以上の大きな大会では関東大会準優勝に留まったのは、彼の実力と日頃のレスリングに対する姿勢からみても少々物足りなかつた気がする。さらには、レスリングの経験はないものの入学後めきめき力をつけて創部以来最高の成績である国体(静岡)グレコローマン八十五kg級第三位となった根津隆夫である。彼は大学進学後にJOC(ジュニアオリンピックカップ)大会で優勝して世界ジュニア選手権(リトアニア)の日本代表に選ばれるという快挙も成し遂げた。わがレスリング部からついに全国チャンピオン世界大会出場者が誕生したのである。このような全国レベルの選手もすばらしいが、特筆すべきは内堀三兄弟であろう。いずれも香港からの帰国生で柔道の経験は多少あつたものの、一からレスリングを覚えて裕介、智仁、貴文と三人とも全国大会出場を果たし、他の部員や生徒の励みとなつたはずである。以上目立った活躍をした生徒名を挙げたが、他の多くの部員の汗がマットに染みついて今日に至っていることを忘れてはいけない。

なつかしく二十五年間をふり返ってみた。今年、共学で再出発した本庄高等学院だがレスリング部にも新しい風が吹き始めた。初めての女子部員となる小黒真愛である。入学間もないジャパンビバレッツジューズカップ(スクールガールの部)で準優勝という輝かしいスタートを切った。今後の活躍を期待したい。

ここまであつという間の二十五年間だったが、次の時代を担うどんな選手が出現するのか楽しみな早大本庄レスリング部である。

(伊藤一雅)

早稲田大学本庄高等学院レスリング部記録（一九九二年以降）

年	大会	階級(kg)	成績	氏名
一九九二	新人戦	六三	三位	細野 雅樹
一九九五	関東大会県予選	五四	一位	静 信次郎
		五四	一位	〃
		五四	二回戦負	〃
		五四	一位	〃
		五四	二回戦負	〃
一九九六	関東大会県予選	五八	一位	静 信次郎
		五八	二回戦負	〃
		五八	二位	〃
		五八	一位	〃
		五八	一回戦負	〃
一九九七	総体県予選	五四	一位	静 信次郎
		六三	三位	野上 武士
		五四	三回戦負	静 信次郎
		五四	一位	〃
		五四	二回戦負	〃
一九九八	新人戦	一一五	三位	内堀 裕介
		五四	二回戦負	〃
		五四	一位	〃
		五四	一位	〃
		五四	二回戦負	〃
一九九八	関東県予選	五二	三位	佐藤 直之
		六五	三位	野上 武士

年	大会	階級(kg)	成績	氏名
二〇〇〇	関東県予選	五四	一位	飯島 健太
		五八	三位	脇坂 宗明
		六五	二位	伊藤 生
		五八	二位	渡辺 雅泰
		六九	三位	松島 慎人
		七六	三位	内堀 智仁
		五四	一位	飯島 健太
		五八	一位	渡辺 雅泰
		七六	三位	内堀 智仁
		五四	一位	飯島 健太
		五四	一位	渡辺 雅泰
		五四	二回戦負	飯島 健太
		五四	三位	飯島 健太
		五八	二位	渡辺 雅泰
		五八	二位	渡辺 雅泰
一九九九	新人戦	八三	一位	内堀 裕介
		六五	二位	野上 武士
		一一五	一位	内堀 裕介
		六〇	三位	渡辺 雅泰
		八三	一位	内堀 裕介
		六〇	七位	渡辺 雅泰
		八三	六位	内堀 裕介
		六〇	三位	小澤 貴信
		六五	三位	内堀 智仁
		七〇	三位	松島 慎人
		五八	二位	渡辺 雅泰
		六九	二位	松島 慎人
		六九	三位	内堀 智仁





二〇〇三	関東県予選	七六	一位	内堀 貴文
	総体県予選	七六	一位	根津 隆夫
	国体県予選	六三	二位	内堀 貴文
	国体(静岡)	七六	一位	根津 隆夫
		八五	三位	根津 隆夫
二〇〇四	新人戦団体		二位	
二〇〇五	新人戦	五五	二位	秋吉 貴裕
		七四	三位	山添 剛志
二〇〇六	関東県予選	五五	二位	秋吉 貴裕
	総体県予選	六六	四位	山添 剛志
	新人戦	五五	三位	秋吉 貴裕
		五五	四位	田畑伸一郎
二〇〇七	クイーンズカップ	五七	二位	小黒 真愛
	女子			
	関東県予選	五五	三位	田畑 伸一
		六〇	四位	幸野 涼平
		一〇	四位	栗原 秀太
	総体県予選	六六	三位	仲村 圭祐

## ワンダーフォーゲル部

ワンダーフォーゲル部は、学院が開校した一九八二年に一期生によって設立されました。最初の顧問は篠田晋治先生でした。初期の活動については、私は正確に把握しておりませんが、初代学院長であった故・神澤惣一郎先生や加納敏郎先生、篠田先生らと一緒に私も荒船山(群馬・長野県)や東御荷鉢山(埼玉・群馬県)へのワンダーフォーゲル部の山行に参加しました。その後、二期生が三年生になった一九八五年四月から、私はこのクラブの顧問を引き受けることになりました。それまでのワンダーフォーゲル部の活動は不定期であったようですが、一九八五年二月か三月頃、二期生の高橋一郎君と関根淳久君からワンダーフォーゲルの活動をもっと活発にしたいと相談を受けました。彼らと相談の上、次のような活動方針を立てました。毎月一回(日曜日か休日)に本庄から日帰り可能な山に行く。夏休みには山小屋を利用して二泊〜四泊ぐらいの合宿を行う。この活動方針は二十三年経った現在も受け継がれています。一九八五年度の活動は、私が顧問となり副顧問は木元保先生が引き受けてくださって始まりました。最初の活動方針通り、毎月一回の日帰り山行を行い(記録がなくなってしまうましたが谷川岳などに行きました)、夏休みには三泊四日の合宿を北八ヶ岳の山々を巡りながら行いました。これも、記録がなくなってしまうのですが、記憶をたどると一日目は新宿駅に集合し、中央線で茅野まで行きここからバスで渋の湯まで入り、歩いて黒百合

平へ行ってここで一泊、次の日は東・西天狗岳に登って中山峠、中山から高見石へ行ってここで一泊、三日目は麦草峠を越えて縞枯山、北横岳を通過して双子池で一泊、最終日は双子池から亀甲池、天祥寺原を通過して親湯へ、ここからバスで茅野に出て各自家路にというコースであったと思います。この合宿には三年生の高橋君、関根君のほか一、二年生もそれぞれ二、三人参加し木元先生と私をいれて十人ほどのパーティであったと思います。このようにしてワンダーフォーゲル部の第一回の合宿は終了しました。その後、同じ年の十月二十日(日)と翌日の二十一日の大学の創立記念日を利用して一泊で尾瀬に行きました。この合宿には約十名の生徒と神澤学院長と木元先生が参加して下さいました。

これ以降の夏合宿(夏休み中の日帰り山行を含む)については紙面の都合上、年月日と場所だけを以下に列挙することにします。

- 一九八六年 七月二〇日～二三日 白馬岳(長野県)
- 一九八七年 七月二〇日～二三日 燕岳・大天井岳(長野県)
- 一九八八年 七月一八日～二一日 燧ガ岳・至仏山(福島・群馬県)
- 一九八九年 七月一八日～二〇日 白馬岳(長野県)
- 一九九〇年 七月一八日～二〇日 北八ヶ岳(長野県)
- 一九九一年 七月一六日～一九日 燧ガ岳・至仏山(福島・群馬県)
- 一九九二年 七月一七日～二〇日 白馬岳(長野県)
- 一九九三年 七月一九日～二二日 火打山・妙高山(新潟県)
- 一九九四年 七月一九日～二一日 苗場山(新潟県)
- 一九九五年 七月二〇日～二三日 白馬岳(長野県)

- 一九九六年 七月三〇日～八月二日 白馬岳(長野県)
- 一九九七年 七月二二日～二五日 火打山・妙高山(新潟県)
- 一九九八年 七月二一日～二三日 苗場山(新潟県)
- 一九九九年 七月二六日～二九日 白馬岳(長野県)
- 二〇〇〇年 七月二五日 平標山(群馬・新潟県)
- 二〇〇〇年 九月四日 谷川岳(群馬県)
- 二〇〇一年 九月二日～四日 妙高山(新潟県)
- 二〇〇二年 七月二四日 水ノ塔山・竈ノ登山(長野県)
- 二〇〇三年 七月二八日～三一日 白馬岳(長野県)
- 二〇〇四年 七月二一日 谷川岳(群馬県)
- 二〇〇五年 七月二五日～二六日 奥白根山(群馬・栃木県)

これらの合宿の中には八九年の白馬岳では悪天候のため麓で足止めとなりそのまま中止した場合や、九五年の白馬岳では梅雨が明けず悪天候続きで出発を中止した場合や、二〇〇五年の奥白根山では台風のため中止したものがあります。また、二〇〇〇年は生徒の希望により合宿ではなく夏休み中の七月と九月に、日頃の活動では実施が困難な時間のかかる日帰りの登山を計画しました。しかし、七月の平標山は天候不良のため中止となりました。

ワンダーフォーゲル部は副顧問のなり手がなかなか見つからず、私一人で生徒の面倒を見ることが多かったのですが、特に宿泊を伴って山を巡る合宿は一人だけの顧問にとつてかなりハードな仕事でした。そのような状況の中で、北八ヶ岳(八五年)・尾瀬(八五年秋)では木元保先生、燕岳(八七年)・尾瀬(八八年)では中野公世先生、火打山・

妙高山（九七年）では吉田茂樹先生、白馬岳（九九年）では三浦健郎先生、妙高山（〇一年）では斎藤正憲先生に副顧問として合宿に参加していただきました。さらに、火打山・妙高山（九三年）ではワンダーフォーゲル部OBで当時早稲田大学四年生であった小島英順さんにコーチとして合宿に参加していただきました。この場をお借りして皆様方のお力添えに御礼を申し上げます。

合宿以外の毎月一回の山行は回数が多いのでここでは述べることはできませんが、その記録を何らかの形で公表できる機会があればと思っています。

ワンダーフォーゲル部の活動は、生徒と一緒に山を歩くために顧問にとってはかなりきつい仕事です。私事になりますが、私は今年度中に人生の一巡り目が終了することになり、二十何年も前のように若い生徒のペースで歩けなくなってきました。幸いなことに今年四月からは経験をお持ちの高井寿文先生を副顧問としてお迎えすることができました。

何でも便利になった現在の日常生活を離れて、自然の中で自分を見つめることができるワンダーフォーゲル部のような活動がもっともつと盛んになってよいと思います。私も歩けなくなるまで何とか頑張つて生徒と楽しい山歩きを続けていきたいと常々思っています。

（吉見孝人）

## スーパーサイエンスクラブ

我々理科教員は目の前の生徒のためにどのようなことを実践していくべきなのであるか。それにはなぜ理科を教えるのか、なぜ理科を学ぶのかといった原点を考えなければならない。

人間はそれぞれがそれぞれの考えを持ちそれぞれの生活を営む。何もしないでじっとしていることは人間にとって苦痛であり、何かしなむといられない。そのうちのひとつが科学であり、多くの人は、一度は科学の楽しさや不思議さを感じたことがあるのではないか。

では、科学への興味を持続させるにはどのようなことをしたらよいのであろうか。その答えを追求する方法のひとつには、科学に興味を持ち続けている人がどのような体験をしてきたかを知ることがある。

どんなきつかけがあつたのか、なぜ興味を持続しているのか、逆にどんなときに興味を失ってしまうのか。これらを調べ、蓄積することにより将来の科学者を育てる方法のひとつがわかるのではないかと考えた。

そこで、スーパーサイエンスクラブを作り、多くの科学者が経験してきた「もの作り」からスタートし、もの作りを通して科学技術に興味を持たせ、継続的に科学を学習していく習慣を身に付けさせる方策について考えることにした。もの作りは一見単純作業のようにとられがちであるが、創意工夫や新たなものを作り出すためにはなくてはならない訓練のひとつである。

初年度は、以下にあげる「もの作り」をした。

- ① 大型モーター
- ② ソーラーカー
- ③ 水撃ポンプ
- ④ 電動自動車
- ⑤ エアーホッケー
- ⑥ ホバークラフト

年度末に生徒にアンケートをとり、スーパーサイエンスクラブのメリットとデメリットを考えてみた。

その結果、多くの生徒がメリットのみをあげていたが、今の状態にももの足りなさを感じている生徒が大勢いることがわかった。そこで何度もミーティングを重ね、次年度からはグループごとにテーマを決め、コンテストなどの外部での発表を目標に活動を続けていくべきだとの意見でまとまった。

また、活動にはなるべく専門家の協力をお願いすることにし、農学博士の広瀬春朗氏、埼玉県土木事務所および水産試験所、NPO法人ピッキオ、植物研究家須藤志成幸氏、早稲田大学自然環境調査室などにご協力いただいた。

二年目三年目の主な研究は

- ① リフター（APEC主催「国際科学コンテスト」金賞など受賞）
- ② 鉄バクテリア（同右銀賞受賞、「国際水コンテスト」審査員特別賞など受賞）

③ 小山川の水生生物調査

④ 金華山の生態系調査（彩の国埼玉）「科学大賞」プレゼンテーション賞受賞

⑤ 下田の現生有孔虫調査（学術論文「伊豆半島下田地域の潮間帯」内部浅海帯現生有孔虫）発表

⑥ 大久保山の植物調査

⑦ 大久保山の蝶の調査

⑧ 遠隔操作ロボット（関西テクノアイデアコンテスト）アイデア賞受賞

⑨ 電子顕微鏡による動物の毛の調査

⑩ 四路スイッチキットの開発（埼玉県発明工夫展）埼玉県工業教育研究会賞受賞

四年目には、ちょうどGITSなどの大学施設が完成し、大学院に支援していただけることになった。それに伴い、高度な研究ができるようになった（大学院関連は印を付す）。

⑪ 古代はすから酵母採取（科学院関連は印を付す）「U18コンテスト」入賞

⑫ ミミズの腸内からのセルロース・リグニン分解菌の分離

⑬ イルカのDNAの研究

⑭ 日光の鳴き竜の研究

⑮ 音の共鳴の研究

⑯ いい音の研究（日本物理学会「ジュニアセッション」入賞）

⑰ 油分解菌をつかった堆肥の研究

⑱ 炭の効用の研究

- ⑲ 2足歩行ロボットの研究
- ⑳ バクテリアリーチング®
- ㉑ 小笠原の環境調査
- ㉒ 元小山川の水質調査
- ㉓ 原子力とエネルギーの市民との関わり（原子力文化振興財団 研究指定校）

このような活動は、発表の場を与えることによりモチベーションが持続することが分かってきた。当初は国内のコンテストに的を絞っていたが、国際的なサイエンスフェアに招待される機会も増え、現在では毎年二から三の国際サイエンスフェアで発表している。

しかし、あくまでも学校教育の一環の部活動であり、本業である学習に大きな支障が出てしまつては本末転倒である。今後もそのバランスを考え、生徒の力にあつた題材を見つけ、専門家の協力を仰ぎながら活動を進めていく。科学的な知識を増やし、創造力や実践力、考え続ける力、チームワークなどの力を身につけた人間を育てる大きな使命を遂行すべく。

（影森 徹）

## 演劇部

### — 演劇部の歩み —

演劇部の「歩み」などといった、立派な足跡などない。誠に、ただどしい歴史はある。

開校当初、一期生たちによつて、「早稲田の演劇」の旗を本庄学院にも立てよう、と意気だけは軒昂であつた。

稲稜祭で、武田泰淳作『ひかりごけ』を上演。つづいて、筒井康隆作『十二人の浮かれる男』（写真）— なんとというレパトリー系列の無思想ぶりか……。

その後、三年生の卒業にともない、部員ゼロとなり休部状態が、何年もつづく。

やがて、埼玉県北部地区演劇コンクールに初参加。鴻上尚史作、あの第三舞台の傑作『朝日のような夕日をつれて』を上演。本来、二時





間半かかるドラマを、五十分に省略、割愛？しての上演、演じる方も観る方も、支離滅裂にして、意味不明。「男子演劇部員、五人が皆元気でよかったが、この芝居で、何言いたいのか？」という審査員からの酷評をいただく。

またもや休部。冬眠状態がつづくも、二回目の地区コンクールへ挑戦。風間益人作「Tears in Heaven」。脳死と臓器移植の問題をテーマに、人間の生命と死の問題を取り扱うも選

外。しかし、稲稜祭では、出演者皆笑顔で満足。

つづいては、歌舞伎十八番『外郎売り』を披露したり、朗読劇を上演。

二〇〇六年、稲稜祭にて、藤生一磨（演劇部員一年生）創作『ドリフト』にて、六本目の演劇上演を立ち上げた。

二〇〇七年は、共学元年。一年生女子も四名加入して、総勢、七名で、秋の稲稜祭には、創作劇で、演劇部の真価を問いたい、と部員一同、劇作に頑張る夏休暇を過ごしている。

女子部員の参加を得て、もう惰眠は許されない。

（風間益人）



オオタカの巣

## 三 その他

### (1) 校舎

本庄高等学院設立の経緯は「学校の形態」のところに記したので、詳しくはそれに譲るが、早稲田大学の責任ある対応を本庄市に示す必要から、高校とはいえ早稲田大学の教育機関を設置する場所として、本庄キャンパスの中心、大久保山の頂上が選ばれたのである。七〇万〜八〇万㎡ともいわれる広大な本庄キャンパスは、東西方向に二つの大きな谷（低地）とそれを南北から挟む三つの丘陵により構成されている。北から、浅見山↓低地↓大久保山↓低地↓塚本山である。標高の一番高いのは浅見山であるが、キャンパスの中心を占め、面積が広いということなどから、キャンパス全体では大久保山が中心と見られている。

一九八一年五月十一日、大久保山の頂で早稲田大学本庄高等学院校舎建設の起工式が行われた。工事は開校までの約一年弱の間、突貫で行われ、現校舎のA棟（事務所・教務室など）・B棟（国語・英語・数学）・C棟（社会・理科）はなんとか、開校までに完成した。セミナーハウスの二階を借りて行なっていた開設準備室の業務が現校舎のA棟に移動したのは一九八二年三月二十四日のことである。こうして、本庄学院の授業はA棟・B棟・C棟でスタートしたのである。

芸術棟、体育館などは完成しておらず、芸術・体育の教員はC棟社会科教員室に同居する形で授業の準備を行った。その年の一学期が終わった七月二十六日になってようやく、E棟（芸術）・H棟（図書室・ハウス）・J棟（食堂）・F棟（大教室）が竣工し、I棟（体育館）が完成したのはその年度の末、一九八三年二月十日のことである。グラウンドなどにおいても整備は遅れ、開校当初は大久保山南側の低地を簡単に整備して、体育の授業や部活などが行なわれていたと記憶している。校舎が現在の姿となり、一応完成を見たのは一九八四年五月の連休明けである。それは、それまで砂利、碎石が敷かれて歩きにくかったB・C棟間の中庭などがコンクリート舗装されたことによる。これまでに開校から丸二年が経過していた。

早稲田大学は本庄学院の校舎だけでなく、大学全体の施設不足を補うために、本庄キャンパスにグラウンド（野球場・陸上競技場・サッカー場・テニスコート）、セミナーハウスの増築、共通教室、図書館分館などの建設計画を立て、学院校舎の完成した一九八四年以降、次々と本庄キャンパス内に大学の施設を建てていった。そして、この施設を利用して、本庄学院の教育も展開することになるのである。

その最初の動きは、共通教室棟体育室の利用である。共通教室棟は大学の学生が本庄セミナーハウスを使って、部やゼミの合宿などを行う際に使用する教室、リクレーションとしてスポーツなどを行なう体育室からなる。大学のゼミや部活の合宿は学期期間中ほとんど行なわれないので、その間、本庄学院では授業や部活動の場所として借り、使用することとしたのである。初めは体育館関係の部活が学院体育館



だけでは狭いということ、積極的に使うことになったが、そのうち、体育の正規授業においても年間計画の下、使用許可を得て、使用するようになった。

一九九四年の教育課程改訂において、男子校でも家庭科の必修が義務付けられ、学院でも家庭科の教員を募集し、開講に取りかかった。

しかし、新設でしかも、ガス・水道などの厨房機能を持つ実習教室をつくるとなると、既存の学院校舎では難しく、そこで、共通教室棟三階の教室を急遽改装し、家庭科の実習教室に作り変えたのである。また、この時期に合わせて、前から言われていた芸術科教員室、および芸術科倉庫の狭さを解消するために、芸術科のうち「音楽」の機能を全て共通教室棟二階に移すこととした。これにより、共通教室棟の体育室、二階教室の一部、三階は本庄学院の正規授業の教室として使用されることになった。ちなみに、旧音楽室は情報教育をおこなうPC教室となった。

一九九三年から持ち上がった「本庄・児玉地方拠点都市地域」構想により、本庄キャンパスの再開発が検討され、一九九七年にはおおよその校地利用計画が出来上がった。それによれば、これまで本庄学院のグラウンドであった浅見山と大久保山間の低地に、早稲田大学の国際情報通信研究科などの各種教育・研究施設が建設されることになり、学院のグラウンドとしては大久保山の南側、塚本山との低地の大学グラウンドを使うことになったのである。大学グラウンドは東から野球場、一周四〇〇mの陸上競技場、サッカー場からなり、すでに完成していた。旧学院グラウンドは土がむき出しであったのに対し、

新しい学院グラウンドは芝の管理がきれいに行き届き、周囲に落葉樹が植えられるなど、見るからに美しいグラウンドであった。しかも、整備されたテニスコートも譲り受け、グラウンド関係の体育授業、部活動においては申し分のない環境となった。二〇〇一年三月、年度末の中、部室、備品などの移転などが行われた。

旧学院グラウンドに作られた国際情報通信研究科の二〇〇四年の本庄での授業開始に合わせて、入学する外国人のための寄宿舎を急遽つくる必要が生じた。理事会は当初キャンパス外に候補地を物色していたが、学院校舎の候補地同様なかなか難しく、結局、これまでセミナーハウスとして使っていた施設を外国人のための寄宿舎（ドミトリー）としてつくり変えることにしたのである。これまで三〇数年間、学生・生徒のゼミ・部活の合宿のために果してきたセミナーハウスとしての機能は本庄キャンパスにはなくなったのである。これにより、本庄学院の夏の合宿は著しい制限を受けることとなり、また、ホームステイの閉鎖期間中に自宅から通えない生徒の泊まる場所も無くなった。それ以降は、不本意ながら、必要な場合のみ、校舎に寝泊りすることになり、現在に至っている。

また、大学本部の図書館の収蔵機能を分散させるということで、一九八四年十月に早稲田大学図書館本庄分館ができた。主に、雑誌、新聞などあまり利用者の少ない図書が収蔵されることになった。本庄学院では、これにあわせ、学院図書の蔵書数が爆発的に増加し、H棟の地下だけでは収蔵しきれない状態になったので、新築なった図書館分館の二階スペースの一部を借りて、本庄学院の図書室にすることを考

え、大学本部と交渉した結果、一九九八年の末、移転することになった。これにより、これまでの図書室は映像関係の資料を残し、そのほかの施設は生徒の調べもの、雑誌閲覧などに供する自修室として活用することにした。一部は三年生の選択授業、課外講義などにも使っている。

物言わぬ校舎・施設でも二五年間にはそれなりの動きがあった。二〇〇七年度からの定員増・共学により、新校舎の建設計画が動き出したが、次の二五年、三〇〇年を見据えた校舎計画になることを期待したい。

(佐々木幹雄)



棟 教 室 共 通

## (2) 高大連携

早稲田大学本庄高等学院は言うまでもなく早稲田大学の附属校である。しかし、本部キャンパスから一〇〇kmも離れていては、日々の学院生活において附属高校としての実感がつかみにくい。卒業後、自分たちが進学する学部の雰囲気や日々目にし、肌で感じながら高校生活の三年間を送れるという「特権」を他の附属・系属の生徒ほどには感じることができない。

開校後、しばらくして、生徒から「附属校、附属校というが、附属校に入ったという実感を得る機会がない」、「大学本部で展開されている企画展とか、早稲田大学の今を知る機会がない」という「不満」とも「皮肉」ともいえる意見が聞かれた。確かに、本部キャンパスに近い、附属・系属校の生徒は、放課後にキャンパスで展開しているさまざまな展示などを見学することもでき、気楽に本部企画に参加することもできる。それこそ、学部の授業に潜り込むことさえも可能である。

そこで、一九九四年当時、将来計画検討委員会では、早慶戦の応援だけではなく、大学本部と連携できるものは何かないか、「早稲田」に入ったと実感できるものは何かなど種々模索した。こうして生まれたのが、各学部の教員に本庄までおいでいただき、学院生に模擬講義をしていただく、という企画である。いわゆる課外講義（当初は科外講義と称していた）としては、学部の教員や学院長による講義、講話などが開校当初から行われていた。しかし、時間の経過とともに、学部

との接点は年一回の学部説明会のみという年がしばらく続いていたのである。

とにかく、大学と本庄の距離をどう縮めるか。学部の教員に本庄をもっと知ってもらいたい、大学の持つ知的財産を学院生に伝えたい、「早稲田」の知の一端を生徒に垣間見させたい、将来進学する学部の情報を知らせたい、卒論製作のヒントにさせたいなど、さまざまな期待と思惑から、時の学院長、教務、事務が中心となり企画し、月一回程度の課外講義や三年生の卒業前の進学準備セミナーが生まれた。三年生対象の進学準備セミナーは進学を前にして少々中だるみしやすい二月の末に、四月からの学部進学への緊張感を持たせる、高校の五〇分授業より長い学部の授業に馴れさせるということもあり、始められた。

記憶によれば、第四代山下元学院長の時代、学部と学院の距離が余りにも離れていることを憂慮して、学部の教員をしばしば本庄に呼んで、保護者会、学校説明会など機会あるごとに、学部や大学の話、本庄学院への期待などを語ってもらうことが多くあった。これは、学部はもとより、保護者へも本庄高等学院が早稲田大学の附属校であることを実感させるのに大いに役立つこととなった。

一九九九年、こうした学部と学院の距離を縮めたい、学部教員に本庄学院生の生の姿を知ってもらいたいという思いが、学院長、教務とは全く別の方面から始まることとなった。早稲田大学の教員で組織する労働組合である「早稲田大学教員組合」がある。当該年度、本庄高等学院の執行委員として教員組合に出向していた望月真帆氏は、本庄

学院を学部教員に知ってもらう必要を感じ、大学の各箇所から組合に出向している学部教員に本庄高等学院での課外講義を依頼した。この呼びかけにに応じていただいた八名の教員により始まったのが、第一回本庄高等学院サマーセミナーである。夏休みに入った七月十七日午後、二日間にわたり、行われることになった。これが、現在でも続いているサマーセミナーであり、今では、組合執行委員の手も離れ、学院行事として位置づけられ、経費の予算も整うなど、充実した内容になってきて、今年で九年目を迎える。

始まった当初は、本庄キャンパスにあるセミナーハウスに宿泊し学部教員と学院生が語り合う、かつて学部のサークルにあった「教授学生交歓会」をイメージしていた。開講数年目のサマーセミナーへの協力を学部教員へ依頼した文書には、

この企画は、「学部の先生方に本庄学院までお出で頂き、緑豊かな環境の下、普段研究されていること、考えていらつしやることなどを気楽に学院生にお話し頂き、学院生は普段接することのない学部の先生とのディスカッションを通じて、大いなる啓発を受ける」ということを期待し、かつての「教授学生交換会」をイメージして考えられたものです。

一泊二日かけて、学部の先生方と「知の合宿」を行う、夕べにはバーベキューを囲み、満天の星を見上げつつ、膝つき合わせて語り合う。学院生にとっては普段の授業では得られない大きな感銘と深い充足感を味わうことにもなります。

さらに、先生方より伺った話が、若く瑞々しい感性のある学院生

に刺激を与え、彼らのその後の進路や将来を決定する大きなきっかけにもなります。多くの可能性を秘め、数年後には早稲田の各学部に進む学院生に是非とも清冽な刺激を与えて頂きたいと思えます。今年度から学院生は学部の授業に参加できるようにになりましたが、残念ながら本庄は遠く、多くの生徒がその機会を得ることが出来ません。このサマーセミナーは学院生にとっては大学の「知」を味わう絶好の機会であり、早稲田に入学した、早稲田の一員になったということを実感するよい機会にもなります。まさに高大一貫教育の一つの姿を見ることが出来ます。

先生方にとりましても普段着の学院生を知る大きな機会になろうかと思えます。

と記され、そのときの思いがひしひしと伝わってくる。

本庄高等学院サマーセミナー講義一覧（一九九九年～二〇〇七年）

年 度	講 義 名	講 師	所 属
一九九九年	人工知能って何？—Machines Who Think せりふの翻訳・舞台で生きる言葉 法学への誘い	松嶋敏泰 小田島恒志 島田陽一	理工学部 文学部 法学部
	中華世界への道しるべ 地球と生きる—資源と環境	小川利康	商学部
	自分さがしの旅—ことばとコミュニケーション	山崎淳司	理工学部
	デリバティブって何？	細川英雄	日本語研究教育センター
	江戸時代までの美術史	葛山康典 星山晋也	社会科学部 文学部

サマーセミナーが開講されて九年が経過した。その間、セミナーハウスが無くなり、宿泊ということはできなくなつたが、受講生は年々増加し、二〇〇七年度は述べ七〇〇名を超えた。進学準備セミナーと違い、受講は「強制」ではない。夏休みに入ったという解放された気分の下、主体的に参加するのがサマーセミナーである。生徒の知的関心の高さを計るにはよい物差と考えている。講義内容が多彩になるにつれ、夏休みの課題とあわせて活用している教員もいるほどである。

高大連携はさまざまな形で行われているが、ここではサマーセミナーを主として取り上げた。一九九九年より二〇〇七年までの講義内容を資料として掲載することにする。

（佐々木幹雄）

二〇〇〇年			
粘土科学への招待	山崎 淳司	理工学部	
表現の扉を開く〜「日本語表現総合」	細川 英雄	日本語研究教育センター	
流行語に見る現代中国	小川 利康	商学部	
冒険物語と古代叙事詩	宮城 徳也	文学部	
性と性分化	山内 兄人	人間科学部	
資源環境社会と廃棄物処理	山崎 淳司	理工学部	
母国語再発見―日本語文法入門	松木 正恵	教育学部	
リアリティは獲得できる、か？	宮崎 清孝	人間科学部	
法学への誘い	島田 陽一	法学部	
生命保険入門	江澤 雅彦	商学部	
土木って本当にグサイ？―大深度地下利用の未来―	小泉 淳	人間科学部	
現代民主主義の政治と選挙―日本とイギリスの比較から考える―	谷 藤悦史	政治経済学部	
法学への誘い	島田 陽一	法学部	
環境を浄化する石	山崎 淳司	理工学部	
インターネット入門	高橋 敬隆	商学部	
フアジイ理論と応用	山下 元	政治経済学部	
外国語の創造性・想像性	ポール・スノードン	政治経済学部	
秩序にひそむ混沌	田崎 秀一	理工学部	
プラトンの「恋愛論」と「国家観」	宮城 徳也	文学部	
パリの形成・歴史と景観	シルビー・ブロッツ	政治経済学部	
アフリカの一人前	大槻 宏樹	教育学部	
経済学の2つの考え方	笹倉 和幸	政治経済学部	
特殊相対性理論・ビッグバン宇宙論対定常宇宙論	大師堂 経明	教育学部	

二〇〇三年	ハイテクノロジーはいかに世界を変えたか	中島 啓 幾	理 工 学 部
	「学問の旅」の仕方、教えます	水島 朝 穂	法 学 部
	植物の雪に対する適応	伊野 良 夫	教 育 学 部
	知能・感情とは何かーロボットにおける心の発生ー	菅野 重 樹	理 工 学 部
	英語の世界	アントニー・ニューエル	政治経済学部
	経済学の二つの考え方	笹 倉 和 彦	政治経済学部
	中国語で学ぶ意味と新時代の中国語学習	齊 藤 泰 治	政治経済学部
	現代ドイツ事情	齊 藤 寿 雄	政治経済学部
	現代家族論	池 岡 義 孝	人 間 科 学 部
	ゼオライトの科学と応用	山 崎 淳 司	理 工 学 部
	愛の文化史を記述するーロシアモダニズム文化入門	草 野 慶 子	文 学 部
	化学とバイオテクノロジー	松 本 和 子	理 工 学 部
	政経学部の国際政治経済学科への招待	田 中 愛 治	政治経済学部
	新世界考古学事情ーマヤ研究への挑戦	寺 崎 秀 一 郎	文 学 部
	放射線実習セミナー	長 谷 川 賢 一	日本原子力文化財団
アメリカ文学研究の面白さとは何か	寺 沢 み づ ぼ	教 育 学 部	
社会科学の数学	山 下 元	政治経済学部	
グローバル・マネジャーの条件	太 田 正 孝	商 学 部	
地域を経営する	友 成 真 一	総合研究機構	
骨を造るーアパタイトって何?ー	山 崎 淳 司	理 工 学 部	
原子の波を見るー極低温に現れる量子力学の世界ー	峰 真 如	本庄高等学院	
がんを防ぐしくみーDNA組み換えー	胡 桃 沢 仁 志	理 工 学 部	
The World of English	アントニー・ニューエル	政治経済学部	

二〇〇四年	<p>家庭と暴力―児童虐待とD.V.を中心として― 経済学と理工学</p> <p>Introduction to Economics</p> <p>福祉工学―生活しやすい環境や道具作り― 私の歩んだ道、科学ってこんなに面白い</p> <p>The World of English</p> <p>ヒンドゥー教の世界</p> <p>数学を使ってマネジメント・管理会計の世界</p> <p>一流短距離走の動作の変遷―過去一〇年をさかのぼって― 映画はこうして作られる</p> <p>環境問題と科学技術</p> <p>年金制度改革への視点</p> <p>物理が開く新しい世界</p> <p>社会科学のための数学</p> <p>福祉ロボットの開発と新規産業の創出</p> <p>より健康になる連鎖反射ストレッチ</p> <p>言葉の創造性・創造性</p> <p>21世紀の法律家と司法制度改革</p> <p>ダライラマの非暴力思想</p> <p>歴史の中の現代日中関係</p> <p>宇宙の現在・過去・未来を探る</p> <p>日本経済を支える中小企業</p> <p>産業公害から都市生活型公害へ</p>	<p>棚村 政行</p> <p>樋口 清秀</p> <p>林 正寿</p> <p>藤本 浩志</p> <p>鷲尾 方一</p> <p>アントニー・ニューエル</p> <p>宮本 久義</p> <p>清水 孝</p> <p>磯 繁雄</p> <p>安藤 紘平</p> <p>河合 素直</p> <p>牛丸 聡</p> <p>竹内 淳</p> <p>山下 元</p> <p>加部 明克</p> <p>鈴木 秀次</p> <p>ポール・スノードン</p> <p>棚村 政行</p> <p>石濱 裕美子</p> <p>劉 傑</p> <p>杉山 直</p> <p>鶴飼 信一</p> <p>黒川 哲志</p>	<p>法 学 部</p> <p>理 工 学 部</p> <p>社会 科学 部</p> <p>人間 科学 部</p> <p>理工学総合研究センター</p> <p>政治経済学術院</p> <p>文学学術院</p> <p>商学学術院</p> <p>スポーツ科学学術院</p> <p>国際情報通信研究科</p> <p>理工学術院</p> <p>政治経済学術院</p> <p>理工学術院</p> <p>政治経済学術院</p> <p>人間科学学術院</p> <p>スポーツ科学学術院</p> <p>国際教養学術院</p> <p>法学学術院</p> <p>教育・総合科学学術院</p> <p>社会科学総合学術院</p> <p>国立天文台</p> <p>商学学術院</p> <p>社会科学総合学術院</p>
二〇〇五年			

		二〇〇六年	
ユビキタス・ラーニング	浦野 義 頼	国際情報通信研究科	
初動負荷トレーニング	鈴木 秀 次	スポーツ科学学術院	
日本の伝統芸能と映像メディア	和田 修 助	文学学術院	
国際コミュニケーション、その第一歩	ポール・スノードン	国際教養学術院	
集まり散じて、金の旅	円城寺 守	教育・総合科学学術院	
超伝導の電子はどのように振舞うのか	尾崎 肇	理工学術院	
ロボットから宇宙まで	河合 素 直	理工学術院	
最近の少年犯罪と家族・社会	棚村 政 行	法学学術院	
環境問題と経済学	栗山 浩 一	政治経済学術院	
膜を用いて人の命を助ける	酒井 清 孝	理工学術院	
現代の世論と政治・メディア政治の展開過程	谷藤 悦 史	政治経済学術院	
地球温暖化問題とその克服に向けた動き	櫻井 英 博	教育・総合科学学術院	
個人の意思と社会の意思	戸田 学	社会科学総合学術院	
言葉の想像性・創造性	ポール・スノードン	国際教養学術院	
戸山・大久保・そして早稲田	秋葉 裕 一	理工学術院	
社会科学と数学	山下 元	政治経済学術院	
日本経済を見る	貞 廣 彰	政治経済学術院	
右と左のサイエンス—ようこそキラルワールドへ—	朝 日 透	先端科学・健康医療融合研究機構	
ストレスに強くなるには	越 川 房 子	文学学術院	
早稲田大学の環境への対応	新 井 智	環境総合センター	
能とセロトニン神経の動き	山内 兄 人	人間科学学術院	
効果的なウォーミングアップとクーリングダウン	広 瀬 統 一	スポーツ科学学術院	
有理数、無理数と円周率	上野 喜三郎	理工学術院	





### (3) 父母の会

改めて言うまでもなく、学校とは多くの人々が参加し、刺激し合い、協力し合って成り立つ教育空間である。多くの人々とは生徒、教員、職員（本庄学院の場合は委託ホームのホストも含む）だけでなく、生徒の保護者も含まれる。特に、保護者は、戦後のGHQによる教育改革によって、いわゆるPTAとして学校運営に占める位置が確立された。教育委員会の指導下にある公立学校とは異なり、私学においては保護者の協力は物心両面において極めて重要である。社会の発展とともに高校、大学への進学率が高まると、保護者の方々の学校教育への関心、期待も強くなり、ますますその存在意義は大きくなってきている。

本庄高等学院は開校した一九八二年の六月二十六日、本学院初の保護者を開いた。夏休みを前にして、一学期の様子を報告し、夏休み期間中の生活について保護者に協力を依頼するためである。当時はまだ一学年しかおらず、全体会はセミナーハウス（現ドミトリ）で行い、その後、各LHR教室にて組主任によるクラス別懇談が行われた。おそらく、この時に、保護者の「父母の会」設立の構想が語られたのではないかと想像する。その年の十一月には各クラスより保護者二名のクラス幹事（世話人）が出揃い、十二月四日の幹事会にて「父母の会」初代会長候補として岩堀忠雄氏が選ばれた。年が明けた一月二十二日、一九八二年度第二回目の保護者会にて第一回父母の会総会が開

かれ、「本会は、父母と学院とが緊密に協力して生徒の学業を向上させ、資質の健全な発達に留意し、有意な人物を育成することを目的とする」などの会則を採択し、正式に岩堀氏が会長に選ばれたのである。ここに、本庄高等学院「父母の会」が正式に発足した。

本庄高等学院の「父母の会」発足に際し、学院側を代表して当時教務担当教務主任として尽力された小野裕二郎氏が「父母の会」の活動成果のひとつである「学院だより」創刊号の編集後記に「父母の会」発足の趣旨を記しているの、それを紹介することにした。

御存知のように戦後は学校も社会に開かれた場となり、ほとんどの学校にPTAがございます。けれども仄聞する限りでは、PTAは、教職員、父母の知的な場ではなく、学校の財政的な援助機関という性格が強くなってきているように見えます。PTAのあり方もひとつの屈折点にさしかかっているのではないかと存じます。

さて、本学院でも五七年四月の開校以来、ご父母の皆様との交流をどのようにするか、保護者会的なもの、いわゆるPTA的なもの、そのどちらでもないものなど模索してりましたが、ご子弟の健全な発達のためには、学院とご父母との事務的連絡にとどまらず、知的な相互啓発の場が必要であって、保護者会もひとつの社会教育の場と考えようと決心して、五八年一月二十二日には「父母の会」を組織いたしました。

単に生徒の保護、監督の相談の場ではない、また学校の財政的な援助機関にはしない。ご父母の意思疎通の場、ご子弟を豊かに包みこむ場として「父母の会」を組織した次第です。

「父母の会」の趣旨が如上の通りであるとすれば、学院の考え方や生徒会の現状などをお報せすることは勿論として、さらに一步を進めて、ご父母の皆様の意見交換やご経験の交流も同時におこなわなければならないということになって参ります。そこで、「父母の会」の中に「父母の会会報編集委員会」を設け、広報的、研究的な会報の発行を今年二月に幹事会で決定いたしました。

これによれば、本庄高等学院の父母の会はよくある財政的支援を行うPTAではなく、教職員、保護者の知的な交流の場という性格をもつてスタートしたということである。

こうして開校の年に発足した本庄高等学院「父母の会」は年度が進むにつれ、会員数も増え、各クラス二名のクラス幹事も充実してきて、全学年の保護者が揃い完成年度といわれた一九八四年から本格的な活動を開始した。「父母の会」活動の拠点として、「父母の会」の中に幹事による「父母の会会報編集委員会」を設けた。この「会報編集委員会」は、早速、一九八四年六月末の保護者会に向け、学院広報誌としての「学院だより」を発行したのである。これが先に述べた小野氏の編集後記を載せた創刊号である。ちなみに、この会報は「学院だより」として発行され、八六年の第五号から「杜一学院だより」と改められ、現在まで三〇号を発行している。

父母の会の活動は『杜一学院だより』の編集、発行だけではない。特に初期のころの活動としてホームステイ運営への関わりをあげなくてはならない。本庄高等学院の特色として、自宅から通えない生徒の寄宿施設として本庄・児玉地区の方にお願ひして開設していただいた

ホームステイがある。海外はもとより、日本各地から生徒を受け入れる本学にあつては必要な施設である。当初、このホームステイ入居にかかる経費は、慌しい開設準備の合間に、学院の生徒担当教務主任が中心となり、職員、ホームステイホストらと協議して、部屋代・食事代などを決めた。しかし、開校して数年が経つと、一般の借家契約に倣い入居料の改定時期を迎えることになった。そこで、これまでの開設準備の時とは違い、入居している生徒の保護者の視点をも入れて、検討するのがよいという判断で、「父母の会」の幹事たちによるホームステイ視察が行われたのである。夏の暑い日、本庄・児玉に点在するホームステイを一軒一軒数日かけてまわり、駅から、学校からの距離といった立地条件、日当たり、付帯設備などの部屋の条件をつぶさに見て、保護者から見た意見を述べ、ホームステイ費を算定する仕事に関わったのである。今では、大学職員を中心として事務・管理システムができており、そうした苦労はしないで済むが、初期の「父母の会」には学院教育のかんりの部分を担っていたと感謝している。

ところで、こうして発足し、活動を開始した「父母の会」であるが、当時、『杜一学院だより』の取材、編集さらにはホームステイまわりなど「父母の会」の活動に要する費用、特に自宅から学院までの交通費、昼食代などは基本的に幹事の方々の負担に負うことが大きかった。当初、「父母の会」の発足の折、学校への財政的支援は行わないということとで、「父母の会」の会費は年額千円とされ、総額約七十二万円ではなかった。手弁当がいやでクラス幹事を引き受けられないという方はないが、学院教育への意識が高く、積極的に幹事になられた保護者とし

ても時間と経費に負担を感じていたと思われる。また、学院としてもその負担に心苦しさを感ずるもいた。

一方、開校して十数年も経つと、生徒たちの部活動も活発になり、他校との練習試合も多くなり、時に関東大会、全国大会への出場を果たすクラブも出始めた。そうした折、これまでは生徒会費からいくばくかの支援金が出されてはいたが、中には顧問の持ち出しに頼ることも多くあった。そこで、大学に頼るのではなく、学院としての自助努力として、何か方法は無いかと模索していたところ、結果において生徒へ還元するのなりということで、保護者の理解を得て、「父母の会」費を値上げして、対応することになったのである。

二〇〇〇年度の佐々木花子会長の折、当時の山下学院長や教務の判断も加わり「生徒の学力向上と健全な育成に資することを目的として」、これまで一人年額千円であった父母会費を、月額千円とし、年額一万二千円にする値上げ案を「父母の会」総会に提案し、承認されたのである。財政的支援を行わないとして発足した本庄学院の「父母の会」ではあったが、これまでの十二倍になる年間約八〇〇万円を超える活動資金が生まれた。これにより、この期を境に学院「父母の会」の活動は大きく飛躍することになる。

年間八〇〇万円を超える父母会費をどう扱うか、必要な分をその都度、支払ってもいいが、父母からの貴重な預かり金であることから、しっかりと予算立てをして、年間計画を立てた方がよいということで、二〇〇一年に、小林秀行会長と高橋淳副会長により現在の形の「父母の会」予算が組まれるようになったのである。

父母会費の予算化についてはいくつか議論があったが、基本的に、会そのものの運営に関わる経費と生徒へ還元される育英資金とに大きく分け、その割合もおおよそ一対三とし、生徒への還元分に大きく割くことにした。運営経費としては、各種委員会による会合、打ち合わせにかかる経費、取材の交通費などに当てられ、育英資金としては大会派遣補助、コーチ交通費・謝礼、各種セミナー開催、交流運営などの特別活動推進費、稲稜祭支援費、生徒表彰費、広報支援費などの費目を立てられ、毎年年度予算が組まれ、それに従い執行されるという仕組みがとられるようになったのである。

「父母の会」会費の値上げによる学院への支援は学院教育の発展の上でも大きな意味を持つことになった。特に部活動において多くのコーチを揃えることができるようになったこと、生徒の大会派遣費を少しでも多く出せるようになったこと、生徒の校外・海外交流に援助が出せるようになったこと、学院賞、学院長賞など生徒の励みになる賞が出せるようになったことなど、学院教育活動の潤滑油的な役目を果たしていただくことになり、心より感謝し、時の英断に敬意を表したい。

このように「父母の会」会費の値上げは生徒たちの活動を大きく支援することになったのだが、それだけでなく「父母の会」の活動をも活発化させた。クラス幹事二名は従来からあった「出版広報委員」、「ホーム委員会」の他に、新たに「文化事業委員」が設けられた。

「広報出版委員会」はこれまでの紙媒体の他に電子媒体も取り入れ、学院広報に力をいれることにした。紙媒体としてはこれまで年二

回発行していた『杜―学院だより』を年度末に一回とし、新たに学院の今を伝える『かぜ 緑風―本庄高等学院通信』を年四回発行することとした。二〇〇〇年十二月に『かぜ 緑風―本庄高等学院通信』創刊号が発行され、現在まで二一号を発行している。二〇〇二年度一年生の保護者から父母の会副会長なられた加藤毅氏は積極的に活動され、時代にあつた情報発信として「父母の会」のホームページを立ち上げられた。これにより、その時々々の「学院の今」を取材し、「父母の会」ホームページを通じて「杜―エクспレス」として発信することができるようになった。体育祭、マラソン大会、文化祭など学院行事のときにカメラを下げ、「広報」の腕章をつけ、活躍する生徒を写す保護者の姿を目にするようになったのもこの時期からである。「杜―エクспレス」は海外などについてなかなか子供に接することのできないホーム生の保護者には大変喜ばれているという。また、受験生への飾らない学校紹介という役割も果たしている。

文化事業委員会は歌舞伎・能などの観劇、音楽鑑賞、文学碑散歩など父母の方々の懇親を図る会を企画する他に、学院行事の芸術鑑賞教室への支援を行っていた。特に二〇〇五年度の野村万作・萬斎父子による狂言教室はその最たるものである。また、将来わが子が進む学部をぜひ事前に見学したいということで、各学部の教務の先生方との協力をえて、学部説明、施設見学などのキャンパスツアーも行われた。

ホーム委員は初期の頃と同じように各ホームを廻り、ホーム運営への提言を行う仕事をしていただいている。また、「父母の会」とは直接

絡まないが、保護者の方々のホーム行事への関わりは年々大きくなってきている。各ホームごとに入居生徒の保護者により構成された「ホーム世話人」により、スポーツツバーベキュー大会、新年餅つき大会などホーム行事の裏方をホストさんとともに取り仕切っていた。特に、一九九七年より始まった稲稜祭にあわせて行うホームバザーでは、献品の整理、値段付け、販売などをしていただき、その売り上げは毎年「本庄高等学院奨学金」に寄付されている。

こうした「父母の会」の活発な動きの中から、二〇〇五年十二月に、卒業生の父母による早稲田大学本庄高等学院「後援会」が生まれた。後援会会則には「本庄高等学院父母の会と連携し、早稲田大学本庄高等学院の教育活動の振興を支援すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする」と謳っている。ここに、在校生の保護者による「父母の会」とは別に、卒業生の保護者を会員とする後援会が発足し、同窓会とともに、本庄学院には三つの支援組織が生まれたことになる。学院としても大変ありがたいことで、二〇〇五年度に硬式テニス部が全国大会に出場した折、「父母の会」とともに後援会からも支援金をいただいた。

この文章は本来、主体者たる「父母の会」で書くべきところであるが、事情により学院で書くことになった。そのため、学院と絡む部分のみを紹介することになり、父母の会の活動の全てを網羅していないことをご了解願いたい。

(佐々木幹雄)

二十五年を想う



錦秋の小径

## 「本庄学院今昔」

嘉 来 純 一

私が本庄高等学院を卒業して十数年。それ以来学院が変わったこと、変わっていないことを少しだけ紹介してみましよう。

ア 変化したこと

- ①共学化 ②学院生 ③先生方の一部 ④学院グランド ⑤セミナーハウス ⑥学院図書館 ⑦学食  
 ⑧早慶戦 ⑨新幹線本庄早稲田駅 ⑩私自身の授業中の態度  
 イ 変化していないこと

- ①校舎 ②先生方の大部分 ③先生方のあだ名

ア 変化したこと

ア①「共学化」に関して

言わずとも知れた共学化。これからの女子生徒の活躍に期待。

ア②「学院生」に関して

まじめです。よく勉強します。でも昔からみんなよく勉強してまし

た!? モヒカン頭やパジャマ姿で登校する人もいません。

ア③「一部の先生方」に関して

当然、私たちが卒業して以来退職された専任の先生方、新しく赴任されてきた先生方がいらっしやいます。詳細は別ページ参照（多分どこかに載っているでしょう）。

ア④「学院グランド」に関して

「学院グランド」が以前のいわゆる「大学グランド」に移動になりました。以前の「学院グランド」周辺を散歩してみてください。ちょっと驚くかもしれません。

ア⑤「セミナーハウス」に関して

以前の「セミナーハウス」の建物が「ドミトリー」というものになりました。以前の「学院グランド」にできたGITSと呼ばれる大学院の留学生の寮、いわゆる「dormitory」です。以前のような利用はできなくなりました。

ア⑥「学院図書館」に関して

「学院図書館」がいわゆる大学の「本庄分館」の方に移動になりました。以前の「学院図書館」は「自修室」として活用されています。

ア⑦「学食」に関して

メニューちょっと変わったかな？ ランチの回数券なんかもあるようです。おばちゃんたちはまだまだ健在です。

ア⑧「早慶戦」に関して

学年行事として一年生は全員参加です。今年は私も参加させていただきました。やはり「紺碧の空」はいいですね。

ア⑨「新幹線本庄早稲田駅」に関して

私も利用しています。大久保山周辺の交通量もだいぶ増えました。

ア⑩「私自身の授業中の態度」に関して

さすがに授業しながら眠るわけにはいかないでしょう(笑)。

イ 変化していないこと

イ①「校舎」に関して

学院の雰囲気はだいぶ変わりましたが、この「校舎」は未だ健在です。

イ②「大部分の先生方」に関して

退職された先生方もいらっしゃいますが、現職の先生方はまだまだ大活躍中です。

イ③「先生方のあだ名」に関して

私はもう使えません(笑)。

変わるべきところは変わり、残すべきことは残す。学院をより良くしていきたいものです。

(英語科・一九九四年度卒)

## 雑 感

木 元 保

先日囲碁の全国大会の引率で出雲へ行く機会があったが、最近全国

大会や関東大会に行く機会が多くなったように思う。街中の学校では垂れ幕を作って派手に宣伝するところであるが、本学院ではカラスや野鳥に見せるだけになって意味がないので垂れ幕は作っていないが誠に残念なことである。

この五年ほどで、硬式テニス部関東大会二回、全国大会一回、スキー部関東大会一回、囲碁将棋部関東大会二回、全国大会三回と引率している。硬式テニス部やスキー部は副顧問なので、都合で引率出来ない大会も含めると実際にはもっと多くなる。他のクラブについては良く分からないが、私が顧問をしているクラブでは開校から二十年ほどでスキー部が関東大会九回、全国大会五回、将棋部全国大会一回であったのを考えると(これだけでも大変な事と思うが)、最近五年での回数が大変な数であるのが良く分かる。α選抜の影響大と言えよう。

開校当初はこのような大会への参加に対しては学校からの補助もほとんど無く壮行会といったものも行わず参加した生徒たちには、可哀想なことをした。顧問としては、その度ごとにいろいろな場所へ行けて大変ラッキーであったと言える。この素晴らしい生徒たちに感謝!

感謝!

これからもこのような大会に生徒たちが数多く参加することが出来て、引率で忙しい日々が送れることを願っている。

(数学科)



## ワセダの中核

小林 大輔

大学からよく言われることだが、学院は「早稲田大学の中核となる人材を育成する場」である。まったくその通りである。その通りなのだ、では「早稲田大学の中核となる人材」とはいかなる輩をいうのか、となると、どうもよく分からない。

そこで、私が「ワセダの中核」つばいと何となく思いついた人物を挙げてみる。例えばタモリ。大学在学中はジャズクラブにて活躍するも、学費未納のため一年少々で除籍。または室井滋。やはり在学中から女優として名を馳せたが、演劇に没頭する余り七年生まで勤め上げた末に中退。ちと古いかもしいないが、文学・ジャズ・映画評論の植草甚一。ジャズも映画も、まだ評論らしい評論がなかった時代から、独自のスタンスで活動を続けた人。不良老人の鑑である。やはり学費未納により除籍。また、高野秀行という辺境冒険作家は、探検部員としての活動を、そのまま今の仕事にしまった人である。彼もまた七年という、小学生よりも長い学生生活を送った末、奇跡的に卒業（ちなみに高野の『ワセダ三畳青春記』は青春文学の傑作である）。

以上から考えるに、「ワセダの中核」とは、親や大学の恩惑、あるいは周囲への迷惑などはさて置いて、一体何の役に立つのか分からない

ことに己のエネルギを注ぎ込める人物をいうのだ、と結論付けることができるだろう。

誤解のないように言い添えておくと、留年したり中退したり除籍されたりするような奴が「ワセダの中核」なのではない。何だか良く分からないエネルギを持ちあわせた人物こそが、歴代のワセダを担ってきたのである。

男女の別なく得体の知れない人材を育成すること。それが学院に奉職する私に課せられた責務であると、肝に銘じる次第である。

(国語科)

## 雑感

齋藤 正憲

二〇〇一年四月に赴任して以来、本庄での暮らしも七年目となった。二十五周年という時の長さを考えれば、ごく短い時間ではあるが、その間、いろいろなことがあった。

一年目は担任外であったが、右も左も分からぬまま、過ぎていった。二年目以降は組主任となり、二〇〇五年三月には初めての卒業生を送り出すことができた。いまだにああすれば良かったと後悔すること頻りであり、担任として職務を全うできたという達成感ほぼ皆無である。しかし四〇名の生徒とともに、成績の心配をし、行事を楽しみ、

学部選択を悩み、学校の矛盾を憂えたことはかけがえない経験となった。未熟な担任を暖かく見守ってくれた生徒たちにはただただ感謝するばかりである。

どうにかこうにか送り出した私にとっての「一期生」も、早いもので、既に学部の三年生になっている。コーヒープレイクが近づけばランチにありつくことばかりを考え、文化祭では女の子の電話番号を手することに熱中していた彼らも、そろそろ就職の心配をする年頃になった。来年の今ごろには就職先を決め、ほどなく、社会に漕ぎ出していくことであろう。

そのような彼らと久しぶりに会って痛感するのは、根っこの部分では高校時代とあまり変わっていないことである。もちろん、大人として扱われる大学生活を経て、落ち着いてきたし、受け答えがすっかりしてきたという印象は強い。しかし、ふと見せる素顔はむしろ馴染み深いもので、高校時代に見せてくれたものとそれほど変わらない気がしてならない。

やはり、高校時代は重要な人格形成期であり、そこで醸成される個性は一生の財産となるのであろう。拙いながらも教員経験を積み、まさに人生の画期を迎えている高校生と向き合うことの責任の重さを噛み締めているところである。生徒の模範となるほどの清廉さを持ち合わせていない私は、せめて、一人の人間として生徒に何がしかの影響を与えられる存在でいたいと願うばかりである。

では何をするべきか？

模範解答を得ることはできないのかもしれないが、少なくとも方向

性だけでも見極められるよう、真摯に生徒に向き合い、また研究でも研鑽を重ね、その成果を教育に活かしていきたい。二十五周年の節目に、そんなことを考えた。

(地理歴史科・世界史)

## 大久保山の仲間十一首

坂井淳一

親鴨を先頭にして子鴨数多横断中なれば吾は一旦停止

体育祭閉会式の上空をオオタカが二羽旋回しをり

1・5リットルのペットボトルに生け捕られし蝮はいつまでも威嚇続ける

生徒らの通報受けて駆け付けしベランダに巨き青大将一匹

キリストの生誕語る七月の教室の隅犬が寝ており

生徒らがスクラムを組む練習機井桁の陰に青蛙見ゆ

夏休み朝練前のラグビー場野うさぎの糞をマーカーに収む

グラウンドに兔を追へば「ふるさと」の歌詞の出だしが頭に浮かぶ

居残りてパソコン叩く教務室ふと見れば横に竈馬おり

夜道帰る吾の自転車の灯火をばわざわざ横切る狸不可思議

猪は隣の山より来たりてふ山と山とは連なりにける

(公民科・倫理)

## 私の「故郷」

佐々木 幹 雄

一九四九年八月一日、敗戦の四年後八朔の日に、私は岩手県一関市に生まれた。北上高地の南西端で、緩やかな丘陵の川筋に沿う狭い耕地を耕し、隣家との距離が百mもある典型的な東北の山村である。生まれた当時は茅葺の家、土間と囲炉裏とランプの生活であった。生活環境は変わったものの、今でも山河の風景は変わらない。ここが私の本質、真正正銘の故郷である。

二歳で仙台にきた。電気もないランプ生活の田舎者にとって仙台は

都会そのものであった。仙台の駅舎で余りにも人の多さに驚き、私は「今日はお祭りなの？」と何度も母に聞いたそうである。自転車で轢かれ、目の前の肉屋に担ぎこまれたが、「肉にされる、肉にされる」と泣き叫び、親切な肉屋を困らせたのも片平町の思い出である。仙台では一回引越をし、住居を変えた。広瀬川で無心に遊んだ八年間の仙台は私の故郷になった。

十歳で東京にきた。東北本線が赤羽、王子を過ぎ上野に近づくに連れ、電車の音や人の声とは違う、低く唸るような音が耳の底に響いてくるのを感じた。大都会の音である。東北訛がぬけずに転校した小学校ではからかわれたこともあった。東京では港・白金、杉並・成宗、世田谷・用賀、中野・上高田と住居を変え二十二の時まで過ごした。その後千葉・八千代、そしてまた東京・東久留米と転々とし、埼玉・本庄に落ち着いたのは本庄高等学院が開校した一九八二年である。当時、本庄駅の南側は一面桑畑、その中にガスタンクが二つ並び、さらにその奥に大久保山が見えた。本庄でも住居を変えて、今の住居が私の人生で一番長い居場所となった。今年で二十七年目になる本庄も今や私の故郷である。

学院が出来る前、私は早稲田大学文化財調査室に所属していた。身分は教務部預かりの嘱託である。早稲田大学が開発の時代に入り、本庄校地を皮切りに、各地のキャンパス整備を開始した。当然本庄キャンパスに高等学院を建てる。その事前調査として埋蔵文化財の発掘調査を行なうというのが私の仕事であった。本庄学院の建設用地を初め、旧セミナーハウスから南に下る共通教室棟前の道路(B二道路)、東に

下り寄居行きのバスの通う道路（E道路）、旧学院グラウンド北斜面（浅見山）など、主に縄文から奈良・平安時代までの遺跡を調査した。

八三年四月に本庄学院の教員となり、爾来二十四年が経つ。学院では日本史を担当する。年代、個人名を闇雲に暗記するのではなく、時代が変化してゆく様をしっかりと理解せよと、口をすっぱく指導した。

字が汚く、板書が下手で、おまけにすぐ怒る。「先生を怒らせるな」とささやく生徒の小さな声が聞こえたこともあった。部活では今はなき柔道部の顧問を十五年ほど務めた。楽しいことも多くあったが、試合で骨折した生徒の姿は、いまでもつらい思い出である。毎年、夏の合宿場所をどこにするか、悩んだこともあった。

自分の研究としては、初めの十年は毎年、奈良県桜井市三輪に坐す神体山信仰として『記紀』にも登場する大神神社に通い、古代祭祀、祭祀遺物の調査をした。祭礼調査は断続的ではあったが一年にも及び、三輪に心奪われたこともあった。私の故郷に加えてもいい。併行して、同僚と学内に窯を築き焼物を焼いた。特に朝鮮半島の影響を受けた須恵器復元の焼成実験は十年かかった。現在は日韓の焼物交流に関心があり、彼の地より何が伝わり、逆に何を伝えたか、それを考古学的手法で追求したいと考えている。

一九九五年には韓国・釜山で一年暮らした。韓国は近いので、いつでもいける、ということとで長期に滞在して研究する人は少ない。週単位という短期的に訪韓し、関心事のみを集中的、ゲリラ的に研究して、成果を上げるといのが一般的な研究スタイルであった。しかし、その国民、民族の生活・文化を理解するには少なくとも通年で滞在し、

四季はもとより韓国人の息を肌で感じる必要がある。そこで、一年間の滞在を決意したのである。私の住民票の前住所の欄に「韓国釜山市」と記されている。それを見るたびに、僅か一年ではあったが、多くの韓国人との濃い出会を懐かしく思い出す。釜山が故郷になったことはいうまでもない。

昔、酔狂で易者に観てもらったことがある。そのとき、易者は「あなたには少し『変転運』がある。だけど、大きな間違いは無いでしょう」と占った。確かに、平凡に生きてきたつもりでも、いくつも故郷がある、と思えることは、そういうことなのかも知れない。私は今夏で五十八歳になる。あと何年生きるか。少なくとも定年まで十二年、選択定年まで七年。そろそろこの後どう過ごすか、どう生きるか、考えておくべき時期に来ている。そして、この後どこが私の新しい故郷に加わるのか。本庄学院二十五周年にして想うところである。

（地理歴史科・日本史）

## 変わりゆくことと変わらぬこと

高山正弘

本学の開校と時を同じくして着任し早二十五年目になります。今にして思えば一から学校を作るといふのはやはり大変なことだったと感ぜられます。マスコミにも騒がれ世間の期待を一身に背負って鳴り物入りでスタートしました。斬新なアイディアは校舎だけでなく学習指導上のカリキュラムにも様々な形で盛り込まれたのですが、教師側の描いていた理想は、生徒たちの厳しい現実の前にあっけなく崩壊していくことも度々でした。一つには、本庄の地にホームステイ（現ホーム）という寄宿制度を導入し、当初は実に七割以上の生徒が自宅外から通学するという状況があったことが挙げられます。毎日が修学旅行状態で睡眠や学習をせず登校してくる生徒たちが大半を占める教室で学習効果上がるはずもなく、教師側はいたずらにあせりと苦悩に振り回されていたように思います。

しかしながら今にして思うのは、生徒たちは結構自由闊達に、大人たる教師側の意向にはお構いなく、自分たちがやりたいこと、やれること、或いはやらねばならないことをやってきていたのではないかと。ないない尽くしの開校当初の環境下でも、早稲田の歴史に名を残さんと思春期の熱い血潮をたぎらせ、力いっぱい現実立ち向かって

くれた生徒たちの心に思いを馳せる時、担任としてどれだけの手助けができたのだろうかと忸怩たる思いがいたします。

共学になっても、校舎が移転しても変わることがないのは、人生において最も多感で傷つきやすい繊細さとしなやかな感性を持つ高校生という一時期を本庄の地で過ごした生徒たちの心根ではないでしょうか。本学で三年間を過ごしてよかったと思える生徒たちを教えることがわれわれ教師に課せられた使命だろうと二十五年目の節目に心を新たにす次第です。

（英語科）

## いつまでも未完成の魅力

田邊潤

先日、卒業生のN君から久しぶりにメールをもらった。私が本庄に勤務した時の一年生だから今では三〇代も半ばくらいの年齢になっているだろうか。

彼は理工学部の数学科に進学後、建築を勉強しにアメリカに渡った。そしてアメリカの大学院修士課程で建築を勉強したのちニューヨークの建築設計事務所勤務し、再びケンブリッジにあるマサチューセッツ工科大学（MIT）の修士課程に進学していた。卒業後も時々本庄へ尋ねに来てくれ、お互いに近況を報告しあっていた。彼から様々な体

験談を聞かせてもらうことは私の楽しみにもなっているが、今回のメールは「N」の修士課程を卒業し、今度は奨学金をもらい隣のハーバードの博士課程に進む事にしたという報告であった。「少々遅いスタートですが、あと三年程、勉強してみる事にしました。それからでもまた就職出来ますし、もう少し自分のやりたい事をやってみる事にしました……」。少年のようなキラキラと輝く瞳でアメリカの街を闊歩するN君の姿が目には浮かび、こちらも清々しい気持ちになった。

本庄高等学院も開校二十五周年を迎えたが、常に新鮮な感覚で未成の魅力を保ち続けることも私たち教員の仕事なのかもしれないと彼のメールを見て感じている。

(体育科)

## 二十五年を振り返って

中野 公世

創立当初のことが、昨日のように思い出されます。皆新しい学校を作る意欲に燃え、連日遅くまで会議をしていました。皆若かったですね。進級基準、卒論、中国修学旅行をはじめとする様々な学校行事、すべて議論をしながら、決めていきました。修学旅行も、今振り返ってみると、よく出来たと思います。今から考えると、すべて大変だったけれど、やりがいがあり、その場に立ち会うことが出来たととても幸

せだったと思います。レールを作りながら走っていました。初年度は体育館、食堂、図書室もなく、グラウンドも整備されていませんでした。何も無い学校に、早稲田の附属という事だけで、子息を預けてくださった父母の方にも感謝します。皆やけに張り切っていました。私はいつのころからか、物子と言う方が通りがよくなりました。気が付いてみると、今までの人生の半分近くを本庄高等学院で過ごした事になります。

はじめは、物理の専任は私一人だったので、実験器具を買い集め、その殆どは今も使っています。高価な実験器具を生徒実験に使えることはすごく恵まれた事です。いかに実際の現象に触れさせるか、擬似体験をさせるかに苦労し、受験校ではなく附属ならではの教育ということに留意しました。単に公式を覚える事ではなく、ものの本質を見抜くこと、一つの現象を多面的に捉えることが少しでも身に着いて欲しいと思えました。非常勤の先生にも恵まれ、特に山口先生、室谷先生には長期にわたり、尽力頂きました。

初期の生徒達は、バイタリテイあふれ、ビックリさせられ通してましたが、それも今になっては懐かしい思い出です。今は時代の影響も大きいですが、素直でおとなしい生徒が増えて、学校の中で積極的に行動する生徒が少なくなってきたのは寂しいです。学校全体が小さくまとまってきたような気がしてならない。教師も生徒も次の四半世紀に向けて、新たに飛躍していかなくては……。忠実な兵隊ではなく、型破りなりダーを育てたいと思っている。それが本庄高等学院の使命ではないだろうか。しかし、学校というところは、かなり意識しない

と、忠実な兵隊を求めてしまふ。これからの時代はますます本庄高等学院のような私学の教育が、日本の社会に必要なようになってくると思う。一期生も四〇歳をすぎ、卒業生が各界で活躍している。彼らの才能を開花させるのに、本庄高等学院の教育が役立つと思いたい。ますます卒業生の活躍に期待したい。

(理科・物理)

## 雑 感

櫛 島 眞 澄

推量・推定の「らしい」には、「……風である」、「いかにも……」と思われる、「の意味もあるらしい。日本人らしい、男らしい、などを使うのだろう。「早稲田らしい」といつたらどういうことか。一見早稲田のようだ、となるのだろうか。似非早稲田、擬似早稲田か。本物のようだが、本物の早稲田とはチョト違う。それとも、これこそ究極本家本元の早稲田である、とうことか。勿論コンテクストに依る。

早稲田と聞いて思いつくのは、「在野精神」、それとも「反骨精神」かな。「学の独立」、「進取の精神」は一般にはあまり馴染みがないのではないか。逞しさ、泥臭さ、努力家、田舎者、猛者等が挙がるかもしれない。「談論風発」、「質実剛健」、「文武両道」もあるのかな。総じてポジティブな印象ではないか。

早稲田人を言葉少なくして言い表すのは難しい。また、各人の持つイメージも色々だろうし、実際とはギャップがあるものだ。イメージだけが一人歩きすることはよくあるものである。

そうであっても、である。早稲田（ウー）マンらしく独立心旺盛で強靱な精神力・意志力があり、在野精神を有し、時代の権威と距離を置き、あるいは時代の権威を批判できる理想の高いひとになってほしいと勝手に思っている。しかし、事はそう容易なものではない。相당한覚悟が必要である。

「一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るゝをもいたむべからず。人の嘲りをも恥づべからず。万事にかへずしては、一の大事成るべからず。」……「されば、一生のうち、むねとあらまほしからん事の中にいづれかまさとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてて、一事をはげむべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事を来たらんなかに、少しも益のまさらん事をいとみて、その外をばうちすてて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心にとり持ちては、一事も成るべからず。」『徒然草（第百八十八段）』

さて、本庄高等学院の校風が、五十周年、百周年にはどのように色づいているだろうか。楽しみである。早本生らしい有能な人材にすべく微力であるが全力を傾注せねばならない。早本教師らしく、へこれはらしくないなあ（有為夢舟櫛島）

(英語科)

## クラス会で思い知らされたこと

羽田 一郎

今年五月に、一九九二年三月に卒業した生徒たちのクラス会があった。優秀な幹事のお陰で大盛会であった。各職場でも中堅になりつつある年代で、公私共に忙しい中にもかかわらず、クラスの半数を超える人が集まった。

当初の予定を急遽変更して、大久保山を散策することにした。卒業後に変化したものを確認していく散策であったが、実は、変化していないものを見つける散策でもあった。何も変わっていないものを見つけては、皆懐かしく思い、安堵の色を正直に浮かべていた。懇親会の席では、「俺たちは、あんなに良い環境で生活していたのですね。」という感想が多くの人から聞かされた。(もっと早く気づけよ。)

いつの世にも教育論議が熱く交わされているが、その多くは、制度の問題であったり、教員の質の問題であったり、家庭の躰の問題であったりしている。しかし、学校が立つ大地を考えた議論を聞くことは少ない。効率や、財政の問題が優先され、生徒たちが生活する環境の重要性にたった議論は少ない。

広い学校敷地と素晴らしいグラウンド、騒音や空気汚染とは縁のない立地条件、山の頂に緑に囲まれて立つ校舎等々、本庄高等学院の大

きな財産の一つは、この大久保山という恵まれた環境に学校があったということ、そしてその環境が生徒を大きく育てていくことを、私は改めてクラス会で思い知らされた。

(数学科)

## 大久保山・その後

吉見 孝人

一九九一年十月に発行された「十周年記念誌」に「大久保山」と題する文章を寄稿した。これを読み返しながら、その後の大久保山について書いてみようと思う。学院の校舎は創立当時と殆ど変わらないまま建っているが、大久保山を取り巻く環境はこの一五年間に大きく変化した。その一つは、学院生が使用していたグラウンドが削られてなくなり、その場所には大学院国際情報通信研究科と環境・エネルギー研究科さらに本庄国際リサーチ研究機構などに関連した建物が並び、そのすぐ北側の調整池(桜並木がある)の近くには新幹線本庄早稲田駅が出現したことである。学院生用のグラウンドは大久保山南側の、以前大学グラウンドと呼ばれていた場所に移動した。本庄キャンパスに大学院が新設されたことに伴い、本庄セミナーハウスは改装されてドミトリと名称が変わり、海外からの大学院生や研究者用の宿泊施



設になつてしまつた。また、大学図書館本庄分館の南側には国際情報研究センター等の建物が出来た。

これらの建設工事が、間隔を置いてではあるが数年間続いたが、本庄高等学院の大教室に比較的近い松林の中にオオタカが巣をつくり子育てをしている。オオタカは一九九七年に大学の自然環境調査室のメンバーによつて、大久保山での繁殖が確認された。オオタカは日本版レッドデータブックに危急種として記載されているタカ目タカ科の鳥でレッドデータブックによると、年一回繁殖し巣は針葉樹とくにアカマツの太枝のつけねなどに小枝を組んでつくり、餌として鳥類ではキジ類から小鳥まで、哺乳類ではノウサギやリスなどを捕らえると記されている。大久保山には二十五年前から何組かのキジが生息しており、現在でも時折甲高い鳴き声が聞こえている。また、以前からいたノウサギも時々（特に夕方）見かけることがあり、キジもノウサギもオオタカに遭られずに無事に生息しているようである。

大久保山の一部は、オオタカの営巣に適したアカマツが林をなしているが、ここには「十周年記念誌」にも記したが、低山の松林を棲家としているハルゼミが生息しており、毎年ゴールデンウィーク前後に初鳴きを聞くことができる。ちなみに、今年（二〇〇七年）は五月七日であった。しかし、今年はその後、鳴き声あまり聞こえず、聞こえても小數であった。三月に校舎近くの林の低木や下草が大規模に刈り払われたのであるが、これが影響しているのかもしれない。ちょうどハルゼミが鳴きだす頃、大久保山にはマツの花粉が降りそそぎ、校舎の外はもちろん、校舎内は廊下も教室の床も机の上も黄色い花粉で

覆われる。今年はマツの花粉も五月七日に初飛びが確認できた。

ちょうどその頃であろうか授業中、校舎近くの林の中で「特許許可局」と高く澄んだ鳴き声が聞こえてくる。この声の主はホトトギスで、図鑑によると鳴き声は「テツペンカケタカ」と記されているが「特許許可局」の方が、その鳴き声をよく表していると思う。

以前にも記したが、本庄高等学院の卒業生は、都心の環境がよいとは言えない大学キャンパスに行かなくてはならない。生徒には、本庄にいる三年間だけでも本庄の「恵まれた自然環境」を自分の目で見て、耳で聞いて、肌で触れていつて欲しいと願っている。

（理科・生物）



紅葉の美しいメタセコイア

## ホーム関係

## ホームを担当して

布川 福治

早稲田大学本庄高等学院創立二十五周年、誠におめでとうございます。この記念すべき二十五周年に偶然にめぐり合わせ、大変意義深く思っております。

また、二十五周年記念誌にホーム担当として寄稿文の依頼を受け、大変名譽であると感じつつ、また不応ではないかと、思いながらも書かせていただきました。

委託ホームを担当し、早や五年になりますが、当初はひたすら先任者の資料を読み日々の業務をこなすのがやっとでした。

やがて見えてきた自分の課題は「生徒にとって快適なホーム作り」でした。生徒や保護者の方々から寄せられる苦情を満足へと変革するため、まず、ホーム入居生の生の声を聞こうとアンケート調査を実施しました。

そして、その中から問題点を洗い出し優先順位をつけ、やれることからホストと一緒に改善の手を打ってきました。現在も進行中

です。

委託ホームの紹介を時代に合わせ、紙媒体から本庄高等学院のホームページに掲載を始めました。○五年十一月より運用しています。

ホーム入居希望者へのホーム紹介ビデオを製作し、○七年度新入生の入学手続きにおいて上映しました。製作にあたっては、ホームの良さをどう表現するか？田邊先生の前案をもとに、ホスト、学院生徒の協力を得て完成しました。

スピードと感度、そして思いやりが求められる時代にあつて、これからは常に問題意識をもち更なる快適ホームを目指し取り組んでいきたいと決意しております。

ホストの皆様方、先生方、事務所スタッフに感謝申し上げます。

(ホーム担当職員)

## 二十五年を振り返って

金子 薫

「これから 伺って良いですか？」

突然の電話に驚き、又懐かしく嬉しい思いを致しました。

二十年ぶりの訪問です。二年生の時に一年間だけお預かりした。

生徒が家族四人で草津と軽井沢に遊びに行った帰りに、ふと思いで出てきてホームに寄りたくなったのでしよう。自分の生活が安定してきて

心にゆとりができたのかもしれないね。そして奥さんと子供達に自分が高校生の時に生活をしていた場所、学校を見て欲しかったのかもしれない。

又ある卒業生は、結婚式に招待してくれ、可愛い子供が二〜三歳になった頃に奥さんと子供を連れて来る事もありました。

在学中は悪戯小僧で手を焼いた事も、今となっては良い思い出です。三年間一生懸命にお世話しても一度も来ない子もいれば、たった一年〜二年しか居ない子供が急に遊びに来ることもあります。

ホストの仕事をしていて何が嬉しいのか、それは突然予期せぬ時に卒業生が遊びに来てくれる事です。何時でもいいです、思い出したら気楽に遊びに来て下さい。

美味しいコーヒを入れて待っています。

(委託ホーム金子 ホスト会二〇〇二・三年度会長)

## 二十五年を振り返って

高田 千枝子

早稲田大学本庄高等学院創立二十五周年を迎えられましたこと、誠にめでとうございます。ホストも皆さんと力を合わせてお手伝いできましたこと嬉しく思っております。我がホーム高田は、一期生の皆さんから預かせて頂き多くの卒業生が巣立って行きました。

卒業してから近況を知らせに遊びに寄って下さる子、手紙にて家族皆で仲良く生活している様子を知らせて下さる子、海外で活躍している子、教育実習に来て元気な姿を見せてくれる子、テレビで変わらぬ姿を見せてくれた子、俳優、脚本家となり女優さんと結婚した子、などたくさん喜びを私たち家族に与えてくれています。

今ホームで生活している生徒の皆さんも勉強、クラブ活動と元気に過ごしていただき高校生活とホームで過ごした事が、人生のプラスになり大きく羽ばたいてくれる事を期待し、今後とも努力して参りたいと思っております。

本庄高等学院の益々のご発展をご祈念申し上げます、お礼の言葉に代えさせて頂きます。

(委託ホーム高田 ホスト会二〇〇四・五年度会長)

## 二十五年によせて

町田 皓次

学院が創立して二十五年という年月がながれ、ここに二十五年を記念を迎える事に当たり心よりお慶び申し上げます。

私達ホームもこの間、学院の先生方をはじめ職員や父母の皆様、多くの関係者の方々のご支援、ご協力のおかげを持ちまして多くのホーム生をお世話し無事に大学に送る事が出来ました。ここに二十五年の

節目に当たり紙面をかりまして、感謝申し上げます。

今ここに振り返って見ますと、この年月の間に「うれしかった事」

「驚いたこと」「大変だった事」「つらかった事」などなど……、一言では言えない色々な事がありました。各ホームも皆同じでそれぞれホームの色々な歴史があると思います。これまでホーム町田にお力添えくださった方々のおかげで二十三年目になります、そして卒業生も三二二名を送る事が出来ました。そんな彼等が本庄に戻ってきて「ホームが懐かしい」「ホームの飯が又食べたい」……など嬉しい事を言ってくれるので、このヤロー迷惑をかけやがってと腹で思いながら彼等が大きく成長していく姿を見ると、「ああ……、ホームをやっている良かったなあ」とつくづく思います。

本庄高等学院も〇七年度 男女共学になって益々発展して行く事を願ひ、私達ホームも学院と共に一生懸命やっけて行きたいと思ひます。

今後もご指導、ご協力を宜しくお願ひ申し上げ、お祝ひの挨拶とさせていただきます。

(委託ホーム町田 ホスト会二〇〇六・七年度会長)



委託ホームホスト北京研修旅行（北大附中 2007）

## 創立二十五周年記念によせて

田村 光生

学校関係者や在校生の皆さん、早大本庄高等学院 創立二十五周年  
おめでとうございます。

早速ですが、二十四年前にあったものとなかったものを挙げてみま  
すと、

あったもの：新しい校舎、制服、中国への修学旅行、マムシ注意の  
看板、本庄駅前の賑わい、稲稜際、赤城のからっ風、関越自動車道

なかったもの：本庄早稲田駅、学校への通学バス、女子生徒、校舎  
にクーラー

時がたつと変わるもの、変わらないものさまざまですね。

私にとって本庄での三年間は、本庄での格別な環境の中で根性を養  
うことができ、その後の人生に良い影響を与えたと思ってます。

在校生の皆さんへの一言としては、人間の行動は、環境と人間性に  
より、変わっていくと言われてますので、本庄での三年間を大事に充  
実した毎日をご過ごしていただければと思います。

次の二十五周年では何か変わっているかを楽しみにしています。

(一九八五年度卒)

## 「持つべきものは……」

岡 弘

四年ほど前、約十年間勤務した金融機関を退職してある団体に転職  
した。

前職の経歴をふまえてか、経理を担当することとなった。とはいえ、  
できあがった決算書を見てあれこれ言うのと、仕訳の最初から行うの  
ではかなり勝手が違う。「三十の手習い」で戸惑うことも多かったが、  
そんな時に学院時代のネットワークが大いに役立った。

証券業務に精通している者や企業財務全般に詳しい者など、多くの  
級友からたくさんのアドバイスをいただいた。違う学部・学科に進学  
したことがこうした形でメリットとなるとは思ってもいなかった。特  
に公認会計士となった某君については、親身になって指導してくれた  
ことをこの場を借りてお礼を言いたい。

ただ、残念なのは三十代なのにすでに亡くなった同期生がいること  
だ。私も、恥ずかしながら今流行り？のメタボリック体型だ。今後共、  
健康には十分留意してまいりたい。

(一九八七年度卒)

## 「本庄」の「人間教育」

小林 央 之

本庄高等学院の二十五周年、誠におめでとうございます。

風間先生、上野先生、御無沙汰しております。HPを拝調し、現在も教壇に立たれていることをうれしく思うとともに懐かしく思いました。卒業後、十五年以上が経過しましたが、本庄での三年間の生活はいまも鮮明な記憶として残っております。

また、HP内の現在のホームステイの生活風景、校内の写真を拝調し、在学時のことを強く思い出し、「本庄に戻ってみたい」という気持ちを感じました。現在、私は企業において開発技術者の職を得ておりますが、会社での生活においても本庄のホーム生活や部活で培われた「人間関係能力」が大変役立っているように感じます。

「本庄」「ホーム」という特徴的な環境により「人間教育」がなされるということが「本庄」の大きな特徴であると思えます。

教職員やホスト、在校生、保護者、OBなどさまざまな立場で「本庄」を支えている方に、一卒業生として感謝したく思います。

(一九九〇年度卒)

山

渡 邊 真

学院用語の中でも、とりわけ山という言葉には愛着がある。むろん大久保山のことである。下界といえど街を指し、下校のことを下山という学校は、そうあるものではない。かつては、けもの道と称する未舗装の登山道が一般的な入山ルートであったが、駐輪場の移転や通学バスの導入とともに状況が変化しているようである。

そう、山は年々変化している。セミナーハウスはドミトリイとなり、Aグラウンドには巨大建築物が出現。そしてよもやの本庄早稲田駅である。学院はいよいよ共学となり、校舎の移転計画さえあるという。いつまでも変わらずに、なんていうのはただの感傷でしかない。

しかし、失ってほしくないものもある。各教室に配された大きな窓の外に広がる山の豊かな自然。学院を卒業して誇れるものを挙げれば枚挙に暇がないが、どんな名画を飾るよりも贅沢な教室で学べたことは、通った人間にしか分からない幸福である。山に抱かれてこそ、学院生は育まれるのだ。

(一九九八年度卒)

## 開校二十五周年、

おめでとうございます

松島 秀典

卒業して早九年が経ちますが、片時もあの特別な三年間を忘れることはありません。喉を潰して叫んだ（歌った）稲稜祭での紺碧の空、真夏のビーチさながらの体育祭、授業中に教室へ飛び込んでくる巨大な蜂や鳥、北京旅行等々。エアコンの無かった近代建築物群の中、大いなる知性と若干の痴性で綴られた学院生活の思い出は、今でも自らを鼓舞する原動力となっています。

集まり散じて人は変われど仰ぐは同じき理想の光と謳われるように、僕らが自由な環境の中で、共に学び考え過ごした時間は何ものにもかえがたく、そこに息づく精神こそ、本庄に宿る不変的な学院らしさだと思えます。後輩たちにも、是非この「らしさ」を大切にしていてほしいと願う次第です。

最後に、お世話になった先生方、職員の皆さん、本当にありがとうございました。特に老練の極みを以って僕たちを導いて下さった冷牟田修二先生には、E組全員になり代わり、心より御礼申し上げます。

卒業生  
(一九九九年度卒)

## 北海道修学旅行

石井 大祐

私達二〇期生は学院二十五年の歴史で唯一、北海道修学旅行に行つた学年だ。前例のない旅を一から企画することは格別の楽しみがあった。実行委員で先生方も含めた三百人規模のイベントを企画し、クイズ問題の作成や賞品の調達まで、毎日遅くまで学校に残つて知恵を絞つた。その甲斐もあり、イベントは大成功、私も司会という大役をなんとかやり遂げた。

この経験は、部活に所属せず、快速電車に乗って帰宅するか、友人と近くの漫画喫茶で過ごしてばかりいた当時の私にとって非常に新鮮なものであった。しかし今思えば、普段自由気ままに過ごしている学院生が、ある目標を見つけたときに絶大な能力と団結力を発揮して成功に導くという象徴的な出来事だったように思う。

あれから四年。皆それぞれ大学院進学や就職など、新たなステージへ旅立とうとしている。学院時代の経験は、良き思い出であると共に、各々の舞台で飛躍するための確かな糧となっているのである。

(二〇〇三年度卒)

## 『早稲田の血』

清水 智 文

幼い頃テレビで観たラグビー早明戦。自分より大きな相手に怯まず立ち向かうそのたくましい赤黒軍団の背中を今でも鮮明に思い出す。これが私と早稲田の初めての出会い。

物心ついた時から私は早稲田に憧れをもっていた。中学で進路を決めるときも、迷わず本庄高等学院を希望した。そして入学試験の結果を受け、うれしくて涙が止まらなかった。合格。あの日のことが昨日のように思い出される。

本庄での三年間は私にとってかけがえのない大切な時間だった。今振り返ると、人間的にも精神的にも大きく成長できたのがあの三年間だった。

難解な定期試験を一生懸命に勉強して乗り越えたこと、毎日真っ黒になりながら暗くなるまでボールを追いかけた部活動。文化祭に向けてクラスの仲間と準備したチャ・ボーイズ。今、目を閉じると楽しかったこと、苦しかったことがとてなつかしく思い出される。

また、本庄高等学院は私にたくさんの出会いを与えてくれた。部活動の仲間、クラスの仲間、そして先生方、事務所の方。この出会いは一生ものである。たくさんの出会いが私を大きく成長させてくれた。

そして、現在私は幼い頃に観たレギュラーの一五人のみが着ることが出来る赤黒軍団の一員になるために毎日一五〇人の部員と闘っている。大学の監督が私に言った。本庄はラグビー強豪校ではないけれど、お前たちには早稲田の血が他の部員より多く流れている、だからお前は早稲田の中心になってチームを、そして早稲田を引っ張っていかなければならないんだ。

本庄を卒業した今だから言える。私は本庄の卒業生であることに誇りを持ち、生きていきたい。なぜなら私には早稲田の血、いや、本庄の血が流れているのだから。

『いざ声そろへて 空もどろに われらが母校の 名をばたたへん わせだ わせだ わせだ わせだ わせだ わせだ わせだ わせだ』  
(二〇〇四年度卒)

## 「付属校」であるということ

福田 崇

早稲田大学本庄高等学院。早稲田大学の付属高校であるこの高校(高等学院)の最大の利点は、大学受験が無いということだろう。これにより、生徒達は受験生には無いものを手にする。

私自身、受験が無いおかげで、音楽の演奏試験など、趣味の方面に力を注ぐことが出来た。このように、受験がある環境では得られない



私たちが早稲田大学本庄高等学院を卒業したあとと共学になった。私はホームの後輩からその話を聞いて知った。この話を聞いたとき私は自分の知っている本庄高等学院の雰囲気が無くなってしまふのではないかと思ひ、少し寂しい気持ちになつた。体育祭のときこ一番で見せる団結力や稲稜祭、後夜祭ステージの盛り上がりやハイテンションなどは男子校ならではのものだと思ひ思う。共学化をしても早稲田大学本庄高等学院はこういつた男子校だったころのいいところを残しつつ、さらに共学化によつていいところを増やしていつてもらいたい。

## われらが母校

野添啓輝

(二〇〇五年度卒)

ものを得た学生達は、大学で特殊な力を發揮するだろう。それは、学業に直接的には関係しないが、大学での人間関係、私生活など、大学生活を支える重要な要素を作るものである。私は、このような環境は、受験戦争が激化する社会において貴重であり、重要なものだと考へる。高校時代に得た物をきっかけに、大学でも友人も増えた。今は、一分一秒さえ惜しいと思へるほど充実した毎日を送つてゐる。私は、このような環境で学ばせてくれた早稲田大学本庄高等学院に、深く感謝してゐる。

そして早稲田大学本庄高等学院がわれらの母校であることを誇りに思へる学校であり続けてもらいたい。

(二〇〇五年度卒)



卒業記念タイムカプセル (2006年度)

## 卒業生保護者

## 感謝の気持ちを込めて

岩 堀 忠 雄

私は病の為布衣の身となり、リハビリに専念し、己れの事に精一杯過ごしてきてしまいました処、早稲田大学本庄高等学院が開校以来満二五年とのお知らせを受けて、はっと我に返り、開校当時のことが鮮明に蘇って参りました。

本庄の地に早稲田大学本庄高等学院が開校するとのニュースは、我が息子の高校進学の時期と一致して、地元推薦入学の特典がある事は思いがけない出来事でした。普通高校志望から急遽本庄高等学院を目指し、入学を許可された時には感謝感激親子共々大いに喜び合いました。当初から早稲田大学建学の精神で勉学に励み、先生と友達にも恵まれた環境での学院生活の三年間でした。

小野教頭先生のアドバイスもあつて理工学部に進み、早稲田マンとしての研鑽を積んだ四年間を終え、お蔭様で石川島播磨重工業(株)に就職しました。職場は直属の上司が早稲田大学理工学部大学院卒の大先輩に恵まれ、仕事に燃えていた息子は数年前事業開発部情報システムグループの課長に昇進し、今は二児の父親となりました。

『私が勤務するIHIには第一期卒業生の同期がいる。めったに話をする機会はないが想い出を共有できる大事な友人だ。社内にいると様々な局面で多くの同志に出会い、共に、戦うことに喜びを感じているものである。北で、西で、アメリカで、イギリスで場所は関係ない。ある時、同じ仕事をする仲間が要所で皆早稲田のOBばかりではないかと気づくことがある。リーダーとなる人は自然と後輩を選んでいるようだ。我々には組織で力を発揮できる良さがある。ここに伝統を築く源泉があるのではないかと実感している』。二十五周年記念に当たり、息子の言葉です。

早稲田大学本庄高等学院の二十五周年記念に際し、本当におめでとうございます。今後の益々の発展をお祈り申し上げます。

(父母の会一九八二・三年度会長)

## 懐かしい思い出

大 谷 恵 教

本庄高等学院創立二十五周年だという。早いものだ。二十六年前の七月高等学院ができるという話を聞いて、妻と車で現地に行った。基礎工事の穴掘りをしている最中だった。

丁度次男が中三で高校進学を考えている時だった。入試、入試と子供達が追われている姿を見ていて、入試はできるだけ少なくして、自

由な生活の中でじっくり物を考えたり、部活をしたりすることが大切だと考えていた私は、次男に理由をよく話して、すでに決めていた熊谷高校のほかにも高等学院も受験したらどうかと薦めた。幸い両校とも合格し、高等学院に進学した。

初年度は校舎は少なく施設も整っていなかったが、生徒たちは一期生という誇りをもってよく学んだり部活をした。友人関係もよかったようだ。三年次の卒論の制度は非常によかったと思う。先生方も使命感に満ち、よく生徒たちを指導されて感謝だった。

父母の会も熱心で、委員のかたがたと教務副主任の先生でホームステイのお宅に伺い、施設や食事を見学したり、こちらの要望を伝えたりしたのも懐かしい懐かしい思い出である。初代学院長で今は亡き神澤先生、本当に御苦労様でした。

本庄高等学院の益々の発展をお祈りします。

(父母の会一九八四年度会長)

## 慶祝創立二十五周年記念

荻本信義

早稲田大学本庄高等学院創立二十五周年を迎え、衷心よりお慶びを申し上げます。

諸般の構想・計画には、なに事につけ礎となる地盤構築に、計り知

られざるエネルギーと、その克服に幾多の試練が問われることを、私共はよく承知しております。草創期の三年間父母の会のご縁に預かり、爾来四半世紀、今や学院は国の内外で名実共に冠たる地歩を占めるに至り、深く感銘を覚える者であります。これも一に、ご尽瘁なされた歴代学院長を初め、教職員の先生方による献身のご尽力の賜と、深甚の敬意を表する次第であります。

学業・修行の場となる環境は、直接、間接、人間形成に大きく係ることです。時同じく、一二五周年記念を迎えた大学の栄えある歴史と伝統。広大な丘陵の地秀峰を背に、静寂さのなか四季折々素晴らしい環境の下で、培われた学院生の識見は人生哲学の礎となり、未来への挑戦に立ち向かうことでしよう。時代の潮流は地球規模で時々刻々身辺に、深く係ってきており、学院生が地球社会に確と眼を見開き、世界の恒久平和、人類の繁栄を世界観の基軸に、躍進されんことを切に希う者であります。

学院の弥栄を祈念しつつ、二十五周年記念のご祝詞を申し上げます。ご挨拶と致します。

(父母の会一九八五年度会長)

## 世代間に渡る学び舎へ

横尾 弘明

二十五周年記念おめでとうございます。

自宅から見える大久保山の緑の中に、塔が見えるようになってからもう二十五年が経つのかと思うと、月日の流れの速さを改めて実感します。

ヨーロッパの修道院を髣髴させる独特の雰囲気のある校舎は、日本の各地、さらには世界の各地から親元を離れた学生たちが共同生活を送るには、最適な環境だったかと想像されます。

入学した当初は、まだ幼さが見えていた学生達の顔も三年時には、みな少年から青年の顔へと変わって行きました。そうした親元を離れて過ごす子供たちが、本庄の地で三年間の生活を経て、大学へと巣立ち、その彼らが、今では、日本全国、世界各地で活躍していることを伺い、感慨深いものがあります。

初期の頃の卒業生には、そろそろ次の世代が育ちつつある時期に来ているかと思えます。そうした次の世代の子供たちが、また本庄の地に集まってくれることを期待するとともに、早稲田大学本庄高等学院が益々発展し、世代間に渡る学びの場を提供してくれることを期待しております。  
(父母の会一九八七年度会長)

## 大久保山で縁を結んだ私達

高橋 福八

早稲田大学本庄高等学院が開校されて二十五年、その間大学院も開校され早稲田は地元につきり定着、本庄市は学園都市に生まれ変わった。

加えて学校の北入口には日本で唯一、大学名の入った新幹線「本庄早稲田駅」も開業、お陰様で本庄という地名も全国的に知られるようになった。有難いことである。

関八州が見渡せる大久保山は四季折々、それぞれに美しい。こうした素晴らしい環境の中で最高の教育を受けることの出来た卒業生はまことに幸せ者といわねばならない。

平成元年（一九八九）卒業した私の息子啓介も今年三十七歳、南米チリで働いている。初代神沢学院長の「日本の希望の星になって下さい」という教えを守り、仲間も国内は勿論、世界の各地で活躍しているようだ。頼もしい限りである。

大久保山で縁を結んだ私達五回生A組の父母会は現役当時四十三名、とにかく仲が良く卒業してから今日に至るまで毎年会合を重ねている。旧交を暖めつつも、いつも新しい話題が尽きない。

会合場所は幹事がその都度綿密に調査し、先年は香港に転勤してい

る会員のご案内で一般の観光旅行では絶対わからないような穴場でおいしい食事を楽しめた。今年は桐生でとび切り美味しい手打ちそばの実体験をやるのだそうだ。

子供が本庄の早稲田本庄高等学院に行ってくれたお陰で、こんな楽しい会に参加できる、私の息子は何と親孝行なんだろうと今つくづく思っただけに感謝している、いや学院に感謝している次第。

早稲田大学本庄高等学院開校二十五周年まことにお目出とうございます。

## 変革の時代に思う

(父母の会一九八八年度会長)

高橋慶一

開校二十五周年おめでとうございます。

私は息子の早稲田大学本庄高等学院の入学と共に「父母の会」の役を授かってから、もう十九年の歳月が過ぎた事に驚くと共に改めて当時の事を思い起こすと、国内では昭和六十四年の正月、昭和天皇崩御により、昭和から平成の時代になりました。又、当時世界はソ連のゴルバチョフのペレストロイカによる東西冷戦の時代が終わり、国名もロシアになり、又、ドイツではベルリンの壁が壊され東西ドイツの統一、東欧の社会主義国の崩壊と続きました。

隣国中国では、天安門広場で自由を求める民衆の暴動が起きて、その為に学院の大きな行事でもある修学旅行（北京大学附属中学との交流）も中止になり、映画鑑賞に代わったと覚えています。新聞、テレビのニュース番組は連日の報道でした。平成元年は世界の歴史の変革の年だったと思います。

扱、学院の話に戻りますが、当時の学院の生徒の多くは、全国各地から入学し、ホームステイのお世話になっていたと覚えています。現在は県内の学生が増えていると聞いています。私共は当時本庄市に在住でしたが、現在上尾市に移住し十五年弱になろうとしています。

又、日時は定かではないが、本庄学院も共学になる様なことが新聞に掲載されていた様に思いますが、少子化に伴い時代の流れの中で、学院の発展の為に私は良い事だと思えます。

(父母の会一九八九年度会長)

## 大久保山の散策

新井光夫

本学院がここに、創立二十五周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

大久保山の地に早稲田大学本庄高等学院が、早稲田大学創立百周年記念事業として開校されることを知った私は、息子達以上に憧れてお

りました。幸に二人の子供達が入学を許された時の喜びは、生涯忘れることはありません。

幹事をお引き受け致しました六年間、神澤先生、大槻先生をはじめ素晴らしい先生方と父母の方々に恵まれ、私の人生の中でも最も充実し楽しい時でした。式典で演奏される校歌「都の西北」を聴くたびに早稲田の有難さが身にしみてまいりました。

父母の会の事業は多くありませんでしたが、思い出されるのは大久保山の散策です。多くの父母の方々とマップとお弁当を手に落葉の山道を歩きました。木々の間から見える「薨」山の上に立つと日光連山、赤城、榛名、妙義、御荷鉾の山々が眺められ、素晴らしい一日でした。

当時は至る所に「マムシに注意」と云う立て看板が有りましたが、最近では新幹線本庄早稲田駅が、又アドミツションオフィス等々大学の施設も充実しつつ大きな変化を遂げております。終わりに早稲田大学本庄高等学院の限らない発展を心より祈念しております。

(父母の会一九九〇・三年度会長)

## 創立二十五周年によせて

坂上俊夫

本庄校地に伝統ある早稲田大学の附属、本庄高等学院が開設され二十五周年おめでとうございます。

進学生にとっては憧れの学校で、県内外より優秀な生徒が難関を勝ち抜いて入学されました。地元中学には推薦制度が有り受験では仲々入学出来ない所、幸いにも二人の息子が入学を許可され、親子共々喜び感激で一杯でした。大隈講堂で厳肅の内に行われた入学式、これ三年後には大学へ一〇〇パーセント進学できると思い安心した次第です。

しかし一学期の授業が始まり、暫く経つと授業での教科の成績が一定のライン以上に達しないと進級出来なく留年になるとの事。二人の息子は、やっとの思いで一学期をクリアする事が出来ました。二学期からは大分馴れて来て部活へも積極的に参加出来る様になりました。その後、勉強、部活の両立が出来、無事、大学の目指す学部へと進む事が出来ました。

高校生活の中で、クラス及び部活の父母の方と親交が持て、卒業して現在も食事会や持ち廻りで各地に小旅行をして、高校時代の苦労話や楽しかった事、又現在の事等語り合っています。これも子供が早大へ入学し、各地の父母の方と交流出来る場を与えてくれた事に感謝しています。

本庄高等学院も女子の入学が決まり、大学も百二十五周年を迎へ、これを契機に益々のご発展を祈念します。

(父母の会一九九一・七年度会長)

## 創立二十五周年

おめでとうございます

三好 大器

私は本庄に在住し、早くからこの学院で教育を受けさせられればと、望んでおりましたので、入学できたのはこの上ない喜びでした。

学院は、すでに教育施設や付属施設等が充分整っており、立派な先生方のもとで教育を受けられたことは真に恵まれたことでした。

大槻学院長が登校時に大久保山の登り口で、生徒一人ひとりに「おはよう」と声をかけておられるのに出会い、教育者としての姿勢に感動を覚えたことが思い出されます。

私は日頃学院の近くを散策し、学院や生徒の様子を知る機会に恵まれておりましたが、部活動や稲稜祭で見られたように、生徒達の伸び伸びとまた自主性を持って高校生活を送っている姿を見て、付属校であることの特徴が活かされているように感じました。

また、天安門事件の影響で一年間中断しておりました中国修学旅行が、この年は幸いなことに行けることになり、子供たちにとって有益な体験となりました。

社会人としての今も学院でのご指導や経験がいかされ、役立っているものと確信しています。

これからも次代を担う優秀な人材を育成していかれますことを心より祈念いたします。

(父母の会一九九二年度会長)

「ビクともするなと風に立つ」

松島 良策

開校二十五周年を心よりお喜び申し上げます。本庄高等学院で無二の青春を過ごした二人の息子は、現在二六歳と二四歳となり、父として頼もしく感じる場面が日増しに多くなっております。都の西北、その遙か西北に位置する本庄は、強烈な赤城風の吹きつける土地です。

しかし、その理不尽な程の強風に曝されて尚、日々の登下校を繰り返す息子らの姿は、たかが風と肩で笑い飛ばすような力強さに溢れておりました。父母の会の折にも、学舎を歩き交う学院生を目にしましたが、皆そのような力強さを纏っているように感じられたものです。

受験にとらわれず、服装にもとらわれず、自由の中で、自分と向き合うことの厳しさは、時に自らを見失う事すらあるでしょう。ましてそれが十六歳から十八歳という若く多感な時期であれば尚更のことでしょう。それでもあの時私が感じた学院生達の力強さは、互いに切磋琢磨し、自ら模索する姿勢に溢れていたからだと思います。教職員の皆様の人格や努力の賜物と深く感謝しております。

入学式で見た大隈老侯の銅像のように、厳しきにもビクともしない芯を持った学院生達が、赤城嵐を早稲田嵐に変えて、都の西北から世の中に新しい風を送り続ける事、そして本庄高等学院がそのような若者を輩出する場であり続ける事を期待、祈念致しております。

(父母の会一九九九年度会長)

## 母と子を育んでくれた

### 本庄高等学院

佐々木 花子

三人の息子達は希望の地、本庄に身を置き、心身共に育んでいただきました。

三年の三倍、九年間でした。

見知らぬ土地、見知らぬ人々、心細い思いに押し潰されそうになりながら、勇気を出して声をかけて見たら、相手も同じ思いでいた様だ。息子達とて同じ思いをしながら居場所を作っていたのだと思います。

栃木からは通学できず、ホームステイを始めた息子達。多感な年頃の息子達をお世話していただき、導いていただいたホストの方々には、感謝の思いでいっぱいです。

三人目の父母会で、恐れ多くも、父母の会会長を仰せつかり、力不

足の私を支え、運営してくれた役員さん。今ではかけがえない友となっている。人生を語り、食事や旅行へと楽しい仲間になっていて、本庄で得られた宝物だと思っている。昨年は海外まで足を延ばし、秋には二度目の海外旅行が予定されている。

三人の息子達は、結婚し、長男には男の子が生まれた。いつの日か本庄の地に行けたらと婆うばは夢見ている。

人生を語り、人生を楽しむ仲間に出会えた早稲田大学本庄高等学院の発展をお祈り申し上げ、感謝の言葉とともに、二十五周年お目出とうございます。

(父母の会二〇〇〇年度会長)

## 二十五周年によせて

高橋 淳

私が、父母の会会長を勤めさせて頂いた二〇〇二年度は、開校二十周年の年でした。記念事業として行なった、ホームカミングデイのお手伝いをさせて頂きました事を懐かしく思い出します。ウエルカムパーティーでは本校の卒業生、またゲストとしてTBSアナウンサーの初田啓介氏をはじめ各界でご活躍の五人の方々に来て頂き、先生方、稲門会の大先輩の方々で懇親を深め、最後は「都の西北」の大合唱となりました。これが歴史ある同窓の絆なのかと感動したことを覚えて



います。

二十五周年を迎え、卒業生五〇〇人以上が羽ばたいていき、各界で活躍していることと思います。昨年、ある大手商社の課長さんと商談をする機会があり、私の名刺の住所、「本庄」から課長さんが、本の二期生とわかり大久保山の話で盛り上がりました。お仕事をバリバリされているお姿を拝見して、うれしくなりました。

また、昨年度から末っ子がお世話になる事となり、父母の会の活躍に触れ、事業が益々活発になっていく事に喜んでおります。

様々な大久保山の歴史と絆が長く強く続くことをお祈り申し上げます。

(父母の会二〇〇二年度会長)

## 「自然の中で」

松田 一郎

初めて本庄高等学院の門をくぐった時、その自然に圧倒されたのを思い出します。このような環境の中で高校生活を送ることのできる息子が羨ましく思いました。その息子も大学四年、最後の学生生活を学業に部活にと満喫しております。校歌や紺碧を肩を組みながら歌い、人生を語る学友を得た事が大きな財産になるし、今の大学では薄れつつある早稲田の良き伝統に高校時代から触れられた事がよき思い出

となってくれる事でしょう。

私自身も父母の会の活動を通し、多くの父母の方々と交流を持つことが出来、楽しい日々を送る事ができました(先輩・後輩の会長の皆様からは特に刺激を受けました)。又、普通であればお会いする機会もないであろう総長や学院長の先生方のお話を直接伺うことができたのも良い経験となりました。

開校二十五周年とのことですが、今後もこのすばらしい自然環境を活かしつつ多くの早稲田魂がここ本庄高等学院から育っていくことを楽しみに見守っていききたいと思っております。

(父母の会二〇〇三年度会長)

## 学院に期待すること

田代 充雄

開校二十五周年本当におめでとうございます。

今年の五月までの三年間父母の会役員として学院長始め教職員の皆様と親しくさせて頂く中で、学院と学院生のことを心から思う姿に接し、今回の慶事に対するお喜びは一入ではないかと思っております。

私が学部在学中、大学はこの本庄に広大な土地を取得してありますが何の利用もせず、地元住民、特に土地を売却した人達からは「何の為の取得なのか、大学が移転するのではなかったのか」等の批判が

高まつており、大学はセミナーハウスを建設し対応した時期でありました。開校当時の学院がどの様なものであったか私は存じませんが、今では大久保山の豊かな緑に囲まれたキャンパスは、隣接地に新幹線の停車駅、その名も『本庄早稲田』駅を配する全国屈指の教育環境を備えた学院となっております。

これからの日本は先見性を持ったリーダーを今以上に必要としております。出された問題早く、正確に解く能力や技術も必要ですが、『何が問題なのかを見つめる能力』はそれよりはるかに重要であります。そんな能力が身につけられる様な環境が醸成されることを、二十五周年を越えた学院の益々の発展を祈念すると共に、大いに期待しております。

(父母の会二〇〇六年度会長)

## 三年生の息子をもつ親の思い

松 隈 健 治

早稲田本庄高等学院、開校二十五周年おめでとうございます。

まだ、私の息子は本学院の三年生であり、本学院を無事卒業し、早稲田大学は目指す学部に入學してほしいと祈る気持ちに先になつた今年の一年です。

息子が中学生のときの頑張りにより、無事に本学院に入學すること

が出来ました。木元先生には三年間担任とし勉強やそれ以外にも指導していただいております。そして、クラブ活動も三年間辞めることなく頑張つてやってきて、たくさん楽しい思い出が出来たものと思います。

クラブ活動では、それまで自分のやりたいことだけ行動すればよかったのが、まとめ役として裏方や人のために行動するようになり、相手やまわりの様子がわかるようになってきて、親から見ても入学当時と今では、態度や言動に変化があらわれ自信が出てきたように思います。そのような変化は学校内で温かく見守っていたに思いますが、そのような変化は学校内で温かく見守っていたに思いますが、木元先生や卓球部顧問の宮田先生、そして学院の先生方のおかげだと思っております。息子が早稲田大学の理想や信念を持った生徒に成長しているかどうかは、今後、大学へ入學し、卒業、そして社会となり数年が経過しないと分かりませんが、社会に負けない、前向きな考えと行動が出来る人間になつてほしいと思っております。

尾崎学院長をはじめ先生方の二十五周年を迎えるまでのご苦労は大変なものと思います。これからも、活動的な自主性を持った生徒を育てていただけますようお願いいたします。

開校二十五周年おめでとうございます。

(父母の会二〇〇七年度会長)

# 資 料

- 1 年 表
- 2 各種データ
  - (1) 歴代学院長
  - (2) 専任教員
  - (3) 歴代教務主任
  - (4) 年度別組主任一覧
  - (5) 卒業者数
  - (6) ホーム入居者数変遷

# 1 年 表

<p><b>1980年度</b></p> <p>7.15(火) 評議員会で本庄高等学院設置が承認される</p> <p>8.1(金) 開設準備室発足 準備室長：神澤惣一郎</p> <p>29(金) 設置趣意書・事業計画を埼玉県に提出</p> <p>9.16(火) 開設準備室開設</p> <p><b>1981年度</b></p> <p>5.11(月) 起工式</p> <p>7.24(金) 食堂業者を給食センターに決定</p> <p>8.23(日) 早稲田大学グリークラブ「開校記念演奏会」(本庄文化会館)</p> <p>10.13(火) 開設準備室の本庄移転に伴い、本部学籍課資料室に臨時事務所を設置</p> <p>10.30(金) 開設準備室、本庄セミナーハウスに移転</p> <p>11.2(月) セミナーハウスで準備業務開始</p> <p>7(土) 本庄高等学院開設紹介講演会(エクステンション主催)</p> <p>24(火) 設置許可申請書を埼玉県学事課に提出</p> <p>1.18(月) 地元指定校推薦応募者面接</p> <p>2.6(土) 埼玉県からの設置許可書受領</p> <p>21(日) 一般生・帰国生入学試験(一次)</p> <p>3.2(火) 一般生・帰国生入学試験(二次)</p> <p>31(水) 開設準備室閉室</p> <p><b>1982年度</b></p> <p>4.1(木) 神澤惣一郎学院長就任</p> <p>6(火) 開校式</p> <p>10(土) 1982年度入学式</p> <p>12(月) 第1学期始業式(セミナーハウス)</p> <p>15(木) オリエンテーション(～17日、国立赤城青年の家)</p> <p>5.15(土) 本庄一早稲田100キロハイク激励会</p> <p>20(木) 生徒会設立準備委員会発足</p> <p>NHK総合テレビ「ニュースセンター6:30」で「ホームステイ」が紹介される</p> <p>29(土) 早稲田大学交響楽団「開校記念演奏会」(本庄文化会館)</p> <p>6.2(水) 評議員に小野裕二郎教諭を選出</p> <p>26(土) 保護者会(セミナーハウス)</p> <p>7.17(土) 夏季休業(～9月7日)</p> <p>26(月) 芸術棟・図書室・食堂・大教室完成</p> <p>竣工式</p> <p>9.7(火) 食堂厨房火入れ式</p> <p>28(火) 第1学期終業式</p> <p>10.4(月) 第2学期始業式</p> <p>16(土) 第1回稲稜祭(～17日)</p>	<p>19(火) 創立100周年記念行事期間(～23日) 全学休校</p> <p>12.18(土) 冬季休業(～1月8日)</p> <p>1.18(火) 地元指定校推薦応募者面接</p> <p>22(土) 保護者会</p> <p>2.10(木) 体育館竣工式</p> <p>21(月) 一般生・帰国生入学試験(一次)</p> <p>27(日) 一般生・帰国生入学試験(二次)</p> <p>3.12(土) 第2学期終業式</p> <p><b>1983年度</b></p> <p>4.8(金) 1983年度入学式</p> <p>11(月) 第1学期始業式</p> <p>23(土) 高等学院との交歓会 高等学院教員34名、来校 本学院教員と懇談</p> <p>5.7(土) 各学部長・教務主任、来校 本学院教員と懇談</p> <p>14(土) 1年100キロハイク激励会</p> <p>6.25(土) 1年保護者会</p> <p>29(水) 球技大会(～30日)</p> <p>7.2(土) 2年保護者会</p> <p>7.18(月) 夏季休業(～9月7日)</p> <p>9.30(金) 第1学期終業式</p> <p>10.5(水) 第2学期始業式</p> <p>19(水) 2年保護者会</p> <p>11.3(木) 第2回体育祭</p> <p>訪中修学旅行下見(小野裕二郎・富永安男 両教諭、～7日)</p> <p>5(土) 第2回稲稜祭(～6日)</p> <p>12.19(月) 冬季休業(～1月7日)</p> <p>1.14(土) 1年保護者会</p> <p>18(水) 地元指定校推薦応募者面接</p> <p>21(土) 2年保護者会</p> <p>2.21(火) 一般生・帰国生入学試験(一次)</p> <p>27(月) 一般生・帰国生入学試験(二次)</p> <p>3.10(土) 第2学期終業式</p> <p><b>1984年度</b></p> <p>4.8(日) 1984年度入学式</p> <p>10(火) 第1学期始業式</p> <p>5.8(火) 中庭舗装完工</p> <p>19(土) 1年100キロハイク激励会</p> <p>6.20(水) 球技大会(～21日)</p> <p>23(土) 3年保護者会</p> <p>27(水) 2年保護者会</p> <p>30(土) 1年保護者会</p> <p>7.23(月) 夏季休業(～9月8日)</p> <p>9.4(火) 畑和埼玉県知事、視察</p>
--	---



5. 2 (土)	1・2年遠足 〈1年：赤城山 2年：浅間山・鬼押出し〉	18(木)	夏季休業(～9月7日)
16(土)	1年100キロハイク激励会	9.30(金)	第1学期終業式
28(木)	球技大会(～29日)	10. 6 (木)	第2学期始業式
6. 1 (月)	教育実習(～13日)	14(金)	第5回訪中修学旅行(～19日) はじめて服装を自由とする
6 (土)	全学保護者会	15(土)	1年保護者会
7.15(水)	漢字大会	20(木)	1・2年演劇鑑賞教室『椎の木の暦』(俳優小劇場)
16(木)	夏季休業(～9月5日)	22(土)	2年保護者会
9. 1 (火)	陶芸用登り窯完成	25(火)	球技大会(～26日) はじめて10月に実施
29(火)	第1学期終業式	11. 5 (土)	第7回稲稜祭(～6日)
10. 5 (月)	第2学期始業式	12(土)	3年保護者会
14(水)	第4回訪中修学旅行(～19日)	15(火)	神澤惣一郎学院長退任
15(木)	1・2年演劇鑑賞教室『ナポレオン』(劇団『顔』)	16(水)	大槻宏樹学院長就任
17(土)	1年保護者会	24(木)	教務主任(教務担当)候補者選挙 田辺明義教諭を選出
24(土)	3年保護者会	12. 3 (土)	1年同和学習 映画『橋のない川』
28(水)	2年保護者会	16(金)	冬季休業(～1月7日)
29(木)	第6回体育祭	12.19(月)	卒業論文提出
11. 7 (土)	第6回稲稜祭(～8日)	1.21(土)	3年保護者会
12. 2 (水)	同和講演会(講師：大串夏身＝都立中央図書館)	2. 2 (木)	地元指定校推薦応募者面接
12(土)	第1回同窓会総会(本部(現西早稲田)キャンパス22号館)	15(水)	3年進学部・学科発表
16(水)	冬季休業(～1月7日)	20(月)	一般生・帰国生入学試験(一次)
18(金)	卒業論文提出	26(日)	一般生・帰国生入学試験(二次)
1.23(土)	3年保護者会	3. 7 (火)	第2学期終業式
2. 4 (木)	地元指定校推薦応募者面接	18(土)	第5回卒業式
15(月)	3年進学部・学科発表		
20(土)	一般生・帰国生入学試験(一次) はじめて戸山キャンパスで実施	1989年度	
27(土)	一般生・帰国生入学試験(二次)	4. 8 (土)	1989年度入学式
3. 7 (月)	第2学期終業式	10(月)	第1学期始業式
18(金)	第4回卒業式	26(水)	生徒1名肺結核罹病のため、一部生徒に 定期外検診実施(～27日)
1988年度		5.13(土)	1年100キロハイク激励会 本庄駅より岡部まで同行 2年遠足：軽井沢・追分
4. 8 (金)	1988年度入学式	20(土)	全国LLA(Language Laboratory Association)大会開催(～21日)
11(月)	第1学期始業式	6. 5 (月)	教育実習(～17日)
28(木)	1・2年遠足 〈1年：本庄市内(徒歩) 2年：埼玉博覧会(熊谷市)〉	8 (木)	第8回体育祭
5.21(土)	1年100キロハイク激励会	10(土)	1年保護者会
6. 6 (月)	教育実習(～18日)	16(金)	傷害見舞基金制度発足
9 (木)	第7回体育祭 はじめて6月に実施	22(木)	教諭会で、「6. 4天安門事件による中国情勢悪化のため1989年度訪中修学旅行中止」を決定
11(土)	1年保護者会	24(土)	2・3年保護者会
16(木)	教諭会で、生徒1名、肺結核罹病の報告	7.15(土)	漢字大会
20(月)	結核についての講演会(講師：本庄保健所長)	17(月)	夏季休業(～9月6日)
22(水)	2年保護者会	20(木)	グランド南側駐輪場新設工事竣工
25(土)	3年保護者会	9.29(金)	第1学期終業式
7.16(土)	漢字大会	10. 5 (木)	第2学期始業式
		14(土)	1年保護者会

11. 4 (土) 第8回稲稜祭(～5日)	17(月) 冬季休業(～1月7日)
11.16(木) 教務主任(教務担当)候補者選挙 風間益人教諭を選出	1. 9 (水) 卒業論文提出
12.16(土) 冬季休業(～1月6日)	19(土) 3年保護者会
1. 8 (月) 卒業論文提出	2. 7 (木) 地元指定校推薦応募者面接
16(火) チャイムが、ウェストミンスターの鐘の 音から大隈講堂の鐘の音に変更される	14(木) 3年進学部・学科発表
20(土) 3年保護者会	20(水) 一般生・帰国生入学試験(一次)
2. 8 (木) 地元指定校推薦応募者面接	26(火) 一般生・帰国生入学試験(二次)
15(木) 3年進学部・学科発表	3. 6 (水) 第2学期終業式
20(火) 一般生・帰国生入学試験(一次)	18(月) 第7回卒業式
26(月) 一般生・帰国生入学試験(二次)	
3. 6 (火) 第2学期終業式	<b>1991年度</b>
15(水) Aグラウンド全面改修およびCグラウンドの テニスコート新設工事(1989年8月1日 ～)完了	4. 1 (月) 学内文書の年次が西暦使用となり、紙型 がA4版となる
18(日) 第6回卒業式	8 (月) 1991年度入学式
28(水) 訪中修学旅行事前視察(風間益人・三崎良 章両教諭、～31日)	10(水) 第1学期始業式
	6. 3 (月) 教育実習(～15日)
	6 (木) 第10回体育祭
	15(土) 1年保護者会
	22(土) 2・3年保護者会
	7.10(水) 芸術鑑賞教室 オペラ『ゼロ弾きのゴー シュ』(オペラシアター こんにやく座)
	13(土) 漢字大会
	15(月) 夏季休業(～9日)
<b>1990年度</b>	10. 5 (土) 創立十周年記念式 大槻学院長、「将来構想として女子入学 の検討」を表明 『十周年記念誌』発行
4. 8 (日) 1990年度入学式	12(土) 1・2年保護者会
10(火) 第1学期始業式	13(日) 第7回訪中修学旅行(～18日)
6. 4 (月) 教育実習(～16日)	17(木) 1年球技大会
7 (木) 第9回体育祭	2年遠足：天神平
8 (金) 大学に、本庄高等学院ホームステイ制度 検討委員会発足	11. 3 (日) 第10回稲稜祭(～4日)
9 (土) 1年保護者会	12.12(木) 同和問題学習 映画『ふれあいの門』
14(木) 評議員に風間益人教諭を選出	14(土) 3年保護者会
23(土) 2・3年保護者会	16(月) 冬季休業(～1月7日)
7.14(土) 漢字大会	1. 8 (水) 卒業論文提出(～9日)
食堂担当業者変更(シダコーポレーショ ンから早稲田大学生協同組合へ)	2. 6 (木) 地元指定校推薦応募者面接
16(月) 夏季休業(～9月5日)	14(金) 3年進学部・学科発表
9.28(金) 第1学期終業式	20(木) 一般生・帰国生入学試験(一次)
10. 4 (木) 第2学期始業式	26(水) 一般生・帰国生入学試験(二次)
13(土) 1・2年保護者会	3. 5 (木) 第2学期終業式
15(月) 第6回訪中修学旅行(～20日) 2年ぶりに再開	18(水) 第8回卒業式
17(水) 1年遠足：赤城山	
23(火) 北京大学附属中学校長弁公室主任陳剛 白・特級教師陳劍剛両先生、来訪	<b>1992年度</b>
24(水) 球技大会(～25日)	4. 1 (木) 始業時刻が9時、第6時間日終了時刻が 15時30分となる
27(土) 3年保護者会	8 (水) 1992年度入学式
11. 3 (土) 第9回稲稜祭(～4日)	10(金) 第1学期始業式
15(木) 教務主任(教務担当)候補者選挙 風間益人教諭を選出	6. 1 (月) 教育実習(～13日)
12.13(木) 1年課外講義「現代日本における人間の 差別について」(講師：小林初枝＝埼玉県 立児玉高校)	4 (木) 第11回体育祭
	13(土) 1年保護者会
	20(土) 2・3年保護者会

7. 1 (水) 芸術鑑賞教室 演劇『阿Q正伝』(劇団世代)	23(土) 1・2年保護者会
15(水) 漢字大会	26(火) 球技大会(～27日)
16(木) 夏季休業(～9月9日)	30(土) 第12回稲稜祭(～31日) 濱田泰三理事、来校 本学院の「校舎移転・立替」を表明
9. 29(火) 第1学期終業式	11. 6 (土) 3年保護者会
10. 5 (月) 第2学期始業式	12. 16(木) 冬季休業(～1月7日)
13(火) 第8回訪中修学旅行(～19日)	1. 8 (土) 卒業論文提出
15(木) 1・2年遠足 〈1年：沼田 2年：天神平〉	13(木) 教諭会で、「1994年度より第2学年において組編成替えを実施する、教務主任・教科主任の交替時期を運用上4月1日とする」ことを決定
24(土) 1・2年保護者会	20(木) 地元指定校推薦応募者面接 濱田発言を受けて「基本構想検討委員会」を設置
27(水) 球技大会(～28日)	2. 10(木) 教諭会で、1994年度からの成績表示方法・不受験者の成績評価等の内規の変更、生徒心得の変更を決定 制服がなくなり、服装が自由化された
31(土) 第11回稲稜祭(～11月1日)	15(火) 3年進学学部・学科発表
11. 5 (木) 教務主任(教務担当)候補者選挙 風間益人教諭を選出 教諭会で、「1994年度の「家庭」新設に伴い、家庭科室として共通教室棟を利用する」ことを決定	18(金) 一般生・帰国生入学試験(一次) はじめて2月18日に実施
7 (土) 3年保護者会	23(水) 一般生・帰国生入学試験(二次)
15(日) 大槻宏樹学院長退任	3. 8 (水) 第2学期終業式
16(月) 榎本隆司学院長就任	18(金) 第10回卒業式
12. 16(水) 冬季休業(～1月7日)	
1. 8 (金) 卒業論文提出(～9日)	<b>1994年度</b>
21(木) 推薦入学応募者面接	4. 1 (金) 3学期制となり、定期試験が年5回実施となる 教育課程が変更になり、新1年より「家庭」が必修となる 「家庭科」が新設され、「社会科」が「地理歴史科」・「公民科」に分割される 音楽・家庭の授業が共通教室で行なわれることとなる 新1年より学部進学基準が変更となり、各学年成績の総計プラス卒業論文点となる 2年進級時の組編成替えが始まる
2. 15(月) 3年進学学部・学科発表	4. 8 (金) 1994年度入学式
20(土) 一般生・帰国生入学試験(一次)	11(月) 始業式
27(土) 一般生・帰国生入学試験(二次)	5. 30(月) 教育実習(～6月10日) 基本構想検討委員会、「今後の学院教育についての基本的な考え一校舎立替を含めて」を答申
3. 5 (金) 第2学期終業式	6. 2 (木) 第13回体育祭
18(木) 第9回卒業式	9 (木) 教諭会で、「1995年度より自己推薦入学試験(α選抜)を実施する」ことを決定 評議員に風間益人教諭を選出
<b>1993年度</b>	11(土) 1年保護者会
4. 8 (木) 1993年度入学式	18(土) 2・3年保護者会
10(土) 第1学期始業式	7. 14(木) 芸術鑑賞教室 演劇『コーカサスの白墨
5. 31(月) 教育実習(～6月12日)	
6. 3 (木) 第12回体育祭	
12(土) 1年保護者会	
19(土) 2・3年保護者会	
30(水) 芸術鑑賞教室 演劇『ベッカニコ鬼』(劇団えるむ)	
7. 15(木) 漢字大会 同和問題学習 映画『橋のない川』第1部	
16(金) 夏季休業(～9月7日)	
8. 11(水) 本庄市・児玉町等1市5町1村が、「地方拠点法」の指定を受ける	
9. 29(水) 第1学期終業式	
10. 5 (火) 第2学期始業式	
14(木) 第9回訪中修学旅行(～20日) 1・2年遠足 〈1年：懐古園・鬼押し出し 2年：浅間山・鬼押し出し〉	
20(水) 同和問題学習 映画『橋のない川』完結編	



<p>の輪』（東京演劇アンサンブル）</p> <p>15(金) 漢字大会</p> <p>16(土) 夏季休業(～9月7日)</p> <p>報告書「本庄高等学院将来構想ならびに教育条件の整備について」を理事会に提出</p> <p>9.20(火) 球技大会(～22日)</p> <p>10.2(日) 第10回訪中修学旅行(～9日)</p> <p>5(水) 人権問題映画『エレファントマン』</p> <p>6(木) 1・2年遠足 〈1年：小諸 2年：白根山〉</p> <p>13(木) 教務主任(教務担当)候補者選挙 青木宏教諭を選出</p> <p>11.5(土) 第13回稲稜祭(～6日)</p> <p>12.7(水) 人権講演会『同和問題の起源と現状』(講師：黒川みどり＝早稲田大学人権委員会)</p> <p>16(金) 冬季休業(～1月7日)</p> <p>1.9(月) 卒業論文提出</p> <p>25(水) α選抜試験(二次)</p> <p>26(木) 地元指定校推薦応募者面接</p> <p>2.15(水) 進学学部・学科発表</p> <p>16(木) 一般生・帰国生入学試験(一次) はじめて高等学院との併願が可能になる</p> <p>21(火) 一般生・帰国生入学試験(二次) 「作文」が廃止され、「面接」のみとなる</p> <p>3.9(木) 終業式</p> <p>18(土) 第11回卒業式</p> <p><b>1995年度</b></p> <p>4.8(土) 1995年度入学式</p> <p>10(月) 始業式</p> <p>5.29(月) 教育実習(～6月9日)</p> <p>6.1(木) 第14回体育祭</p> <p>8(木) 全学審議会開設に伴い、委員に風間益人教諭を選出</p> <p>10(土) 1年保護者会</p> <p>17(土) 2・3年保護者会</p> <p>7.5(火) 芸術鑑賞教室 演劇『センポ・スギャファラ』(劇団「銅鑼」)</p> <p>7(木) 風間教諭の辞退を受け、全学審議会委員に高橋広満教諭を選出</p> <p>15(土) 漢字大会</p> <p>17(月) 夏季休業(～9月7日)</p> <p>9.19(火) 球技大会(～20日)</p> <p>10.2(月) 第11回訪中修学旅行(～8日)</p> <p>3(火) 人権教育映画『私を抱いて、そしてキスして』</p> <p>5(木) 1・2年学年行事 〈1年：赤城山遠足 2年：谷川岳・天神平遠足〉</p>	<p>「学年行事」という名称になる</p> <p>12(木) 教務主任(教務担当)候補者選挙 青木宏教諭を選出 このときより任期は4月1日開始</p> <p>14(土) 1・2年保護者会</p> <p>18(土) 3年保護者会</p> <p>11.4(火) 第14回稲稜祭(～5日)</p> <p>12.16(土) 冬季休業(～1月6日)</p> <p>1.8(月) 卒業論文提出</p> <p>24(水) α選抜試験(二次)</p> <p>25(木) 地元指定校推薦応募者面接</p> <p>2.10(土) 第一文学部面接 第一文学部が進学者に対して面接を課すことになる</p> <p>15(木) 3年進学学部・学科発表</p> <p>16(金) 一般生・帰国生入学試験(一次)</p> <p>20(火) 一般生・帰国生入学試験(二次)</p> <p>3.9(土) 終業式</p> <p>18(月) 第12回卒業式</p> <p><b>1996年度</b></p> <p>4.1(月) 3年次の選択科目が1科目2時間、5科目選択となる 「ホームステイ」の名称が「委託ホーム」に変更される 卒業論文の評価が100点満点、10点刻みとなる</p> <p>4.8(月) 1996年度入学式</p> <p>10(水) 始業式</p> <p>6.3(月) 教育実習(～14日)</p> <p>6(木) 第15回体育祭</p> <p>15(土) 1年保護者会</p> <p>22(土) 2・3年保護者会</p> <p>7.4(木) 芸術鑑賞教室 演劇『国語元年』(劇団東京演劇アンサンブル)</p> <p>15(月) 漢字大会</p> <p>16(火) 夏季休業(～9月7日)</p> <p>9.17(火) 球技大会(～18日)</p> <p>10.3(木) 第12回訪中修学旅行(～9日)</p> <p>9(水) 人権講義「ろうあ者相談員として思うこと」(講師：岩田恵子＝埼玉県社会福祉事業団)</p> <p>17(木) 全学審議会(第二次)委員に佐々木幹雄教諭を選出</p> <p>11.2(土) 第15回稲稜祭(～3日)</p> <p>9(土) 1・2年保護者会</p> <p>16(土) 3年保護者会</p> <p>30(土) 第1回全国私立大学付属中学校・高等学校教育研究会(～12月1日)開催</p> <p>12.16(月) 冬季休業(～1月7日)</p> <p>1.8(水) 卒業論文提出</p> <p>22(水) α選抜試験(二次)</p>
---	---

23(木)	地元指定校推薦応募者面接		当)候補者選挙
2.15(土)	3年進学学部・学科発表		山田庄一教諭を選出
16(日)	一般生・帰国生入学試験(一次)	13(土)	保護者会
	はじめて西早稲田・本庄で実施	16(火)	冬季休業(～1月7日)
21(金)	一般生・帰国生入学試験(二次)	19(金)	第1回本庄高等学院に関する懇談会開催
25(火)	教務部長から「1997年度以降の両学院入学者からは各部進学時入学金を全額徴収する」(これまでは半額)ことが通知される		「本庄キャンパス校地利用基本計画検討委員会第一次報告書」提出
3.6(木)	青木宏教務主任(教務担当)の病気による辞任を受け、教務主任(教務担当)候補者選挙	1.8(木)	卒業論文提出
	風間益人教諭を選出(任期は青木教諭の残存期間の97年3月16日～98年3月31日)		山田教諭の辞退を受けて教務主任(教務担当)候補者選挙
8(土)	終業式		篠田晋治教諭を選出
18(火)	第13回卒業式	17(土)	第2回本庄高等学院に関する懇談会開催(～18日)
		22(木)	地元指定校推薦応募者面接
		23(金)	α選抜試験(二次)
		2.12(木)	一般生・帰国生入学試験(一次)
			入学試験日程が大幅に前倒しになる
		14(土)	3年進学学部・学科発表
		18(水)	一般生・帰国生入学試験(二次)
1997年度		3.7(土)	終業式
4.1(火)	専任教員の学部等での授業担当が可能となる	18(水)	第14回卒業式
	高大一貫教育が制度的に実現		
8(火)	1997年度入学式		
10(木)	始業式	1998年度	
5.8(木)	教諭会で、「1998年度より英語ライティング授業をクラス2分割で行なう」ことを決定	4.1(水)	養護教諭が赴任
			入学試験の手続き率が予想を上回り、入学者が282名となったため、新1年が7クラス編成となる
6.2(月)	教育実習(～13日)	8(水)	1998年度入学式
5(木)	第16回体育祭	10(金)	始業式
7.2(水)	芸術鑑賞教室 演劇『トリッピングミスターじい』(劇団鳥獣戯画)	16(木)	評議員に風間益人教諭を選出
		23(木)	第3回本庄高等学院に関する懇談会開催
12(土)	保護者会	6.1(月)	教育実習(～12日)
	はじめて1～3年同日開催となる	4(木)	第17回体育祭
15(火)	漢字大会	7.8(水)	芸術鑑賞教室 音楽『ラテン音楽をきく』(有馬徹とノーチェ・クバーナ)
16(水)	夏季休業(～9月6日)		
10.4(土)	第13回訪中修学旅行(～10日)	11(土)	保護者会
7(火)	1・2年球技大会	15(水)	漢字大会
	1・2年のみの開催となる	16(木)	夏季休業(～9月7日)
8(水)	人権教育映画『橋のない川』	9.10(木)	教諭会で、本庄高等学院に関する懇談会報告書「まとめと提言」発表
9(木)	1・2年学年行事		河合素直常任理事・白井克彦教務部長、来校
	<1年：松代・小布施遠足 2年：赤城山登山>		本院の本庄駅一本庄キャンパスの間地点への移転計画が持ち上がる
16(木)	教務主任(教務担当)候補者選挙	10.4(日)	第14回訪中修学旅行(～10日)
	風間益人教諭を選出	6(火)	1・2年球技大会(～7日)
11.1(土)	第16回稲稜祭(～2日)	8(木)	1・2年学年行事
13(木)	「本庄高等学院に関する懇談会」設置にともない、学院長、正副教務主任以外の委員として、佐々木幹雄・篠田晋治・高橋聡・三崎良章・吉田茂各教諭を選出		<1年：美ヶ原遠足 2年：天神平遠足>
12.3(水)	人権講話『私の人生ごよみ』(講師：小林初枝=埼玉県立児玉高校)	9(金)	同和映画『サインはストレート』
		31(土)	第17回稲稜祭(～11月1日)
4(木)	風間教諭の辞退を受け、教務主任(教務担	11.12(木)	「将来計画検討委員会報告」提出

12.12(土) 保護者会	三次)委員に高橋聡教諭を選出
15(火) マラソン大会	12. 8 (水) 人権教育講話『ジェンダーについて』(講師:延興桂=東京女性財団)
16(水) 冬季休業(~0105)	9 (木) 大学点検評価委員会開設に伴い、委員に三崎良章教諭を選出
18(金) 図書室が中央図書館本庄分館に移転	15(水) マラソン大会
1. 8 (金) 卒業論文提出	16(木) 冬季休業(~1月7日)
23(土) 地元指定校推薦応募者面接	1. 8 (土) 卒業論文提出
24(日) α選抜試験(二次)	22(土) 地元指定校推薦応募者面接
2.12(金) 一般生・帰国生入学試験(一次)	24(月) α選抜試験(二次)
15(月) 3年進学学部・学科発表	入試要項がA4版となる
16(火) 一般生・帰国生入学試験(二次)	2. 3 (木) 高橋教諭の怪我を受け、全学審議会(第三次)委員に高山正弘教諭を選出
3. 6 (土) 終業式	12(土) 一般生・帰国生入学試験(一次)
18(木) 第15回卒業式	14(月) 3年進学学部・学科発表
31(水) 「1998年度将来計画検討委員会報告一主として第二次諮問への答申」提出 定員増男女共学化が打ち出される 榎本隆司学院長退任	社会科学部にはじめて受入定員が設けられる
1999年度	16(水) 一般生・帰国生入学試験(二次)
4. 1 (木) 山下元学院長就任 「国内研修員・在外研究員制度」にかわって「特別研究期間制度」が始まる 旧図書室を「自修室」として使用開始 「本庄キャンパス校地利用に関する基本的な考え」発表	3. 8 (水) 終業式
4. 8 (木) 1999年度入学式 はじめて西早稲田キャンパスで新入生クラス別ガイダンスを行なう	18(土) 第16回卒業式
9 (金) 始業式	2000年度
5. 6 (木) 教諭会で、「近い将来男女共学に移行する方向で具体的検討に入る」ことが確認される	4. 8 (土) 2000年度入学式
31(月) 教育実習(~6月11日)	10(月) 始業式
6. 3 (木) 第18回体育祭	5.29(月) 教育実習(~月10日)
7. 7 (水) 芸術鑑賞教室 演劇『夏の世の夢』	6. 1 (木) 第19回体育祭
15(木) 漢字大会	7. 1 (土) 全学でmnシステムを利用した専任教員への業務連絡開始
16(金) 夏季休業(~9月7日)	学内の諸連絡が紙媒体から電子媒体に移行
17(土) 保護者会	15(土) 漢字大会
19(月) サマーセミナー開催(~20日)	16(日) 保護者会
9.12(日) ホーム生保護者会	17(月) 夏季休業(~9月7日)
10. 3 (日) 第15回訪中修学旅行(~9日)	サマーセミナー(~18日)
5~6日には白井克彦常任理事が参加	10. 8 (日) 第16回訪中修学旅行(~14日)
5 (火) 1・2年球技大会(~6日)	10(火) 1・2年球技大会
7 (木) 1・2年学年行事 〈1年:美ヶ原遠足 2年:谷川岳遠足〉	12(木) 1・2年芸術鑑賞教室 音楽『早稲田大学交響楽団演奏会』(大隈講堂で開催)
8 (金) 人権教育映画『明日にスイング』	13(金) 人権映画『風はみどりに』
14(木) 教務主任(教務担当)候補者選挙 篠田晋治教諭を選出	11. 4 (土) 第19回稲稜祭(~5日)
28(木) 全学審議会(第三次)委員に佐々木幹雄教諭を選出	12. 6 (水) 人権講話『外国人差別』(講師:中原道子=早稲田大学国際教育センター)
30(土) 第18回稲稜祭(~31日)	15(金) マラソン大会
11.29(月) 佐々木教諭の辞退を受け、全学審議会(第	16(土) 冬季休業(~1月6日)
	保護者会
	1. 9 (火) 卒業論文提出
	アブストラクトも提出することとなる
	22(月) 地元指定校推薦応募者面接
	24(水) α選抜試験(二次)
	本庄に加え、西早稲田(総合学術情報センター国際会議場)・仙台(ホテルメトロポリタン仙台)・福岡(博多都ホテル)

	でも実施		る
2.12(月)	一般生・帰国生入学試験(一次)	15(金)	3年進学学部・学科発表
15(木)	3年進学学部・学科発表	16(土)	一般生・帰国生入学試験(二次)
16(金)	一般生・帰国生入学試験(二次)	21(木)	進学準備セミナー(～3月2日)
3.8(木)	終業式	3.8(金)	終業式
18(日)	第17回卒業式 本庄高等学院表彰がはじまる 北側グラウンドを引き払い、南側の大学グラウンドを本学院グラウンドとする	9(土)	第18回卒業式(文化会館) 終業式翌日の開催となり、1・2年生もはじめて参加
<b>2001年度</b>		<b>2002年度</b>	
4.1(日)	「地理歴史科」と「公民科」が合併し、「地理歴史公民科」となる	4.1(月)	大学授業が生徒に開放される 生徒5人が受講 全学の情報基盤システムが、Wasadonetポータルに統合される
4.8(日)	入学式	8(月)	2002年度入学式
10(火)	始業式	9(火)	始業式
5.26(土)	保護者会・ホーム保護者会	11(木)	評議員に風間益人教諭を選出
6.4(月)	教育実習(～6月16日)	12(金)	文部科学省より、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に指定される
7(木)	第20回体育祭	5.12(日)	ホーム保護者会
7.4(水)	芸術鑑賞教室 落語『らくごくらぶ』	25(土)	保護者会
8(日)	北京大学附属中学学生・教員、来訪(～13日)	6.3(月)	教育実習(～15日)
10(火)	自己点検・評価報告書(2000年度)発行	6(木)	第21回体育祭
14(土)	漢字大会 1年保護者会	13(木)	教諭会で「2003年度より帰国生自己推薦入学試験(1選抜)を実施する」ことを決定
16(月)	夏季休業(～9月7日)	7.10(水)	芸術鑑賞教室 コント『THE NEWS-PAPER』(トリックスター社)
17(火)	サマーセミナー(～18日)	16(火)	漢字大会
9.1(土)	本庄駅・寄居駅と本庄キャンパスとの連絡バス運行開始 本庄高等学院一本庄駅南口 本庄高等学院一寄居駅北口(松久駅経由)	17(水)	夏季休業(～9月6日)
7(金)	全学審議会(第4次)委員に風間益人教諭を選出	18(木)	サマーセミナー(～19日)
8(土)	大学点検・評価委員会第三者評価委員、来校	10.6(日)	第18回訪中修学旅行(～12日)
10.4(木)	教務主任(教務担当)選挙 佐々木幹雄教諭を選出	8(火)	1・2年球技大会(～9日)
7(日)	第17回訪中修学旅行(～13日)	10(木)	1・2年学年行事 〈1年：群馬県立自然史博物館等見学 2年：学年コンサート等〉
9(火)	1・2年球技大会(～10日)	11(水)	人権教育映画『誇り高き男』
11(木)	1・2年学年行事 〈1年：榛名山遠足 2年：妙義山遠足〉	11.2(土)	第21回稲稜祭(～3日)
12(金)	人権教育映画『愛する』	6(水)	創立20周年記念フォーラム 卒業生の加藤剛・永井伸一・初田啓介・田中充各氏のパネルディスカッション
11.3(土)	第20回稲稜祭(～4日)	7(木)	大学点検・評価委員会委員に篠田晋治教諭を選出 教諭会で、「2003年度以降の卒業論文の評価を0点～100点の1点刻みとし、進学学部決定時には3倍にして加点する」ことを決定
12.15(土)	マラソン大会	10(日)	創立20周年記念ホームカミングデー 卒業生217人、来賓・招待者51人、参加
16(日)	保護者会	12.12(木)	マラソン大会
17(月)	冬季休業(～1月7日)	15(日)	保護者会
1.8(火)	卒業論文提出	16(月)	冬季休業(～1月7日)
21(月)	地元指定校推薦応募者面接		
24(木)	α選抜試験(二次)		
2.12(火)	一般生・帰国生入学試験(一次) 合格発表の掲示が本庄のみとなり、電話応答システムによる発表も行なわれ		

1. 8 (水) 卒業論文提出	7 (火) 1・2年球技大会
22(水) α選抜試験(二次)	8 (水) 人権教育映画『サインはストレート』
I 選抜試験(二次)	9 (木) 1・2年学年行事
はじめてI選抜(帰国生入学試験【AO方式】)を実施	<1年:慶應義塾志木高校との交流 2年:卒論・学部説明会>
23(木) 地元指定校推薦応募者面接	11. 1 (土) 第22回稲稜祭(～2日)
2. 12(水) 一般生・帰国生入学試験(一次)	14(金) 教諭会で、「定員増(80名)・男女共学化」の将来計画検討委員会答申を報告
合格発表の掲示がなくなり、電話応答システムとホームページによる発表となる	12. 13(土) マラソン大会
15(土) 3年進学学部・学科発表	14(日) 保護者会
16(日) 一般生・帰国生入学試験(二次)	16(火) 冬季休業(～1月7日)
3. 8 (土) 第19回終業式	1. 21(水) 地元指定校選抜応募者面接
本庄高等学院賞とともに本庄高等学院長賞が贈られる	22(木) α選抜試験(二次)
31(月) 堀口健治常任理事・深沢良彰教務部長、来校	福岡会場は廃止となる
定員増共学化検討を要望	I 選抜試験(二次)
本学院がキャンパス外に移転する案は消滅	2. 9 (火) 一般生・帰国生入学試験(一次)
山下元学院長退任	14(土) 一般生・帰国生入学試験(二次)
	24(火) 進学準備セミナー(～27日)
	3. 6 (土) 第20回終業式
	9 (火) 卒業式
	3. 15(月) 上越新幹線本庄早稲田駅開業 新幹線通学生が出現
<b>2003年度</b>	<b>2004年度</b>
4. 1 (火) 河合素直学院長就任	4. 8 (木) 2004年度入学式
教育課程が変更になり、「情報」が必修となり、3年次の選択科目が1科目2時間、7科目選択となる	9 (金) 始業式
「情報科」が新設される	5. 13(木) 教諭会で、「2005年度より一般指定校推薦制度を導入する」ことを決定
8 (火) 2003年度入学式	31(月) 教育実習(～6月16日)
9 (水) 始業式	6. 3 (木) 第23回体育祭
5. 29(木) 教諭会で、「新型肺炎(SARS)流行のため訪中修学旅行を中止する」ことを決定	5 (土) 保護者会
6. 2 (月) 教育実習(～21日)	7. 7 (水) 芸術鑑賞教室 演劇『ケブラーあこがれの星海航路』(青年劇場)
実習期間が3週間となる	15(木) 漢字大会
5 (木) 第22回体育祭	16(金) 夏季休業(～9月6日)
7 (土) 保護者会・ホーム保護者会	サマーセミナー(～17日)
12(木) 教諭会で、「全学の分煙体制実施に伴い本学院においても管理棟外の喫煙所以外での喫煙禁止」を決定	8. 3 (月) 3rd APEC Youth Science Festival 2004 in Beijing (中国・北京)に参加(～9日)
7. 2 (水) 一学期末試験	10. 11(月) 第19回訪中修学旅行(～17日)
試験開始20分経過後の途中退出が認められなくなる	12(火) 1・2年球技大会
10(木) 教諭会で、「男女共学にむけて、具体的な準備作業を行なう」ことを承認	13(水) 人権教育ビデオ『メール』
15(火) 漢字大会	14(木) 1・2年学年行事
16(水) 夏季休業(～9月6日)	<1年:県立ぐんま自然史博物館見学 2年:学部説明会>
17(木) サマーセミナー(～18日)	30(土) 第23回稲稜祭(～31日)
9. 17(水) 芸術鑑賞教室 音楽『アコーディオンとその仲間たち』(田ノ岡三郎他)	「両高等学院将来構想検討会」が開催される
10. 2 (木) 教務主任(教務担当)候補者選挙	12. 1 (木) International Student Science Fair (オーストラリア・阿德レード)に参加
佐々木幹雄教諭を選出	12. 15(木) マラソン大会
5 (日) 北海道修学旅行(～8日)	16(木) 冬季休業(～1月7日)

18(土) 保護者会	(野村万作・野村満斎)
1. 8(土) 卒業論文提出	24(木) International Student Science Fair(タイ国マヒドール・ウィッタヤソーン高校)に参加(～29日)
22(土) α選抜試験(二次) 仙台会場が廃止となり、本庄・西早稲田のみでの実施となる	理事会で、本学院の将来構想が承認され、「定員増・共学化」の学則変更を埼玉県に申請することが決定される
I 選抜試験(二次)	12.15(木) マラソン大会
24(日) 地元指定校推薦・一般指定校推薦応募者面接 一般指定校推薦が始まる	16(金) 冬季休業(～1月7日)
2. 9(水) 一般生・帰国生入学試験(一次)	17(土) 保護者会
12(土) 3年進学学部・学科発表	1. 10(火) 卒業論文提出
14(月) 一般生・帰国生入学試験(二次)	18(水) 地元指定校推薦・一般指定校推薦応募者面接
22(火) 進学準備セミナー(～25日)	22(日) α選抜試験(二次)
3. 8(火) 終業式	I 選抜試験(二次)
9(水) 第21回卒業式	2. 9(木) 一般生・帰国生入学試験(一次)
31(木) 河合素直学院長退任	12(日) 3年進学学部・学科発表
<b>2005年度</b>	14(火) 一般生・帰国生入学試験(二次)
4. 1(金) 尾崎肇学院長就任 文部科学省より、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)に再指定される	20(月) 進学準備セミナー(～23日)
8(金) 入学式	3. 2(木) 教諭会で、「定員増・共学化を伴う学則変更の埼玉県への申請」について最終的な意思を確認
9(土) 始業式	8(水) 終業式
5. 30(月) 教育実習(～6月15日)	9(木) 第22回卒業式
6. 2(木) 第24回体育祭	<b>2006年度</b>
4(土) 保護者会	4. 8(土) 2006年度入学式
13(月) ノロウイルス様症状を呈した生徒が複数確認される 7月4日までに発症者は教職員等も含め222名に上る	9(月) 始業式
7. 1(金) ノロウイルス感染拡大で臨時休校(～5日)	13(木) 評議員に風間益人教諭を選出
16(土) 漢字大会	5. 18(木) 埼玉県私学審議会で、本学院の定員増が承認される 第8回中国高校生訪日団(35名)、来訪(～19日) 生徒宅・ホームにホームステイ
18(月) 夏季休業(～9月3日) ノロウイルス感染拡大による臨時休校措置にともない夏季休業を7月に1日、9月に2日短縮する	29(月) 教育実習(～6月14日) 国立台中第一高校教育訪問団(65名)、来訪
18(月) サマーセミナー(～19)	6. 3(土) 保護者会
9. 28(水) 人権教育講演『個性尊重の時代』(講師：藤井輝明＝熊本大学)	8(木) 第25回体育祭
10. 6(木) 教務主任(教務担当)候補者選挙 佐々木幹雄教諭を選出	7. 8(土) 北京大学附属中学訪日団、来訪(～18日)
10(月) 第20回訪中修学旅行 15日には堀口健治常任理事が参加	12(水) 芸術鑑賞教室 オペラ『注文の多い料理店』・『歌のステージ』(オペラシアターこんにゃく座)
11(火) 1・2年学年行事 〈1年：かなな町・鈴木演芸場・草津・赤城に別れて遠足 2年：学部説明会〉	15(土) 漢字大会
13(木) 1・2年球技大会	17(月) 夏季休業(～9月6日) サマーセミナー(～18日) 埼玉県審議会が、本学院の定員増共学化を承認
20(木) 台湾教育視察団(20名)、来校	8. 21(月) International Student Science Fair(韓国・釜山Korea Science Academy)に参加(～25日)
11. 5(土) 第24回稲稜祭(～6日)	10. 5(木) 大学点検・評価委員会委員に三崎良章教
16(水) 芸術鑑賞教室 狂言『萩大名』『六地藏』	

<p>論を選出</p> <p>16(月) 第21回訪中修学旅行(～22日)</p> <p>17(火) 人権教育講演会『共学化を迎えるにあたって』(講師：青木玲子=WITH YOU さいたま)</p> <p>18(水) 1・2年学年行事          &lt;1年：妙義山・軽井沢・鈴木演芸場に別れて遠足 2年：学部説明会&gt;</p> <p>19(木) 1・2年球技大会</p> <p>11. 4(土) 第25回稲稜祭(～5日)</p> <p>18(土) 第11回全国私立大学附属・併設中学校・高等学校教育研究集会開催</p> <p>12.15(金) マラソン大会</p> <p>16(土) 冬季休業(～1月6日)</p> <p>保護者会</p> <p>1. 9(火) 卒業論文提出</p>	<p>17(水) 地元指定校推薦・一般指定校推薦応募者面接          はじめて女子の入学試験を行なう</p> <p>22(月) α選抜試験(二次)          西早稲田会場が廃止となり、本庄だけでの実施となる          I選抜試験(二次)</p> <p>2. 9(金) 一般生・帰国生入学試験(一次)</p> <p>13(火) 3年進学学部・学科発表</p> <p>14(水) 一般生・帰国生入学試験(二次、男子)</p> <p>15(木) 一般生・帰国生入学試験(二次、女子)</p> <p>26(月) 進学準備セミナー(～3月1日)          理事会で、「南側斜面・グラウンド脇への新校舎建設」が決定される</p> <p>3. 9(金) 終業式</p> <p>10(土) 第23回卒業式</p>
--	--

(三崎良章)

## 2 各種データ

### (1) 歴代学院長

代	在任期間	氏名
1	1982.4～1988.11	神澤 惣一郎
2	1988.11～1992.11	大槻 宏樹
3	1992.11～1999.3	榎本 隆司
4	1999.4～2003.3	山下 元
5	2003.4～2005.3	河合 素直
6	2005.4～	尾崎 肇

### (2) 専任教員

職名	氏名	担当教科	在職期間
教諭	風間 益人	国語	1982.4～
教諭	篠田 晋治	理科	1982.4～
教諭	高山 正弘	英語	1982.4～
教諭	中野 公世	理科	1982.4～
教諭	中村 忍	芸術	1982.4～
教諭	吉田 茂樹	芸術	1982.4～
教諭	吉田 茂	国語	1982.4～
教諭	吉見 孝人	理科	1982.4～
教諭	若林 正	体育	1982.4～
教諭	渡辺 良隆	体育	1982.4～
教諭	矢作 修	数学	1982.4～1982.7
教諭	岩田 克己	英語	1982.4～1985.3
教諭	小野裕二郎	理科	1982.4～1992.3
教諭	加納 敏郎	英語	1982.4～1995.3
教諭	冨永 安男	数学	1982.4～1999.3
教諭	笹川 古日	社会	1982.4～2001.1
教諭	田辺 明義	国語	1982.4～2001.3
教諭	冷牟田修二	社会	1982.4～2001.3
教諭	上野 幸彦	理科	1983.4～
教諭	木元 保	数学	1983.4～
教諭	佐々木幹雄	社会	1983.4～
教諭	羽田 一郎	数学	1983.4～
教諭	三崎 良章	社会	1983.4～
教諭	佐藤 正春	体育	1983.4～1987.3
講師	ダニエルC ジョーンズ	英語	1983.4～1987.3
教諭	田実 佳郎	数学	1983.4～1996.3
教諭	山田 庄一	英語	1983.4～2007.3
教諭	伊藤 一雅	体育	1984.4～
教諭	青木 宏	社会	1984.4～2007.3
教諭	高橋 廣満	国語	1985.4～1997.3
教諭	加藤 裕章	英語	1986.4～
教諭	利根川博司	英語	1986.4～

職名	氏名	担当教科	在職期間
教諭	半田 亨	情報	1986.4～
教諭	高橋 聡	国語	1986.4～2003.4
教諭	田邊 潤	体育	1987.4～
講師	L.デニス ウールブライト	英語	1987.4～1990.3
教諭	棚島 眞澄	英語	1988.4～
講師	トーマスB グラハム	英語	1990.4～1993.3
教諭	三浦 健郎	数学	1992.4～
講師	ロバートL マキニー	英語	1993.4～1996.3
教諭	大塚恵美子	家庭	1994.4～2006.3
教諭	望月 眞帆	英語	1995.4～
教諭	坂井 淳一	社会	1996.4～
教諭	福永 泰規	体育	1996.4～
教諭	影森 徹	理科	1997.4～
教諭	曾原 祥隆	国語	1998.4～
養護 教諭	児玉 光子	養護	1998.4～2003.3
教諭	宮田 庸一	数学	1999.4～
講師	サブスキー・ アレクサンダー	英語	1999.4～2003.3
講師	ロジャー ジェフリース	英語	2000.9～2001.3
教諭	川鶴 進一	国語	2001.4～
教諭	齋藤 正憲	社会	2001.4～
教諭	上田 太郎	社会	2002.4～
教諭	小林 大輔	国語	2003.4～
養護 教諭	齋藤 香織	養護	2003.4～
教諭	ジョウジ・マ シュー・レオン	英語	2004.4～
教諭	嘉来 純一	英語	2007.4～
教諭	神岡 勝見	数学	2007.4～
教諭	上牧瀬 香	国語	2007.4～
教諭	高井 寿文	社会	2007.4～
教諭	棚橋 知之	家庭	2007.4～



### (3) 歴代教務主任

#### 1 教務担当教務主任一覧

No.	在任期間	氏名
1	1982.4～1986.11	小野 裕二郎
2	1986.11～1989.11	田辺 明義
3	1989.11～1994.11	風間 益人
4	1994.11～1997.3	青木 宏
5	1997.3～1998.3	風間 益人
6	1998.4～2002.3	篠田 晋治
7	2002.4～	佐々木 幹雄

#### 2 生徒担当教務主任一覧

No.	在任期間	氏名
1	1982.4～1986.11	加納 敏郎
2	1986.11～1988.3	山田 庄一
3	1988.4～1989.11	若林 正
4	1989.11～1990.11	佐々木 幹雄
5	1990.11～1992.11	中村 忍
6	1992.11～1998.3	渡辺 良隆
7	1998.4～2000.3	羽田 一郎
8	2000.4～2002.3	大塚 恵美子
9	2002.4～2006.3	吉田 茂
10	2006.4～	田邊 潤

#### 3 教務担当教務副主任一覧

No.	在任期間	氏名
1	1982.4～1985.3	冷牟田 修二
2	1985.4～1987.3	風間 益人
3	1987.4～1989.3	篠田 晋治
4	1989.4～1990.11	田実 佳郎
5	1990.11～1993.11	木元 保
6	1993.11～1998.3	半田 亨
7	1998.4～2000.3	吉田 茂
8	2000.4～2001.3	三浦 健郎
9	2001.4～2002.10	木元 保
10	2002.10～2004.3	中野 公世
11	2004.4～	髙島 眞澄

#### 4 生徒担当教務副主任一覧

No.	在任期間	氏名
1	1982.4～1985.3	田辺 明義
2	1985.4～1987.3	青木 宏
3	1987.4～1989.3	羽田 一郎
4	1989.11～1990.11	伊藤 一雅
5	1990.11～1992.11	高山 正弘
6	1992.11～1993.11	吉田 茂樹
7	1993.11～1996.3	加藤 裕章
8	1996.4～1997.3	吉田 茂
9	1997.3～1998.3	田邊 潤
10	1998.4～2000.3	三浦 健郎
11	2000.4～2002.3	影森 徹
12	2002.4～	坂井 淳一

## (4) 年度別組主任一覽

年度	学年	A 組	B 組	C 組	D 組	E 組	F 組	G 組	H 組
1982	1 年	高山 正弘	若林 正	吉田 茂樹	吉見 孝人	風間 益人	中野 公世		
1983	1 年	中村 忍	羽田 一郎	篠田 晋治	吉田 茂	渡辺 良隆	佐々木幹雄		
	2 年	高山 正弘	若林 正	吉田 茂樹	吉見 孝人	風間 益人	中野 公世		
1984	1 年	三崎 良章	佐藤 正春	田実 佳郎	伊藤 一雅	木元 保	上野 幸彦		
	2 年	中村 忍	羽田 一郎	篠田 晋治	吉田 茂	渡辺 良隆	佐々木幹雄		
	3 年	高山 正弘	若林 正	吉田 茂樹	吉見 孝人	風間 益人	中野 公世		
1985	1 年	田辺 明義	富永 安男	笹川 古日	山田 庄一	高橋 廣満	若林 正		
	2 年	三崎 良章	佐藤 正春 1986.1.10 ~3.1 青木宏	田実 佳郎	伊藤 一雅	木元 保	上野 幸彦		
	3 年	中村 忍	羽田 一郎	篠田 晋治	吉田 茂	渡辺 良隆	佐々木幹雄		
1986	1 年	吉見 孝人	利根川博司	冷牟田修二	吉田 茂樹	半田 亨	高橋 聡		
	2 年	田辺 明義 1986.11.16~ 中村 忍	富永 安男	笹川 古日	山田 庄一 1986.11.16~ 加藤 裕章	高橋 廣満	若林 正		
	3 年	三崎 良章	佐藤 正春 1986.9.8~ 青木 宏	田実 佳郎	伊藤 一雅	木元 保	上野 幸彦		
1987	1 年	青木 宏	風間 益人	木元 保	佐々木幹雄	高山 正弘	渡辺 良隆		
	2 年	吉見 孝人	利根川博司	冷牟田修二	吉田 茂樹	半田 亨	高橋 聡		
	3 年	中村 忍	富永 安男	羽田 一郎 1987.10.1~ 笹川 古日	加藤 裕章	高橋 廣満	若林 正		
1988	1 年	上野 幸彦	三崎 良章	吉田 茂	中野 公世	加藤 裕章	田邊 潤		
	2 年	青木 宏	風間 益人	木元 保	佐々木幹雄	高山 正弘	渡辺 良隆		
	3 年	吉見 孝人	利根川博司	冷牟田修二	吉田 茂樹	半田 亨	高橋 聡		
1989	1 年	山田 庄一 1989.10.5 ~10.31 利根川博司	篠田 晋治	棚島 眞澄	伊藤 一雅 1989.11.20~ 吉田 茂樹	高橋 廣満	羽田 一郎		
	2 年	上野 幸彦	三崎 良章	吉田 茂	中野 公世 1989.9.1~ 12.31 加納 敏郎	加藤 裕章 1990.1.8~ 利根川博司	田邊 潤		
	3 年	青木 宏	風間 益人	木元 保	佐々木幹雄	高山 正弘	渡辺 良隆		
1990	1 年	富永 安男	中村 忍 1991.1.1~ 若林 正	加納 敏郎	半田 亨	吉見 孝人	高橋 聡		
	2 年	山田 庄一	篠田 晋治	棚島 眞澄	吉田 茂樹	高橋 廣満	羽田 一郎		
	3 年	上野 幸彦	三崎 良章	吉田 茂	中野 公世	利根川博司	田邊 潤		
1991	1 年	田辺 明義	加藤 裕章	渡辺 良隆	伊藤 一雅	冷牟田修二	田実 佳郎		
	2 年	富永 安男	若林 正	加納 敏郎	半田 亨	吉見 孝人	高橋 聡		
	3 年	山田 庄一	篠田 晋治	棚島 眞澄	吉田 茂樹	高橋 廣満	羽田 一郎		
1992	1 年	田邊 潤	三崎 良章	中野 公世	佐々木幹雄	青木 宏	上野 幸彦		
	2 年	田辺 明義	加藤 裕章	渡辺 良隆 1992.11.16~ 篠田 晋治	伊藤 一雅	冷牟田修二	田実 佳郎		

年度	学年	A 組	B 組	C 組	D 組	E 組	F 組	G 組	H 組
1993	3年	富永 安男	若林 正	加納 敏郎	半田 亨	吉見 孝人	高橋 聡		
	1年	羽田 一郎	吉田 茂	利根川博司	笹川 古日	三浦 健郎	山田 庄一		
	2年	田邊 潤	櫛島 眞澄	中野 公世	佐々木幹雄	青木 宏	上野 幸彦		
1994	3年	田辺 明義	加藤 裕章	篠田 晋治	伊藤 一雅	高橋 廣満	田実 佳郎		
	1年	高橋 聡	若林 正	中村 忍	吉見 孝人	富永 安男	冷牟田修二		
	2年	羽田 一郎	吉田 茂	利根川博司	笹川 古日	三浦 健郎	山田 庄一		
1995	3年	田邊 潤	櫛島 眞澄	中野 公世	佐々木幹雄	青木 宏	上野 幸彦		
	1年	大塚恵美子	高山 正弘	高橋 廣満	木元 保	篠田 晋治	吉田 茂樹		
	2年	高橋 聡	若林 正	中村 忍	吉見 孝人	富永 安男	冷牟田修二		
1996	3年	羽田 一郎	吉田 茂	利根川博司	笹川 古日	三浦 健郎	山田 庄一		
	1年	伊藤 一雅	田辺 明義	望月 眞帆	三崎 良章	田邊 潤	櫛島 眞澄		
	2年	大塚恵美子	高山 正弘	高橋 廣満	木元 保	篠田 晋治	吉田 茂樹		
1997	3年	高橋 聡	若林 正	中村 忍	吉見 孝人	富永 安男	冷牟田修二		
	1年	加藤 裕章	福永 泰規	坂井 淳一	中野 公世	三浦 健郎	佐々木幹雄		
	2年	伊藤 一雅	田辺 明義	望月 眞帆	三崎 良章	上野 幸彦	吉田 茂		
1998	3年	大塚恵美子	高山 正弘	羽田 一郎	木元 保	篠田 晋治	吉田 茂樹		
	1年	中村 忍	山田 庄一	笹川 古日	利根川博司	影森 徹	若林 正	青木 宏	
	2年	加藤 裕章	福永 泰規	坂井 淳一	中野 公世	冷牟田修二	佐々木幹雄		
1999	3年	伊藤 一雅	富永 安男	望月 眞帆	三崎 良章	上野 幸彦	櫛島 眞澄		
	1年	田邊 潤	曾原 祥隆	高山 正弘	大塚恵美子	吉見 孝人	渡辺 良隆		
	2年	中村 忍	山田 庄一	高橋 聡	利根川博司	影森 徹	若林 正	青木 宏	
2000	3年	加藤 裕章	福永 泰規	坂井 淳一	中野 公世	冷牟田修二	佐々木幹雄		
	1年	上野 幸彦	半田 亨	宮田 庸一	伊藤 一雅	望月 眞帆	吉田 茂樹		
	2年	田邊 潤	曾原 祥隆	高山 正弘	三崎 良章	吉見 孝人	渡辺 良隆		
2001	3年	中村 忍	山田 庄一	風間 益人	利根川博司	笹川 古日 2000.5.22~ 吉田 茂	若林 正	青木 宏	
	1年	加藤 裕章	福永 泰規	坂井 淳一	中野 公世	羽田 一郎	櫛島 眞澄		
	2年	上野 幸彦	半田 亨	宮田 庸一	伊藤 一雅	望月 眞帆	吉田 茂樹		
2002	3年	田邊 潤	曾原 祥隆	高山 正弘	三崎 良章	吉見 孝人	渡辺 良隆		
	1年	青木 宏	川鶴 進一	齋藤 正憲	利根川博司	三浦 健郎	若林 正		
	2年	加藤 裕章	福永 泰規	中村 忍	中野 公世	羽田 一郎	櫛島 眞澄		
2003	3年	上野 幸彦	半田 亨	宮田 庸一	伊藤 一雅	望月 眞帆	風間 益人		
	1年	曾原 祥隆	吉見 孝人	大塚恵美子	田邊 潤	上田 太郎	山田 庄一		
	2年	青木 宏	川鶴 進一	齋藤 正憲	利根川博司	三浦 健郎	若林 正		
2004	3年	加藤 裕章 2003.9.12~ 篠田 晋治	福永 泰規	中村 忍	吉田 茂樹	羽田 一郎	櫛島 眞澄		
	1年	篠田 晋治	小林 大輔	三崎 良章	渡辺 良隆	宮田 庸一	望月 眞帆		
	2年	曾原 祥隆	吉見 孝人	大塚恵美子	田邊 潤	上田 太郎	山田 庄一		
2005	3年	風間 益人	川鶴 進一	齋藤 正憲	利根川博司	三浦 健郎	若林 正		
	1年	加藤 裕章	福永 泰規	木元 保	吉田 茂樹	青木 宏	影森 徹		

年度	学年	A 組	B 組	C 組	D 組	E 組	F 組	G 組	H 組
	2年	篠田 晋治	小林 大輔	三崎 良章	渡辺 良隆	宮田 庸一	高山 正弘		
	3年	曾原 祥隆	吉見 孝人	大塚恵美子	田邊 潤	上田 太郎	山田 庄一		
2006	1年	羽田 一郎	利根川博司	上野 幸彦	伊藤 一雅	川鶴 進一	半田 亨		
	2年	木元 保	福永 泰規	加藤 裕章	吉田 茂樹	青木 宏	影森 徹		
	3年	篠田 晋治	小林 大輔	三崎 良章	渡辺 良隆	宮田 庸一	高山 正弘		
2007	1年	棚橋 知之	望月 眞帆	齋藤 正憲	中村 忍	風間 益人	吉見 孝人	嘉来 純一	上田 太郎
	2年	羽田 一郎	利根川博司	上野 幸彦	伊藤 一雅	川鶴 進一	半田 亨		
	3年	木元 保	福永 泰規	加藤 裕章	吉田 茂樹	三浦 健郎	影森 徹		

### (5) 卒業者数

卒業年度	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995
人数	240	246	253	245	253	249	256	263	253	251	233	239

卒業年度	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	合計
人数	246	231	231	239	271	243	236	239	252	237	236	5642

## (6) ホーム入居者数変遷

番号	ホーム名/年度	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
1	相澤(※)	20	19	19	19	19	18	19	19	19	18	16	16	15
2	荒川	—	18	20	20	18	18	20	19	19	19	17	16	15
3	石井	—	14	14	14	14	14	14	14	14	13	12	12	12
4	宇野	—	—	7	8	8	8	10	9	8	8	7	8	8
5	大澤	—	—	7	7	7	7	7	7	7	6	7	6	5
6	金子	—	—	10	10	10	10	10	10	10	10	8	8	8
7	上山	—	—	15	15	15	14	16	16	15	15	12	11	11
8	高田	—	20	19	21	19	18	19	20	20	19	17	16	15
9	高仁	—	18	20	20	20	18	20	20	20	18	17	16	14
10	千代田	—	18	19	20	19	17	20	20	20	18	17	16	14
11	ひまわり	—	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5
12	藤野	—	—	—	—	10	10	10	10	10	13	12	12	11
13	堀口	—	—	—	15	15	14	15	15	15	13	12	12	13
14	町田	—	—	15	16	14	15	15	15	15	15	13	13	12
15	武藤	—	13	13	13	13	13	13	13	13	14	12	12	13
16	村松	—	—	—	8	8	8	8	8	8	8	8	7	8
17	もてぎ	—	19	20	20	19	18	20	20	20	18	17	16	14
18	さかえ	—	—	13	12	12	12	12	12	12	12	10	10	9
19	武田	—	—	—	2	4	2	3	3	3	3	3	3	3
20	根岸(※)	—	18	17	20	19	18	20	20	20	18	17	16	14
21	青木	—	—	15	15	14	14	15	15	15	14	13	12	14
22	白洗舎	—	17	19	20	19	18	20	20	20	18	18	16	14
23	駒沢	20	18	20	20	20	17	20	20	19	18	17	16	15
24	村山	—	18	19	20	18	18	20	20	20	18	17	16	13
25	小池	—	15	14	16	15	14	16	15	16	15	13	13	12
26	藤五	—	18	19	20	19	18	20	20	20	18	17	16	14
27	飯島	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	2	2
28	亀田	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	2	—
29	原	—	—	—	16	15	14	15	16	14	14	11	12	—
30	桜沢	20	18	18	18	18	16	18	18	18	17	15	—	—
31	山辺	—	—	14	15	15	14	16	15	15	14	—	—	—
32	中央	—	—	15	18	14	15	13	20	18	—	—	—	—
33	鎌形	—	—	15	18	14	14	17	15	—	—	—	—	—
34	七本木	—	19	20	20	18	19	19	19	—	—	—	—	—
35	みなみ	12	12	12	12	13	14	10	—	—	—	—	—	—
36	宮沢	—	—	12	11	12	12	12	0	—	—	—	—	—
37	米良	—	—	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—
38	金塚	—	—	15	15	15	14	—	—	—	—	—	—	—
39	坂元	17	17	16	14	13	13	—	—	—	—	—	—	—
40	高山	—	2	2	2	2	2	—	—	—	—	—	—	—
41	二本松	20	17	20	20	16	12	—	—	—	—	—	—	—
42	松野	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
43	三友	—	—	—	—	13	10	—	—	—	—	—	—	—
44	さかうえ	4	3	1	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—
45	アナン	—	—	12	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—
46	山田(A)	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
47	高橋	20	21	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
48	山田(B)	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
49	かがみ	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
50	寮	61	35	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	198	392	564	572	554	527	508	488	448	413	364	335	303

※ホーム相澤は、2000年度まではホーム塚越の人数を掲載

※ホーム根岸は、1990年度まではホーム中山の人数を掲載

1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	ホーム名/年度	番号
13	14	15	15	13	14	12	12	13	15	17	17	17	相澤(※)	1
13	12	15	15	13	14	11	12	11	13	14	11	13	荒川	2
10	12	11	13	12	14	11	12	13	13	13	13	11	石井	3
5	7	6	7	8	8	7	8	8	8	8	8	8	宇野	4
5	5	4	7	6	7	7	6	5	7	7	7	7	大澤	5
8	9	8	10	10	10	8	8	9	10	10	10	10	金子	6
14	11	12	14	13	14	11	11	12	13	12	14	14	上山	7
13	14	14	14	14	13	11	12	12	15	16	16	16	高田	8
12	12	11	12	12	12	10	11	11	12	11	12	15	高仁	9
16	13	14	15	14	0	9	11	12	13	10	14	0	千代田	10
5	5	0	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	ひまわり	11
10	12	10	14	13	13	11	11	12	12	10	6	0	藤野	12
10	13	12	14	12	12	11	10	12	13	11	9	7	堀口	13
13	14	12	16	14	15	12	12	13	14	14	16	16	町田	14
11	10	11	13	14	14	11	12	13	13	10	11	8	武藤	15
7	7	7	7	8	8	6	7	7	8	5	6	5	村松	16
14	15	14	14	13	12	11	9	12	11	10	13	13	もてぎ	17
9	11	10	11	12	11	10	10	11	5	5	—	—	さかえ	18
3	3	3	3	3	3	3	3	3	—	—	—	—	武田	19
14	14	13	15	13	14	10	11	12	—	—	—	—	根岸(※)	20
10	11	12	14	13	13	9	—	—	—	—	—	—	青木	21
15	10	11	15	10	—	—	—	—	—	—	—	—	白洗	22
16	11	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	駒沢	23
14	13	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	村山	24
11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	小池	25
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	藤五	26
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	飯島	27
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	亀田	28
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	原	29
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	桜沢	30
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	山辺	31
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中央	32
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鎌形	33
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	七本木	34
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	みなみ	35
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	宮沢	36
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	米良	37
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	金塚	38
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	坂元	39
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	高山	40
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	二本松	41
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	松野	42
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	三友	43
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	さかうえ	44
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	アナン	45
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	山田(A)	46
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	高橋	47
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	山田(B)	48
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	かがみ	49
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	寮	50
286	258	251	263	245	226	196	192	206	200	188	188	165	計	

## 編集後記

二十五周年記念事業委員会は二〇〇六年度四月から発足し、風間、坂井、佐々木、田邊、利根川、中村、礒島、宮田、若林、吉見の十名の教員と豊澤、食堂事務長の二人の職員で編成され、委員長に風間、書記に宮田が選出されました。また、翌年二〇〇七年度は嘉来、風間、神岡、坂井、佐々木、田邊、利根川、中村、礒島、三崎、宮田、吉見、渡辺の十三名の教員と津村、食堂事務長に一部再編、増員されました。尚、職員人事の都合上二〇〇六年六月で豊澤から津村へ、二〇〇七年六月で津村から杉本へ委員を交代しました。

翌年の二〇〇七年四月から本格的に記念誌作成に取り組み、まず最初の段階として原稿を依頼または募集することになった。当初は原稿が思うように集まらず六月末の締め切りを七月末まで延長することになったが、夏休み半ばには原稿も集まり、どうにか形を整えることができました。原稿を提出していただいた卒業生、御父母、ホーム、教職員の皆様には、改めてお礼申し上げます。

さて最近では学会においても報告集の枚数を減らし、その代わりにCDを配布するところが出てきました。また聞く所によると、早稲田大学人間科学部の創立二十周年記念では、記念誌の代わりにDVDを作成することです。本庄高等学院も将来的には電子媒体のみ作成、配布ということになるかもしれません。

(宮田 庸一)

二十五周年を迎えるにあたり記念事業をどうするか、委員会を発足させ協議した結果、記念式典の挙行、記念誌・記念DVD・記念品の作成などが決まった。式典は早稲田大学の百二十五周年目に当る創立記念日の十月二十一日は避け、十月六日(土)とし、記念誌は佐々木・宮田、DVDは田邊、記念品は風間が責任をもつことになった。

さて、その記念誌が本書である。題して「継承と発展」とした。いうまでも無く、二十五年の男子校としての伝統を継承し、その上で共学校としての新たな発展を期したからである。内容は最終的に巻頭グラビア写真の外、「挨拶・祝辞」、「二十五年の教育と今後の展望」、「二十五年を想う」、「資料」の四部構成とした。中心となる「二十五年の教育と今後の展望」では、高等学校の記念誌としてはなじみが薄いかもしいないが、早稲田大学の教学組織体系に倣い、教務関係と生徒関係とに大きく二つに分けた。扱う項目も学院内の分掌に従った。

今回、記念誌を作成するに当たり、常に意識したのはいうまでも無く「十周年記念誌」である。創立十年、まだ開設の熱冷めやらぬ時期に成った「十年誌」は大部で内容も濃い。このようなものは今回無理ではないか、いまだ少し肩の力を抜いてできることを纏めるという姿勢で臨んだ。しかし、作業を進めるうちに、徐々に「十年誌」に少しでも近づきたい、「十年誌」と違った色彩にしたい、という「欲」が頭をもたげてきた。「十年誌」より分量を減らすことは確認されたが、削ることができない項目もあり、また、十年と二十五年では扱う内容も倍以上になり、期待していたほどのスリムな内容とはならなかった。

一番多く紙数を占めたのは、やはり「学校の形態」である。本文に

もあるとおり、十周年以降のこの十五年の本庄高等学院の歴史を語るには避けて通ることはできない項目である。共学には様々な意見、想いがあつた。それをどう纏めるか、執筆担当者としては大いに悩んだが、学院教育を取り巻く社会情勢、環境の変化に対応し、早稲田大学の一員としてどう応えるかという視点で纏めることにした。

また、教務関係に比べ、生徒関係の分量、さらに教員・卒業生の寄稿が「十周年記念誌」よりも少なくなつたことには大いに責任を感じているが、この十五年の間に見られたSSH、国内外交流、入試形態、そして運動系クラブの多くの活躍などを掲載できたことにより、「十年誌」とは違う特色を出し得たのではないかと、自らを慰めてもいる。

巻頭グラビア写真であるが、編集期日が短かく、かつ記録写真の未整理などにより、十分に内容を吟味することができず、結局、過去の印刷物よりの転載という形が多くなつてしまった。今後、学校の記録管理のあり方の反省材料になればと思う。それでも、稲稜祭のパンフレットを長きにわたり保管してくれていた応援部には感謝する。巻頭グラビアにタイトルを付した方がいいのではという意見もあり、編集の責任で、校歌の歌詞より考えてみた。違和感を抱かれる方もあろうが、笑いとばして頂きたい。本文中の挿入写真は父母の会の戸谷智子さんの協力を得た。

原稿の締め切りは当初二〇〇七年五月の連休明けであつたが、いつもの事ながらなかなか集まらない。校務で多忙な先生方に原稿を出していただくのは本当に心苦しいのではあるが、「原稿が集まらないのではないか」という不安が去来する中、執拗に催促し、また、別件で教

務室に出入りする先生方に無差別に原稿を依頼し、ようやくして出来上がった。結局、締め切りは最終的に八月のお盆明けまで延びた。

書き易いように枚数、書式については制限を加えずに依頼したので、全体を通してバランス、統一が取れない内容となつてしまった。勿論、編集の責任であるが、これも本庄学院の「個性」と御理解いただきたい。また、編集の都合で、お寄せいただいた玉稿を失礼ながら一部手直しさせていただいたところもある。ご寛恕願いたい。本誌に関する全ての不具合は編集責任者の佐々木にある。

末尾ながら、ご多忙の中、玉稿をお寄せいただいた関係各位はもとより、分担校正をお願いした委員の先生方、また、短期間にも関わらず、多くの注文、無理を受け入れていただいた朝日印刷工業（株）の横尾和茂・横山貴弘両氏に心より感謝申し上げます。

（佐々木幹雄）



早稲田大学本庄高等学院

二十五周年記念誌

二〇〇七年十月六日 発行

編集 早稲田大学本庄高等学院

二十五周年記念事業委員会

発行人 尾崎肇

発行所 早稲田大学本庄高等学院

〒367-0035 埼玉県本庄市西富田一三六

(〇四九五) 二一—二四〇〇

印刷所 朝日印刷工業株式会社